甲府市文化財調査報告 15

甲府城下町遺跡 I

— 北口二丁目（桜シルク跡）発掘調査報告書 —

2001

桜シルク工業株式会社
甲府市教育委員会

序

都市「甲府」の発展は、今から遡ること482年前の大永16年に、武田信虎が相川扇状地の躑躅ヶ崎の地に新たな館を築いたことに始まります。甲府の地名は「甲斐の府中（首都）」を表すもので、文字どおり甲斐国の政治・経済・文化の中心として成長してまいりました。

武田氏が滅亡した16世紀の末は中世から近世への一大転換期であり、東国支配の重要拠点となった甲府では、壮大な石垣をめぐらせた甲府城の築城工事が豊臣秀吉の側近大名によって進められ、今日に継承されるみごとな都市プランのもとに大規模な城下町も整備されました。江戸時代260年間は江戸城防衛の要衝であり、徳川一門、続いて柳沢家、甲府勤番支配が甲府に配置され、明治維新以降は県都として発展を続けております。

本書は甲府駅北口の土地開発計画区域内における発掘報告書でございますが、平成11年度に実施した調査では武田氏の時代から現代にかけての遺構・遺物が発見され、中世城下町に始まり近世・近代都市へと発展したこの地の歴史的変遷過程を明らかにすることができました。取り分け、大量に出土した近世の陶磁器は、甲府城下町における生活実態を解明する上で欠かせない資料であり、北九州など遠隔地の陶磁器生産地との物流を調べる上でも非常に重要なものとなっております。

本書の刊行により甲府城下町の研究が一層深化するものと自負するところでございますが、こうした調査・研究の成果が広く市民一般の地域学習に活かされ、21世紀のまちづくりに大いに活用されることを願ってやみません。

末筆となりましたが、調査にあたり御理解と多大なる御協力をいただきました桜シルク工業株式会社及び関係者各位に、衷心より御礼申し上げます。

平成13年３月

甲府市教育委員会
教育長　金　丸　　晃

例　言

1．本書は、甲府城下町遺跡のうち、山梨県甲府市北口二丁目１番７号ほかに所在する「甲府城下町遺跡（桜シルク跡）」の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、桜シルク工業株式会社と甲府市教育委員会との協議に基づき、発掘調査に関わる契約を締結して実施した。

3．調査期間は、試掘調査を平成11年２月10日から４月12日まで実施し、本調査を同年５月12日から８月13日まで行った。さらに追加調査を、同年９月28日から10月６日まで実施し、引き続き整理作業を行った。

4．試掘調査は平塚洋一（文化財主事）、本調査は志村憲一（文化財主事）・早川さやか（調査員）が担当した。

5．本書の編集・執筆は、市瀬文彬文化芸術課長を編集責任者とし、志村憲一が行った。
なお、志村の指示のもと、遺物観察表は鈴木由香、ピット一覧表は望月秀和が作成した。

6．木製品・金属製品等の保存処理については、財団法人帝京大学山梨文化財研究所の畑大介氏に御協力をいただいた。

7．遺構全体図・航空写真に関しては、株式会社シン技術コンサルと写真測量の委託契約を行い、その図面を基本として本書に掲載した。

8．本報告書執筆にあたり、甲府の製糸産業と丸茂製糸場について、丸茂製糸場設立者の御子孫である丸茂喬平氏より多々御教示をいただいた。

9．本書の挿図は、飯室久美恵・長田由美子・小林明美・鈴木由香・関本芳子・高添美智子・塚原澄子・林　久美子・望月貴美子・望月秀和・志村憲一が作成した。

10．本書に係わる出土遺物及び記録図面・写真等は甲府市教育委員会で保管している。

11．報告書の作成にあたって、多くの方々から御指導と御協力をいただいた。
井尻工業株式会社、小野正敏、河西　学、時枝　務、橋口定志、成田涼子、畑　大介、堀内秀樹、宮里　学、水本和美、宮久保真紀、望月郁也（順不同・敬称略）

12．発掘調査に際しては、次の一般参加者に御協力をいただいた。
荒木昭彦、飯室久美恵、岡　悦子、小沢菊太郎、小沢四郎、金井いく代、川口格一、岸本美苗、栗田宏一、小林明美、小宮通子、佐田金子、佐田　昇、清水公子、末木義光、鈴木正文、高添美智子、高添陽平、武井美知子、武井裕太、塚原澄子、花曲敬子、根岸利昭、平原　司、本道歌子、本道政清、三上和子、望月宏美、望月貴美子、山田利三、三浦正廣、渡辺　茂
（順不同・敬称略）

凡　　例

本書に掲載した遺構図・遺物実測図は以下のとおりである。

1．遺構・遺物番号は、各調査区単位で通し番号とした。

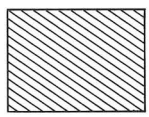
2．全体図・遺構・遺物実測図の縮尺は、図面上に表示したスケールのとおりである。

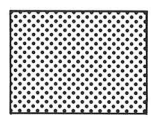
3．遺構断面図中のレベルポイントに付した数字は、標高を表す。

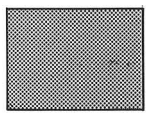
4．挿図中のＥ・Ｗ・Ｓ・Ｎは、東・西・南・北を表す。

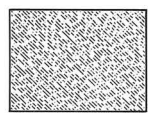
5．遺物観察表中の色調は『標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修　1997後期)に基づいて記載した。

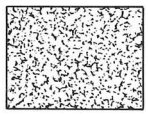
6．実測図内のスクリーントーン指示は以下のとおりであるが、部分的に指示を個々の図面上に表示したものもある。


……地　　山


……礫　・　石


……炭　化　物


……溶　融　物


……攪　　乱

目　　次

序
例　　言
凡　　例
目　　次

第１章　調査の経緯と概要
第１節　調査に至る経緯……1
第２節　調査方法……1
第２章　地理的・歴史的環境
第１節　地理的環境……4
第２節　歴史的環境……4
第３節　調査の概観……5
第３章　Ａ区発掘調査の成果
第１節　遺構概観……6
第２節　基本層序……6
第３節　遺構と遺物……6
(1)　溝……6
(2)　井　戸……15
(3)　掘立柱建物跡……18
(4)　埋　桶……20
(5)　土　坑……22
(6)　ピ ッ ト……30
(7)　そ の 他……30
(8)　遺物観察表……30
第４章　Ｂ区発掘調査の成果
第１節　遺構概観……76
第２節　基本層序……76
第３節　遺構と遺物……76
(1)　二 の 堀……76
(2)　土　塁……79
(3)　溝……79
(4)　井　戸……80
(5)　土　坑……80
(6)　ピ ッ ト……80
(7)　遺物観察表……80
第４節　試掘調査トレンチ……80
(1)　溝……84
(2)　集石遺構……84
第５章　ま　と　め
第１節　古　代……89
第２節　中　世……89
第３節　近　世……89
第４節　近　代……92

表目次

表１　Ａ区ピット観察表①……32
表２　Ａ区ピット観察表②……33
表３　Ａ区ピット観察表③……34
表４　Ａ区ピット観察表④……35
表５　Ａ区ピット観察表⑤……36
表６　Ａ区ピット観察表⑥……37
表７　Ａ区遺物観察表①……38
表８　Ａ区遺物観察表②……39
表９　Ａ区遺物観察表③……40
表10　Ａ区遺物観察表④……41
表11　Ａ区遺物観察表⑤……42
表12　Ａ区遺物観察表⑥……43
表13　Ａ区遺物観察表⑦……44
表14　Ａ区遺物観察表⑧……45
表15　Ａ区遺物観察表⑨……46
表16　Ａ区遺物・Ｂ区近代遺物観察表⑩……47
表17　Ａ区出土金属製品観察表……48
表18　Ａ区出土銭貨観察表……48
表19　Ｂ区ピット観察表……85
表20　Ｂ区遺物観察表……86

図版目次

図１　甲府城跡・甲府城下町遺跡主要調査地点……2
図２　調査区配置図……3
図３　調査区グリッド図……3
図４　Ａ区基本土層……3
図５　Ａ区１号溝西側平面図・西壁セクション……8
図６　Ａ区１号溝東側平面図・側面図・セクション……9
図７　Ａ区２号・３号・９号溝平面図・側面図・セクション……11
図８　Ａ区７号溝平面図・セクション・石積側面図……12
図９　Ａ区井戸平面図・エレベーション……16
図10　Ａ区井戸平面図・セクション・エレベーション……17
図11　Ａ区掘立柱建物跡平面図・エレベーション……19
図12　Ａ区埋桶１～13平面図・セクション・エレベーション……21
図13　Ａ区１号・３号・７号土坑平面図・エレベーション……23
図14　Ａ区８号・９号・10号・11号・13号土坑平面図・
セクション・エレベーション……25
図15　Ａ区５号・21号・22号・24号土坑平面図・セクション……27
図16　Ａ区23号・25号土坑平面図・セクション、14号溝セクション……28
図17　Ａ区26号土坑、８号溝平面図・セクション、石列側面図……29

図18　Ａ区石積遺構・支柱状遺構……31
図19　Ａ区１号溝出土遺物……49
図20　Ａ区１号溝出土瓦・２号溝出土遺物……50
図21　Ａ区７号溝出土遺物……51
図22　Ａ区７号・８号溝出土遺物……52
図23　Ａ区10号・11号・12号・13号・14号溝出土遺物……53
図24　Ａ区１号・２号・３号・４号・５号井戸出土遺物……54
図25　Ａ区５号井戸出土木製品……55
図26　Ａ区５号・６号・７号井戸出土遺物……56
図27　Ａ区８号井戸出土磁器……57
図28　Ａ区８号井戸出土陶磁器……58
図29　Ａ区８号井戸出土陶器……59
図30　Ａ区８号井戸出土陶器……60
図31　Ａ区８号井戸出土遺物……61
図32　Ａ区８号・９号井戸出土遺物……62
図33　Ａ区１号土坑出土遺物……63
図34　Ａ区２号・３号・８号・13号・21号土坑・埋桶８出土遺物……64
図35　Ａ区22号土坑出土遺物……65
図36　Ａ区23号土坑出土遺物……66
図37　Ａ区24号・26号土坑出土遺物……67
図38　Ａ区６号・25号土坑、ピット51・274・315・369・533・562・588出土遺物……68
図39　Ａ区グリッド出土遺物……69
図40　Ａ区グリッド出土遺物……70
図41　Ａ区グリッド出土遺物……71
図42　Ａ・Ｂ区近代遺物……72
図43　Ａ・Ｂ区近代遺物、Ａ区９号井戸胴木……73
図44　Ａ区出土金属製品……74
図45　Ａ区出土銭貨……75
図46　Ｂ区基本土層……76
図47　Ｂ区二の掘・土塁断面概略図……76
図48　Ｂ区全体図……77
図49　Ｂ区１号・２号土坑、１号井戸平面図・エレベーション……81
図50　Ｂ区追加調査トレンチ平面図・セクション……82
図51　Ｂ区２号井戸平面図、試掘トレンチＴ―１平面図……83
図52　Ｂ区１号井戸出土遺物……87
図53　Ｂ区３号溝、１号土坑、ピット74、８号溝、Ｔ―７、２号井戸出土遺物……88

第１章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯

山梨県甲府市北口二丁目における今回の発掘調査は、桜シルク工業株式会社の店舗及び駐車場建設に伴って実施された。当地区は平成元年から開始された甲府市の新都市拠点整備事業予定地にあたり、今後開発が促進される地域である。江戸時代、当地域一帯は甲府城下町の郭内で、二の堀と森下小路に挟まれた武家屋敷地にあたる。平成７年度に実施された甲府駅北口周辺の試掘調査では、当調査区北東側に中～近世の遺構が良好な状態で遺存していることが確認された。

平成11年１月頃から、桜シルク工業株式会社による店舗・駐車場の建設計画が表面化した。そのため、平成11年２月10日から同年４月12日まで試掘調査を行い、中世から近世にかけての井戸・土坑・石列など遺構を検出した。これを受けて甲府市教育委員会は、事前の発掘調査の必要性がある旨の調査報告を桜シルク株式会社に提出した。これに基づき両者で協議を行い、工事により遺構面が破壊される部分について本調査を実施することになった。委託契約の締結は５月６日である。

本調査は平成11年５月12日から８月13日まで実施し、さらに同年９月28日から10月６日まで追加調査を行った。一方、平成11年９月15日には遺物整理作業及び報告書作成業務について委託契約を締結し、平成12年４月１日から平成13年３月まで整理作業および報告書作成業務を実施した。

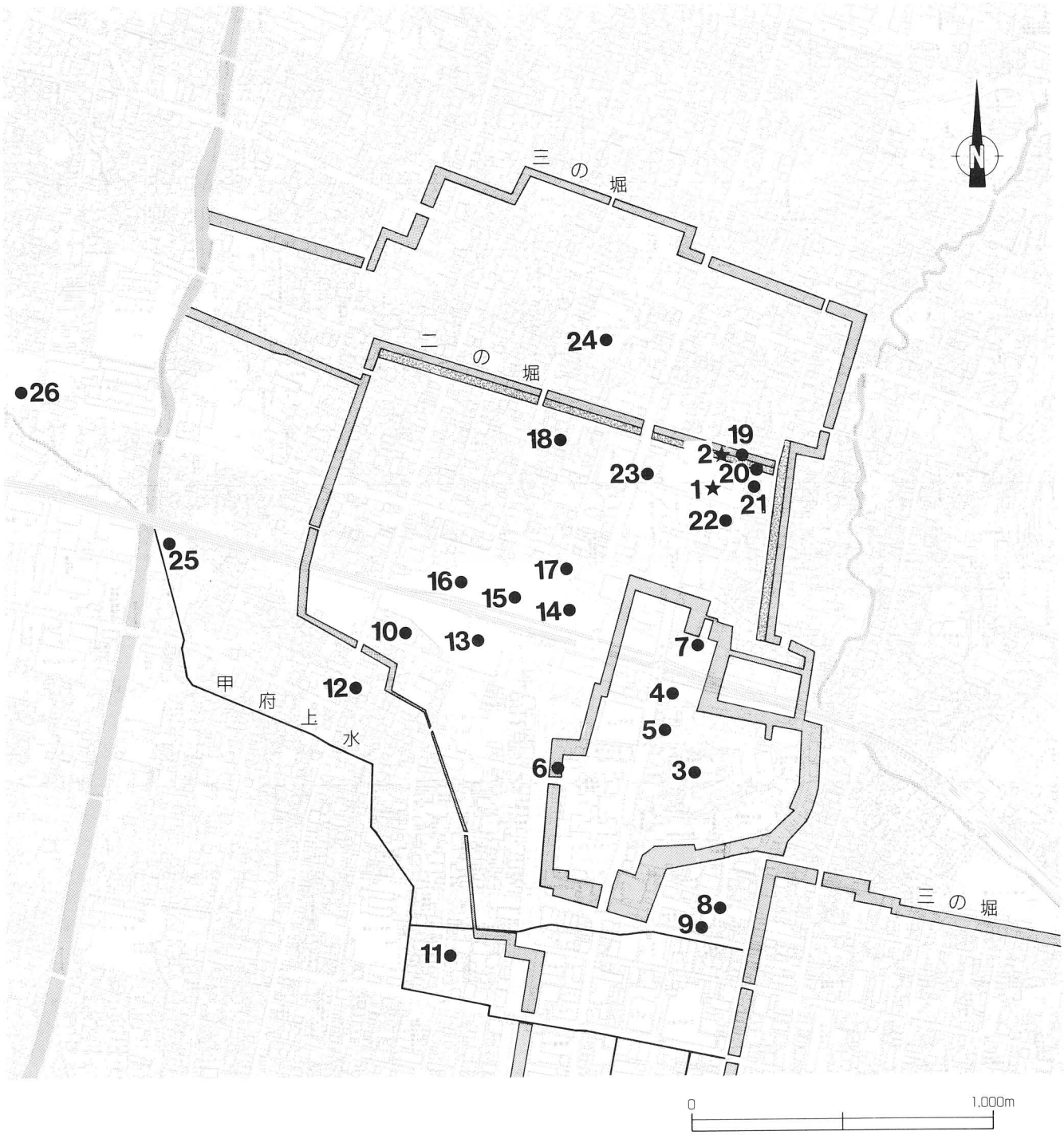
第２節　調査方法

発掘調査に先立ち、平成11年２月10日から同年４月12日にかけて試掘調査を実施した。調査区南側の店舗建設予定地部分（Ａ区）に２本、駐車場建設部分（Ｂ区）に３本の計５本の試掘トレンチ（Ｔ－１～５）を設定し、重機で表土の掘削を行うとともに、人力で遺構の確認作業を行った（図２）。

試掘調査の結果を基に、建設工事による遺構面の破壊が予想される店舗建設予定地部分（Ａ区）700㎡と駐車場建設部分（Ｂ区）300㎡の計1000㎡に対し本調査を実施することを決定した。近世段階の遺構は現在の地割線とほぼ平行するものと推測され、現状の地割に対し平行にグリッドを設定することにした。その結果、東西軸は西側からＡ～Ｉ、南北軸は南側より１～22、計198のグリッド（４×４ｍ）が設定された（図３）。掘り下げにあたり、近代の盛土層・攪乱層については、重機により除去を行った。グリッド設定後は、人力で遺構及び遺物の確認を行っている。

Ｂ区の二の堀検出は、堆積層が極めて軟弱なため堀底までの調査の危険が指摘された。工事により遺構面破壊の可能性もないため、堀の立ち上がり部を検出して調査を終了させた。また調査終了後、Ｂ区周辺では駐車場の建物基礎と看板の設置工事による遺構面への影響が心配されたため、新たに追加調査トレンチ（Ｔ－６～８）の３本を設定し調査を実施した。

遺構図面作成段階では設定したグリッド杭に水糸を張ってメッシュを設定し、作図を行った。試掘調査及び追加調査トレンチは、平板を使用して作図を行っている。遺物の取り上げについては、基本的に遺構ごとに行った。遺構がほぼ完全に検出された８月上旬の段階で航空測量を行い、空中写真及び全体図の作成を行った。



	遺跡名	検出遺構・遺物など	時期		遺跡名	検出遺構・遺物など	時期
①	甲府城下町遺跡（桜シルク跡）A区	武家屋敷跡（井戸、溝、土坑）	中世～近代	⑭	甲府城関係遺跡A区	柳沢権太夫屋敷及び山手御役宅跡	中世～近世
②	甲府城下町遺跡（桜シルク跡）B区	甲府城二の堀・土塁、井戸、溝	中世～近代	⑮	甲府城関係遺跡B区	武家屋敷跡及び御先手小路	近世～近代
③	県史跡甲府城	近世初頭の近世城郭	近世	⑯	甲府城関係遺跡B西区	武家屋敷跡	近世
④	甲府城屋形曲輪（駐輪場予定地）	甲府城屋形曲輪堀跡（瓦大量に検出）	近世	⑰	甲府城下町遺跡	集石、土坑墓	中世～近世
⑤	甲府城屋形曲輪（駐車場）	大規模瓦溜（浅野家紋瓦）	近世	⑱	甲府城下町遺跡	土坑2基、瀬戸美濃系陶器	中世
⑥	甲府城内堀	甲府城内堀石垣	近世	⑲	甲府城下町遺跡	井戸・ピット・甲府城二の堀	中世～近世
⑦	甲府城関係遺跡30街区	山手御門土橋、清水曲輪石垣	近世	⑳	甲府城下町遺跡	溝3条・土坑墓	中世～近世
⑧	甲府城下町遺跡	溝2条・溝状遺構3条・ピット・土坑	近世	㉑	日向町遺跡	溝、ピット、土坑、柵列	中世～近世
⑨	甲府城下町遺跡	溝1条・井戸1基	近世～近代	㉒	甲府城下町遺跡	井戸・溝・土坑2基	近世
⑩	甲府城下町遺跡（裏先手小路）	道路面	近世	㉓	甲府城下町遺跡	井戸（かわらけ・漆器製品出土）	中世
⑪	甲府城下町遺跡（百石町）	土師器出土	古墳	㉔	新紺屋小学校遺跡	散布地	近世
⑫	甲府城下町遺跡	井戸1基・屋敷境検知石	近世	㉕	甲府上水遺跡	甲府上水跡	近世
⑬	甲府城関係遺跡42・43街区	溝跡	近世	㉖	塩部遺跡	住居跡・溝	弥生～中世

図1　甲府城跡・甲府城下町遺跡主要調査地点
（No.3・21は県埋蔵文化財センター調査）

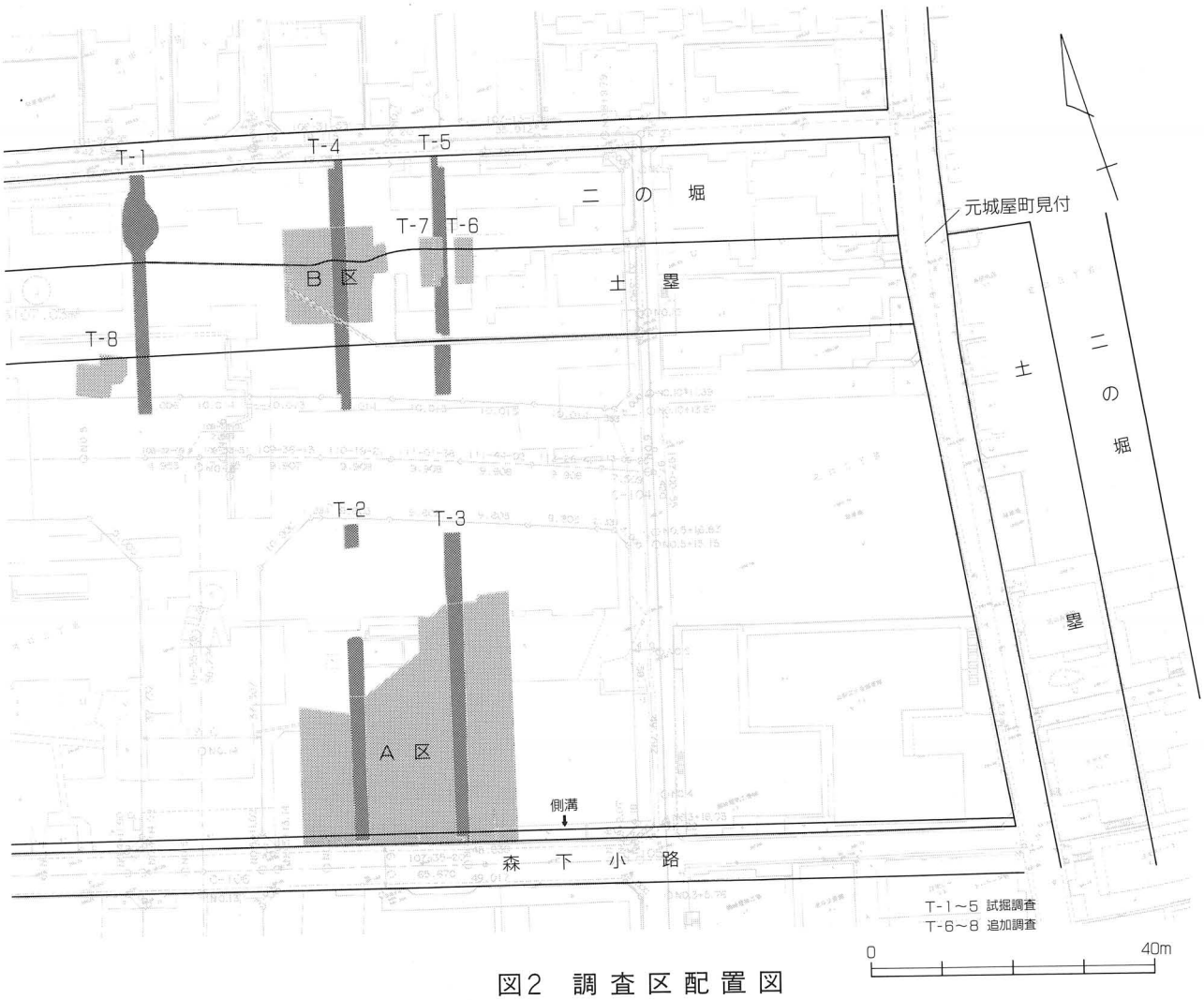


図2　調査区配置図

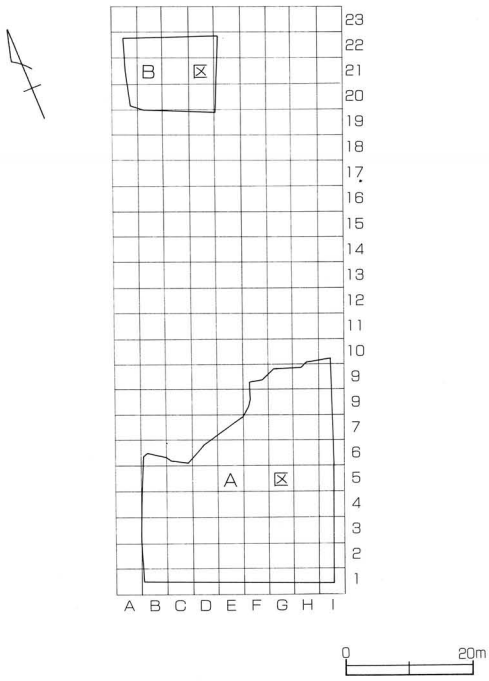


図3　調査区グリッド図

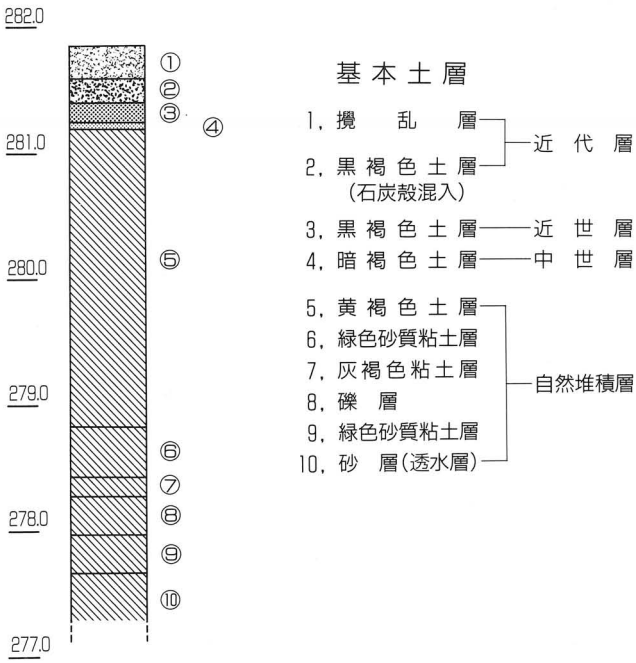


図4　A区基本土層

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

近世の甲府城下町は、相川扇状地の一帯に建設・整備された戦国時代の城下町を南方の沖積平野に移して建設された。中央には標高304.8ｍの一条小山を利用して造られた甲府城の天守台・本丸・二の丸などが聳え立ち、これを中心に家臣屋敷地・商職人町が同心円状に配置されていた。甲斐国中央の低地に位置する甲府城とその城下町は、甲府盆地縁辺の高台から遠望することができ、城主の権威と権力を民衆に見せつけていた。

今回、発掘調査が実施された桜シルク跡地は、甲府城北側に整備された城下町の一角で、相川扇状地の扇端部、標高281～282ｍの南傾緩斜面上に位置する。調査地点北側には二の堀が東西に横切り、家臣屋敷地と商職人町を分けていた。二の堀の水は、相川扇状地の東西を南流する相川・藤川の両河川から取水したものではなく、扇央部から扇端部にかけて流れるいく筋かの小河川から引いたものと推定されるが、一年を通じて水量は少なかったものと思われる。

調査地点には相川扇状地に一般的に見られる黄褐色の粘質土が堆積しており、地表下約５ｍで砂層の透水層が検出された。

第２節　歴史的環境

都市「甲府」の発展の契機は、永正16年（1519）、武田信虎が相川扇状地上の躑躅ケ崎の地に新たな居館を造営し、これを中心として甲斐の府中を建設したことに求められる。城下町の南に位置する一条小山には、大永４年（1524）に砦が築かれ、山上にあった一蓮寺は山裾に移設された（『高白斎記』）。城下町南端の東西出入り口部には八日市場・三日市場が開設されたことが明らかで、職商人の集住を表す元柳町・元連雀町・元城屋町・元紺屋町・元柳町・工町といった地名が城下町南半に密に分布している。また、一条小山の南側には一蓮寺の門前町が形成されていた。

甲府城の築城開始は武田氏滅亡後の天正18年（1590）頃と推定されており、豊臣秀吉側近の羽柴秀勝、加藤光泰、浅野長政・幸長父子が建設にあたった。甲府城は東国では数少ない総石垣の近世城郭であり、内堀・二の堀・三の堀により城と城下町が厳重に防御されていた。二の堀と土塁で囲まれた内郭が武家屋敷地で、15か所の見付けが置かれ、人々の出入りを監視した。二の堀の外側には、北に上府中26町、南東部に下府中23町の計49町が整備されている。

宝永元年（1704）、柳沢吉保が武蔵国川越から十五万石で入部した。翌宝永二年には甲府城の屋形曲輪・楽屋曲輪の殿舎の建設と石垣の修築願いを幕府に提出し、城と城下町の大規模な再整備に着手した。柳沢時代は、郭外の侍屋敷225軒、役人屋敷60軒、足軽屋敷627軒、同心組屋敷100軒・小人組屋敷14軒を数え、続く甲府勤番支配の時代と比べても屋敷数が多い。柳沢時代の城下町は、『裏見寒話』に「甲州の長臣柳沢権太夫・同市正・酒井志摩・川口石見・鈴木主門・松平多治見・柳沢帯刀・同矢柄・平岡政盛等の屋敷善美を尽せり、就中権太夫の舊邸は石垣切石長屋の様子一万石以上に見ゆ、東塀裏植込、梅楓にて一町程続きたり」と記述されるほどに、華麗な重臣屋敷が建ち並んでいた。

享保９年（1724）、柳沢氏は大和郡山に転封となり、甲府城・甲府城下町の守備を目的に甲府勤番支配が設置された。その後、享保12年（1727）の大火により、柳沢時代に築かれた武家屋敷や、櫓などの城内建築物の多くは焼失し、残った殿舎も撤去された。江戸時代後期に著された『甲斐廼手振』には「武士屋敷何れも茅屋根也。近来稀に瓦并同断長屋もみゆる」、「三百俵取以上大抵厩あり」、「長屋建の門多し。中には長屋建にて門を引戸一枚にして潜りの方無之」とあり、武家屋敷の状況をうかがうことができる。この時代に今回の発掘調査地一帯に居住者した武士としては、山岡・長・永井・北条などの勤番士を古絵図（絵図２～５）から確認することができる。

明治時代に入ると富国強兵、殖産興業の方針のもとに近代化が押し進められた。荒廃した甲府城は明治６年（1873）に内堀で画された内城部分の保存が決まり、郭内（旧武家屋敷地）の市街化が促進された。この年、権令に就任した藤村紫朗は「物産富殖ノ告論」を発し、明治７年（1874）10月には錦町に200名規模の県営勧業製糸場の建設を行うなど甲府城郭内の再開発に着手した。明治36年(1903)には中央線が甲府まで開通し、甲府城内城の北側は鉄道用地となった。

明治初年には、調査区周辺にあった勤番士の屋敷は撤去され、畑地となった。大正時代に入ると市街地には製糸工場が多く建設され、富士見町の矢嶋製糸第三工場など大規模工場も建てられた。この時期に県外資本の参入も始まり、その先駆けとして今回の発掘調査対象地に進出したのが、長野県茅野地方を本拠とする丸茂製糸場である。

丸茂製糸場は大正８年から建設され、翌９年２月に操業が開始された。しかし、昭和の金融恐慌や生糸相場の暴落などにより経営はいきづまり、合資会社舞鶴製糸場と名前を変える。昭和19年には、立川飛行機の飛行機部品を生産する軍需工場として転用され、昭和20年７月６日の甲府空襲を無事乗り越えて終戦を迎えた。

昭和22年には経営権と建物が桜シルク工業へ売却され、新たに桜シルク工業株式会社の甲府工場として生糸生産を復活させた。しかし、平成元年には工場が閉鎖され、建物は撤去された。最後まで残っていた旧丸茂製糸場創業時からのレンガ造りの煙突（写真93）も、平成11年３月に撤去され、製糸工場の痕跡は完全に消滅した。

第３節　調査の概要

Ａ・Ｂ区の遺構面は、ともに大正８年の製糸工場建設等による攪乱を受けた部分が多い。遺構は地表下0.6～１ｍの地山層に掘り込まれた状況で確認されている。

Ａ区は近世の森下小路沿いに位置した武家屋敷地で「四十九番」と記した古絵図（絵図３）も存在する。溝28基、掘立柱建物跡１基、井戸11基、埋桶13基、土坑26基、石積遺構、支柱状遺構、ピット727基が検出された。中世から近代の遺構である。現在の街路と直交する南北方向の溝は、屋敷割りの変遷を窺う上で貴重である。また、大量に検出された近世の陶磁器は、甲府城下町における武士階層の生活・文化の解明はもとより、近世陶磁器の器種構成と流通状況を知る上で重要である。近代の遺構は、戦前まで日本の輸出産業を担った製糸工場の痕跡であり、大正８年に建設され戦後まで稼働していた。

Ｂ区は攪乱を受けていたが、調査により古絵図の描写を裏づける二の堀と土塁の位置が確認された。他に近世遺構の確認は井戸１基にとどまったが、土塁基底部下層から溝９条、井戸２基、土坑２基、ピット78基が検出され、中世段階の遺構であることが確認された。

調査区全域から検出された中世の遺構・遺物は、武田氏館跡を中心に建設・整備された戦国時代の甲府城下町に関わるものであり、町割りや発展過程を解明していくうえで重要な資料となろう。

第３章　Ａ区発掘調査の成果

第１節　遺構概観

Ａ区は森下小路側に位置する。江戸時代には武家屋敷が建てられていた。近世の古絵図（絵図１～５）からは、屋敷割りと街路位置の変遷があった状況がうかがわれる。遺構は溝28条、井戸11基、掘立柱建物跡１棟、土坑26基、埋桶13基、その他の遺構２基、ピット727基が検出された。ピットの規則的な配列を確認することはできなかった。遺構確認面は黄褐色土の自然堆積層である。

時代が明確に確定される中世の遺構は、井戸５基・土坑墓１基が検出された。中世の遺物は、ほぼＡ区全域から検出された。かわらけ・瀬戸美濃系陶器・中国製磁器・李朝白磁など16世紀代を主体とする。特に５号井戸内からは大量の木製品・漆製品なども検出されている。

最も多いのは近世の遺構である。街路と平行若しくは直交し、ほぼ同軸の方位を取る遺構が多い。特に森下小路に直交する南北方向の溝・暗渠は屋敷の境界を示すものと推定され、屋敷割りの変遷を把握する上で重要である。礎石建物跡は未検出であるが、２丈四方の規模をもつ掘立柱建物跡が確認された。ただし、時期・機能については判然としない。遺物は18世紀以降の陶磁器が多い。特に８号井戸からは一括廃棄された18～19世紀初頭の陶磁器が大量に検出された。

近代の遺構は柵列・石積遺構・支柱状遺構・11号井戸などが検出されている。いずれも丸茂製糸場に関連するものであろう。特にレンガ積の11号井戸は、丸茂製糸場操業時に２基設置された内の１基である。遺物は、製糸場で使用された器械部品や生活用品が出土した。

第２節　基本層序（図４）

Ａ区は相川扇状地扇端部に位置し、南側に僅かに傾斜している。Ａ区南側で標高約281ｍ、北側で282ｍを測り、１ｍほどの比高差が見られる。製糸場建設と撤去により攪乱を受けた部分が多い。

土層は、現地表面から約60㎝下の地山層との間に、３～４層の堆積が認められる。第１層は地表下20～40㎝で、セメント片などを含む近年の整地盛土層である。続く第２層は石炭殻を含む黒褐色土層であり、大正９年の製糸場建設に伴う造成などによって形成された堆積層と考えられる。

第３層は近世の堆積層で、10～20㎝の厚さをもった黒褐色土層である。部分的に炭化物が混入するが、火災層は確認されていない。18～19世紀代の遺物を含む江戸時代後期の堆積層である。第４層の暗褐色土層は10㎝以下の厚さで、部分的に検出された。遺物はないが、自然堆積層の直上に位置することから、近世以前の堆積層と推定される。第４層が部分的な確認にとどまっていることは、17世紀初頭の城下町建設時に、武家屋敷地造成のため切土されたことを示唆している。

自然堆積層は、５号井戸の断面観察から地表下５ｍ地点までに６層が確認された。最上部の第５層は、相川扇状地上に一般的に見られる黄褐色の粘質土層であり、約2.5ｍの厚さをもつ。第６層は緑色砂質粘土層、第７層は灰褐色粘土層、第８層は礫層である。第９層の緑色砂質粘土層は第６層とほぼ同質である。第10層の砂層は、標高約277ｍ地点に位置する透水層である。

第３節　遺構と遺物

（1）溝

溝は28条が検出された。暗渠についてもここに含めて報告する。

１号溝（図５～６、写真４・７・51）

調査区南側の道路と平行する。近世から近代にかけて存続した溝で、Ｎ―69°―Ｗを軸とし、約30ｍにわたり検出された。２号溝に切られ、10号溝と同時存在したものと考えられるが、３号溝との切り合い関係については不明である。溝の東側には長さ11.3ｍにわたり石列が検出されているが、西側部

分については未検出である。溝の底部は平坦であり、流れの方向については不明。道路からの溝幅1.1mを測る。長さ25～40cmの加工された安山岩が一段、約80度の角度で検出されたが、当初は数段積まれた屋敷境の石積みであったと考えられる。石材はいずれも地山層に据えられており、東端の窪み部分には石列下部に長さ約1.3m、径7cmの丸太材の胴木が置かれていた。石材の背後には径約10cmの栗石が充塡されている。溝内からは、18世紀から近代の遺物が多く検出された。さらに溝廃絶後に打ち込まれた径約10cmの丸太材が、道路と平行してほぼ1間（1.8m）間隔で4本検出された。

溝西側は、近代の支柱状遺構・近代石積遺構等により攪乱を受け、石列は検出されていない。幅1.0～1.5m、深さ約20～30cmを測る。B－1グリッドの溝北側では、部分的に5号溝の上面に位置する、礫を多く含む硬化面が検出されている。西壁セクションでは3時期の変遷が捉えられる。1期からは近代、2・3期の層からは江戸時代後期（19世紀代）の遺物が確認された。2・3期の溝は19世紀代の遺物と割石を含む埋設土に覆われており、幕末から明治初期に廃絶したものと考えられる。

出土遺物（図19－1～22、図20－23）は、18世紀から近代にかけての大量の肥前系磁器・瀬戸系陶磁器が検出されている。段重蓋（9）には焼継ぎが見られる。山水土瓶（18）は19世紀代に多く見られる。22は高台内に「有限会社三井商店」とある。19世紀代と推定される大量の桟瓦が検出されたことから、溝沿いに塀などの構築物が存在したことが分かる。

2号溝（図7、写真5・52）

G－1～6グリッドに位置する。N－18°－Eに軸をもつ石組みの暗渠である。遺構は最も上層から確認され、1号溝を切る。溝幅約5cm、深さ10cm、総延長約18.5mを測る。暗渠の側面は約20cmの長方形の自然石と、蓋部分は径20～30cmの自然石により築かれている。出土遺物（図20－24～27）は、馬の目皿・肥前系磁器・瀬戸系磁器・土瓶など19世紀代の遺物が主に検出されている。しかし1号溝の上に築かれていることから、近代の区画の暗渠と考えられる。

3号溝（図7、写真6）

F－1・2グリッドに位置する。N－22°－Eに軸をとる、石列を伴う溝である。北側は攪乱、南側は近代の支柱状遺構によって切られる。長さ1.2m、溝上部幅約0.7m、内幅約0.2m、深さ20cmを測る。石列は東側に面を持ち、径20～40cmの安山岩の検知石が確認されている。覆土内からは桟瓦など19世紀の遺物が検出されている。

4号溝（写真9）

F－6・7グリッドに位置する。N－22°－Eに軸をとり、北・南側は攪乱を受け、長さ6.6m、幅約0.3m、深さ約20cmを測る。溝底部には砂粒の堆積が見られる。出土遺物は確認されていない。

5号溝（図5）

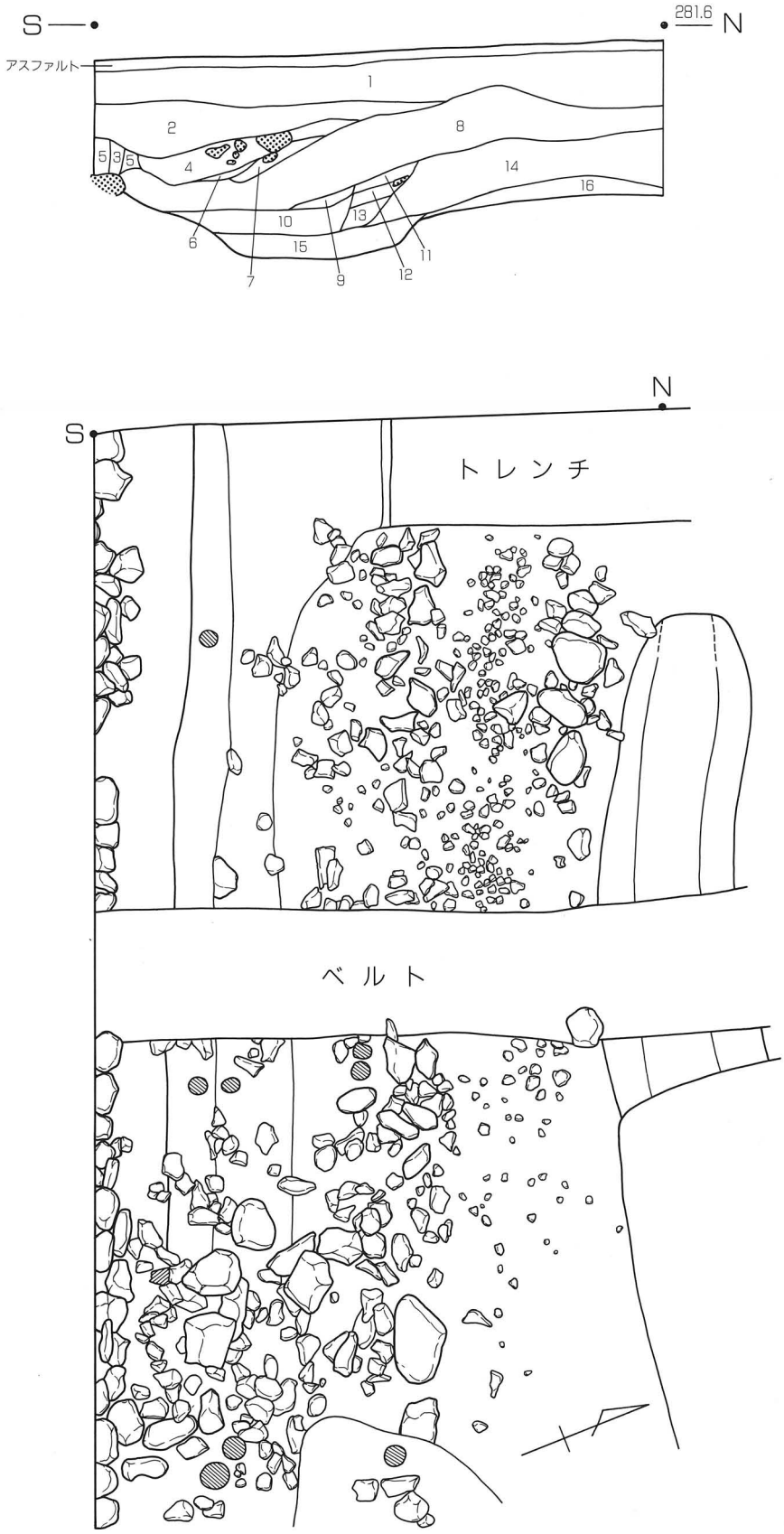
1号溝の北側約1mに位置する。N－69°－Wに軸をとり、1号溝と平行する。攪乱等により不明な部分も多いが、2・3・10・28号溝に切られている。東側から約9.0m、9.0m、2.0mの長さで部分的に検出された。溝幅は約0.4～1.0m、深さ約10～20cmを測る。F・G－1グリッド部分の2.3mは溝が途切れている。D－2グリッドでは、溝北側上端に長さ0.9mの平行する石列が検出された。底部には砂粒が僅かに堆積するが、流水の痕跡は確認されなかった。小片のため図化は行っていないが、19世紀を下限とする肥前系磁器・瀬戸美濃系陶器・土器・鍋などの遺物が検出されている。1号溝と平行し、ほぼ同時期に存在したものと考えられ、塀等の雨落ち溝であった可能性が高い。

6号溝

D・E・H－2グリッドに位置する。N－69°－Wに軸をとり、東から西側へ緩やかに傾斜する。攪乱により切断されているが、西側で長さ2.2m、幅1.1m、東側で長さ3.0m、幅0.5～0.7m、深さ7～10cmを測る。覆土は黒色土で、中世のかわらけ片が検出されている。

7号溝（図8、写真10・13・54）

E－5～7グリッドに位置する。北側はN－22°－E、南側はN－35°－Eに軸をとる、石組の暗渠である。南・北側は攪乱を受けている。溝南側で8号溝と分岐するが、新旧関係は不明である。長さ約9.0m、溝上部幅約0.8m、内幅0.10～0.15m、深さ約30cmを測る。長径10～20cmの自然石が2～3段、高さ25cmに積まれ、径20～30cmの蓋石をのせる。



1，礫　　層
2，石炭殻層
3，杭　　跡　石炭殻多く含む。
4，淡黄褐色砂質土層　炭化物・焼土粒子微量、礫少量、土管片含む。固く締まる。
5，黒褐色粘質土層　砂粒子・黄色土粒子微量含む。
6，灰黄褐色砂質土層　礫微量含む。
7，褐灰色土層　炭化物微量、黄褐色砂粒少量含む。固く締まる。
（1期）
8，黒褐色土層　炭化物・焼土粒子・礫少量、砂粒やや多量含む。土器片混入。固く締まる。
9，黒色粘質土層　黄褐色土粒子・砂粒微量含む。やや固く締まる。
10，黒褐色土層　炭化物・焼土粒子・礫少量、砂粒やや多量含む。粘性あり。
11，黒褐色粘質土層　炭化物微量、黄褐色土・砂粒少量含む。固く締まる。
12，黒色粘質土層　炭化物・焼土粒子微量、砂粒少量含む。固く締まる。
13，黒色粘質土層　炭化物・焼土粒子少量含む。
（2期）
14，黒褐色土層　炭化物・焼土粒子・礫少量含む。土器片混入。固く締まる。
15，黒色粘土層　炭化物・焼土粒子・砂粒微量含む。19世紀陶磁器検出。やや固く締まる。
（3期）
16，黒色粘質土層　黄褐色土粒子・砂粒微量、炭化物・焼土粒子少量含む。固く締まる。

＝杭

0　1m

図５　A区１号溝西側平面図・西壁セクション

図6　A区1号溝東側平面図・側面図・セクション

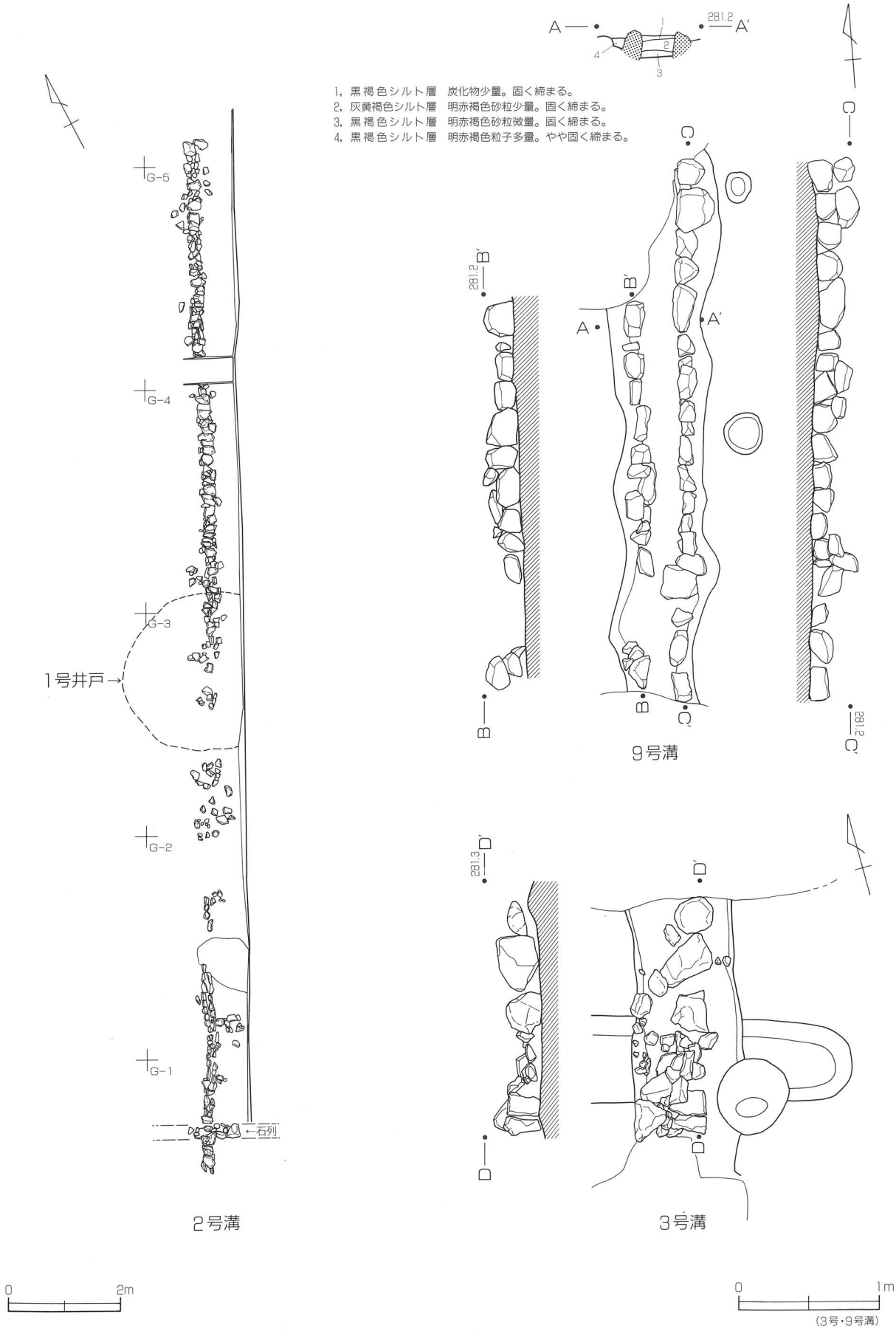


図7　A区2号・3号・9号溝平面図・側面図・セクション

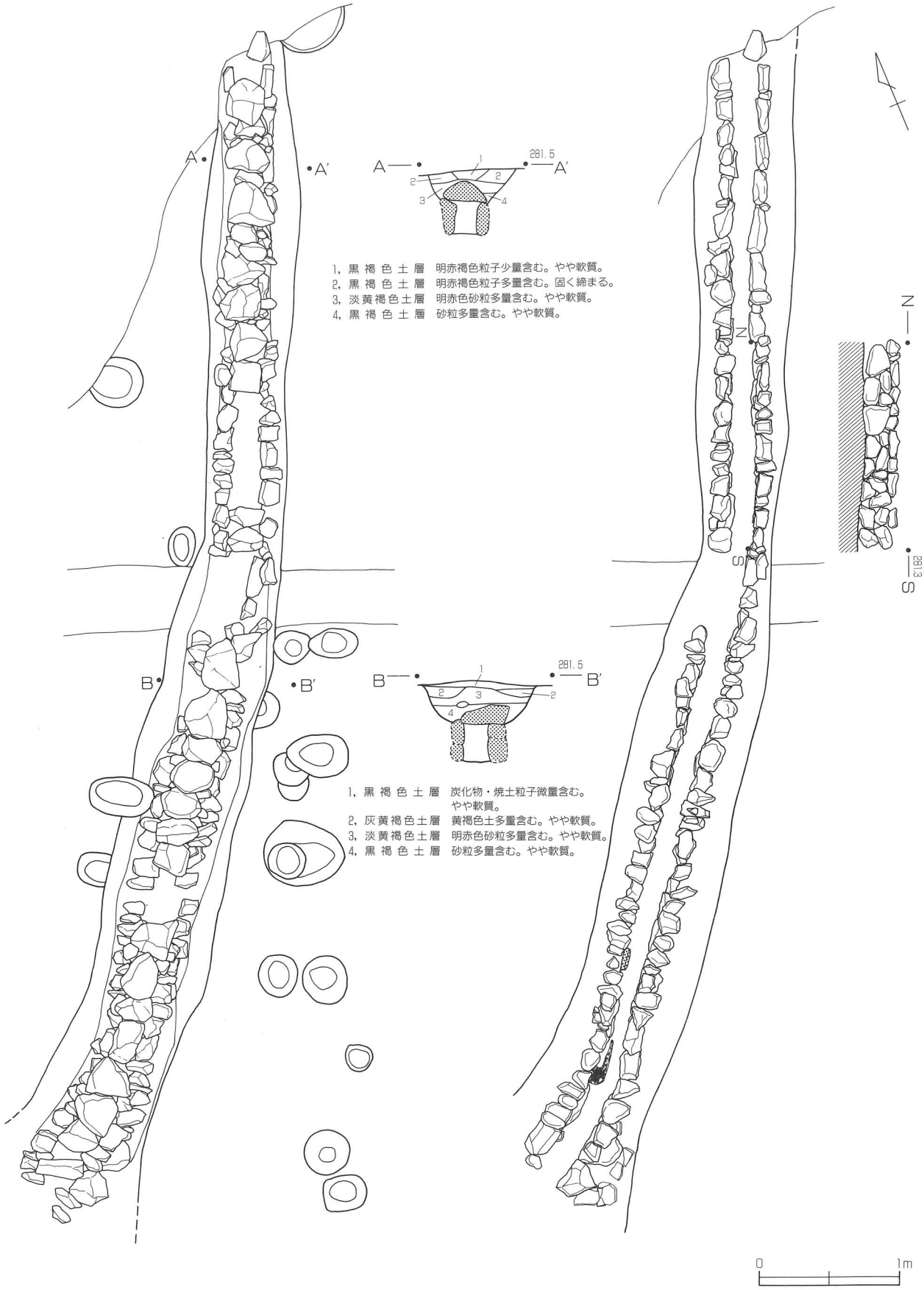


図８　Ａ区７号溝平面図・セクション・石積側面図

覆土から石臼・鋤・磁器・瀬戸系陶器・土器など19世紀代の遺物が検出された（図21—28～34、図22—35～36、図44—２）。石積みの一部には石製品（33～36）が転用されていた。蓋石上面から、19世紀代に比定される桟瓦（29～31）が大量に検出されており、暗渠もこの時期に構築されたものと考えられる。

８号溝（図17、写真55）

Ｅ—４グリッドに位置する。Ｎ—22°—Ｅに主軸をとり、溝南側は西方向に軸を曲げる。12号溝を切るが、27号溝との重複関係については不明である。溝は長さ約5.0ｍ、幅約0.4～0.8ｍ、最も深いところで約30cmを測る。溝南側では径20～30cmの自然石を用いた、長さ1.3ｍの石列が検出された。

出土遺物（図22—37～41）は少ない。40は、陽刻の上に金箔が付着した土製品である。41は棟の角部に設置されていた瓦と考えられる。遺物の下限時期から、19世紀代の溝と推定され、７・９号溝と同時期に存在したものと考えられる。

９号溝（図７）

Ｅ—３グリッドに位置する。Ｎ—22°—Ｅに軸をもつ石積みの溝である。南・北側は攪乱を受けている。長さ3.7ｍ、溝上部幅約0.6ｍ、内幅20cm、深さ約20cmを測る。縁石は、長径10～35cmの自然石が１～２段残存していた。遺構東側にはピット190と203が、溝と平行し１間間隔で検出されている。覆土より、瀬戸系磁器・土瓶など19世紀代の遺物が出土した。

10号溝（図５、写真８・53）

Ｈ—１～３、Ｇ—５～７グリッドに位置する。Ｎ—18°—Ｅに軸をとり、１号溝に接続する江戸時代後期（19世紀代）の遺構である。５・６・16号溝を切るが、11・26号溝及び24号土坑との時期差は不明。部分的に攪乱を受けているが、総延長23.6ｍ、幅0.3～0.5ｍ、深さ約８cmを測る。溝西側から多数のピットが検出されたが、柵列・塀などを想定し得る規則的な配列は確認されなかった。覆土は砂粒を微量に含む黒褐色粘質土で、肥前系磁器など19世紀の遺物が検出されている。南側の１号溝に直支することから、19世紀代の屋敷境を区画する溝と考えられる。

図23—42～48が出土遺物で、たこ唐草文の皿（43）と御神酒徳利（45）、桟瓦（48）など18～19世紀代のものが多い。

11号溝（図15、写真12）

Ｈ・Ｉ—６グリッドに位置する。Ｎ—73°—Ｗに軸をとる。北側は24号土坑に切られるが、10号溝との重複関係は不明。長さ約6.8ｍ、幅約0.7ｍ、深さ約20cmを測る。覆土より、16世紀代のかわらけ（図23—49）、近世のミニチュア土製品（50）、その他小片のため図化していないが溶融物付着土器・瀬戸美濃系擂鉢・瓦・瀬戸系陶器など16～18世紀代の遺物が検出されている。

12号溝（図17、写真11）

Ｂ～Ｇ—４グリッドに位置する。Ｎ—70°—Ｗに軸をとり西側へ緩く傾斜する。Ｄ・Ｅ—４グリッドでは2.3ｍ程攪乱を受けているが、延長24.0ｍが検出された。溝断面はＵ字状を呈し、幅約0.4～0.7ｍ、深さ約20～40cmを測る。８・18号溝に切られるが、17号溝との重複関係は不明である。

出土遺物（図23—51～60）は、かわらけ（51～54）・瀬戸美濃系陶器（56）、その他染付・焼土塊など16世紀代のものが多い。

13号溝（図16）

Ｈ—７・８グリッドに位置する。Ｎ—11°—Ｅに軸をとる。16号溝を切り、南側は24号土坑、北側は25号土坑に切られる。長さ約6.8ｍ、幅0.3～0.6ｍ、深さ約10cmを測る。覆土は砂粒を含む黒色土である。遺物は、中世段階に位置づけられるかわらけ（図23—61）が確認されただけである。

14号溝（図16、写真20）

Ｆ～Ｉ—９グリッドに位置する。Ｎ—69°—Ｗに主軸をとり、西方向へ傾斜する。15号溝を切り、23・25号土坑に切られ、東側は攪乱を受けている。長さ約12.5ｍ、幅0.3～0.8ｍ、最深約15cmを測る。覆土は黒色土で、縄文土器・古墳時代の高坏脚部（図23—62）・かわらけ・陶器が検出されている。

15号溝（図16）

Ｇ—８、Ｈ—７～９、Ｉ—５グリッドに位置し、Ｎ—４°—Ｅに主軸をとる。16号溝を切り、11・14

号溝と24号土坑に切られる。21・22・23号溝との重複関係については不明。延長約19m、幅0.3～1.3m、深さ約5cmを測る。覆土は炭化物を少量含む黒色粘質土で、遺物は未検出である。

16号溝

H－7グリッドほかに位置する。N－84°－Eに軸をとり、10・13・15号溝に切られる。長さ7.5m、幅0.35～0.8m、深さ約10cmを測る。覆土は炭化物を含む黒色粘質土層であり、遺物は未検出である。

17号溝（写真11）

9号溝の北側B－4、C－4・5グリッドに位置する。N－83°－Eに軸をとり、長さ8.0m、幅約0.3～0.7m、深さ約10cmを測る。12号溝との新旧関係は不明。かわらけ片が少量検出された。

18号溝

C－4・5グリッドに位置する。N－22°－Eに軸をとり、12・17号溝を切るものと推定される。C－4グリッドは長さ約2.8m、幅約0.4m、深さ約4cm、C－5グリッドでは長さ約3.1m、幅約0.2～0.4m、深さ5cmを測る。暗黒褐色土の堆積が確認されたが、出土遺物はない。

19号溝

D－2・3、E－2グリッドに位置する。N－43°－Wに軸をとり、東側に緩やかに傾斜する。6・9号溝に切られている。D－2・3グリッドでは長さ約4.0m、幅0.42～0.6m、深さ5cmを測る。E－2グリッドでは6号溝に切られるが、長さ1.5m、深さは約10cmを測る。黒色粘質土の覆土より、かわらけ片が検出された。

20号溝

B－2、C－2・3グリッドに位置する。北東から南西に湾曲しN－49°－Wに軸をとるが、北側は東へ湾曲し南に傾斜する。16世紀代のかわらけが出土した3号井戸によって切られる。長さ約8.0m、幅1.0～1.2m、深さ5～20cmを測る。覆土は炭化物を含む黒褐色土で、遺物は未検出である。

21号溝（図15）

H－6グリッドに位置する。N－84°－Eに軸をとり、24号土坑に切られる。長さ約2.3m、幅0.5m、深さ約5cmを測る。東壁セクションから、幅0.7m、深さ18cmの規模を有していたことが分かる。覆土は焼土粒子を微量含む黒色土層である。遺物はない。

22号溝（図15）

H－6グリッドに位置し、N－65°－Wに軸をとる。西側は24号土坑に切られる。長さ約1.7m、幅0.35m、深さ約5cmを測る。覆土は暗褐色土で、遺物はない。

23号溝（図15）

H－6グリッドに位置する。N－84°－Eに軸をとり、24号土坑に切られる。長さ約2.1m、西側幅0.5m、東側幅0.7m、深さ約15cmを測る。覆土は黒褐色土で、遺物はない。

24号溝

D－6グリッドに位置する。N－22°－Eに軸をとる。南・北は攪乱により切られている。25号溝との重複関係は不明である。長さ約2.2m、幅1.18m、深さ約10cmを測る。20号溝覆土と類似した黒褐色土の堆積が確認されている。小片のため図化は行っていないが、近世以前のかわらけ・土器・焼土塊などが検出されている。溝は南側へ延びていたものと考えられる。

25号溝

D・E－6グリッドに位置し、N－80°－Wに軸をとる。24号溝との切合い関係は不明である。長さ約1.8m、幅0.2～0.25m、深さ約3cmを測る。覆土は黒色土で、遺物は検出されていない。

26号溝

H・I－2・3グリッドに位置する。N－69°－Wに軸をとり西へ僅かに傾斜する。西側は4号溝に切られる。長さ6.0m、幅0.3～0.5m、深さ5cmを測る。遺物は検出されていない。

27号溝（図17）

E－4グリッドに位置する。N－88°－Wに軸をとる。8・12号溝、ピット213・305との重複関係は不明である。現状長さ2.2m、幅0.13～0.23m、深さ2～5cmを測る。覆土は黒褐色土であり、遺物は検出されなかった。

28号溝（写真８）

Ｇ－２～６グリッドに位置する、土管が埋設された近代の溝である。Ｎ－18°－Ｅに軸をとる。総延長20ｍ、幅0.3～0.4ｍ、深さ約10cmを測る。土管は長さ約１ｍ、径約15cmを測り、製糸工場が建設された大正８年以降の所産と考えられる。

(2) 井戸

中世から近代の井戸11基は、素掘り、石積み、レンガ積みの３形態に分類される。

１号井戸（図９、写真15）

調査区中央部Ｆ－３、Ｇ－３グリッドに位置し、遺構確認面の標高は381.40ｍである。円形を呈する石積みの井戸で、上面の長軸2.7ｍ、短軸2.6ｍ、深さ約3.0ｍを測る。石積みは内径約0.7ｍの円形で、現高約1.3ｍを測る。石積み下部には、径10cmほどの丸太材が井桁状に組まれていた。石積みは、径約30～40cmの安山岩製の山石を奥行きを長くとって垂直に積み、間詰石として拳大を超える比較的大きな礫石を用いている。裏込石はなく、背面に黒褐色土が充塡されている。

出土遺物（図24―63～67）は16～17世紀前後の所産である。朝鮮製の白磁碗（65）は、17世紀前後に位置づけられる。真鍮製の鉤（図44―３）は茶道の花飾りで使用される鎖の鉤である可能性が考えられる。覆土には炭化物が多く、出土遺物から17世紀前後に火災を受けた後、埋められたものと推定される。

２号井戸（図９、写真16）

Ｃ－２グリッドに位置する。南は近代の石積遺構、西は近代の攪乱によって破壊を受けている。確認面の標高は281.10ｍである。上面の長軸3.2ｍ、短軸2.2ｍ、深さ2.3ｍを測る。断面はロート状を呈し、上面から1.7ｍ下がったところで内径約1.3ｍとなり、そこからほぼ垂直に掘り下げている。かわらけ・瀬戸美濃系陶器など16世紀代の遺物（図24―68～75）が検出された。かわらけ（68～71）は、武田氏館跡などで類似したものが出土している。73は成分不明の溶融物が付着した土器であり、周辺で鍛冶が行われていた可能性を示す。遺物から16世紀代の井戸と判断される。

３号井戸（図９）

Ｂ－２、Ｃ－２グリッドに位置する、円形を呈した素掘りの井戸で、20号溝を切って検出された。内径約0.9ｍを測る。危険を伴うため、深さ1.2ｍまでの確認にとどめた。遺構上面から16世紀に比定される完形のかわらけ（図24―76）が出土した。

４号井戸（図９、写真17）

Ｉ－３グリッドに位置する、筒状の素掘りの井戸である。上面で径1.8ｍの円形を呈し、深さ約4.5ｍを測る。上面から約0.5ｍ下がった部分から内径0.9ｍと狭まり、底部では約0.65ｍとなる。遺構内からは多くの炭化物が確認される。

出土遺物（図24―77～81）は16世紀代の所産で、瀬戸美濃系陶器（79・80）は大窯第１・２段階に比定される。銭貨（図45―2～4）も出土した。16世紀代の火災を契機に廃絶されたものと判断される。

５号井戸（図９、写真18・56～58）

Ｂ－２グリッドの西壁際に位置する、筒状の素掘りの井戸である。径1.3ｍの円形を呈し、深さ3.8ｍを測る。上面から約1.0ｍ下がったところで内径0.9ｍと狭まり、底部から0.7ｍ上の硬質礫層部で0.7ｍ、底面では約0.5ｍとなる。かわらけ・瀬戸美濃系陶器・青磁・漆碗・木製品・石製品（図24―82～89、図25―90～108、図26―109～110）は、いずれも16世紀代に位置づけられる。瀬戸美濃系陶器（86・87）は大窯第２・３段階、初山窯の碗（84）は16世紀後半に比定される。覆土から炭化物・焼土塊が多量に検出されたことから、16世紀代後半の火災を契機に埋め立てられたものと推定される。

６号井戸（図９、写真19～20・59）

Ｃ－１グリッドに位置する、石積み井戸である。上面で径1.4ｍの円形を呈し、深さは4.2ｍを超える。底部の確認はできなかったが、下部から桶・胴木・石積みにより構築されている。石積み部分は内径約0.7ｍ、深さ3.2ｍを測る。石積みの最上面は長径80cmの大きめの石材を使用するが、井戸内面は径20～30cmほどの自然石が積まれ、間に粘土が充塡されていた。胴木は幅約10×6.5cm、長さ約75cm

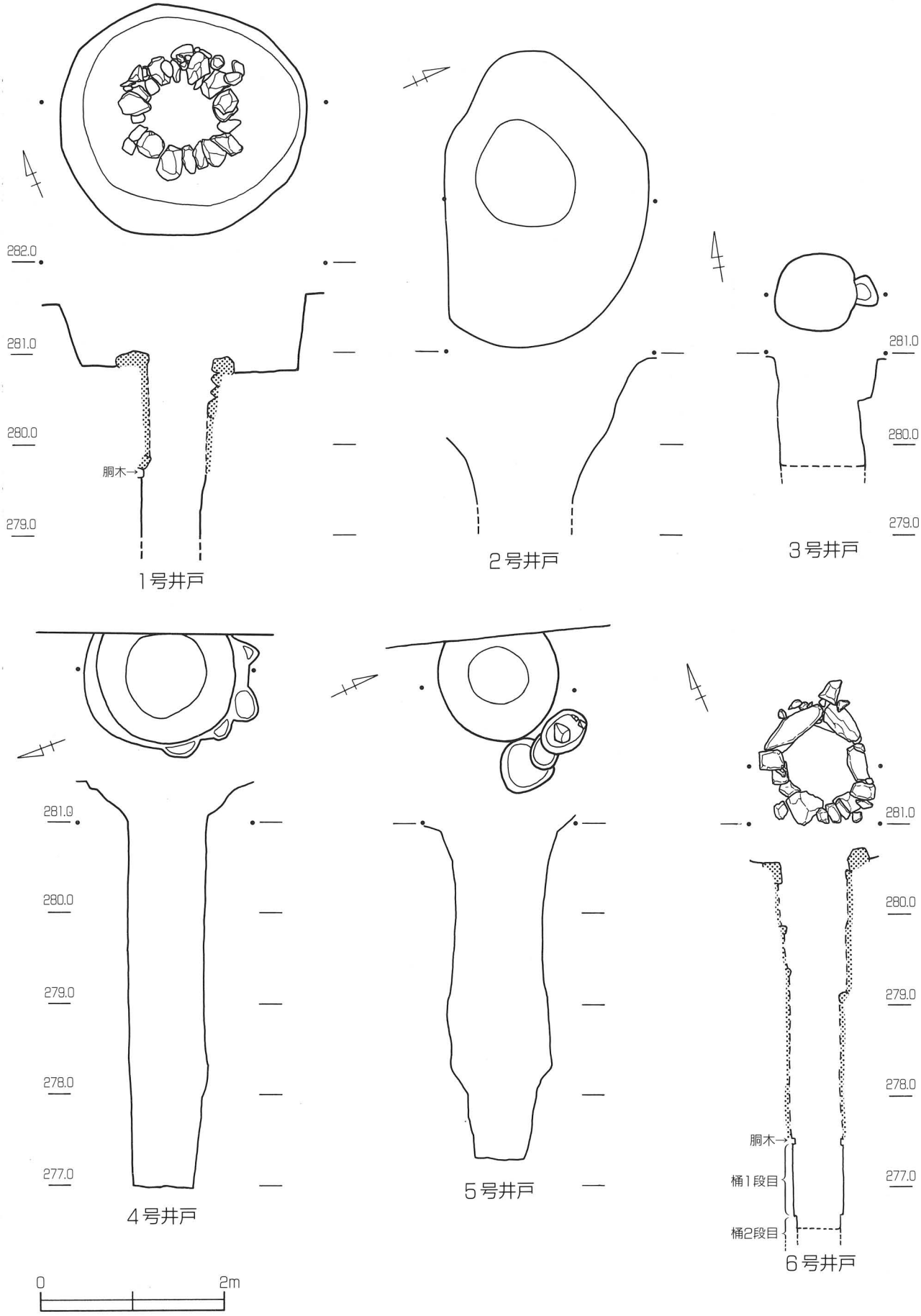
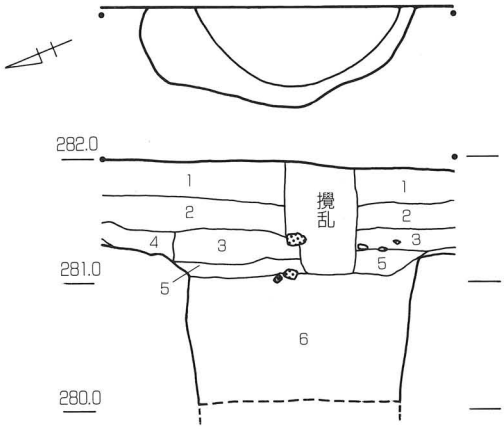
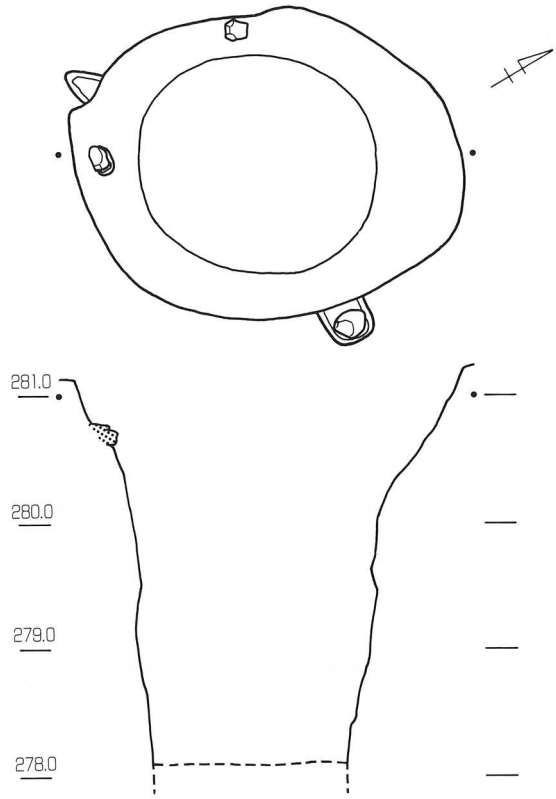


図9　A区井戸平面図・エレベーション

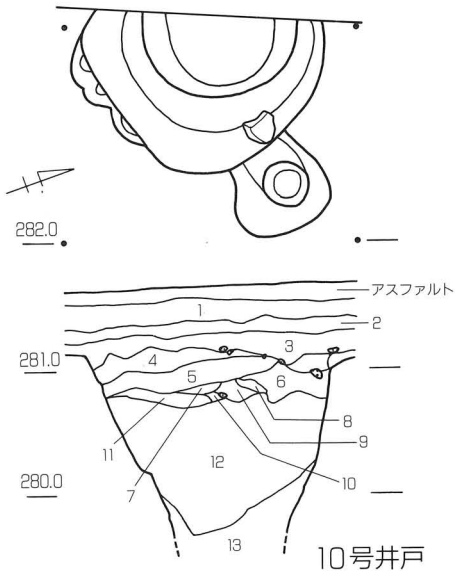


7号井戸

1, 盛　土　層
2, 黒 褐 色 土 層　炭化物・焼土粒子若干、礫（≦0.5～3㎝）少量含む。固く締まる。
3, 黒 褐 色 土 層　炭化物・焼土粒子微量、土器・江戸時代磁器検出。やや固く締まる。
4, 黒 褐 色 土 層　炭化物・焼土粒子少量、黄褐色土ブロック状に混入。やや軟質土。
5, 暗 褐 色 土 層　砂礫と黄褐色土ブロック含む。粒子は粗い。
6, 灰黄褐色土層　礫若干、黄褐色土・黒褐色土ブロック状に混入。やや軟質土。

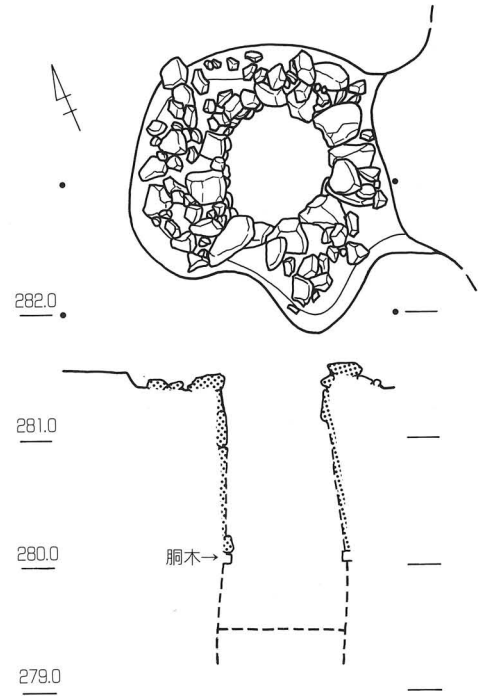


8号井戸



10号井戸

1, 盛　土　層
2, 黒 褐 色 土 層　炭化物・焼土粒子・黄褐色土を少量と砂礫をやや多く含む。土目はやや粗いが締まりは強い。
3, 黒褐色粘質土層　炭化物・焼土粒子・黄褐色土粒子・砂礫を少量含む。粘性があり、締まりが強い。
4, 灰黄褐色粘質土層　炭化物・焼土粒子を微量含み、礫が混入する。粘土ブロックが密に入っている粘土層。
5, 黒褐色粘質土層　炭化物・焼土粒子・砂礫を少量と黄褐色粒子をやや含む。
6, 黒褐色粘質土層　5層と類似するが、5層よりも締まりが強い。
7, オリーブ黒色粘質土層　炭化物・焼土粒子を微量と白色・黄褐色粘土ブロックを含む。
8, オリーブ黒色粘質土層　白色・黄褐色粘土ブロックを多く含む。
9, 灰 色 粘 土 層　白色・黄褐色・黒褐色粘土ブロックを若干含む粘土層。
10, オリーブ黒色粘質土層　8層と類似するが、土目がやや細かい。
11, 黒褐色粘質土層　白色・黄褐色粘土ブロックをやや多く含む。
12, オリーブ褐色粘質土層　白色・黒褐色・黄褐色粘土ブロックを多く含み、少量の礫が混入し、下部は締まりがややゆるい。
13, 黒 色 粘 質 土 層　炭化物・焼土粒子を少量含む。砂礫が少量混入し、締まりがゆるい。



9号井戸

0　2m

図10　A区井戸平面図・セクション・エレベーション

の角材を井桁状に組んでいた。桶は長さ80cm、厚さ1.7cm、幅約10cmの木材を20本ほど組み合わせており、２段目まで確認した。

出土遺物（図26―111～115）の多くは16世紀代に比定される。図化を行ってはいないが、厚さ2.1cmの近世の丸瓦片が検出された。中には被熱を受けたものも見られる。遺構は１号溝に切られ、18世紀以降の遺物が検出されていないことから、17世紀代の井戸の可能性もあり得る。

７号井戸（図10、写真21・60）

Ｉ―４グリッドに位置し、東壁に掛かって検出された。素掘りの井戸で、形状は円形を呈するものと考えられる。内径は不明であるが、検出部で約1.8ｍを測る。出土遺物（図26―116～122）は、18世紀代を中心としたものである。

８号井戸（図10、写真22～23・62～66）

Ｂ―３・４グリッドに位置する、近世の素掘りの井戸である。掘方部分で長軸3.1ｍ、短軸2.4ｍ、深さ3.1ｍを測る。上面から1.2ｍ下がった部分から内径が狭まり、下部では約1.5ｍとなる。井戸上部側壁部からは径15cmほどの礎石が２か所検出されている。覆土上層は径約10～20cmの自然石が大量に投げこまれ、その内部から18世紀後半の陶器・磁器・瓦・土製品などが大量に出土した。さらに下層からは径約５～10cm、長さ２ｍほどの木材が検出されている。木材の多くは枘穴が穿たれており、炭化物も検出された。木材は、井戸上屋の構築材とも考えられる。覆土中に焼土が多く確認されたことから、火災を契機に埋められたものと推定される。

出土遺物（図27～図32―123～218）は、18世紀後半から19世紀初頭にかけての肥前系磁器・瀬戸美濃系陶器・土製品・瓦・木製品などが大量に検出された。126は素地は肥前で生産され、絵付けを江戸で行った「江戸染付」であり、同一個体片が１号溝と24号土坑からも検出されている。広東碗製品（図27―130～134）は、18世紀後半から19世紀にかけて流行した碗である。泉州堺製の擂鉢（図30―183～185）は18世紀代から流行し、遠隔地との物流が行われていたことを示す。涼炉（図31―209・210）は、煎茶で使用されたものと考えられ、居住者の階層制と趣味を物語る遺物である。

９号井戸（図10、写真24～25・61）

Ｅ―３グリッドに位置する。確認面の標高は381.40ｍである。円形を呈し、上部に石積みを施す。上面の長軸2.4ｍ、短軸2.0ｍ、深さ2.1ｍを測る。石積み上面の内径は約0.9ｍであるが、内部は若干フラスコ状に広がる。石積みは径30cm前後の自然石を高さ1.5ｍほどに積み上げている。石積み下部の地山層を若干掘り込んで、幅約７cm、長さ90cmの角材（図43―368）が六角形状に組まれていた。出土遺物（図32―219～225）は中世から近世のものである。小片のため図化は行っていないが、近世の漆椀片も検出された。

10号井戸（図10）

Ｂ―３グリッドに位置し、西壁に掛かって検出された。円形を呈するものと推定される。正確な内径は計測できないが、検出部上面で径2.0ｍ、上面から0.9ｍ下がった部分で径1.2ｍ、現状深さ約2.0ｍである。覆土中からの遺物の検出はなかった。

11号井戸（写真26）

調査区北西側Ｂ―３・４グリッドに位置する、近代の井戸である。レンガと石積みにより築かれ、深さ約4.5ｍ、上面の長軸3.5ｍ、短軸3.0ｍを測る。上部レンガ積みの井戸側は内径2.2ｍ、深さ約2.0ｍを測る。縦10.2cm、横22.5cm、高さ5.5cmの赤褐色のレンガを小口積みで26段積み上げている。下部の石積みも上部と同じく内径2.2ｍを測り、径30～40cmの玉石状の自然石を積み上げている。昭和20年代以降の機械部品が大量に廃棄されていた。

この遺構の北西側10ｍの位置に、平成11年３月までレンガ造りの煙突（写真93）が残存しており、同じレンガ造りであることから、丸茂製糸創業時からの遺構であることが判明した。

(3) 掘立柱建物跡（図11、写真14）

Ｆ～Ｈ―２～４に位置する、Ｎ―18°―Ｅに軸をとった正方形の掘立柱建物跡である。桁行6.5ｍ、梁間6.5ｍ、面積42.25㎡を測る。８基（ピット276・278・285・302・417・465・496・497）の柱穴はい

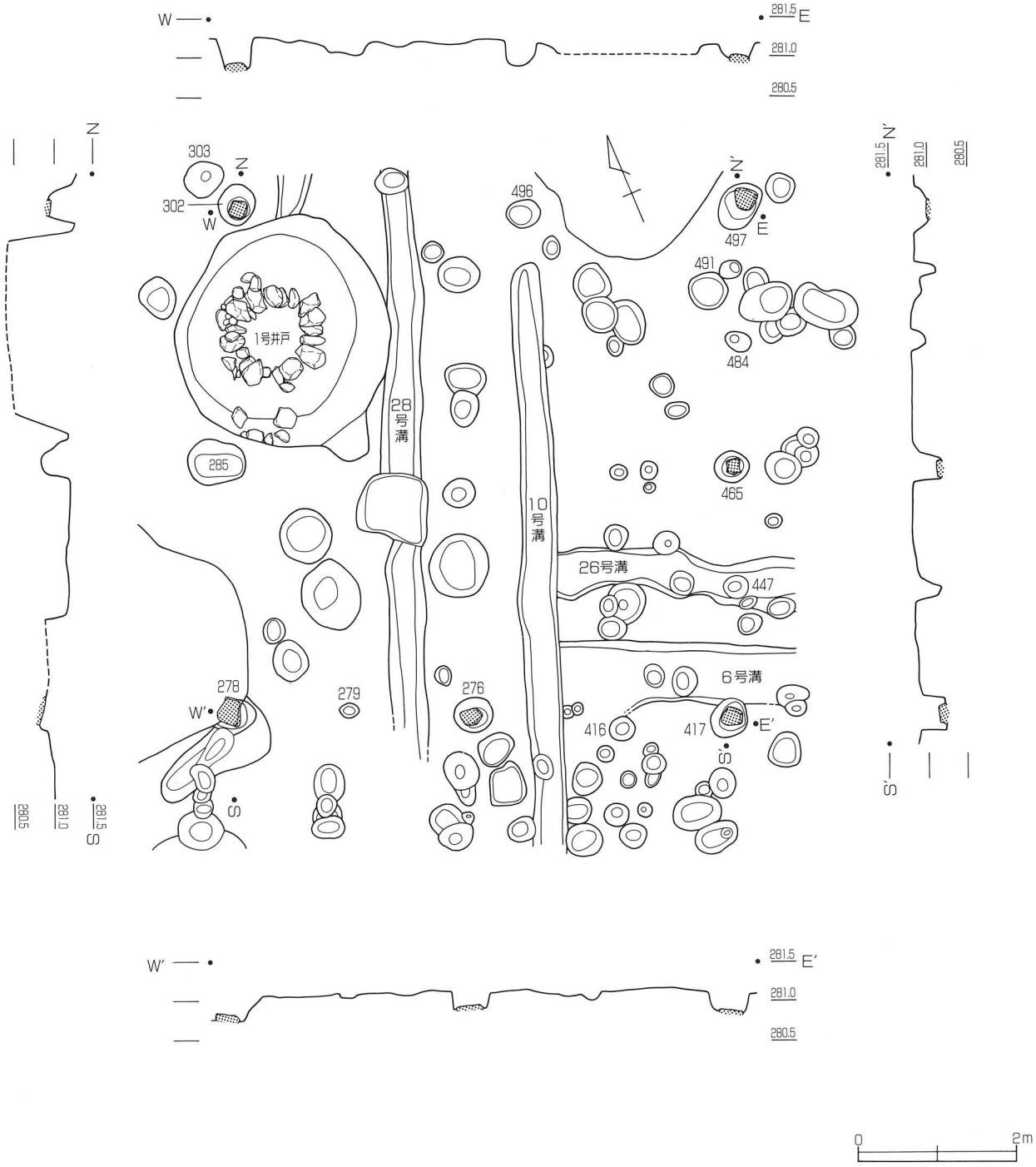


図11　A区掘立柱建物跡平面図・エレベーション

ずれも径50～70cm、深さ約30cmを測る。６基の柱穴の底部からは、径20～40cmの扁平な自然石が確認されている。図化していないが、ピット497から16世紀代の瀬戸美濃系陶器、さらにピット298では近世の磁器と陶器が検出された。建物跡は近世に位置づけられるが、機能は不明である。

(4) 埋桶

検出された13基は近世～近代の遺構である。桶部材は腐食が著しく、計測不能なものが多い。

埋桶１（図12、写真27）

Ｈ―２グリッドに位置する。上部は長径約70cm、短径約60cm、下端はほぼ円形を呈し、径約50cm、深さ約10cmを測る。桶は径40cmの底板が確認され、５枚の板材に分割される。著しい腐食のため図化できなかったが、底板の東側上面から長さ約20cmの鎌状の金属製品が検出され、その上に径15～25cmの自然石４点が確認された。他に肥前系磁器２点、陶器１点、瓦片など19世紀代のものが検出されたが、小片のため図化は行っていない。

埋桶２（図12、写真28）

Ｅ―２グリッドに位置する。上部は楕円形を呈し、東側の一部は攪乱を受けている。上面の長径70cm、短径38cmを測る。下部は長径46cm、短径33cm、深さ約15cm。桶は腐食が著しく、径約30cmの底板が確認された。図化していないが、18～19世紀代の肥前系磁器１点と、金属製品（図44―16～17）が検出されている。

埋桶３（図12、写真29）

Ｅ・Ｆ―３グリッドに位置する。上面は円形を呈し、径約45cmを測る。下端は径約35cm、深さ12cmである。桶は径30cmの底板が確認され、２枚の板材に分割される。側板は残存していたが、腐食が著しく計測不能である。小片のため図化していないが、肥前系磁器・陶器・土器・瓦など、19世紀代の遺物が検出されている。

埋桶４（図12、写真30）

Ｉ―２グリッド、埋桶12の西側に位置する。円形を呈し、上端径約60cm、下端径約50cm、深さ約35cmを測る。底板・側板は腐食が著しく、計測不能であった。出土遺物は確認されていない。

埋桶５（図12、写真31・38）

Ｅ―５グリッドの埋桶８の北側に位置する。円形を呈し、上端径約45cm、下端径約40cm、深さ約15cmを測る。底板は確認されなかったが、厚さ１cm前後の側板と竹製の箍が検出されている。図化していないが、肥前系磁器・甕・瓦・土管・集緒器など19～20世紀にかけての遺物が検出されている。

埋桶６（図12、写真32）

Ｆ―６グリッドに位置する。南西側はピットにより攪乱を受ける。掘方はほぼ円形を呈し、上端径約65cm、下端径約50cm、深さ約10cmを測る。底板は腐食が著しいが径50cmほどであろう。厚さは不明である。幅15cm、厚さ１cmの側板の断片が検出されているが、他に遺物は確認されていない。

埋桶７（図12、写真33）

Ｇ―５グリッドに位置する。円形を呈し、上端径約50cm、下端径約45cm、深さ８cmを測る。長さ40cm、幅７cmの底板の断片が検出された。遺物は確認されていない。

埋桶８（図12、写真34・38）

Ｅ―５グリッドの５号埋桶の南側に位置する。不整形を呈し、26号土坑とピット242が重複するが、新旧関係は不明。上端長径約1.1ｍ、短径約60cm、深さ約20cmを測る。底板は腐食が著しかったが、径40cm程度と推定される。底板は３枚の板材に分割される。底板周辺から径13～20cmの自然石７点が検出された。遺物は緑色凝灰岩製の砥石（図34―242）１点と寛永通宝（図45―11）が検出された。

埋桶９（図12、写真35）

Ｈ―５グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、上端径約70cm、下端径約60cm、深さ約20cmを測る。桶は径41cmの底板が確認された。底板は厚さ約1.5cmを測り、４枚の板に分割される。肥前系磁器・陶器製土瓶蓋・土製品・瓦など、19世紀代の遺物が検出されたが、小片のため図化していない。

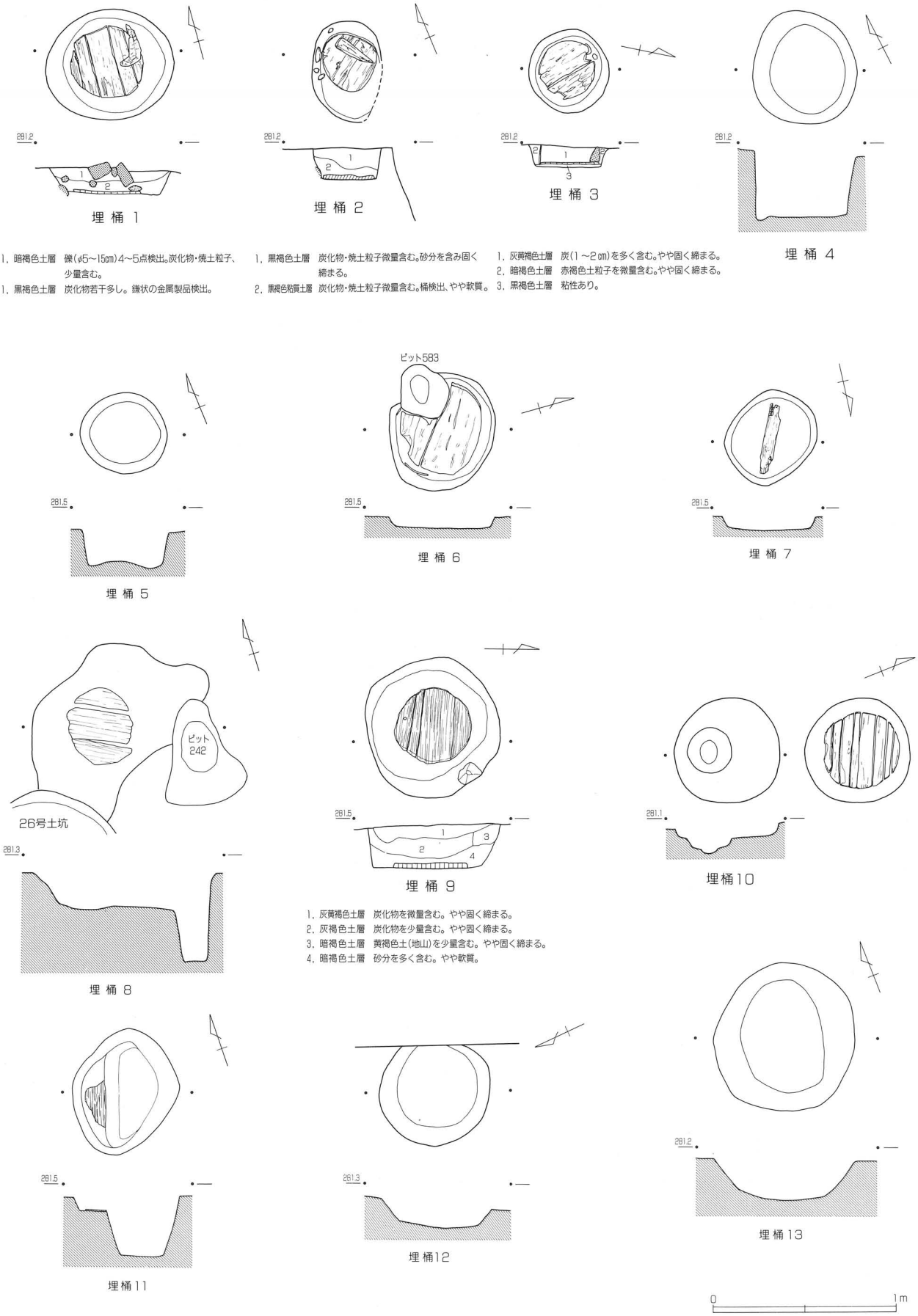


図12　A区埋桶1～13平面図・セクション・エレベーション

埋桶10（図12、写真36）

B－5グリッドの11号井戸東側に近接する。円形を呈し、上端径56cm、深さ8cmを測る。底板は径約40cm、厚さ約1.5cmを測り、8枚の板に分割される。肥前系磁器1点と銭貨（図45—12）が検出されている。

埋桶11（図12、写真37）

H－5グリッドに位置する。不整円形を呈し、上端長径70cm、短径58cm、下端は長径60cm、短径40cm、深さ45cmを測る。桶は腐食が著しく計測不能であった。遺物はなかった。

埋桶12（図12）

I－2グリッドに位置する。円形を呈し、上端径約60cm、下端径約45cm、深さ約15cmを測る。桶は腐食が著しく、計測不能であった。遺物は確認されていない。

埋桶13（図12）

G－2・3グリッドのライン上に位置する。円形を呈し、上端径約80cm、下端径約45～60cm、深さ約20cmを測る。桶は腐食が著しく、計測不能だった。遺物はない。

(5) 土　坑

土坑は26基が検出されている。時期・性格の不明なものが多いが、8号土坑は中世墓である。23・25号土坑は近世の水利遺構、25号土坑は近世の地下室、26号土坑は池跡の可能性がある。ここでは、これら径約1mを越える掘り込みをすべて土坑に分類し記述する。

1号土坑（図13、写真39・67）

F・G－2グリッドのライン上に位置する。不整形を呈する近世の土坑である。ピット262・277・250との重複関係については不明であるが、ピット278に切られる。長軸1.65m、短径0.7m、深さ20cmを測る。遺構検出段階において肥前系磁器・瀬戸系陶器・土鍋など19世紀代の遺物が礫を伴って多数出土した。上層を除去した段階で、N—73°—Eに軸をもつ長さ約1.9mの石列が検出されている。その間から19世紀代の桟瓦が多数出土した。19～20世紀前半の遺構であるが、性格については不明である。

出土遺物（図33—226～237）は、いずれも18～19世紀代に比定される。長皿（227）は焼継ぎが見られる。鉢（228）は19世紀代の肥前磁器である。小壺（232）、小鍋（233）、土釜（234）、鍋（235）などは台所用品である。軒平瓦は、寄棟部分に使用される三角形の瓦である。唐草文と菊文が見られ、19～20世紀前半にかけての瓦と考えられる。

2号土坑

B－3グリッドに位置する。ピット35に切られる。楕円形を呈し、長径0.9m、短径0.6m、深さ約25cmを測る。上面からは径約10～25cmの自然石多数検出され、覆土から縄文土器・肥前系磁器・瀬戸系陶器・瓦・銭貨（図45—8～9）が検出された。これらの遺物の図化は行っていない。遺物から18世紀以降の土坑と考えられるが、性格は不明である。

3号土坑（図13）

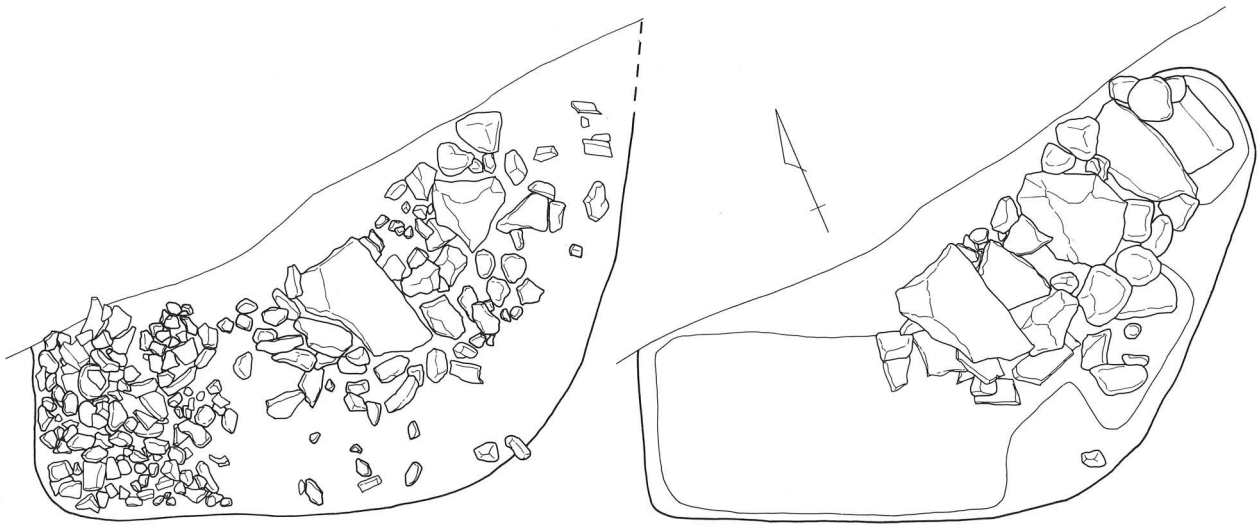
B－4グリッドに位置する。12号溝とピット88・89に切られる。楕円形を呈し、長径1.1m、短径0.7m、最深約0.4mを測る。上面では径約20cmの自然石8点が、底部からは径35cmの扁平な石1点が検出された。暗黒褐色土の覆土中には、部分的に炭化物の堆積が確認され、16世紀代に比定されるかわらけ5点が出土した。土坑は近世以前に位置づけられるが、性格については不明である。

4号土坑（図13）

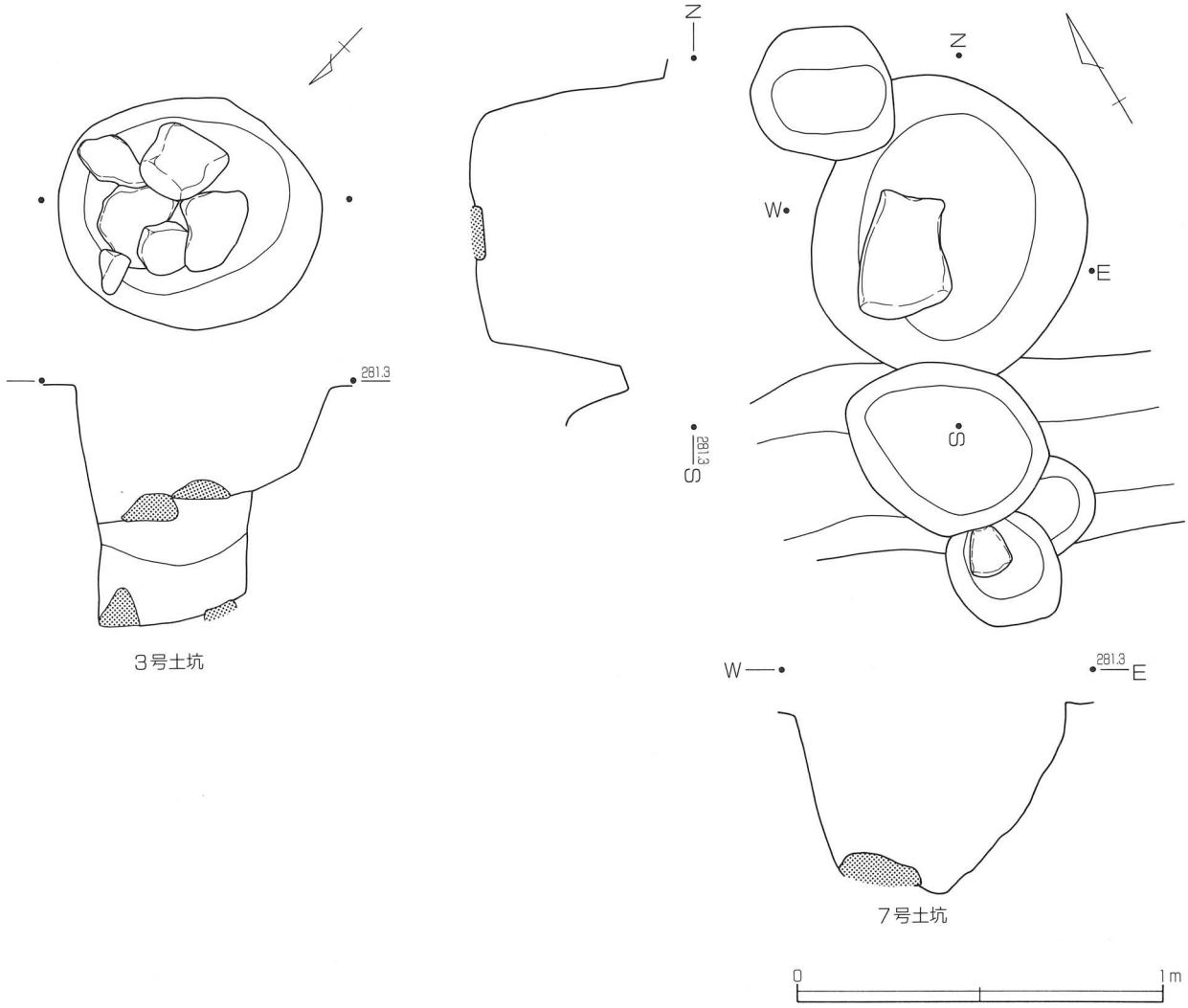
C－4グリッドに位置する。12号溝を切って検出された。楕円形を呈し、長径約0.73m、短径0.64m、深さ0.66mを測る。暗黒褐色土の覆土からは、径約10～20cmの自然石が検出されたが、遺物は未検出である。時期・性格については不明である。

5号土坑（図15）

D－5グリッドに位置する。21号土坑を切る。楕円形を呈し、長径約0.9m、短径0.4m、深さ15cmを測る。覆土より径10～15cmの自然石数点が確認された。遺物はなく、時期・性格は不明である。



1号土坑検出状況　　1号土坑石列検出



3号土坑　　7号土坑

図13　A区1号・3号・7号土坑平面図・エレベーション

6号土坑

E－4グリッドに位置する。東側は攪乱を受けている。楕円形を呈し、長径約1.1m、短径0.54m、深さ17.5cmを測る。黒褐色土の覆土からは、17～18世紀の肥前磁器1点（図38—287）が検出された。遺構は18世紀以降に位置づけられるが、性格は不明。

7号土坑（図13、写真40）

F－4グリッドに位置する。楕円形を呈し、12号溝及びピット307・315に切られる。N—50°—Eに軸をもち、長径0.9m、短径0.7m、深さ約0.5mを測る。土坑底部から径45cmの扁平な自然石が出土した。遺物は、16世紀代の瀬戸美濃系陶器片と北宋銭（図45—10）が検出されている。16世紀代の遺構であるが、性格は不明である。

8号土坑（図14、写真41・68）

G－5グリッドに位置する。楕円形を呈する中世の土坑墓である。北側はピット339、南側は溝跡に切られる。N—21°—Eに軸をとるものと考えられ、長径0.85m、短径0.60m、深さ約0.2mを測る。遺構北側では人骨頭部と歯、中央部から銭貨3枚（図45—5～7）、南側よりかわらけ（図34—238）が検出されている。覆土からは、15～16世紀の白磁片（239）が1点検出された。

9号土坑（図14）

G－5グリッドに位置する。楕円形を呈し、長径約0.9m、短径0.65m、深さ約17cmを測る。覆土は暗黒褐色土であり、かわらけと土器の小片と、釘（図44—15）が検出された。遺構の時期・性格は不明である。

10号土坑（図14）

I－4グリッドに位置し、遺構上面は近代の攪乱を受けていた。楕円形を呈し、長径約0.8m、短径0.6m、深さ約43cmを測る。土坑内からは、径30cmの扁平な自然石が確認されている。遺物は検出されず、遺構の時期・性格は不明である。

11号土坑（図14）

G－6グリッドに位置する。楕円形を呈し、遺構内には円形のピットが確認されている。長径0.85m、短径0.75m、深さ約18cmを測る。ピットは径8cm、深さ約15cmである。かわらけ・肥前系磁器・瀬戸系陶器・平瓦など19世紀代を下限とする小片が検出されている。遺構の性格は不明である。

12号土坑

G－6・7グリッドのライン上に位置する。円形を呈し、径約1.1m、深さ約25cmを測る。検出段階において、上面に径5～25cmの集石が見られた。肥前系磁器・擂鉢・平瓦・丸瓦・焼土塊が出土した。遺物の一部は熱を受けている。近世段階に位置づけられるが、遺構の性格は不明である。

13号土坑（図14）

H－9グリッドに位置する。N—73°—Wに軸をもつ、隅丸長方形の土坑である。上面は削平を受けており、東西約1.0m、南北0.7m、深さ約0.1mを測る。ピット666に切られる。土坑内から瓦などが検出されており、近世の遺構と判断される。

14号土坑

G－1グリッドに位置する。ピット261に切られ、西側は近代の攪乱を受けている。円形を呈し、径約1.5m、深さ約0.4mを測る。肥前系磁器・瀬戸系陶器・かわらけ・瓦・蒔絵櫛など近世遺物の小片が検出されている。

15号土坑

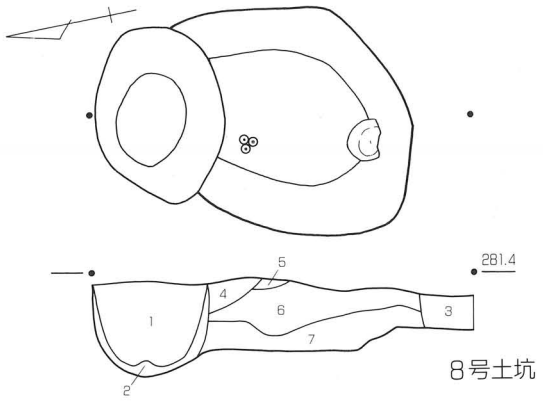
G－3グリッドに位置する。埋桶3・13に近接し、近代の28号溝に切られる。隅丸方形を呈し、長軸0.9m、短軸0.85m、深さ約13cmを測る。遺物はなく、遺構の時期・性格は不明である。

16号土坑

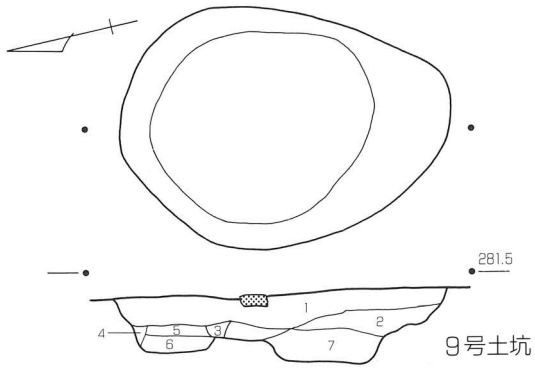
H－4グリッドに位置し、10号溝の東側に平行して検出された。長軸1.13m、短軸0.4m、深さ15cmを測る。遺物はなく、遺構の時期・性格は不明である。

17号土坑

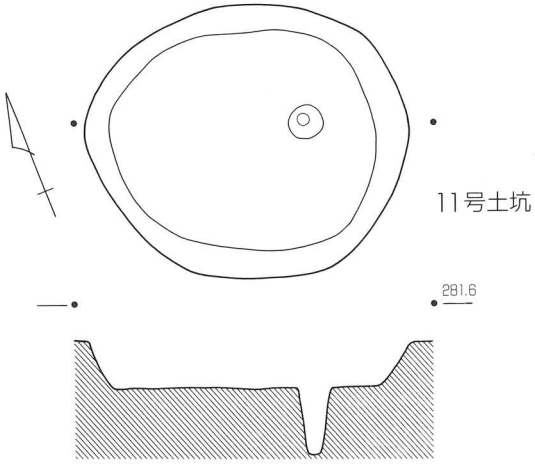
F－6グリッドに位置する。北側は攪乱を受け、ピット373に切られる。長軸1.2m、短軸0.6m、最



1, 黒 褐 色 土 層　炭化物・砂粒多量含む。やや軟質（ピット）
2, 黒 褐 色 土 層　黄褐色砂粒含む。やや軟質。　（ピット）
3, 灰黄褐色土層　黄褐色粒子をやや多量含む。やや固く締まる。（溝跡？）
4, 暗 褐 色 土 層　黄褐色粒子少量含む。やや固く締まる。
5, 暗 褐 色 土 層　黄褐色粒子微量含む。やや固く締まる。
6, 暗 褐 色 土 層　黄褐色粒子多量含む。やや固く締まる。
7, 黒 褐 色 土 層　黄褐色粒子少量含む。やや固く締まる。かわらけ破片・銭貨出土。



1, 淡黄褐色土層　黄褐色粒子・白色粒子を多量含む。やや固く締まる。
2, 黒 褐 色 土 層　黄褐色粒子多量含む。やや粘質があり、固く締まる。
3, 黒 褐 色 土 層　やや軟質。
4, 灰黄褐色土層　黄褐色粒子微量含む。やや固く締まる。
5, 黒 褐 色 土 層　黄褐色粒子・白色粒子少量含む。やや固く締まる。
6, 黒 褐 色 土 層　黄褐色粒子微量含む。やや固く締まる。
7, 黒褐色シルト層　黄褐色粒子微量含む。やや固く締まる。



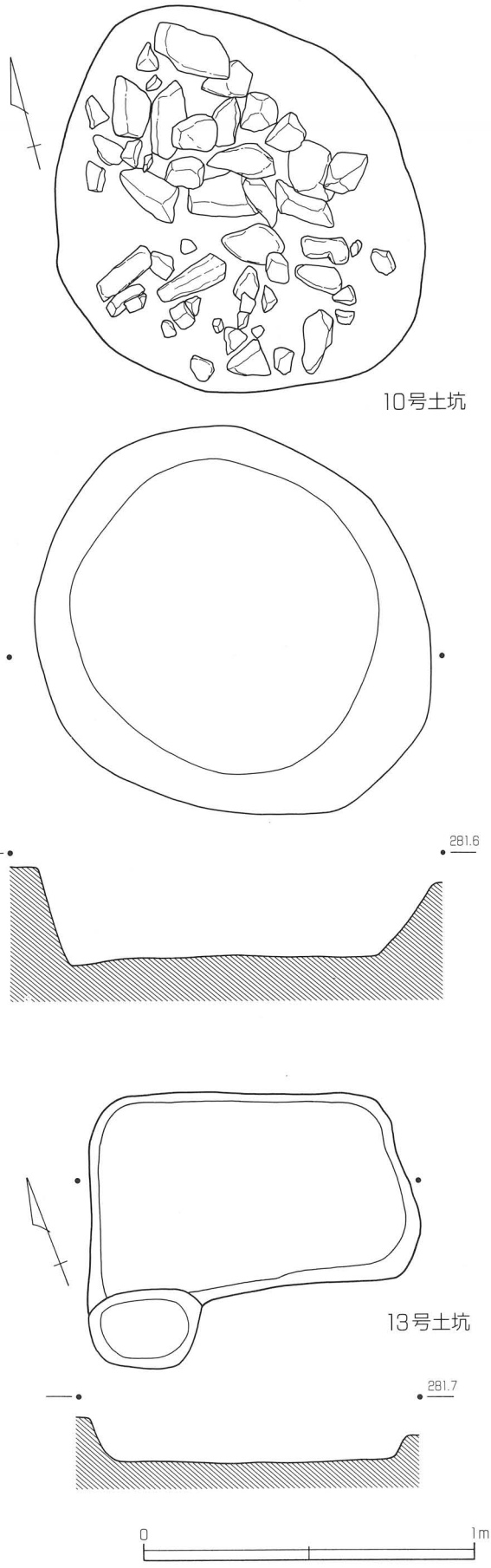


図14　A区8号・9号・10号・11号・13号土坑平面図・セクション・エレベーション

深10cmを測る。16世紀代の瀬戸美濃系鉄釉陶器・土製擂鉢・近世瀬戸系陶器・瓦・土器などの小片が検出された。近世18世紀以降の土坑であるが、性格は不明。

18号土坑

H－6グリッドに位置する。15号溝を切り、ピット194・604・721に切られる。東側は攪乱を受けている。北側19号土坑との重複関係は不明。長方形を呈し、N－21°－Eに軸を持つ。長軸2.6m、短軸0.58m、深さ20cmを測る。覆土は炭化物と砂分を少量含む黒色粘質土で、遺物は検出されていない。土坑の時期・性格は不明である。

19号土坑

H－8・9グリッドのライン上に位置する。東側の18号土坑との重複関係については不明である。南北1.5m、東西0.8m、深さ27cmを測る。中世のかわらけ小片や近代のレンガ片などが検出されている。遺物から近代の遺構と考えられる。

20号土坑

I－6グリッドに位置し、西側は攪乱を受ける。長軸0.7m、短軸0.4m、深さ5cmを測る。遺物は未検出であり、時期・性格は不明である。

21号土坑（図15、写真42）

D－4・5グリッドのライン上に位置する。N－21°－Eに主軸をとる。ピット225・226・228・229及び5号土坑に切られるが、ピット231～233との重複関係は不明。隅丸方形を呈し、径約1.9m、深さ約15cmを測る。出土遺物（図34－244～247）は、18世紀代以降に比定される。土製品（247）は明和9年（1765）～天保元年（1830）に鋳造された「南鐐二朱銀」の模造品である。中世の瀬戸美濃系陶器・桟瓦・焼土塊も検出されている。遺物の一部には焼継ぎが見られ、19世紀代に廃絶した土坑と考えられる。

22号土坑（図15、写真42・69）

D－5グリッドに位置する。N－21°－Eに主軸をとる長方形の遺構である。ピット235に切られ、244を切る。ピット227との重複関係は不明である。長軸約1.9m、短軸約1.3m、深さ約35cmを測る。北東隅が一部突出する。内部は平坦面であるが、北西隅にテラス状の段差がある。

出土遺物（図35－248～263）は、いずれも18～19世紀代の遺物である。肥前系赤絵磁器（250）・香合（251）などは、武士層など比較的上層階級の所持品と考えられる。散り蓮華（252）は18世紀後半から出現した器種である。瓦（260～263）のほか土坑内から大量の桟瓦が検出されている。遺物の器種構成や大量の瓦が検出されたことから、武家屋敷の建物に伴う19世紀代の遺構と推定される。

23号土坑（図16、写真44・45・47・70）

G－7・8・9グリッドに位置する。攪乱のため遺構の全容は把握できなかった。13・15号溝を切り、4号溝に切られている。N－17°－Eに軸をもち、南北8.0m、東西は北側で1.5m、南側で2.5m、深さ約0.5mを測る。底部は平坦で、25号土坑とほぼ同レベルである。覆土上面は礫に覆われ、礫内から近世遺物が大量に検出された。遺構下層部は25号土坑と類似する粘土質の堆積層である。

出土遺物（図36－264～280）は18～19世紀代にかけてのものが主体で、かわらけ・肥前系磁器・瀬戸系陶器・堺製擂鉢など生活用品が多く検出された。焼塩壺（278・279）は18世紀代に比定されるものと考えられる。瓦はいずれも小片のため図化していないが、19世紀代の桟瓦である。25号土坑と、土層の堆積状況や遺物の時期などに類似性が見られる。

24号土坑（図15、写真43～44）

G・H－6グリッドに位置する。N－69°－Wに軸をもち、長軸約6.5mを測る長方形の大規模土坑である。重複関係については東西方向の11号溝（近世）と21・22・23号溝（時期不明）、南北方向の10号溝と13・15号溝（時期不明）、ピット634・635・636を切り、ピット609と28号溝に切られる。ピット605・608・615・616・617・618・619・620・714の重複関係については不明である。遺構は2基の方形プランにより構成される。東側部分は東西4.0m、南北3.6m、深さ約0.7mを測る。南壁からは長さ約1mの杭が検出された。両プランの時期差については不明である。西側部分は2.5m四方の方形を呈し、最深0.25mを測る。両プランの段差部分北側には階段状のステップが見られる。

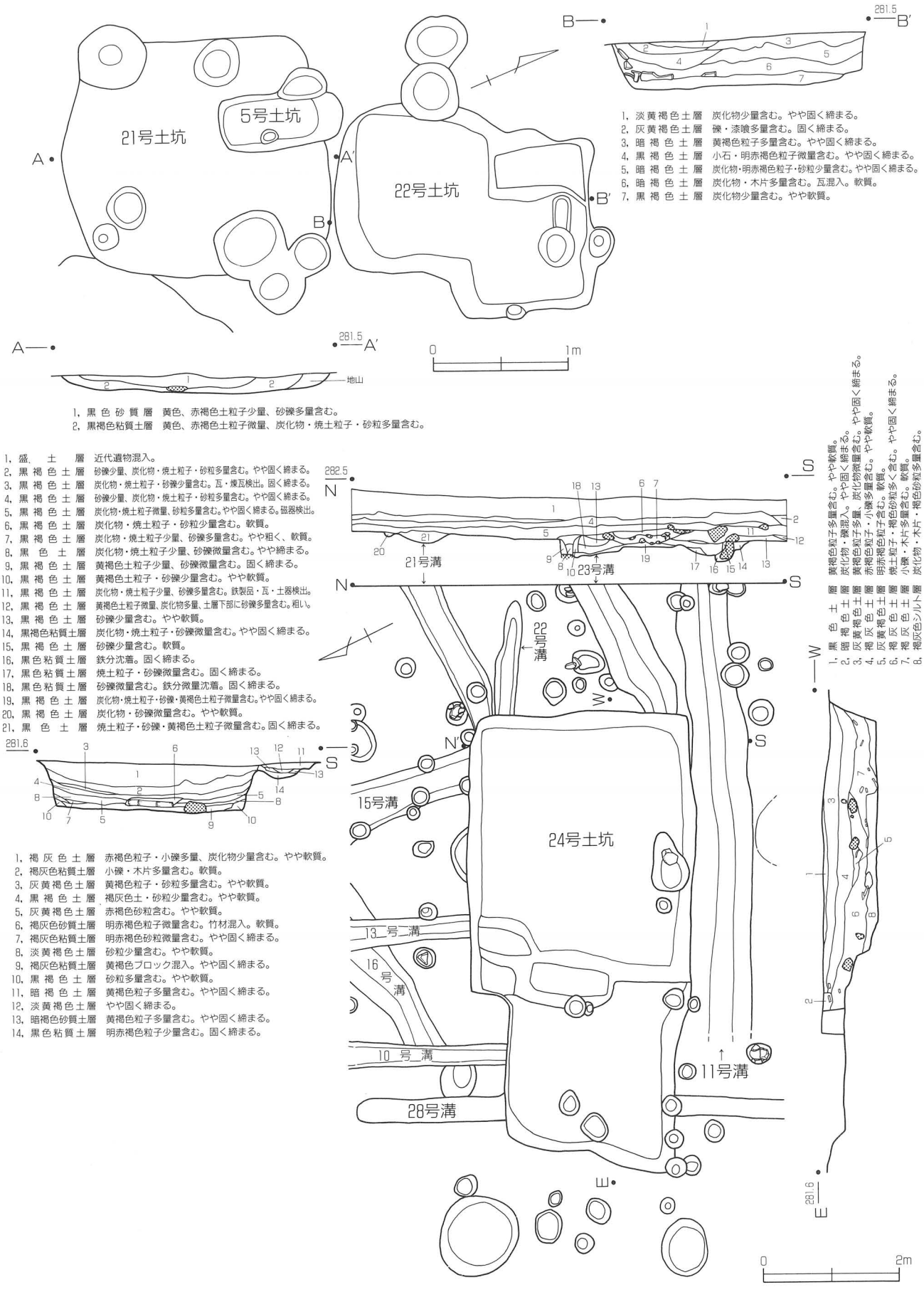
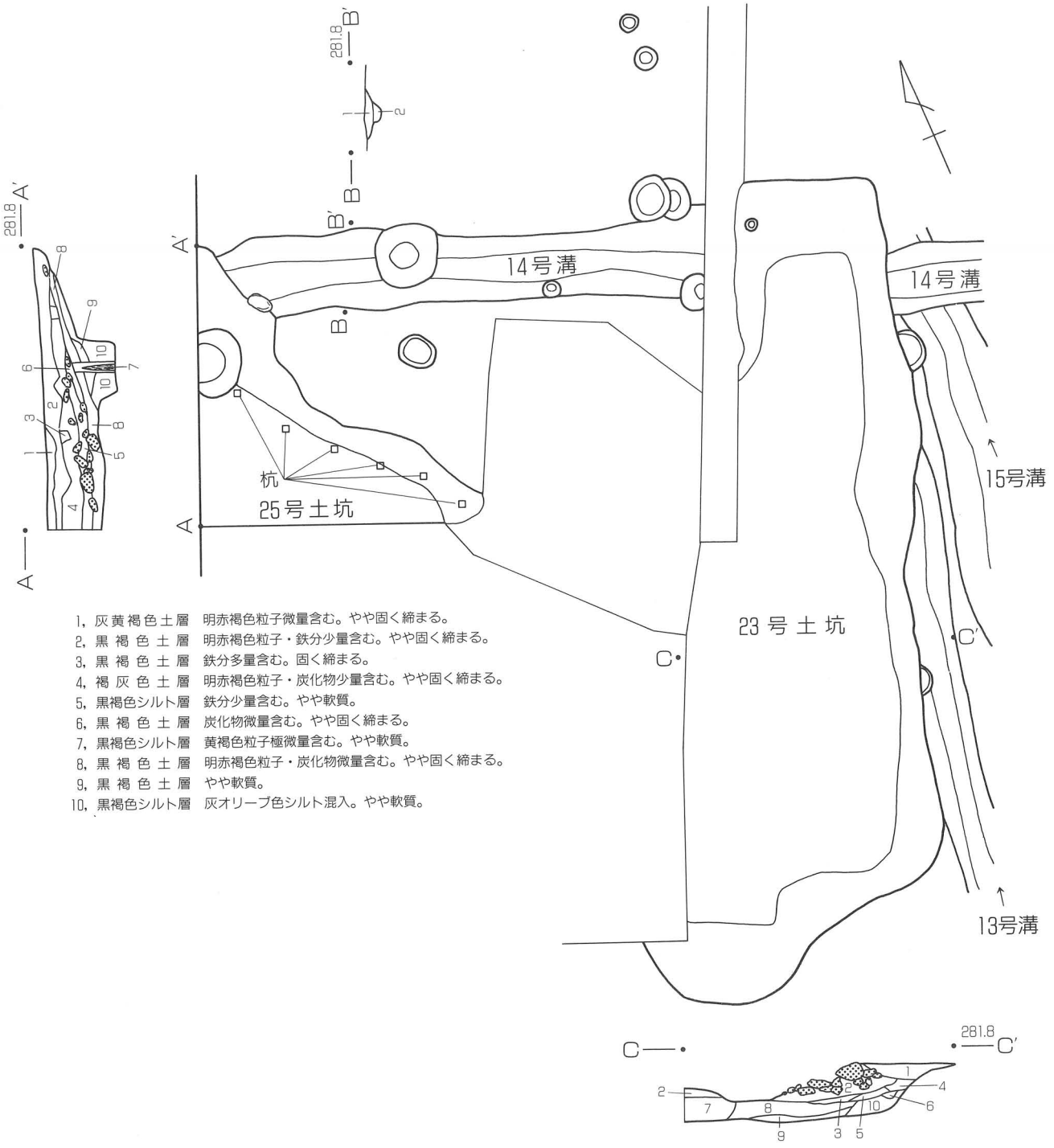


図15　A区5号・21号・22号・24号土坑平面図・セクション

14号溝
1, 黒　色　土　層　炭化物・焼土粒子、鉄分少量含む。固く締まる。
2, 黒　色　土　層　粘性あり。やや固く締まる。



1, 灰黄褐色土層　明赤褐色粒子微量含む。やや固く締まる。
2, 黒 褐 色 土 層　明赤褐色粒子・鉄分少量含む。やや固く締まる。
3, 黒 褐 色 土 層　鉄分多量含む。固く締まる。
4, 褐 灰 色 土 層　明赤褐色粒子・炭化物少量含む。やや固く締まる。
5, 黒褐色シルト層　鉄分少量含む。やや軟質。
6, 黒 褐 色 土 層　炭化物微量含む。やや固く締まる。
7, 黒褐色シルト層　黄褐色粒子極微量含む。やや軟質。
8, 黒 褐 色 土 層　明赤褐色粒子・炭化物微量含む。やや固く締まる。
9, 黒 褐 色 土 層　やや軟質。
10, 黒褐色シルト層　灰オリーブ色シルト混入。やや軟質。

0　2m

1, 黒 褐 色 土 層　炭化物・焼土粒子、黄褐色土ブロック少量含む。砂分若干多く固く締まる。
2, 黒 色 粘 土 層　⌀10～30cmの石多く含む。瓦、陶磁器など江戸時代後期の遺物検出。
3, 黒褐色粘土層　炭化物・焼土粒子微量含む。砂分と黄褐色土ブロック若干混入。固くよく締まる。
4, 黒褐色粘土層　炭化物・焼土粒子微量含む。砂分少量と黄褐色土ブロック多く含む。黒色粘土多く固く締まる。
5, 暗褐色粘土層　4層と類似するが黒色粘土は少ない。
6, 暗褐色粘土層　5層とほぼ同一層。
7, 暗褐色粘土層　砂分と赤褐色の沈着物混入。やや固く締まる。
8, 黒褐色粘土層　炭化物微量含む。やや固く締まる。
9, 黒褐色粘土層　炭化物微量、砂分少量含む。やや固く締まる。
10, 黒褐色粘質土層　炭化物・焼土粒子微量含む。砂分と黄褐色土粒子混入。固く締まる。

図16　A区23号・25号土坑平面図・セクション、14号溝セクション

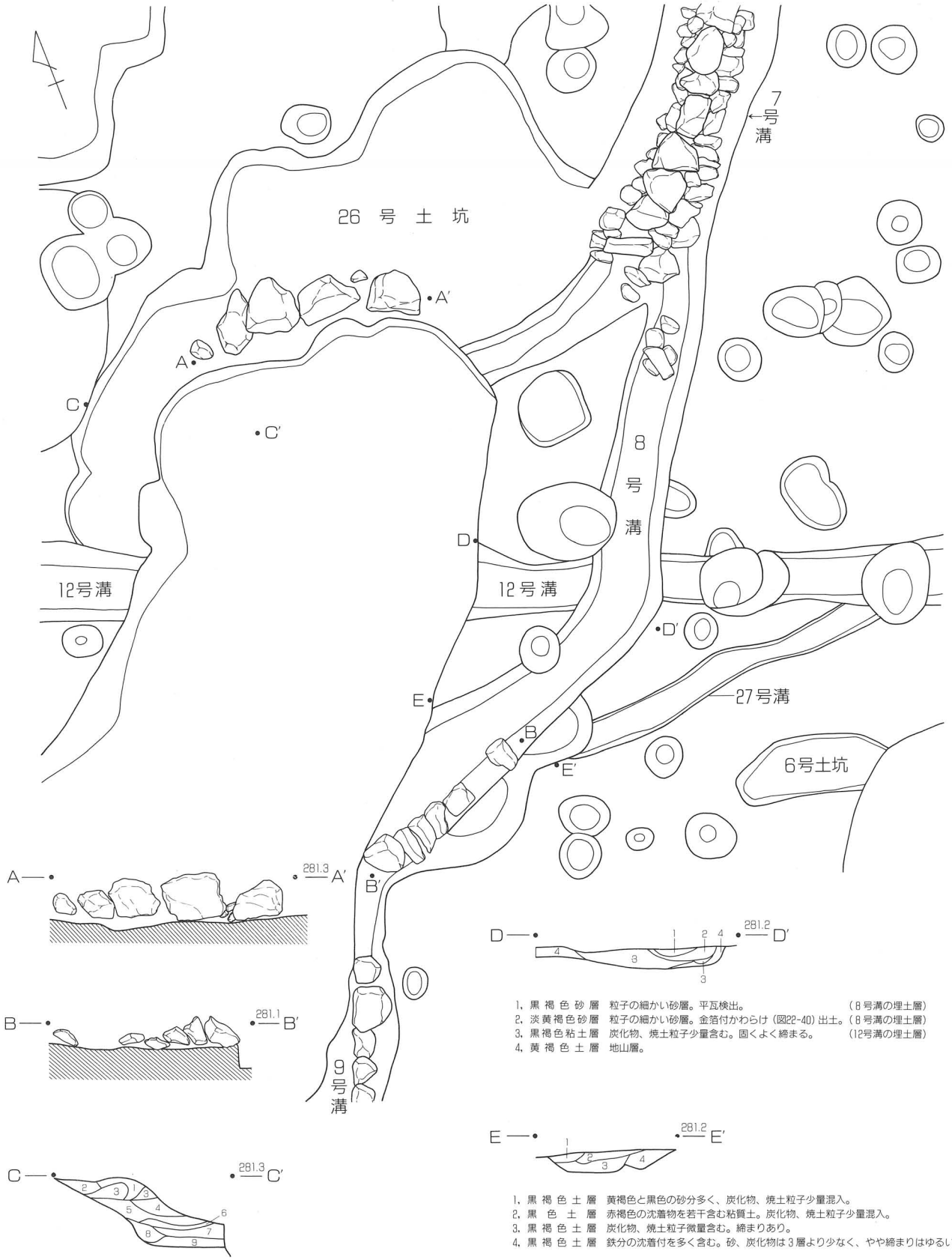


図17　A区26号土坑、8号溝平面図・セクション・石列側面図

遺構は19世紀代に廃絶したものと考えられる。東側部分の遺構底部には粘質土が多く堆積しているが、遺構から外部への排水機能を伴う溝が確認されていないこと、さらに階段状の段差があることから、東京の近世遺跡で多く確認されている地下室遺構である可能性も考えられる。

覆土からは、18～19世紀代の遺物（図37―281～286）が検出された。図化していないが肥前系磁器・小杉茶碗・瀬戸系陶器・土瓶蓋・平瓦・桶など、主に19世紀代の生活用品の小片が多数出土している。

25号土坑（図16、写真44・46）

Ｆ―８・９グリッドに位置し、14号溝を切る。遺構西・南側が攪乱を受けるているなど、遺構の全容は把握できなかった。上面はＮ―45°―Ｗに軸をとり、深さ約50cmを測る。下端には径約３cmの杭６本が、40～60cm間隔で検出された。遺物（図38―288～297）は、16世紀代からの近世の所産で、小杉茶碗（288）・肥前系磁器碗（293）など19世紀代のものが多い。かわらけ・肥前系磁器・瀬戸系陶器・堺製擂鉢・桟瓦などの小片も検出された。

23号土坑と同様な粘質土が堆積し、杭が確認されたことから、両土坑は一体の水利遺構と考えられる。19世紀代の遺物を含む礫に覆われており、この時期に埋設されたものと推定される。

26号土坑（図17）

Ｄ・Ｅ―４・５グリッドに位置し、南側は攪乱を受けている。北側の平面プランは蛇行状を呈し、長軸約4.3ｍ、深さ約0.5ｍを測る。遺構中央部から長さ1.4ｍにわたり石列が確認された。石列は南側に面を持ち、加工された径20～40cmの安山岩４石が出土した。石列の裏込め部分から自然石や19世紀代の桟瓦などが多数検出された。遺構西側には、桟瓦を多数含む瓦溜まりが存在した。桟瓦の出土は、遺構の廃絶時が19世紀代であることを示唆する。遺構北東隅には７号溝が見られ、遺構底部に粘土質が堆積することから、池などの水利遺構と考えられる。

(6) ピット

727基が検出された。掘立柱建物跡の柱穴として（ピット276・278・285・302・417・465・496・497）が確認された。ピット533からは12cm四方の角柱（写真72）が検出されている。杭や底部に扁平な自然石が据えられたピットもあるが、規則的な配列は認められない。他のピットは、別掲「Ａ区ピット観察表」にまとめた。

(7) その他

石積遺構（図18、写真48）

森下小路側のＣ―１・２グリッドに位置する。2.8ｍ四方のプランで、内法は南北1.85ｍ、東西1.95ｍ、高さ約１ｍを測り、５～６段の石積みが囲繞する。石積みは径約25～30cmの玉石状の自然石を、落とし積みでほぼ垂直に積む。底部から80cmの位置には、径約25cm、長さ１ｍの土管が南側の側溝へ通じる。内部から径約７cmの杭が２本直立して検出され、黒褐色泥質土が多く堆積していた。集緒器・摺輪など製糸工場設備の部品や、靴・缶・瓶など大正～昭和時代の遺物が検出されている。遺構は、堆積土と土管等からから、汚水沈殿池等の機能を備えた製糸工場の水利施設と考えられる。

支柱状遺構（図18、写真49～50）

森下小路側Ｆ・Ｅ―１に位置する近代の遺構である。１・３号溝を切り検出された。支柱間は3.7ｍを測りほぼ道路と平行する。長さ1.2～1.5ｍ、深さ30～40cmの十字状の掘り込みに、幅10cm、長さ1.0～1.1ｍの角材を十字状に組み、その交点に枘穴を穿ち径20cmの円柱が垂直に据えられている。円柱は四方から長さ約40cmの木片により支えられ、上面には径20～30cmの自然石が据えられていた。周辺からは近代の遺物が検出されていることから製糸工場関連の遺構と考えられる。

(8) 遺物観察表

Ａ区出土遺物を、別掲の表にまとめ、一覧化した。

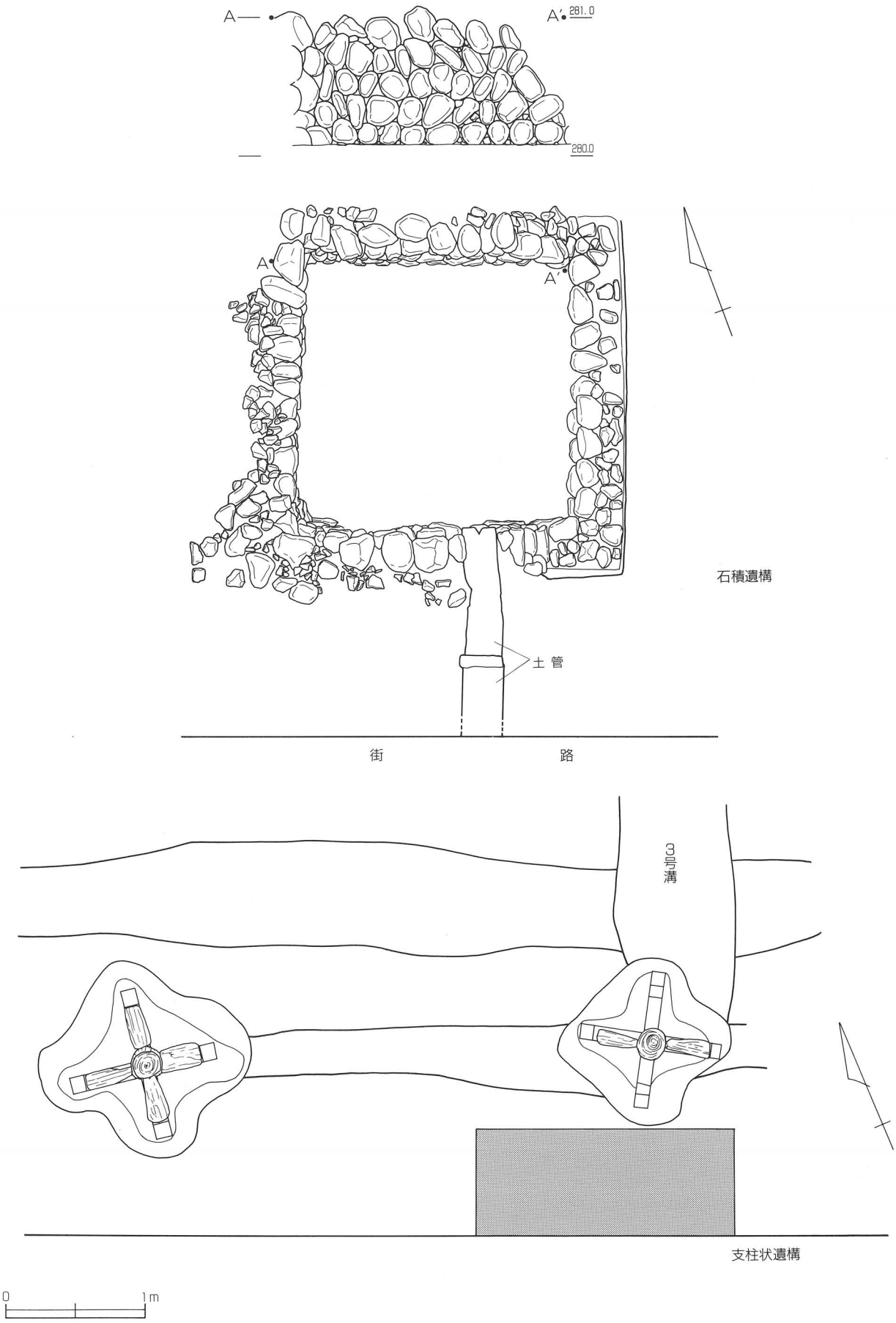


図18　A区石積遺構・支柱状遺構

表１　Ａ区ピット観察表①

番号	位置	平面形	長径	短径	深さ	出土遺物・重複関係
1	B－1	楕円形	34	28	17	底部に平石　1号溝に切られる
2	C－1	円形	24	—	34	1号溝に切られる
3	C－1	円形	25	—	33	
4	C－1	円形	19	—	—	5を切る
5	C－1	不整円形	32	—	—	4に切られる
6	B－2	円形	31	24	20	瀬戸美濃系　鉄釉擂鉢　焼土塊
7	B－2	楕円形	49	36	27	土器　焼土塊
8	B－2	円形	48	36	17	かわらけ
9	B－2	楕円形	56	41	79	底部に礫　10を切る
10	B－2	楕円形	—	42	9	9に切られる
11	B－2	不整円形	57	30	10	
12	B－2	円形	33	—	7	かわらけ
13	C－2	不整円形	33	—	45	3号井戸に切られる
14	B－2	楕円形	48	35	40	
15	B－2	円形	26	34	26	
16	B－2	円形	25	48	23	かわらけ
17	B－2	円形	27	—	20	かわらけ
18	C－2	楕円形	59	—	76	かわらけ　20号溝に切られる
19	C－2	円形	20	49	—	20号溝に切られる
20	C－2	円形	18	—	14	焼土塊
21	C－2	円形	30	—	17	
22	C－2	楕円形	38	—	7	
23	C－2	円形	20	—	23	
24	C－2	円形	25	—	12	
25	C－2	円形	20	—	39	底部に平石
26	C－2	楕円形	(22)	14	11	
27	B－3	円形	22	—	20	
28	B－3	楕円形	18	35	10	陶器(大窯3)　上部に礫
29	B－3	円形	24	—	5	
30	B－3	不整円形	48	—	13	
31	B－2	円形	33	—	9	
32	B－3	円形	30	—	30	
33	B－3	円形	35	—	37	
34	B－3	円形	28	—	37	
35	B－3	不整円形	43	—	36	2号土坑を切る
36	B－3	—	—	—	21	染付(近代)　平瓦(近代)　10号井戸に切られる
37	C－2	円形	56	—	25	
38	B－1	円形	15	—	17	焼土塊　1号溝に切られる
39	C－3	円形	32	—	25	焼土塊　20号溝を切る
40	C－3	円形	18	—	32	
41	C－3	円形	31	—	29	
42	C－3	円形	30	—	19	20号溝を切る
43	C－3	円形	25	—	16	底部に礫　20号溝を切る
44	B－3	楕円形	20	13	—	
45	B－3	不整円形	—	26	—	8号井戸に切られる
46	B－3	円形	39	—	70	焼土塊
47	C－3	楕円形	36	18	28	
48	C－3	円形	26	—	9	かわらけ　土器
49	C－3	円形	30	—	39	かわらけ
50	C－3	楕円形	34	25	11	土器　炭化物　焼土塊　20号溝を切る
51	C－3	楕円形	—	—	10	染付(近世)　土器
52	C－3	円形	25	—	14	かわらけ　焼土塊
53	C－3	楕円形	47	33	21	底部に平石
54	C－3	不整円形	62	—	46	20号溝を切る
55	C－3	楕円形	40	—	—	
56	C－3	楕円形	19	—	32	
57	C－3	円形	26	—	14	
58	B－3	円形	17	—	34	
59	B－3	円形	29	—	16	
60	C－3	円形	15	—	22	
61	C－4	円形	34	—	26	かわらけ
62	B－4	円形	42	—	14	かわらけ　焼土塊　上部に礫
63	B－4	円形	51	—	20	平瓦(近世)　上部に礫
64	B－4	楕円形	33	25	27	
65	B－4	楕円形	(41)	34	11	12号溝に切られる
66	B－4	楕円形	(34)	30	24	かわらけ　底部に礫
67	B－4	楕円形	(46)	32	—	
68	C－3	楕円形	48	38	12	上部に礫　20号溝を切る
69	C－4	楕円形？	(31)	38	12	底部に平石　8号井戸に切られる
70	C－4	円形？	29	—	4	
71	C－4	円形	39	—	23	かわらけ
72	C－4	円形	12	—	14	
73	C－4	楕円形	44	31	20	底部に礫
74	C－4	円形	14	—	33	
75	C－4	楕円形	25	19	49	
76	C－4	楕円形	35	30	36	かわらけ
77	C－4	楕円形	33	—	17	78に切られる
78	C－4	楕円形	33	26	14	77・163を切る
79	C－4	円形	34	—	6	
80	C－4	楕円形	30	25	42	土器(香炉形)　焼土塊　底部に礫
81	C－4	円形	21	—	—	
82	C－4	円形	23	—	19	
83	C－4	円形	41	—	15	上部に礫
84	C－4	楕円形	35	28	13	焼土塊　上部に礫　18号溝を切る
85	C－4	不整円形	30	28	32	上部に礫
86	B－4	楕円形	45	35	—	上部に礫
87	B－4	楕円形	30	25	—	
88	B－4	楕円形	42	33	14	3号土坑を切る
89	B－4	不整円形	60	—	45	3号土坑を切る
90	B－3	—	—	—	29	10号井戸に切られる
91	B－4	楕円形	27	20	19	12号溝に切られる
92	B－4	不整円形	45	24	—	底部に礫　12号溝を切る
93	B－4	円形	29	—	—	底部に礫　12号溝を切る
94	C－4	楕円形	32	19	21	かわらけ　陶器　土器　焼土塊
95	B－3	—	—	—	41	
96	C－4	円形	28	—	19	
97	C－4	楕円形	35	25	39	かわらけ　焼土塊　底部に礫
98	C－4	—	18	—	17	
99	C－4	円形	25	—	19	底部に礫
100	C－4	楕円形	—	—	20	
101	C－4	円形	23	—	44	底部に礫
102	C－4	楕円形	33	28	17	
103	B－4	楕円形	35	26	25	かわらけ　陶器　擂鉢　底部に礫
104	B－4	円形	31		13	
105	B－4	楕円形	37	25	25	17号溝を切る
106	B－4	楕円形	28	17	25	17号溝を切る
107	B－4	不整円形	45	—	17	かわらけ　焼土塊　17号溝を切る
108	C－4	円形	20	—	12	
109	C－4	円形	25	—	42	焼土塊
110	C－4	円形	21	—	16	17号溝を切る
111	C－4	円形	28	—	16	
112	C－5	円形	35	—	21	かわらけ
113	C－5	楕円形	38	29	24	17号溝を切る
114	C－4	楕円形	42	28	27	陶器　平瓦（近世）
115	C－4	楕円形	40	31	32	
116	C－5	不整円形	—	21	22	
117	B－4	—	61	30	23	
118	B－5	—	—	40	17	
119	B－4	楕円形	39	24	22	平瓦(近世)　120・726を切る
120	B－4	不整円形	32	—	4	119に切られる
121	B－5	円形	29	—	12	かわらけ　焼土塊
122	C－5	円形	23	—	16	焼土塊

表２　Ａ区ピット観察表②

番号	位置	平面形	長径	短径	深さ	出土遺物・重複関係
123	C－5	円形	29	—	40	かわらけ 土器 207に切られる
124	C－5	円形	24	—	6	
125	C－5	円形	24	—	23	
126	C－5	円形	47	—	5	
127	C－5	円形	62	—	8	
128	B－5	楕円形	—	26	—	かわらけ 土器 底部に平石
129	B－5	不整円形	47	—	34	底部に礫
130	B－5	不整円形	62	—	18	
131	B－5	円形	42	—	21	底部に礫
132	C－5	不整円形	30	—	36	
133	C－5	円形	19	—	12	
134	C－5	円形	38	—	14	18号溝に切られる
135	C－5	楕円形	42	34	—	
136	C－5	円形	32	—	27	土器 焼土塊
137	C－5	楕円形	27	18	—	
138	C－5	不整円形	63	—	21	
139	D－1	楕円形	17	13	17	
140	D－1	楕円形	28	19	16	
141	D－1	円形	30	—	35	磁器(近世)
142	D－1	円形	28	—	38	
143	D－1	円形	28	—	35	
144	D－1	—	—	34	26	
145	D－1	—	—	37	11	５号溝を切る
146	B－3	楕円形	60	38	—	
147	D－1	—	—	14	27	土器
148	D－1	不整円形	35	22	—	杭 ５号溝を切る
149	D－1	円形	42	—	29	５号溝を切る
150	D－1	不整円形	31	—	6	
151	D－1	楕円形	34	21	20	
152	D－1	楕円形	30	24	18	
153	E－1	楕円形	58	37	16	
154	E－1	楕円形	27	19	—	
155	E－1	楕円形	30	22	11	平瓦(近世)
156	E－1	楕円形	27	23	4	
157	E－1	円形	30	—	34	平瓦 平桟瓦 (近世～近代)
158	E－1	円形	29	—	10	
159	E－1	楕円形	31	28	25	
160	E－1	円形	33	—	30	土器 平瓦 桟瓦 杭 161を切る
161	E－1	円形	37	—	12	160に切られる
162	B－3	楕円形	52	52	—	上部に礫
163	C－4	円形	12	12	12	焼土塊 底部に礫 78に切られる
164	B－4	不整円形	34	34	15	上部に礫 17号溝を切る
165	E－2	楕円形	40	25	9	
166	E－2	不整円形	84	65	17	鉄釉陶器 杭
167	E－2	楕円形	70	58	25	底部に平石
168	E－2	不整円形	47	—	27	かわらけ
169	F－2	不整円形	70	—	54	
170	E－2	円形	28	—	25	
171	E－2	円形	30	—	13	６号溝に切られる
172	E－2	円形	39	—	37	
173	D－2	円形	35	—	18	
174	D－2	不整円形	29	—	39	
175	D－2	楕円形	33	25	6	
176	D－2	楕円形	38	29	12	
177	D－3	楕円形	40	33	6	
178	D－3	楕円形	33	22	6	19号溝に切られる
179	D－3	楕円形	27	21	7	
180	D－3	楕円形	43	33	17	
181	D－3	円形	38	—	35	磁器(近世)
182	D－3	楕円形	21	16	10	
183	D－3	楕円形	43	20	11	
184	D－3	円形	17	—	6	
185	E－3	楕円形	36	30	—	
186	E－3	—	—	—	23	かわらけ 瓦 土器
187	E－3	楕円形	40	—	15	陶器 土器 染付
188	E－3	円形	43	—	—	
189	E－3	円形	40	—	48	
190	E－3	円形	33	—	4	レンガ
191	E－3	円形	20	—	6	
192	E－3	円形	33	—	12	かわらけ
193	E－3	円形	25	—	26	
194	E－3	円形	40	—	10	土器 18号土坑を切る
195	E－3	不整円形	39	—	6	土器 平桟瓦
196	E－3	円形	22	—	12	
197	B－4	楕円形	16	19	10	
198	E－3	不整円形	39	—	26	瀬戸美濃系陶器 かわらけ
199	E－3	楕円形	35	28	10	
200	E－3	円形	38	—	19	かわらけ 底部に平石
201	E－3	円形	41	—	—	
202	E－3	円形	25	—	24	
203	E－3	楕円形	27	21	—	土器
204	E－4	円形	30	—	16	底部に礫
205	E－4	円形	32	—	10	擂鉢
206	C－4	不整円形	33	—	9	17号溝を切る
207	C－5	円形	24	—	12	123を切る
208	E－4	楕円形	19	17	6	
209	E－4	楕円形	39	30	26	
210	E－4	円形	30	—	14	
211	D－1	円形	37	—	24	
212	E－4	—	—	—	27	
213	E－4	—	—	—	12	
214	E－4	円形	30	—	24	
215	E－4	円形	25	—	9	
216	E－4	楕円形	48	38	40	
217	D－4	楕円形	32	27	—	
218	D－4	楕円形	30	24	21	かわらけ 土器
219	C－5	円形	20	—	15	17号溝を切る
220	E－4	楕円形	77	55	45	底部に平石 瓦 ８号溝に切られる
221	E－4	—	—	27	6	
222	E－4	不整円形	57	—	47	陶器 土器 底部に礫
223	E－4	不整円形	51	—	9	21号土坑を切る
224	E－4	円形	30	—	40	
225	D－4	円形	50	—	57	外面鉄釉陶器(近世) 21号土坑を切る
226	D－4	円形	31	—	22	21号土坑を切る
227	D－5	円形	23	18	50	
228	D－5	円形	38	—	13	21号土坑を切る
229	D－5	不整円形	39	—	30	21号土坑を切る
230	D－1	—	—	23	26	磁器
231	D－5	円形	54	—	22	土器 底部に礫
232	D－5	円形	30	—	15	土器 かわらけ 土鍋 底部に礫
233	D－5	円形	40	—	40	染付 平瓦(近世) 底部に礫
234	D－5	楕円形	37	29	29	
235	D－6	楕円形	42	33	16	底部に礫 22号土坑・236を切る
236	D－5	円形	46	—	24	磁器 (貫入 近世)底部に礫
237	E－5	不整円形	37	29	28	
238	E－5	不整円形	55	—	16	土器 焼土塊
239	E－5	楕円形	39	30	37	
240	D－5	楕円形	37	28	15	土器 染付(タコ唐草) 底部に礫
241	D－5	円形	43	—	—	釘 磁器 陶器 瓦 底部に礫
242	E－5	不整円形	59	67	52	焼土塊
243	D－5	円形	23	—	—	
244	D－5	円形	30	—	22	22号土坑に切られる

表３　Ａ区ピット観察表③

番号	位置	平面形	長径	短径	深さ	出土遺物・重複関係
245	D－5	不整円形	55	—	42	丸皿(大窯２) 陶器 青磁 瓦 底部に礫
246	D－5	不整円形	23	—	7	
247	E－5	円形	30	—	18	
248	E－5	不整円形	34	—	25	土製品 水晶
249	E－5	楕円形	27	21	—	
250	G－2	円形	25	—	25	
251	E－5	円形	25	—	21	底部に礫
252	E－5	円形	20	—	—	
253	E－5	円形	30	—	21	土製品(釘付着)
254	E－5	不整円形	39	—	19	底部に礫
255	E－5	楕円形	18	10	8	
256	F－1	楕円形	56	46	41	底部に礫 瓦 杭
257	E－5	—	—	24	11	
258	E－5	楕円形	44	27	8	
259	G－1	円形	48	—	26	
260	G－2	不整円形	66	—	48	底部に礫
261	G－2	円形	58	—	39	焼土塊 底部に礫 杭 14号土坑を切る
262	G－2	円形	27	—	12	
263	G－2	楕円形	45	30	19	底部に礫
264	G－2	円形	27	—	—	底部に礫
265	G－2	不整円形	—	41	81	
266	G－2	楕円形	50	40	38	
267	G－2	円形	48	—	33	
268	G－2	不整円形	45	—	40	
269	G－2	円形	16	—	27	
270	G－2	円形	39	—	10	
271	G－2	—	—	—	—	
272	G－2	楕円形	37	28	33	かわらけ
273	G－2	楕円形	—	25	12	
274	G－2	不整円形	58	—	14	かわらけ 天目茶碗 焼土塊 赤絵 染付
275	G－2	不整円形	50	—	49	
276	G－2	円形	51	—	32	底部に平石
277	G－2	不整円形	—	28	37	磁器 平瓦(近世) 278を切り396に切られる
278	G－2	円形	47	—	17	平石 １号土坑を切り277に切られる
279	G－2	楕円形	26	19	6	
280	G－2	円形	28	—	29	
281	G－2	円形	43	—	34	焼土塊
282	G－2	円形	34	—	10	
283	G－2	不整円形	92	—	21	
284	F－1	不整円形	35	—	8	上部に礫 杭
285	G－3	楕円形	77	57	46	陶器 染付 磁器 釘
286	F－4	—	—	—	28	かわらけ 土器 焼土塊 307・308に切られる
287	F－5	円形	—	—	19	
288	G－3	楕円形	43	34	15	
289	F－3	円形	27	91	32	土器
290	F－3	不整円形	54	—	13	磁器
291	F－5	円形	25	—	11	
292	G－3	不整円形	43	37	32	焼土塊 底部に礫
293	G－3	不整円形	37	—	—	
294	F－3	円形	39	—	17	
295	F－3	不整円形	50	—	14	
296	F－4	円形	28	—	—	
297	F－4	円形	35	—	13	
298	G－4	不整円形	58	47	47	染付 陶器 平瓦
299	G－4	円形	27	—	—	
300	F－4	円形	27	—	15	
301	F－4	不整円形	45	—	17	
302	G－4	円形	47	—	48	底部に平石
303	G－4	不整円形	56	—	53	五輪塔 (火輪)
304	G－4	円形	55	—	9	磁器
305	F－4	楕円形	58	47	44	
306	F－4	円形	48	—	28	
307	F－4	不整円形	56	39	5	染付 平瓦(近世) 286・308・７号土坑を切る
308	F－4	不整円形	37	—	43	土器 286を切り307に切られる
309	F－4	円形	29	—	11	
310	G－4	不整円形	65	—	66	12号溝を切る
311	G－4	楕円形	55	45	—	染付
312	G－4	円形	54	—	—	
313	G－4	円形	34	—	—	
314	G－4	円形	25	—	—	
315	F－4	不整円形	40	—	204	砥石 平瓦(近世) ７号土坑を切る
316	G－5	楕円形	55	45	33	
317	F－5	円形	33	—	13	
318	F－4	不整円形	74	—	12	陶器 染付
319	E－4	不整円形	43	—	13	
320	E－4	不整円形	40	—	6	
321	E－4	不整円形	50	—	25	白磁 土鍋
322	F－4	楕円形	30	25	13	
323	F－4	円形	26	—	33	
324	F－4	不整円形	85	—	25	
325	F－4	円形	17	—	13	
326	F－4	円形	23	—	21	石英
327	F－4	楕円形	48	34	35	
328	F－4	楕円形	50	34	10	
329	G－4	楕円形	26	19	17	
330	F－5	円形	30	—	37	
331	F－5	不整円形	32	—	15	
332	F－5	円形	40	—	19	染付 平瓦
333	F－5	楕円形	78	50	13	平瓦(近世)
334	F－5	円形	23	—	39	
335	F－5	円形	25	—	27	
336	G－5	円形	34	—	23	かわらけ 土製品 黒曜石 上部に礫
337	F－5	円形	24	—	14	
338	F－5	円形	21	—	19	かわらけ 平瓦(近世)
339	G－5	楕円形	51	38	24	８号土坑を切る
340	G－5	楕円形	40	35	14	
341	G－5	円形	27	—	21	
342	G－5	楕円形	35	26	22	
343	G－5	円形	19	—	14	
344	G－5	円形	58	—	12	
345	F－5	円形	20	—	10	
346	E－5	円形	29	—	14	
347	F－5	円形	30	—	29	
348	F－5	楕円形	72	46	15	
349	F－5	—	—	32	13	
350	F－5	円形	25	—	16	平瓦(近代)
351	F－6	楕円形	25	19	50	
352	F－5	円形	15	—	8	
353	F－5	円形	31	—	10	
354	F－5	円形	26	—	22	
355	G－5	円形	47	—	12	黒曜石
356	G－5	楕円形	48	—	13	10号溝に切られる
357	G－5	楕円形	48	41	24	
358	G－5	円形	19	—	7	
359	G－5	円形	20	—	15	
360	G－5	楕円形	32	15	17	
361	G－5	楕円形	42	32	15	
362	G－5	楕円形	33	18	11	
363	G－5	楕円形	70	56	55	土器
364	G－5	円形	39	—	13	
365	E－5	円形	27	—	6	
366	F－5	楕円形	60	46	9	焼土塊

表４　Ａ区ピット観察表④

番号	位置	平面形	長径	短径	深さ	出土遺物・重複関係
367	F－5	円形	36	—	10	瀬戸美濃系陶器
368	F－5	円形	26	—	44	かわらけ
369	F－5	円形	32	27	50	かわらけ
370	F－5	楕円形	45	31	39	７号溝に切られる
371	F－5	円形	28	—	4	
372	F－5	不整円形	56	—	19	底部に礫
373	F－5	円形	33	—	12	17号土坑を切る
374	F－5	楕円形	40	30	25	かわらけ（江戸時代）
375	F－5	円形	33	—	19	
376	F－5	楕円形	34	26	41	
377	F－7	—	—	—	7	
378	G－5	円形	28	—	36	平瓦 28号溝に切られる
379	G－6	円形	38	—	21	
380	H－1	円形	45	—	26	
381	H－1	円形	50	—	27	
382	H－1	不整円形	30	—	—	
383	H－1	円形	34	—	30	底部に礫
384	H－2	円形	48	—	24	ヒデ鉢 かわらけ 焼土塊 底部に礫
385	H－2	楕円形	30	23	—	
386	H－2	不整円形	40	—	34	底部に礫
387	H－2	円形	28	—	24	
388	H－2	円形	33	30	10	
389	H－2	円形	18	—	7	
390	H－2	円形	19	—	12	
391	H－2	円形	20	—	36	
392	H－2	楕円形	65	46	35	中世 瀬戸皿 底部に礫
393	H－2	楕円形	56	35	21	底部に礫
394	H－2	円形	38	—	42	焼土塊
395	F－6	円形	28	—	17	
396	F－2	不整円形	39	—	24	277を切る
397	H－2	不整円形	83	—	41	平瓦(近世)
398	H－2	—	28	—	—	
399	H－2	楕円形	30	26	20	土鍋 磁器 陶器 土器
400	I－2	円形	36	—	22	底部に礫
401	I－2	円形	26	—	19	底部に礫
402	I－2	不整円形	34	—	31	底部に礫
403	I－2	円形	40	—	51	
404	I－2	楕円形	36	30	41	
405	I－2	円形	22	—	23	底部に礫
406	I－2	楕円形	23	17	19	
407	I－2	楕円形	27	18	27	杭
408	I－2	円形	20	—	22	瀬戸美濃系陶器
409	I－2	楕円形	28	24	24	かわらけ 瓦 底部に平石
410	I－2	楕円形	31	—	31	
411	H－2	円形	20	—	9	
412	H－2	円形	29	—	12	
413	H－2	—	17	—	4	
414	H－2	円形	18	—	—	焼土塊 丸瓦
415	H－2	円形	23	—	—	
416	H－2	楕円形	35	28	30	
417	H－2	不整円形	53	—	36	底部に平石
418	H－2	不整円形	40	—	49	瀬戸美濃系陶器 瓦 底部に礫
419	H－2	円形	28	—	34	砥石
420	I－2	楕円形	37	27	—	
421	I－2	円形	18	—	12	
422	I－2	楕円形	50	—	23	
423	H－2	楕円形	30	26	12	かわらけ
424	H－2	楕円形	38	30	29	
425	H－2	楕円形	40	—	13	磁器
426	I－2	円形	18	—	30	
427	I－2	楕円形	30	18	27	
428	I－2	円形	22	—	16	
429	I－2	円形	18	—	13	
430	I－2	円形	17	—	8	
431	I－2	円形	18	—	—	
432	I－2	円形	19	—	6	
433	H－2	楕円形	37	—	15	
434	H－2	円形	26	29	45	
435	H－2	円形	53	—	11	
436	H－2	不整円形	34	—	9	
437	H－2	楕円形	23	14	6	
438	H－2	楕円形	33	27	12	陶器 稜皿（大窯２）
439	H－2	円形	26	—	29	
440	H－2	円形	17	—	5	
441	I－2	円形	33	—	41	
442	I－2	円形	38	—	—	
443	F－4	円形	29	—	36	
444	I－2	楕円形	24	19	11	杭
445	I－2	円形	31	—	21	
446	H－2	円形	29	—	29	
447	H－2	円形	33	—	30	
448	H－2	楕円形	26	18	9	
449	I－2	不整円形	37	—	16	底部に礫
450	I－3	楕円形	26	22	3	
451	I－2	楕円形	—	16	—	
452	I－2	円形	26	—	—	
453	I－3	楕円形	30	14	4	
454	H－3	円形	30	—	24	
455	H－3	円形	30	18	50	
456	H－3	楕円形	22	—	18	
457	H－3	円形	24	—	18	
458	I－3	円形	28	14	22	
459	I－3	楕円形	19	—	—	
460	I－3	不整円形	24	23	26	陶器
461	I－3	楕円形	33	—	10	
462	H－3	円形	19	—	27	鉄釉擂鉢
463	H－3	円形	22	—	26	
464	H－3	円形	13	—	6	
465	H－3	円形	40	—	44	底部に平石
466	H－3	円形	40	—	44	
467	H－3	—	—	—	12	かわらけ
468	I－3	円形	35	—	27	
469	I－3	円形	26	—	14	
470	I－3	円形	21	—	8	
471	I－3	円形	18	—	7	
472	I－3	円形	22	15	11	底部に礫
473	I－3	円形	51	—	33	
474	H－3	楕円形	33	23	18	
475	H－3	円形	30	—	39	
476	H－3	円形	42	—	64	
477	I－3	円形	14	—	10	
478	I－3	円形	22	—	17	
479	H－3	円形	27	—	—	かわらけ 10号溝に切られる
480	H－3	円形	25	—	4	
481	H－3	楕円形	55	45	18	
482	H－3	円形	43	—	30	底部に礫 杭
483	H－3	円形	50	—	26	
484	H－3	楕円形	35	24	26	
485	H－3	円形	46	—	14	
486	H－3	不整円形	81	—	33	染付 内塗外青 灯明皿 陶器 土器
487	I－3	円形	35	—	20	
488	H－3	不整円形	74	46	34	土瓶 灯明皿 陶器

表5　A区ピット観察表⑤

番号	位置	平面形	長径	短径	深さ	出土遺物・重複関係
489	H－3	円形	32	39	12	
490	I－3	楕円形	43	36	43	鉄釉灯明皿 丸瓦
491	H－3	円形	24	—	27	
492	H－3	円形	34	—	27	
493	H－4	円形	17	—	12	
494	I－3	円形	41	—	40	土器 染付
495	H－4	円形	23	—	17	
496	H－4	楕円形	45	35	32	
497	H－4	楕円形	67	46	29	陶器 天目茶碗か？底部に平石
498	H－4	楕円形	40	—	28	底部に平石
499	H－4	円形	39	—	17	底部に礫
500	I－4	円形	22	—	18	
501	I－4	円形	17	—	11	
502	I－4	円形	20	—	29	
503	I－4	円形	23	—	25	
504	I－4	円形	39	—	42	
505	I－4	円形	33	—	40	かわらけ
506	I－4	楕円形	—	18	40	かわらけ
507	I－4	円形	26	—	40	
508	I－4	不整円形	85	50	60	
509	F－4	円形	21	—	16	
510	H－4	円形	20	—	—	
511	H－4	円形	11	—	16	
512	I－4	楕円形	27	17	24	底部に礫
513	I－4	楕円形	40	30	32	底部に礫
514	I－4	円形	29	—	24	
515	I－4	円形	23	—	38	土器
516	H－5	楕円形	63	45	41	瀬戸 平瓦
517	H－5	円形	30	—	43	
518	H－5	楕円形	35	30	31	かわらけ 染付 平瓦
519	H－5	円形	27	—	7	
520	H－5	円形	34	—	37	染付
521	H－5	円形	33	—	28	
522	I－5	円形	34	—	18	
523	F－4	円形	22	—	16	
524	I－5	円形	30	—	17	
525	F－4	不整円形	39	—	19	
526	I－5	円形	28	—	19	
527	H－5	楕円形	42	32	36	
528	I－5	円形	25	—	31	
529	I－5	楕円形	30	—	36	
530	I－5	円形	16	—	37	
531	I－5	円形	28	—	38	
532	H－5	—	—	—	35	10号溝に切られる
533	H－5	円形	37	—	46	軒平桟瓦 角柱
534	H－5	円形	53	—	16	10号溝に切られる
535	H－5	円形	34	—	47	
536	H－5	円形	40	—	25	土器
537	H－5	不整円形	47	—	43	かわらけ 金属製品 土製品 陶器 平瓦 丸瓦
538	H－5	円形	30	—	24	
539	H－5	不整円形	56	—	17	
540	H－5	円形	50	—	45	
541	H－5	不整円形	55	—	33	磁器
542	H－5	円形	50	—	16	
543	H－5	不整円形	55	—	30	
544	I－5	楕円形	42	35	38	染付（碗）平瓦 15号溝・549を切る
545	H－5	円形	37	—	18	
546	H－5	円形	40	—	16	陶器 （貫入有り） 底部に礫
547	I－5	円形	29	—	28	
548	I－5	楕円形	42	35	26	
549	I－5	楕円形	44	32	44	平瓦 544に切られる
550	I－5	円形	24	—	—	
551	I－5	楕円形	36	—	33	
552	H－5	円形	53	—	26	かわらけ
553	H－5	不整円形	62	—	8	
554	I－5	楕円形	27	20	27	
555	I－5	楕円形	39	30	12	
556	I－5	円形	35	—	32	10号溝に切られる
557	I－5	円形	23	—	17	
558	I－5	円形	21	—	16	
559	I－5	円形	22	—	19	
560	I－5	楕円形	40	36	30	
561	I－5	不整円形	50	—	24	
562	H－5	楕円形	43	29	45	かわらけ
563	H－5	円形	21	—	20	銅線
564	H－5	円形	29	—	20	
565	H－5	円形	38	—	22	
566	I－5	円形	40	—	26	土器 底部に礫
567	I－5	円形	22	—	10	24号溝に切られる
568	D－6	円形	29	—	12	土器 底部に礫
569	D－6	楕円形	43	32	46	底部に礫
570	D－6	円形	28	—	20	
571	E－6	楕円形	33	27	13	
572	E－6	円形	43	—	32	
573	E－6	円形	34	—	15	底部に礫
574	E－6	楕円形	40	29	45	
575	E－6	円形	21	—	8	
576	E－6	楕円形	23	17	6	
577	E－6	円形	31	—	20	底部に礫
578	E－6	楕円形	30	20	13	
579	E－6	円形	36	—	11	
580	F－5	円形	21	—	30	かわらけ 焼土塊
581	F－5	楕円形	27	22	54	平瓦
582	F－5	楕円形	37	27	25	
583	F－5	楕円形	35	31	14	埋桶6を切る
584	F－6	円形	40	—	21	
585	F－6	楕円形	30	24	50	
586	F－6	円形	31	—	41	
587	F－6	円形	24	—	24	4号溝に切られる
588	F－6	楕円形	44	29	32	土器 軒平桟瓦（近世） 底部に礫
589	F－6	円形	23	—	10	
590	F－6	円形	30	—	20	
591	F－6	円形	40	—	17	平瓦（近世）
592	F－6	円形	28	—	21	
593	F－6	円形	54	—	30	染付 鉄釉陶器 土器
594	F－6	円形	25	—	17	
595	F－6	円形	29	—	21	かわらけ
596	F－6	円形	32	—	32	かわらけ 陶器 レンガ 底部に礫
597	F－7	円形	18	—	8	
598	F－7	楕円形	38	27	9	
599	F－7	円形	35	—	38	
600	F－7	円形	42	—	25	陶器 杭
601	F－7	円形	33	—	14	
602	F－7	楕円形	—	41	29	
603	G－6	円形	22	—	41	
604	H－8	円形	40	—	18	18号土坑を切る
605	G－6	円形	29	—	17	土器 陶器 擂鉢
606	G－6	円形	31	—	10	
607	G－6	円形	35	—	50	かわらけ 瀬戸美濃系陶器 石製品 釘 平瓦
608	G－6	円形	30	—	22	
609	G－6	円形	30	—	24	28号溝を切る
610	G－6	円形	23	—	13	

表6　A区ピット観察表⑥

番号	位置	平面形	長径	短径	深さ	出土遺物・重複関係
611	G－6	円形	28	—	15	
612	G－6	円形	41	—	11	
613	G－6	楕円形	50	38	5	
614	G－6	楕円形	27	19	10	
615	G－6	不整円形	40	—	21	
616	G－6	楕円形	39	30	23	
617	H－6	楕円形	23	15	23	
618	H－6	円形	31	—	21	
619	H－6	円形	30	—	37	底部に礫
620	H－6	楕円形	20	13	32	
621	H－6	円形	31	—	28	
622	I－6	円形	40	—	23	かわらけ
623	I－6	円形	29	—	13	23号溝に切られる
624	I－6	円形	25	—	15	
625	I－6	不整円形	40	—	17	
626	I－6	不整円形	51	—	29	
627	I－6	円形	51	—	10	
628	I－6	—	—	—	22	底部に礫 23号溝に切られる
629	I－6	楕円形	30	26	19	
630	G－7	楕円形	37	30	33	
631	G－7	円形	35	—	16	
632	G－7	円形	34	—	19	
633	G－7	円形	53	—	15	染付 磁器
634	H－7	—	—	—	12	24号土坑に切られる
635	H－7	円形	26	—	33	24号土坑に切られる
636	H－7	円形	25	—	19	24号土坑に切られる
637	I－7	円形	34	—	15	底部に礫
638	I－7	円形	32	—	12	礫
639	H－7	円形	35	—	17	底部に礫
640	H－7	円形	24	—	22	
641	H－7	不整円形	41	—	10	
642	H－7	円形	25	—	7	
643	H－7	楕円形	25	21	12	15号溝を切る
644	H－7	円形	30	—	10	
645	H－7	円形	18	—	7	
646	H－7	楕円形	68	51	13	丸皿か？
647	H－7	円形	19	—	7	16号溝を切る
648	H－7	円形	57	—	5	陶器 16号溝を切る
649	I－7	円形	33	—	35	
650	I－7	円形	28	—	32	
651	I－7	楕円形	27	22	23	染付
652	I－7	円形	28	—	15	底部に礫 16号溝を切る
653	I－7	円形	28	—	20	底部に礫
654	I－7	円形	27	—	7	16号溝を切る
655	G－8	—	—	—	6	杭
656	G－8	円形	14	—	14	
657	G－8	楕円形	41	35	30	
658	G－8	円形	26	—	—	
659	I－8	円形	37	—	19	土器 底部に礫 16号溝を切る
660	I－8	—	24	—	9	
661	I－8	—	(50)	—	13	磁器
662	H－9	楕円形	28	22	13	磁器 底部に平石
663	H－9	不整円形	49	—	17	底部に平石 15号溝を切る
664	H－9	楕円形	40	33	20	
665	H－9	不整円形	40	—	22	焼土塊
666	H－9	楕円形	33	26	18	13号土坑を切る
667	H－9	円形	27	—	10	底部に礫
668	H－9	楕円形	42	35	17	底部に礫 14号溝に切られる
669	H－9	不整円形	38	—	23	底部に平石
670	H－9	円形	31	—	9	
671	H－9	楕円形	25	23	9	底部に平石
672	H－9	楕円形	30	24	8	底部に平石
673	H－9	楕円形	35	28	14	
674	H－9	円形	36	—	14	
675	I－9	円形	26	—	13	底部に礫
676	I－9	円形	20	—	17	
677	I－9	円形	30	—	7	
678	I－9	円形	31	—	11	底部に礫
679	I－9	円形	33	27	29	
680	H－9	楕円形	40	32	13	
681	I－9	楕円形	30	15	12	
682	F－9	不整円形	37	—	11	
683	G－9	円形	62	—	31	14号溝を切る
684	G－9	円形	15	—	18	
685	G－9	円形	37	—	13	
686	G－9	楕円形	47	38	16	
687	G－9	円形	24	—	20	
688	G－9	円形	16	—	14	
689	G－9	円形	12	—	—	
690	F－5	円形	31	—	6	
691	G－4	—	—	—	8	
692	G－5	円形	26	—	14	
693	G－5	—	24	—	29	
694	G－7	楕円形	—	53	—	10号溝・28号溝に切られる
695	I－2	円形	23	—	45	底部に礫
696	H－2	円形	25	—	11	
697	I－2	不整円形	29	—	11	
698	H－3	円形	26	—	15	
699	H－3	円形	36	—	27	
700	H－3	円形	24	—	25	
701	H－3	円形	12	—	25	
702	H－3	—	—	—	8	
703	I－3	—	—	—	11	
704	I－3	—	—	—	21	
705	I－3	—	—	—	40	底部に平石
706	I－3	—	—	—	9	
707	I－5	—	—	—	5	
708	I－5	楕円形	34	26	16	
709	H－5	円形	57	—	10	11号溝に切られる
710	I－6	—	—	—	14	
711	I－6	—	—	—	10	底部に礫
712	I－6	円形	25	—	16	
713	I－6	円形	30	—	10	
714	H－6	円形	23	—	—	
715	H－7	円形	19	—	3	15号溝を切る
716	H－7	円形	28	—	9	15号溝を切る
717	H－7	楕円形	30	24	5	15号溝を切る
718	H－7	楕円形	45	—	7	15号溝を切る
719	H－7	—	12	—	4	
720	H－7	不整円形	26	—	5	
721	H－8	不整円形	35	—	19	15号溝を切る 18号土坑を切る
722	G－9	楕円形	45	—	17	
723	F－8	円形	65	—	—	杭
724	B－5	不整円形	—	—	20	
725	E－5	不整円形	—	—	28	石英
726	B－4	不整円形	—	—	28	119に切られる
727	G－4	楕円形	44	32	24	底部に礫 28号溝に切られる

表７　Ａ区遺物観察表①

（　）復元値、〈　〉残存値

図	番号	出土位置	種別・器種		法量（cm）			部位	観察所見（技法・文様・その他）	推定生産地	推定年代	備考
					口径	底径	器高					
19	1	1号溝	磁器	碗	(10.6)	(3.8)	5.8	口縁～底部	染付	砥部焼か	18～19世紀	
〃	2	1号溝	磁器	碗	(10.5)	4.4	5.5	口縁～底部	染付	瀬戸	19世紀	
〃	3	1号溝	磁器	碗	(8.6)	4.5	4.5	口縁～底部	染付	肥前		
〃	4	1号溝	磁器	端反碗	(9.6)	(4.1)	4.95	口縁～底部	染付	瀬戸		
〃	5	1号溝	磁器	碗	(6.0)	2.5	3.1	口縁～底部	染付	肥前	19世紀	
〃	6	1号溝	磁器	小皿	(7.8)	(3.8)	2.4	口縁～底部	染付	瀬戸		
〃	7	1号溝	磁器	碗	—	(6.2)	〈6.5〉	口縁～底部	染付	肥前		
〃	8	1号溝	磁器	碗	(12.7)	(5.6)	7.3	口縁～底部	染付	肥前		
〃	9	1号溝	磁器	段重蓋	10.0	最大幅 11.1	3.5	口縁～把手	染付、焼継ぎ	肥前		
〃	10	1号溝	磁器	段重蓋	9.7	最大幅 11.2	蓋上部まで 2.6	口縁～蓋上部	染付	肥前		
〃	11	1号溝	磁器	植木鉢	孔 2.2	7.0	〈3.3〉	底部	染付	瀬戸か		
〃	12	1号溝	磁器	仏飯器	(6.1)	4.2	5.4	口縁～底部	白磁			
〃	13	1号溝	陶器	灯明受皿（台付）	(6.25)	4.6	4.1	口縁～底部	底部無釉、口縁部被熱	—		
〃	14	1号溝	陶器	灯明皿	(8.5)	(3.3)	1.9	口縁～底部	外面体部～底部無釉	—		
〃	15	1号溝	陶器	灯明皿	(9.5)	—	〈2.0〉	口縁～底部	外面体部～底部無釉	—		
〃	16	1号溝	陶器	灯明受皿	(9.45)	(5.3)	1.7	口縁～底部	外面体部～底部無釉	—		
〃	17	1号溝	陶器	急須蓋	(5.7)	最大幅 (5.85)	2.0	口縁～把手	素焼き、外面布目	—		
〃	18	1号溝	陶器	山水土瓶	7.6	—	—	口縁～底部		—	19世紀	
〃	19	1号溝	陶器	行平蓋	(15.8)	最大幅 (15.8)	〈3.0〉	口縁～体部	内面鉄釉 外面トビガンナ	—	19世紀	
〃	20	1号溝	磁器	碗	(6.4)	(3.5)	(4.6)	口縁～底部	内面白釉、外面絵付部金彩 高台内「萬古」	萬古焼		
〃	21	1号溝	磁器	皿	(10.0)	5.8	2.0	口縁～底部	コバルト染付	肥前	近代	
〃	22	1号溝	磁器	碗	—	(5.3)	〈2.9〉	体部～底部	青磁 高台内「有限会社三井商店」	瀬戸	近代	
20	23	1号溝	瓦	丸瓦	長さ 〈25.8〉	幅 〈15.15〉	厚さ 2.0	—	外面ヘラ成形	—	近世	
〃	24	2号溝	磁器	碗	(11.5)	5.2	6.6	口縁～底部	焼継ぎ 裏面焼継ぎ文字	肥前	1740年～1780年代	
〃	25	2号溝	磁器	碗	(11.2)	(5.8)	5.5	口縁～底部	口縁釉ハギ	肥前		
〃	26	2号溝	磁器	端反碗	(8.2)	(3.2)	4.4	口縁～底部		瀬戸	19世紀	
〃	27	2号溝	陶器	大皿（馬の目皿）	(24.3)	12.4	4.9	口縁～底部		瀬戸	19世紀	
21	28	7号溝	土器	七輪	(28.4)	—	〈11.6〉	口縁～体部	内外面ロクロ成形、内面被熱			
〃	29	7号溝	瓦	軒桟瓦	—	—	厚さ 1.75	—				
〃	30	7号溝	瓦	軒桟瓦	—	—	1.7	—	軒部に刻印㊀			
〃	31	7号溝	瓦	軒桟瓦	外径 7.5	内径 4.8	厚さ 1.8	—				
〃	32	7号溝	瓦	丸瓦	長さ 〈16.4〉	幅 17.0	厚さ 1.65	—	側面部に刻印㊀			
〃	33	7号溝	石製品	石臼	(46.8)	—	〈24.3〉	口縁～体部	安山岩製			
〃	34	7号溝	石製品	石臼	(32.0)	(10.25)	(31.0)	下臼	安山岩製			
22	35	7号溝	石製品	石臼	(32.25)	(30.8)	(10.3)	上臼	安山岩製			
〃	36	7号溝	石製品	石臼	(28.45)	(27.5)	(11.2)	上臼	安山岩製			
〃	37	8号溝	陶器	灯明皿	(8.0)	(2.8)	1.7	口縁～底部	外面体部～底面無釉			

表8　A区遺物観察表②

（　）復元値、〈　〉残存値

図	番号	出土位置	種別・器種		法量（cm） 口径	底径	器高	部位	観察所見（技法・文様・その他）	推定生産地	推定年代	備考
22	38	8号溝	陶器	灯明受皿	(8.7)	(4.5)	2.3	口縁～底部	外面体部～底部釉ハギ			
〃	39	8号溝	磁器	碗	(15.3)	—	〈3.0〉	口縁～体部	染付	中国製か		
〃	40	8号溝	土器	かわらけ？	—	—	—	体部	外面黒褐色、陽刻部分金箔付			
〃	41	8号溝	瓦	あご付棟瓦	外径 11.5	内径 7.3	厚さ 2.0	—	表面ヘラ整形			
23	42	10号溝	磁器	碗	(6.3)	3.1	4.4	口縁～底部	染付	肥前		
〃	43	10号溝	磁器	皿	(15.8)	—	〈3.2〉	口縁～体部	内面たこ唐草文 外面唐草文	肥前	18～19世紀	
〃	44	10号溝	陶器	不明	—	(6.8)	〈3.2〉	底部	底部回転糸切り			1号土坑遺物と接合
〃	45	10号溝	磁器	御神酒徳利	—	3.4	〈6.5〉	体部～底部	染付、たこ唐草文	肥前	18～19世紀	
〃	46	10号溝	陶器	行平蓋	(16.8)	最大幅 (17.0)	〈2.6〉	口縁～体部	内面鉄釉 外面トビガンナ	—	19世紀	
〃	47	10号溝	陶器	植木鉢	(24.6)	—	〈14.8〉	口縁～体部	体部外面～口縁内面緑釉	瀬戸 勇右衛門窯	18～19世紀	
〃	48	10号溝	瓦	軒桟瓦	長さ —	幅 3.65	厚さ 1.55	—				
〃	49	11号溝	土器	かわらけ	(9.6)	(7.0)	2.1	口縁～底部	内外面ロクロ成形、底部回転糸切り、口縁部炭化物付着		近世	
〃	50	11号溝	土製品	ミニチュア製品 徳利か	—	(2.95)	〈1.9〉	底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り	江戸近郊	近世	
〃	51	12号溝	土器	かわらけ	(6.8)	(4.4)	1.3	口縁～底部	内外面ロクロ成形、底部回転糸切り、内面炭化物付着		近世	
〃	52	12号溝	土器	かわらけ	(6.9)	(4.4)	1.6	口縁～底部	内外面ロクロ成形、底部回転糸切り、内面炭化物付着		近世	
〃	53	12号溝	土器	かわらけ	(11.5)	(6.0)	2.7	口縁～底部	内外面ロクロ成形、底部回転糸切り、内面炭化物付着			
〃	54	12号溝	土器	かわらけ	(10.75)	(5.6)	2.55	口縁～底部	内外面ロクロ成形、底部回転糸切り、内面炭化物付着			
〃	55	12号溝	土器	土鍋	(13.7)	(13.0)	4.3	口縁～底部	内面炭化物付着 外面指頭痕			
〃	56	12号溝	陶器	丸皿	(11.8)	—	〈2.2〉	口縁部		瀬戸・美濃	大窯2	
〃	57	12号溝	土器	擂鉢	—	(13.0)	〈4.5〉	体部～底部	外面削り痕 内面炭化物付着			
〃	58	12号溝	磁器	皿	—	(8.0)	〈1.1〉	底部	染付、内面「冨」、 高台部「天」	中国	16世紀	
〃	59	12号溝	陶器	端反皿	(9.8)	—	〈2.6〉	口縁～体部		瀬戸美濃	大窯2	
〃	60	12号溝	石製品	五輪塔 火輪	上部幅 8.9	底部幅 16.5	最大幅 23.7	高さ 11.45	安山岩製		中世	
〃	61	13号溝	土器	かわらけ	10.2	5.5	2.3	完形	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り		中世	
〃	62	14号溝	土器	高坏脚	—	—	〈3.9〉	脚部	内外面ナデ成形		古墳時代	
24	63	1号井戸	土器	かわらけ	(7.4)	(4.8)	1.7	口縁～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り		16世紀	
〃	64	1号井戸	陶器	丸皿	—	(6.4)	〈1.2〉	底部		瀬戸・美濃	大窯1	
〃	65	1号井戸	磁器	白磁碗	(11.1)	4.1	4.2	口縁～底部	見込み及び高台部に砂目	朝鮮	16世紀末～17世紀初頭	
〃	66	1号井戸	磁器	碗	(10.0)	—	〈1.6〉	口縁部	染付	中国製	16世紀	
〃	67	1号井戸	石製品	碁石	長径 2.4	短径 1.8	厚さ 0.4	完形	頁岩製	—		
〃	68	2号井戸	土器	かわらけ	(12.3)	5.8	2.9	口縁～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り		16世紀	
〃	69	2号井戸	土器	かわらけ	(12.6)	(6.8)	2.6	口縁～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り		16世紀	
〃	70	2号井戸	土器	かわらけ	(7.7)	(5.0)	2.6	口縁～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り		16世紀	
〃	71	2号井戸	土器	かわらけ	(8.0)	(4.0)	2.0	口縁～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り		16世紀	
〃	72	2号井戸	陶器	皿	(11.8)	—	〈1.9〉	口縁部		瀬戸美濃	大窯2	
〃	73	2号井戸	土器	かわらけ	(14.0)	(8.7)	(4.0)	口縁～底部	溶融物付着			
〃	74	2号井戸	土器	擂鉢	—	—	—	体部				

表９　Ａ区遺物観察表③

（　）復元値、〈　〉残存値

図	番号	出土位置	種別・器種		法量（cm）			部位	観察所見（技法・文様・その他）	推定生産地	推定年代	備考
					口径	底径	器高					
24	75	2号井戸	石製品	くぼみ石	最大幅 9.8	高さ 6.1	孔径 5.9	孔深さ 2.0	輝石安山岩製			
〃	76	3号井戸	土器	かわらけ	12.0	5.8	3.0	完形	内外面ロクロ成形、底部回転糸切り、口縁部炭化物付着		16世紀	
〃	77	4号井戸	土器	かわらけ	(6.9)	4.0	2.0	口縁～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り		16世紀	
〃	78	4号井戸	土器	かわらけ	(7.5)	—	〈1.7〉	口縁部	内外面ロクロ成形		16世紀	
〃	79	4号井戸	陶器	丸皿	(10.6)	(7.0)	(2.0)	口縁～底部		瀬戸・美濃	大窯２	
〃	80	4号井戸	陶器	擂鉢	—	—	—	口縁部	内外面鉄釉	瀬戸・美濃	大窯1	
〃	81	4号井戸	木製品	不明	長さ 7.8	幅 1.8	厚さ 1.25	—				
〃	82	5号井戸	土器	かわらけ	(12.6)	(7.0)	2.3	口縁～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り		16世紀	
〃	83	5号井戸	土器	かわらけ	9.3	4.9	2.15	口縁～底部	内外面ロクロ成形、底部回転糸切り、内面炭化物付着			
〃	84	5号井戸	陶器	碗	(9.8)	—	〈1.9〉	口縁部	鉄釉	初山窯		
〃	85	5号井戸	陶器	鉢	(26.3)	—	〈4.9〉	口縁～体部		志戸呂か		
〃	86	5号井戸	陶器	擂鉢	(30.0)	—	〈4.2〉	口縁～体部	鉄釉	瀬戸・美濃	大窯２	
〃	87	5号井戸	陶器	碗 天目茶碗	(11.2)	—	〈4.0〉	口縁～体部		瀬戸・美濃	大窯３	
〃	88	5号井戸	磁器	青磁・皿	(12.0)	(5.0)	2.3	口縁～底部	口縁輪花	中国 龍泉窯	15～16世紀	
〃	89	5号井戸	漆器	碗	(13.5)	(7.9)	3.3	口縁～底部	内面朱 外面黒、鶴松文様朱			
25	90	5号井戸	木製品	曲物底	長さ 10.5	幅 6.3	厚さ 0.4	—				
〃	91	5号井戸	木製品	桶蓋	長さ 8.0	幅 5.2	厚さ 0.7	—				
〃	92	5号井戸	木製品	桶蓋	長さ 9.4	幅 2.75	厚さ 0.7	—				
〃	93	5号井戸	木製品	曲物	長さ 13.6	幅 6.45	厚さ 0.6	—				
〃	94	5号井戸	木製品	箸	長さ 〈21.55〉	幅 0.7	厚さ 0.45	—				
〃	95	5号井戸	木製品	箸	長さ 〈16.2〉	幅 0.65	厚さ 0.45	—				
〃	96	5号井戸	木製品	箸	長さ 〈19.5〉	幅 0.5	厚さ 0.7	—				
〃	97	5号井戸	木製品	箸	長さ 〈16.2〉	幅 0.65	厚さ 0.45	—				
〃	98	5号井戸	木製品	箸	長さ 14.95	幅 0.7	厚さ 0.45	—				
〃	99	5号井戸	木製品	箸	長さ 25.4	幅 0.45	厚さ 0.6	—				
〃	100	5号井戸	木製品	箸	長さ 26.15	幅 0.7	厚さ 0.5	—				
〃	101	5号井戸	木製品	箸	長さ 27.6	幅 0.5	厚さ 0.55	—				
〃	102	5号井戸	木製品	不明	長さ 23.5	幅 10.65	厚さ 0.7	—				
〃	103	5号井戸	木製品	不明	長さ 19.3	幅 1.05	厚さ 0.5	—				
〃	104	5号井戸	木製品	不明	長さ 〈11.95〉	幅 0.6	厚さ 0.4	—				
〃	105	5号井戸	木製品	不明	長さ 18.7	幅 10.3	厚さ 0.7	—	上部炭化			
〃	106	5号井戸	木製品	不明	長さ 17.5	幅 1.4	厚さ 0.75	—	上部炭化			
〃	107	5号井戸	木製品	下駄	長さ 20.4	幅 10.2	厚さ 4.3	高さ 10.3	表面十字の刻み有り 歯部擦痕			
〃	108	5号井戸	木製品	下駄	長さ 18.2	幅 9.8	厚さ 1.65	2.7	表面指形の使用痕 表面下部が炭化			
26	109	5号井戸	石製品	石臼	(30.7)	(29.2)	(12.3)	上臼	安山岩製、外面上部縁辺炭化物付着			
〃	110	5号井戸	石製品	ヒデ鉢	(28.0)	—	—	口縁～体部	安山岩製、内面炭化物付着			
〃	111	6号井戸	陶器	丸皿	(10.5)	(6.0)	2.45	口縁～底部	底部輪トチ痕	瀬戸・美濃	大窯２	

表10　A区遺物観察表④

（　）復元値、〈　〉残存値

図	番号	出土位置	種別・器種		法量（cm）			部位	観察所見（技法・文様・その他）	推定生産地	推定年代	備考
					口径	底径	器高					
26	112	6号井戸	陶器	擂鉢	—	—	—	体部		志戸呂	16世紀後半	
〃	113	6号井戸	陶器	擂鉢	—	—	—	口縁部	胎土赤褐色			
〃	114	6号井戸	石製品	砥石	長さ 10.6	幅 4.35	厚さ 2.45	—				
〃	115	6号井戸	石製品	茶臼	20.0	14.1	19.85	上臼	安山岩製、被熱			
〃	116	7号井戸	磁器	碗	(9.0)	—	〈4.5〉	口縁～体部	花部分赤絵と金使用	肥前	18世紀	
〃	117	7号井戸	磁器	碗	(9.0)	—	〈4.7〉	口縁～体部	染付、コンニャク印判	肥前	18世紀前半～中期	
〃	118	7号井戸	磁器	小碗	(6.0)	(2.2)	(3.0)	口縁～底部	染付	肥前	18世紀	
〃	119	7号井戸	陶器	皿	(12.4)	(7.8)	2.2	口縁～底部		瀬戸		
〃	120	7号井戸	陶器	碗	(14.7)	—	〈4.3〉	口縁～体部	内外面灰色			
〃	121	7号井戸	陶器	花瓶か	(8.0)	—	〈10.0〉	口縁～体部	胎土灰褐色、緑釉、耳付痕、口縁研磨	信楽系か		
〃	122	7号井戸	土器	焼塩壺蓋	(8.7)	蓋上部 (7.4)	1.7	口縁～蓋上部		堺	18世紀	
27	123	8号井戸	磁器	碗	(9.4)	(2.8)	5.3	口縁～底部	染付	肥前系	18世紀	
〃	124	8号井戸	磁器	碗（筒形碗）	(8.0)	—	—	口縁～体部	染付	肥前		
〃	125	8号井戸	磁器	碗	(8.8)	(3.2)	6.0	口縁～底部	あざみ文様	肥前		
〃	126	8号井戸	磁器	碗	(8.2)	(4.4)	7.5	口縁～底部	江戸染付 焼継ぎ	肥前		1号溝・24号土坑と接合
〃	127	8号井戸	磁器	碗（筒形碗）	7.2	3.9	5.95	口縁～底部	見込み五弁花文	肥前		
〃	128	8号井戸	磁器	小碗	(6.8)	—	〈2.3〉	口縁～体部		肥前系		
〃	129	8号井戸	磁器	碗	(6.7)	2.7	3.5	口縁～底部		肥前系		
〃	130	8号井戸	磁器	広東碗蓋	10.25	蓋上部 6.0	2.5	口縁～蓋上部	内外面るり釉	肥前系	18世紀末～19世紀	131とセットか
〃	131	8号井戸	磁器	広東碗	(11.4)	—	〈4.4〉	口縁～体部	内外面るり釉	肥前系	18世紀末～19世紀	130とセットか
〃	132	8号井戸	磁器	広東碗	(11.1)	—	—	口縁～体部		肥前	18世紀後半	
〃	133	8号井戸	磁器	広東碗	(10.5)	5.8	5.9	口縁～底部		肥前	18世紀末～19世紀	
〃	134	8号井戸	磁器	広東碗蓋	(10.3)	蓋上部 (5.6)	2.6	口縁～蓋上部	外面　コウモリ、花文 内面　白サギ	肥前系	18世紀末～19世紀	
〃	135	8号井戸	磁器	鉢（端反形小鉢）	(12.3)	(4.5)	(5.3)	口縁～底部	外面折松葉文 口縁部内側　連弧文帯	肥前系	17世紀末～19世紀	皿山本登窯
〃	136	8号井戸	磁器	皿	(13.9)	(8.6)	(4.2)	口縁～底部	見込み五弁花文	肥前	18世紀	
〃	137	8号井戸	磁器	皿	(13.1)	(7.4)	(4.0)	口縁～底部	見込みコンニャク判五弁花文 底裏銘「渦福」	肥前	18世紀	
〃	138	8号井戸	磁器	皿	(17.2)	(8.7)	(4.75)	口縁～底部	見込みコンニャク判五弁花文 底裏銘有り	肥前	18世紀	
〃	139	8号井戸	磁器	皿	10.8	6.4	2.5	口縁～底部	波縁、内面龍文	肥前系	18世紀	
〃	140	8号井戸	磁器	皿	(10.0)	(4.9)	(2.1)	口縁～底部	染付	肥前系		
〃	141	8号井戸	磁器	皿	(13.2)	(7.4)	3.2	口縁～底部	見込み蛇ノ目釉ハギ コンニャク判五弁花文	肥前	18世紀	
〃	142	8号井戸	磁器	皿	(13.8)	(8.0)	2.5	口縁～底部	見込み蛇ノ目釉ハギ コンニャク判五弁花文	肥前	18世紀	
〃	143	8号井戸	磁器	皿	—	(9.3)	〈3.2〉	体部～底部	見込み蛇ノ目釉ハギ コンニャク判五弁花文	肥前	18世紀	
28	144	8号井戸	磁器	白磁鉢	—	(7.8)	〈2.9〉	体部～底部	内面陽刻の唐草文	肥前系		
〃	145	8号井戸	磁器	皿	(10.5)	(6.0)	2.3	口縁～底部	型押成形、見込み染付文 口縁輪花・口銹	肥前	17～18世紀	
〃	146	8号井戸	磁器	皿	(13.3)	8.6	2.5	口縁～底部	染付、龍文	肥前	18世紀	
〃	147	8号井戸	磁器	鉢	—	(5.4)	〈4.7〉	体部～底部	内面底部、松竹梅文	肥前系	18世紀後半	
〃	148	8号井戸	磁器	鉢（蓋付鉢）	(14.9)	—	〈7.3〉	口縁～体部	口縁内面釉ハギ	肥前	18世紀	

表11　A区遺物観察表⑤

（　）復元値、〈　〉残存値

図	番号	出土位置	種別・器種		法量（cm）			部位	観察所見（技法・文様・その他）	推定生産地	推定年代	備考
					口径	底径	器高					
28	149	8号井戸	磁器	香炉・火入れ	—	(8.0)	〈4.8〉	体部～底部	蛇ノ目凹形高台 内面無釉	肥前系	18世紀末～19世紀	
〃	150	8号井戸	磁器	鉢蓋	(8.1)	最大幅(9.0)	〈1.7〉	体部～底部	染付	肥前系	18世紀末～19世紀	
〃	151	8号井戸	磁器	蓋	(5.2)	最大幅(5.4)	1.0	口縁～底部	染付	肥前系	18世紀末～19世紀前期	
〃	152	8号井戸	磁器	火入れ	5.5	4.4	6.8	口縁～底部	染付 ベタ底	肥前系	18世紀	
〃	153	8号井戸	磁器	碗	6.3	5.3	6.5	口縁～底部	口縁内面釉ハギ	肥前系	18世紀	
〃	154	8号井戸	磁器	青磁火入れ	(5.7)	(4.5)	6.75	口縁～底部	ベタ底	肥前系		
〃	155	8号井戸	磁器	徳利	—	(5.8)	〈9.0〉	体部～底部	染付	肥前系	18世紀	
〃	156	8号井戸	磁器	仏飯器	—	4.7	〈5.1〉	体部～底部		肥前系	18世紀～19世紀	
〃	157	8号井戸	陶器	碗(小杉茶碗)	(9.0)	(2.8)	4.8	口縁～底部	鉄絵	京都、信楽系	1730年代～1860年代	
〃	158	8号井戸	陶器	碗(小杉茶碗)	(9.2)	3.6	4.9	口縁～底部		京都、信楽系	1730年代～1860年代	
〃	159	8号井戸	陶器	碗(小杉茶碗)	(9.5)	(3.6)	5.3	口縁～底部		京都、信楽系	1730年代～1860年代	
〃	160	8号井戸	陶器	碗	(13.1)	4.6	4.3	口縁～底部		肥前系		
〃	161	8号井戸	陶器	碗	(11.0)	4.0	6.0	口縁～底部	貫入	瀬戸		
〃	162	8号井戸	陶器	碗	(10.0)	—	〈4.8〉	口縁～体部	貫入	瀬戸		
〃	163	8号井戸	陶器	碗	(8.4)	—	〈5.0〉	口縁～底部	灰釉、貫入	京都、信楽系		
〃	164	8号井戸	陶器	碗(呉器手碗)	—	(4.6)	〈4.5〉	体部～底部	貫入	肥前系	1650年～1740年	
〃	165	8号井戸	陶器	碗	—	4.0	〈4.3〉	体部～底部		瀬戸		
〃	166	8号井戸	陶器	皿	(10.4)	(5.2)	1.8	口縁～底部	外面体部～底部無釉	瀬戸		
〃	167	8号井戸	陶器	鉢	—	—	—	口縁部	三島手鉢	唐津		
29	168	8号井戸	陶器	皿	—	(10.2)	〈4.3〉	体部～底部	白釉・黒釉、内面鉄絵 高台のみ無釉	瀬戸・美濃		
〃	169	8号井戸	陶器	大皿	(17.6)	12.0	(4.7)	口縁～底部	削出し高台、呉須絵笹文 外面体部～底部無釉	瀬戸	18世紀	小西窯
〃	170	8号井戸	陶器	徳利	—	—	〈7.7〉	体部	外面のみ灰釉(緑色)	瀬戸		
〃	171	8号井戸	陶器	徳利	—	(8.6)	〈3.1〉	体部～底部	底部無釉	瀬戸	18世紀	尾呂窯
〃	172	8号井戸	陶器	不明	(15.4)	(9.0)	(7.0)	口縁～底部	内外面鉄釉			
〃	173	8号井戸	陶器	火入	—	(18.0)	〈7.3〉	体部～底部		瀬戸		
〃	174	8号井戸	陶器	鉢又は片口	—	(9.6)	〈6.5〉	体部～底部		瀬戸		かみた窯群
〃	175	8号井戸	陶器	土鍋	(15.2)	(6.4)	(7.3)	口縁～底部	外面底部無釉			
〃	176	8号井戸	陶器	半胴甕	—	(17.4)	〈11.5〉	体部～底部	鉄釉、底部無釉	瀬戸・美濃		
〃	177	8号井戸	陶器	土瓶	(8.2)	—	〈3.3〉	口縁～体部	シノギ、鉄釉			
〃	178	8号井戸	陶器	甕	(27.8)	—	〈7.4〉	口縁～体部	柿釉、外面口縁部黒色釉タレ	瀬戸		
〃	179	8号井戸	陶器	鉢	—	(18.0)	〈5.9〉	体部～底部	外面底部印花文、内面底部 ハリ痕4ヵ所	瀬戸		
〃	180	8号井戸	陶器	擂鉢	(13.0)	5.0	(5.9)	口縁～底部	内外面鉄釉 櫛目9本単位	瀬戸		
〃	181	8号井戸	陶器	擂鉢	—	(12.7)	〈4.6〉	体部～底部	内外面鉄釉、胎土に長石含む 櫛目8本単位	信楽か		
〃	182	8号井戸	陶器	擂鉢	—	10.5	〈4.6〉	体部～底部	内外面鉄釉 底部回転糸切り	瀬戸		
〃	183	8号井戸	陶器	擂鉢	(35.6)	(18.4)	15.4	口縁～底部		堺	18世紀中葉	
〃	184	8号井戸	陶器	擂鉢	(39.2)	—	〈12.0〉	口縁～体部	櫛目8本単位	堺	18世紀中葉	
〃	185	8号井戸	陶器	擂鉢	(34.8)	—	〈12.1〉	口縁～底部		堺	18世紀中葉	

表12　A区遺物観察表⑥

（　）復元値、〈　〉残存値

図	番号	出土位置	種別・器種		法量（cm）			部位	観察所見（技法・文様・その他）	推定生産地	推定年代	備考
					口径	底径	器高					
30	186	8号井戸	陶器	蓋	(10.3)	最大幅(10.5)	〈2.5〉	口縁～把手	外面茶褐色の施釉			
〃	187	8号井戸	陶器	徳利	—	(7.6)	〈5.5〉	体部～底部	底部刻印有り			
〃	188	8号井戸	陶器	餌入れ	(4.4)	(4.0)	2.3	口縁～底部	底部回転糸切り	瀬戸		
〃	189	8号井戸	陶器	鬢水入れ	—	—	〈1.8〉	体部～底部	鉄絵	瀬戸		
〃	190	8号井戸	陶器	油受け皿	7.7	3.6	1.9	口縁～底部	内外面鉄釉 底部釉拭き取り			
〃	191	8号井戸	陶器	油受け皿	9.4	4.5	1.8	口縁～底部	内外面鉄釉 底部釉拭き取り			
〃	192	8号井戸	陶器	油受け皿	10.6	5.1	2.2	口縁～底部	内外面鉄釉、外面釉拭き取り 内面炭化物付着			
〃	193	8号井戸	陶器	油受け皿	10.5	4.8	2.2	口縁～底部	内外面鉄釉、外面釉拭き取り			
〃	194	8号井戸	陶器	油受け皿	10.0	4.7	1.9	口縁～底部	内外面鉄釉、外面釉拭き取り			
〃	195	8号井戸	陶器	灯明皿	7.8	3.6	1.5	口縁～底部	内外面鉄釉、外面釉拭き取り			
31	196	8号井戸	土器	かわらけ	(9.6)	(5.6)	(2.3)	口縁～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り			
〃	197	8号井戸	土器	かわらけ	(8.1)	(5.7)	(2.3)	口縁～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り			
〃	198	8号井戸	土器	かわらけ	(7.9)	(6.0)	(1.8)	口縁～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り			
〃	199	8号井戸	土器	焼塩壺	—	4.8	〈1.9〉	体部～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り		18世紀末	
〃	200	8号井戸	土器	焼塩壺蓋	6.1	蓋上部6.4	0.95	口縁～蓋上部	内面布目		18世紀末	
〃	201	8号井戸	土器	焼塩壺蓋	6.9	蓋上部6.75	1.0	口縁～蓋上部	内面布目		18世紀末	
〃	202	8号井戸	土器	不明	(18.6)	(19.8)	5.2	口縁～底部	内外面ロクロ成形 口縁部炭化物付着			
〃	203	8号井戸	土器	不明	(13.6)	(16.0)	5.05	口縁～底部	内外面ロクロ成形 内外面炭化物付着			
〃	204	8号井戸	土器	鉢	—	(8.0)	〈2.5〉	体部～底部	内面白釉 外面墨書有り			
〃	205	8号井戸	土器	火消壺	—	(22.5)	〈7.8〉	体部～底部	外面ロクロ成形、内面指頭痕、三足貼付			
〃	206	8号井戸	土器	不明	—	—	厚さ1.3	—	板作成形			
〃	207	8号井戸	土器	丸七輪	—	—	〈9.2〉	体部	外面ロクロ成形 内面炭化物付着			
〃	208	8号井戸	土器	手焙り？	—	(11.1)	〈7.4〉	体部～底部	ロクロ成形、外面薄緑色の施釉 外面文様有り			
〃	209	8号井戸	土器	涼炉	—	11.7	〈5.8〉	体部～底部	ロクロ成形、外面研磨 胎土雲母混入			
〃	210	8号井戸	土器	涼炉	—	(11.8)	〈7.9〉	体部～底部	ロクロ成形、外面研磨 胎土雲母混入、内面被熱			
〃	211	8号井戸	瓦	軒丸瓦	外径14.0	内径9.8	厚さ2.15	—				
〃	212	8号井戸	瓦	軒丸瓦	外径14.2	内径10.0	厚さ2.25	—				
〃	213	8号井戸	瓦	軒丸瓦	外径13.6	内径10.4	厚さ2.1	—				
〃	214	8号井戸	瓦	丸瓦	厚さ1.85	孔径1.8	—	—				
32	215	8号井戸	瓦	丸瓦	厚さ2.2	—	—	—				
〃	216	8号井戸	瓦	平桟瓦	厚さ1.9	—	—	—				
〃	217	8号井戸	木製品	下駄	長さ21.0	幅7.4	厚さ1.15	—	歯部磨耗			
〃	218	8号井戸	木製品	下駄歯	最大幅12.25	最小幅9.3	高さ9.95	厚さ1.6				
〃	219	9号井戸	土器	かわらけ	(6.1)	(4.0)	1.4	口縁～底部	内外面ロクロ成形 灰褐色被熱			
〃	220	9号井戸	土器	かわらけ	(8.0)	—	〈2.5〉	口縁～体部	内外面ロクロ成形 灰褐色、被熱			
〃	221	9号井戸	磁器	皿	(10.1)	(6.0)	2.1	口縁～底部				
〃	222	9号井戸	磁器	染付皿	—	(6.0)	〈1.0〉	底部	染付			

表13　A区遺物観察表⑦

（　）復元値、〈　〉残存値

図	番号	出土位置	種別・器種		法量（cm）			部位	観察所見（技法・文様・その他）	推定生産地	推定年代	備考
					口径	底径	器高					
32	223	9号井戸	須恵器	甕	—	—	—	胴部	外面叩き目			
〃	224	9号井戸	陶器	擂鉢	—	—	—	体部	内外面鉄釉	志戸呂か		
〃	225	9号井戸	木製品	桶蓋	直径 (26.2)	厚さ 2.0	—	—				
33	226	1号土坑	磁器	碗	(9.0)	3.8	4.85	口縁～底部	染付	肥前	18～19世紀	
〃	227	1号土坑	磁器	長皿	長15.8 短 9.0	10.6	2.85	口縁～底部	染付、型打成形、焼継ぎ	肥前	19世紀	
〃	228	1号土坑	磁器	鉢	18.5	9.4	8.75	口縁～底部	染付、ロクロ型打成形(輪花)	肥前	19世紀	
〃	229	1号土坑	陶器	小坏	(5.6)	(2.9)	2.3	口縁～底部		瀬戸		
〃	230	1号土坑	陶器	灯明皿	(7.8)	(2.5)	2.0	口縁～底部	口縁部と内面施釉 外面炭化物付着	江戸近郊		
〃	231	1号土坑	陶器	土瓶	5.7	—	〈9.0〉	口縁～体部				
〃	232	1号土坑	陶器	小壺	11.8	—	〈7.75〉	口縁～体部	内外面柿釉、外面体部黒色釉	瀬戸	19世紀	
〃	233	1号土坑	陶器	土鍋	(16.1)	—	〈6.2〉	口縁～体部	紐状把手貼付 柿釉、内面炭化物付着		19世紀	
〃	234	1号土坑	瓦質土器	土釜か	—	—	—	体部	外面型文様			
〃	235	1号土坑	土器	鍋	(22.6)	(25.4)	7.3	口縁～底部	把手部分穿孔			
〃	236	1号土坑	瓦	軒平瓦	厚さ 1.5	—	—	—	唐草と菊文		19～20世紀	
〃	237	1号土坑	土製品	泥人形	長さ 1.27	幅 0.95	厚さ 0.35	完形	大黒 裏面に指紋痕			
34	238	8号土坑	土器	かわらけ	12.1	6.3	3.2	口縁～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り		16世紀	
〃	239	8号土坑	磁器	白磁皿				口縁		中国	16世紀	
〃	240	2号土坑	土器	不明	(19.3)	—	〈11.1〉	口縁～体部	ロクロ成形、内面上部赤釉 炭化物付着			
〃	241	2号土坑	土器	土製鉢	—	—	〈2.4〉	口縁～底部	見込み指頭痕 底部、脚の痕跡2ヶ所		近世	
〃	242	埋桶8	石製品	砥石	長さ 10.25	幅 3.55	厚さ 2.8	—	緑色凝灰岩製			
〃	243	13号土坑	石製品	ヒデ鉢	(39.5)	—	〈10.7〉	口縁～体部	安山岩製、内面炭化物付着			
〃	244	21号土坑	磁器	皿	(10.4)	6.9	2.75	口縁～底部	染付	肥前		
〃	245	21号土坑	陶器	徳利	—	—	〈5.3〉	体部	外面鉄釉	瀬戸	18世紀	
〃	246	21号土坑	磁器	八角鉢	—	(8.0)	〈3.9〉	体部～底部	染付、ロクロ型打成形 蛇ノ目凹形高台、焼継ぎ	肥前	18～19世紀	
〃	247	21号土坑	土製品	模造銭	長さ 2.05	幅 1.2	厚さ 0.25	—	南鐐二朱銀の模造	江戸近郊	1765年以降	
35	248	22号土坑	磁器	小坏	(6.0)	—	〈2.3〉	口縁～体部	染付	肥前	19世紀	
〃	249	22号土坑	磁器	碗	7.3	3.05	3.8	口縁～底部	染付	瀬戸	19世紀	
〃	250	22号土坑	磁器	碗	(7.9)	—	〈3.3〉	口縁～体部	赤絵染付	肥前	18世紀	
〃	251	22号土坑	磁器	香合	3.4	4.2	1.5	口縁～底部	蓋接合部のみ釉ハギ	瀬戸・美濃	19世紀	
〃	252	22号土坑	磁器	散り蓮華	幅 (3.85)	厚さ 0.85	—	—	染付	肥前系	19世紀	
〃	253	22号土坑	陶器	餌入れ	—	(5.0)	〈2.0〉	体部～底部	底部回転糸切り	瀬戸	18～19世紀	
〃	254	22号土坑	陶器	土瓶	(5.6)	—	〈5.0〉	口縁～体部	赤目、鉄釉		19世紀	
〃	255	22号土坑	土器	かわらけ	(10.0)	(7.0)	2.3	口縁～底部	内外面ロクロ成形、底部回転糸切り、口縁部炭化物付着			
〃	256	22号土坑	土器	小皿	(6.8)	(3.2)	(1.4)	口縁～底部	内外面ロクロ成形、内面白釉 底部回転糸切り			
〃	257	22号土坑	土製品	ミニチュア蓮華	長さ 2.45	幅 1.24	厚さ 0.45	—	表面のみ施釉			
〃	258	22号土坑	土器	不明	厚さ 1.65	—	—	—	外面ウロコ状			
〃	259	22号土坑	瓦器	丸瓦	—	—	厚さ 2.0	—	表面ヘラ削り整形			

表14　A区遺物観察表⑧

（　）復元値、〈　〉残存値

図	番号	出土位置	種別・器種		法量（cm）			部位	観察所見（技法・文様・その他）	推定生産地	推定年代	備考
					口径	底径	器高					
35	260	22号土坑	瓦	平瓦	厚さ 1.65	—	—	—				
〃	261	22号土坑	瓦	軒桟瓦	—	—	—	—				
〃	262	22号土坑	瓦	軒桟瓦	厚さ 1.80	—	—	—				
〃	263	22号土坑	瓦	軒桟瓦	厚さ 1.55	—	—	—	三巴文			
36	264	23号土坑	磁器	碗	(10.5)	4.4	5.2	口縁～底部	染付	肥前	18世紀	
〃	265	23号土坑	磁器	碗	(9.9)	(3.0)	4.9	口縁～底部	染付	肥前	18世紀	
〃	266	23号土坑	磁器	青磁・皿	(12.8)	—	〈2.1〉	口縁～底部	口縁輪花、内面口縁部陰刻	中国	15世紀	
〃	267	23号土坑	磁器	紅猪口	2.5	0.8	1.2	完形	型押し成形	肥前	19世紀	
〃	268	23号土坑	磁器	碗	—	(5.8)	〈2.9〉	体部～底部		瀬戸		
〃	269	23号土坑	陶器	皿	(11.6)	5.6	2.7	口縁～底部		瀬戸		
〃	270	23号土坑	陶器	皿	—	—	—	底部		唐津系		
〃	271	23号土坑	陶器	皿	5.8	—	〈1.5〉	口縁～底部	内面菊花文様	京・信楽系	19世紀か	
〃	272	23号土坑	陶器	擂鉢	(16.6)	—	〈6.4〉	体部～底部	内外面鉄釉、櫛目19本単位 底部回転糸切り	瀬戸・美濃	18世紀～19世紀	
〃	273	23号土坑	陶器	擂鉢	(29.3)	(12.0)	12.0	口縁～底部	内外面鉄釉、櫛目14本単位 底部回転糸切り・ヘラ整形	瀬戸・美濃	18世紀～19世紀	
〃	274	23号土坑	土器	かわらけ	(9.0)	—	1.5	口縁部	内外面ロクロ成形		近世	
〃	275	23号土坑	陶器	鍋鉢又は片口	(17.0)	—	〈6.8〉	口縁～体部		瀬戸	江戸中期以降	
〃	276	23号土坑	陶器	徳利	—	(7.8)	〈9.7〉	体部～底部	外面施釉 削出し高台	瀬戸・美濃	18世紀	
〃	277	23号土坑	土器	かわらけ	9.0	6.3	2.2	口縁～底部	内外面ロクロ成形 口縁炭化物付着			
〃	278	23号土坑	土器	焼塩壺	(6.3)	—	〈8.4〉	口縁～体部	板作成形		18世紀	
〃	279	23号土坑	土器	焼塩壺	—	(5.6)	〈8.7〉	体部～底部	板作成形		18世紀	
〃	280	23号土坑	土器	土鍋	(25.8)	(24.8)	(5.2)	口縁～底部	内外面ロクロ成形 外面炭化物付着			
37	281	24号土坑	磁器	皿	(10.6)	5.6	(3.6)	口縁～底部	染付、ロクロ型打成形 高台内「大明年製」	肥前	17世紀後半～18世紀	
〃	282	24号土坑	陶器	皿	—	6.2	—	底部		瀬戸		
〃	283	24号土坑	磁器	香合蓋	長さ 〈2.3〉	幅 〈1.5〉	厚さ 〈0.4〉	—	染付			
〃	284	24号土坑	瓦	平桟瓦	長さ 26.45	幅 25.7	厚さ 1.7	—			19世紀	
〃	285	24号土坑	瓦		長さ 18.4	幅 13.3	厚さ 1.5	—				
〃	286	26号土坑	磁器	徳利	—	(5.4)	〈6.3〉	体部～底部	染付	瀬戸か	19世紀	
38	287	6号土坑	磁器	碗（端反碗）	(8.0)	—	〈3.9〉	口縁～体部	染付	肥前	17世紀後半～18世紀前半	
〃	288	25号土坑	陶器	小杉茶碗	(9.1)	(3.5)	(5.45)	口縁～底部			18～19世紀	
〃	289	25号土坑	磁器	碗	(9.0)	—	—	口縁～体部	染付	肥前	1780～1810年代	皿山本登窯
〃	290	25号土坑	陶器	半胴か	(25.65)	—	〈8.1〉	口縁～体部	内外面柿釉	瀬戸	19世紀	
〃	291	25号土坑	陶器	碗か	—	(9.0)	〈3.4〉	体部～底部				
〃	292	25号土坑	磁器	土瓶蓋	(7.9)	最大幅 (10.15)	(1.8)	口縁～蓋上部	上面鉄絵			
〃	293	25号土坑	磁器	碗	—	3.4	〈3.3〉	体部～底部	染付 見込みコンニャク判五弁花文	肥前	1780～1810年代	皿山本登窯
〃	294	25号土坑	陶器	擂鉢	—	—	—	体部	内外面鉄釉	瀬戸・美濃		
〃	295	25号土坑	磁器	白磁碗	—	—	—	口縁～体部		中国	15～16世紀	
〃	296	25号土坑	陶器	灯明皿	9.0	4.2	1.75	完形	内外面白釉 碁笥底	瀬戸	18世紀中期～	

表15　A区遺物観察表⑨

（　）復元値、〈　〉残存値

図	番号	出土位置	種別・器種		法量（cm）			部位	観察所見（技法・文様・その他）	推定生産地	推定年代	備考
					口径	底径	器高					
38	297	25号土坑	磁器	紅猪口	4.1	1.5	1.55	完形	型打成形	肥前	18～19世紀	
〃	298	ピット51	陶器	皿	(10.2)	(4.9)	2.3	口縁～底部	底部削出し	志戸呂か		
〃	299	ピット274	陶器	丸皿	(9.25)	(4.7)	1.75	口縁～底部	見込み無釉 削出し高台	瀬戸・美濃		
〃	300	ピット315	石製品	砥石	長さ 5.7	幅 1.9	厚さ 1.45	—				
〃	301	ピット369	土器	かわらけ	(6.0)	(3.5)	1.9	口縁～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り			
〃	302	ピット533	木製品	角柱	長さ 〈32.65〉	長径 13.0	短径 12.7	—				
〃	303	ピット562	土器	かわらけ	(6.0)	3.5	1.5	口縁～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り			
〃	304	ピット588	土器	鍋	(15.2)	(13.9)	3.5	口縁～底部	口縁部指頭痕 見込み炭化物付着			
39	305	I－6	磁器	小坏	(6.9)	3.0	4.6	口縁～底部	型紙摺	肥前	18世紀 前半	
〃	306	D－5	磁器	碗 (端反碗)	(8.0)	4.0	4.0	口縁～底部	染口、口銹、見込み文様	瀬戸	19世紀	
〃	307	E－4	磁器	碗	(6.3)	3.2	5.35	口縁～底部	染付、貫入	肥前系		
〃	308	D－4	磁器	碗	(6.8)	3.6	5.1	口縁～底部		瀬戸		
〃	309	A区	磁器	湯飲み碗 (筒型)	(6.0)	—	〈4.9〉	口縁～体部	コバルト釉	瀬戸	19世紀	
〃	310	A区	磁器	碗	(6.1)	2.65	3.45	口縁～底部	染付、蛇ノ目高台、見込み文様	肥前系	19世紀	
〃	311	H－2	磁器	碗	(8.8)	(3.6)	4.8	口縁～底部	染付、高台内４文字記載	肥前	18世紀	
〃	312	E－2	磁器	碗	(9.0)	〈3.5〉	〈4.3〉	口縁～底部	染付、見込み「軍武年製」、高台内マーク有り	瀬戸	19世紀	
〃	313	A区一括	磁器	碗	10.0	4.1	5.9	口縁～底部	畳付に砂付着、染付	肥前		
〃	314	A区	磁器	碗	(10.1)	(4.1)	6.1	口縁～底部	染付			
〃	315	Tr－3	磁器	碗	7.0	3.1	5.0	口縁～底部	染付	肥前	1820 ～1860年代	
〃	316	G－8	磁器	碗	10.05	—	〈4.8〉	口縁～体部	染付	肥前		
〃	317	T－3	磁器	碗蓋	(8.5)	蓋上部 3.4	2.6	口縁～蓋上部	染付、焼継ぎ	肥前	19世紀	
〃	318	A区	磁器	碗	—	〈6.2〉	〈2.6〉	底部	見込みコンニャク判五弁花文 高台内「渦福」	肥前	18世紀	
〃	319	A区	磁器	碗	(15.25)	6.4	7.9	口縁～底部	見込み手描き五弁花文 高台内「渦福」	肥前	18世紀中葉	
〃	320	A区	磁器	大皿	(24.3)	(14.0)	3.1	口縁～底部	口縁輪花 焼継ぎ、底部焼継ぎ文字	肥前系	19世紀	
〃	321	E－5	磁器	皿	(15.1)	(8.3)	4.1	口縁～底部	ロクロ型打成形、口縁輪花 ・口銹、内面絵有り	肥前系	19世紀	
40	322	H－2	磁器	徳利	—	—	〈11.95〉	体部	文字表面行書、裏面草書 「御神酒」	肥前	18～19世紀	
〃	323	H－2	陶器	土瓶蓋	4.9	最大幅 6.6	〈2.0〉	口縁～蓋上部	上面のみ施釉、イッチン		19世紀	
〃	324	F－5	陶器	山水土瓶蓋	(6.9)	最大幅 (8.2)	〈1.3〉	口縁～蓋上部	上面のみ施釉		19世紀	
〃	325	A区	磁器	カンテラ	4.7	4.7	4.55	口縁～底部			18～19世紀	
〃	326	F－5	陶器	灯明受皿	10.0	4.0	2.0	口縁～底部	外面底部釉拭き取り、 外面炭化物付着			
〃	327	E－2	陶器	灯明受皿 (台付)	6.8	5.1	5.15	完形	底部無釉	信楽か	19世紀	
〃	328	D－5	陶器	灯明皿	(6.85)	(3.1)	1.6	口縁～底部	外面無釉、口縁炭化物付着		18～19世紀	
〃	329	E－4	陶器	灯明皿	(6.8)	3.0	1.2	口縁～底部	体部～底部無釉、貫入	瀬戸	18～19世紀	
〃	330	G－8	陶器	練鉢(大)	(30.7)	—	〈12.1〉	口縁～体部	内外面体部～底部施釉	瀬戸	18世紀 第９小期	
〃	331	F－5	陶器	練鉢(中)	(20.3)	—	〈6.7〉	口縁～体部	内外面体部～底部施釉	瀬戸	第11小期 (1850年～)	
〃	332	B－2	陶器	碗	(11.7)	—	〈7.3〉	口縁～体部	外面底部無釉	瀬戸	18世紀	尾呂窯
〃	333	A区一括	土器	かわらけ	(12.2)	(7.0)	3.0	口縁～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り			

表16　A区遺物・B区近代遺物観察表⑩

（　）復元値、〈　〉残存値

図	番号	出土位置	種別・器種		法量（cm） 口径	底径	器高	部位	観察所見（技法・文様・その他）	推定生産地	推定年代	備考
40	334	A区	土器	焼塩壺	(6.7)	(5.6)	9.05	口縁～底部	板作成形		18世紀	
〃	335	D－5	土器	鉢	(10.2)	5.8	6.85	口縁～底部	内外面ロクロ成形			
〃	336	F－5	土器	鍋	(20.8)	(17.1)	5.0	口縁～底部	内外面ロクロ成形 外面炭化物付着			
〃	337	H－2	陶器	擂鉢	—	(13.0)	〈12.6〉	体部～底部	鉄釉、櫛目磨耗	瀬戸	18～19世紀	
〃	338	H－2	土製品	泥人形	〈3.09〉	1.97	1.73	—	底部穿孔			
〃	339	F－5	土製品	泥人形	長さ〈2.7〉	幅2.41	厚さ1.20	—	表面一部緑釉 底部穿孔			
〃	340	F－5	ガラス	ガラス棒	長さ〈4.0〉	径0.35	—	—				
41	341	E－5	瓦	軒桟瓦	外径7.8	内径5.45	厚さ1.9	—				
〃	342	E－5	瓦	軒桟瓦	外径7.5	内径4.75	厚さ2.2	—				
〃	343	A区	瓦	軒桟瓦	—	—	厚さ1.9	—				
〃	344	E－5	瓦	軒桟瓦	—	—	厚さ1.75	—				
〃	345	I－4	石製品	ヒデ鉢	—	17.4	〈8.6〉	脚部	安山岩製、三脚			
〃	346	A区	石製品	硯	長さ〈8.55〉	幅7.95	厚さ2.6	—	オカの窪み顕著、線刻有り			
〃	347	T－3	石製品	砥石	長さ〈6.8〉	幅3.1	厚さ0.7	—				
〃	348	D－7	石製品	五輪塔地輪	底部16.6	上部16.1	高さ11.65	孔径6.5	安山岩製			
〃	349	A区	石製品	五輪塔火輪	底部16.2	上部7.3	高さ8.25	孔径6.4	孔深さ3.95　安山岩製			
〃	350	B－5	石製品	五輪塔火輪	底部15.0	上部6.2	高さ8.4	—	安山岩製			
42	351	T－5	磁器	碗	(10.3)	4.7	(3.2)	口縁～底部	外面戦車と日章旗 高台底部番号とマーク		大正～昭和20年	
〃	352	T－5	磁器	小坏	5.5	2.0	3.0	完形			大正～昭和	
〃	353	B区	ガラス	化粧容器	5.4	6.0	5.0	完形	白色		20世紀	
〃	354	B区	磁器	化粧容器	4.8	4.9	3.4	完形	底部無釉		20世紀	
〃	355	T－5	ガラス	化粧容器	5.4	5.3	3.4	完形	白色		20世紀	
〃	356	一括	骨	歯ブラシ	長さ15.65	幅1.15	厚さ0.55	完形	持ち手表面に「特」		20世紀	
〃	357	石積遺構	ガラス	インク瓶	2.9	7.5	16.5	完形	外面「PILOT」の銘 割型成形		20世紀	
〃	358	T－5	ガラス	薬瓶	1.8	長6.3 短4.2	16.4	完形	外面「鉄道病院　鉄道診療所」の銘、割型成形		20世紀	
〃	359	石積遺構	ガラス	ビール瓶	2.1	6.8	28.7	完形	割型成形		20世紀	
〃	360	T－1	ガラス	ガラス棒	長さ(19.3)	幅1.75	—	—	コバルト色 製糸工場の器械部品		20世紀	
〃	361	D－5	陶器	繰糸鍋	—	—	10.75	口縁～底部		深川製陶	20世紀	
43	362	T－1	磁器	碗	(14.6)	6.0	7.5	口縁～底部			昭和22年以降	
〃	363	T－1	磁器	皿	(11.8)	(7.0)	(2.6)	口縁～底部	内面印判		大正期	
〃	364	D－5	磁器	碗	6.5	3.4	4.7	完形	染付		19～20世紀	
〃	365	T－5	磁器	碗	(6.0)	(2.8)	(5.1)	口縁～底部	内面「甲府市堅町マ梅沢穀店 電一五一三」 外面俵と稲穂、底部角枡		20世紀	
〃	366	A区1号溝	磁器	集緒器	1.9	—	0.6	完形	外面に〇〇の染付		20世紀	
〃	367	A区1号溝	磁器	集緒器	1.9	—	0.6	完形	内面に㊋の染付		20世紀	
〃	368	9号井戸	木製品	胴木	長さ90.8	幅9.2	厚さ5.9	—			近世	

表17　A区出土金属製品観察表

( )残存値

番号	出土位置	種別・器種	胎　質	法　量(mm)		(g)	観察所見	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
1	1号溝	蓋のつまみ	銅	23.0	—	(1.4)		裏込めより出土
2	7号溝	鋤	鉄	366.0	122.0	15.0		
3	1号井戸	鉤	真鍮	33.0	34.0	1.8	穿径　2.0mm	
4	5号井戸	釘	鉄	58.5	11.3	—		
5	8号井戸	煙管	銅	42.0	15.7	16.3		
6	8号井戸	煙管	銅	61.1	11.1	10.3		
7	8号井戸	煙管	銅	32.4	12.1	11.6		
8	8号井戸	釘	鉄	79.2	8.9	—		
9	8号井戸	釘	鉄	36.6	16.0	—		
10	8号井戸	釘	鉄	43.5	59.0	—	角釘	
11	8号井戸	釘	鉄	75.2	13.1	—	角釘	
12	8号井戸	鈴	銅	30.5	10.7	10.3		
13	8号井戸	雁首銭	銅	18.9	17.4	1.9	穿径　5.8mm	
14	1号土坑	釘	鉄	26.6	11.5	—		
15	9号土坑	釘	鉄	87.0	35.0	—		
16	埋桶2	不明	鉄	36.1	11.3	7.9	鎹の一部か？	
17	埋桶2	釘	鉄	44.0	11.2	—		
18	22号土坑	釘	鉄	27.3	9.8	—		
19	ピット241	釘	鉄	43.8	7.7	—		
20	ピット607	釘	鉄	55.6	10.8	—		
21	B—3	不明	鉄	29.9	4.3	4.0	中空	
22	E—2	釘	鉄	41.0	5.3	—		
23	1号溝	小鉤	真鍮	13.8	13.0	0.5		近世～近代
24	1号溝	眼鏡	—	(65.3)	(31.5)	4.2		近代

表18　A区出土銭貨観察表

( )は復元値、〈 〉は残存値

番号	出土地点	銭種	材質	法量(mm)			(g)	観察所見		時代	初鋳
				外径	穿径	厚さ	重さ	字体	遺存状況・特徴・その他		
1	1号井戸	永楽通宝	銅	24.5	5.40	1.40	2.8	—	完形	明	1408
2	4号井戸	熙寧通宝	銅	23.8	6.00	1.50	3.0	真	ほぼ完形	北宋	1068
3	4号井戸	□元通宝	銅	24.4	6.85	1.60	〈 2.1〉	真	1/4欠損	—	—
4	4号井戸	□□元宝	銅	(25.3)	6.75	1.40	〈 1.6〉	—	1/2欠損	—	—
5	8号土坑	□□通宝	銅	23.5	6.10	1.70	3.5	—	ほぼ完形嘉祐通宝か？	—	—
6	8号土坑	元□□宝	銅	24.9	6.75	1.50	2.7	—	ほぼ完形	—	—
7	8号土坑	祥符元宝	銅	25.7	6.10	1.55	3.1	真	ほぼ完形	北宋	1008
8	2号土坑	天聖元宝	銅	24.9	7.20	1.20	2.5	篆	完形	北宋	1023
9	2号土坑	寛永通宝	銅	25.1	5.75	1.50	4.1	—	完形　裏面上に「文」	江戸時代	—
10	7号土坑	元□通宝	銅	23.0	6.55	1.00	1.8	—	ほぼ完形　元祐通宝か？	北宋	1068
11	埋桶8	寛永通宝	銅	27.6	5.75	1.80	4.2	—	ほぼ完形,短尾寛、裏面21波有り	明和5	1768
12	埋桶10	—	銅	23.6	5.10	2.10	3.5	—	ほぼ完形だが腐蝕が著しく判別不能	—	—
13	B—4 / ピット64	元祐通宝	銅	23.9	6.75	1.45	2.7	真	完形	北宋	1086
14	B—4 / ピット67	永楽通宝	銅	24.7	5.70	1.35	2.4	—	完形	明	—
15	F—5 / ピット367	寛永通宝	銅	24.0	5.70	1.20	3.1	—	完形	江戸時代	—
16	H—5 / ピット545	熙寧元宝	銅	23.6	6.80	1.15	2.3	篆	ほぼ完形だが腐蝕が著しい	北宋	1068
17	H—5 / ピット562	紹聖元宝	銅	23.5	6.10	1.30	3.1	篆	ほぼ完形	北宋	1094
18	I—5 / ピット524	紹興元宝	銅	23.8	6.55	1.55	3.1	真	ほぼ完形	南宋	1131
19	B—5	□□元宝	銅	23.6	6.55	1.45	2.0	篆	2/5欠損明道元宝か？	—	—
20	F—3	□□□宝	銅	23.7	5.95	1.45	2.4	—	ほぼ完形淳化元宝か？	—	—
21	G—7	寛永通宝	銅	26.7	6.00	1.75	3.4	—	ほぼ完形	江戸時代	—
22	G—2	元祐通宝	銅	24.2	6.90	1.60	3.6	篆	ほぼ完形攪乱内出土	北宋	1086
23	H—2	熙寧元宝	銅	23.3	6.85	1.40	3.2	真	ほぼ完形	北宋	1087
24	G—6	2銭銅貨	銅	32.0	—	2.35	13.5	—	完形波ウロコ	明治14	1881

図19　A区1号溝出土遺物

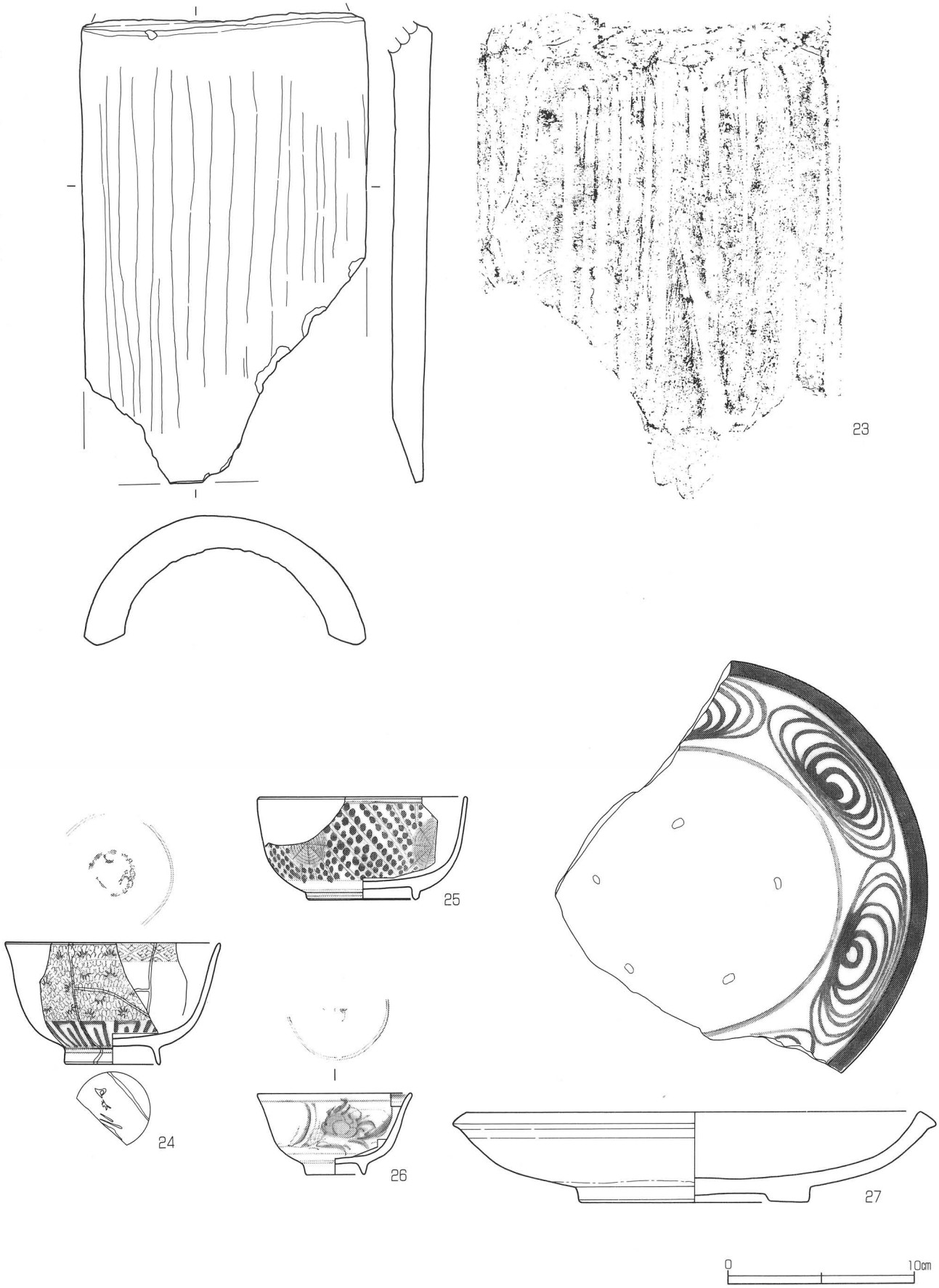


図20　A区１号溝出土瓦・２号溝出土遺物

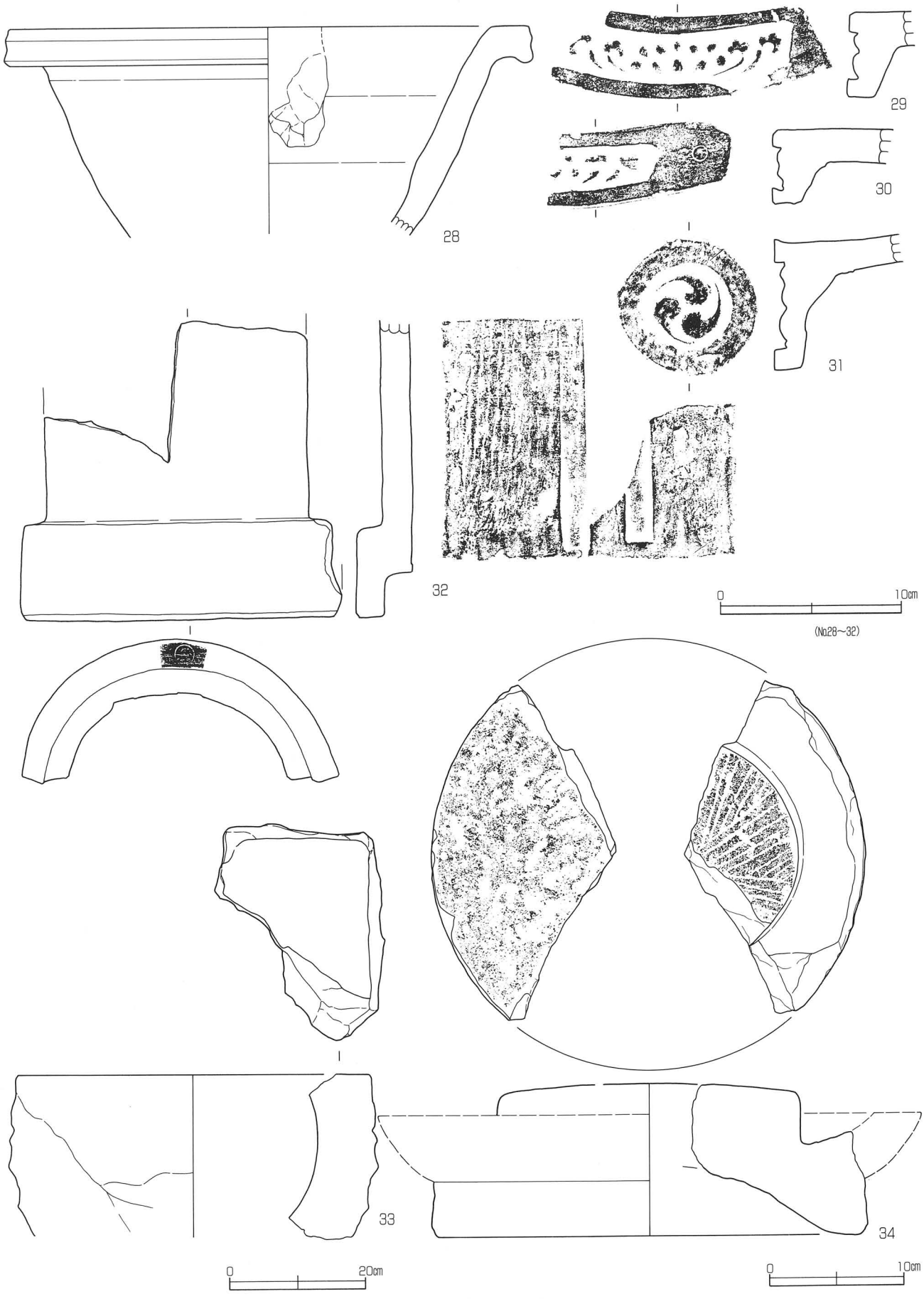


図21　A区7号溝出土遺物

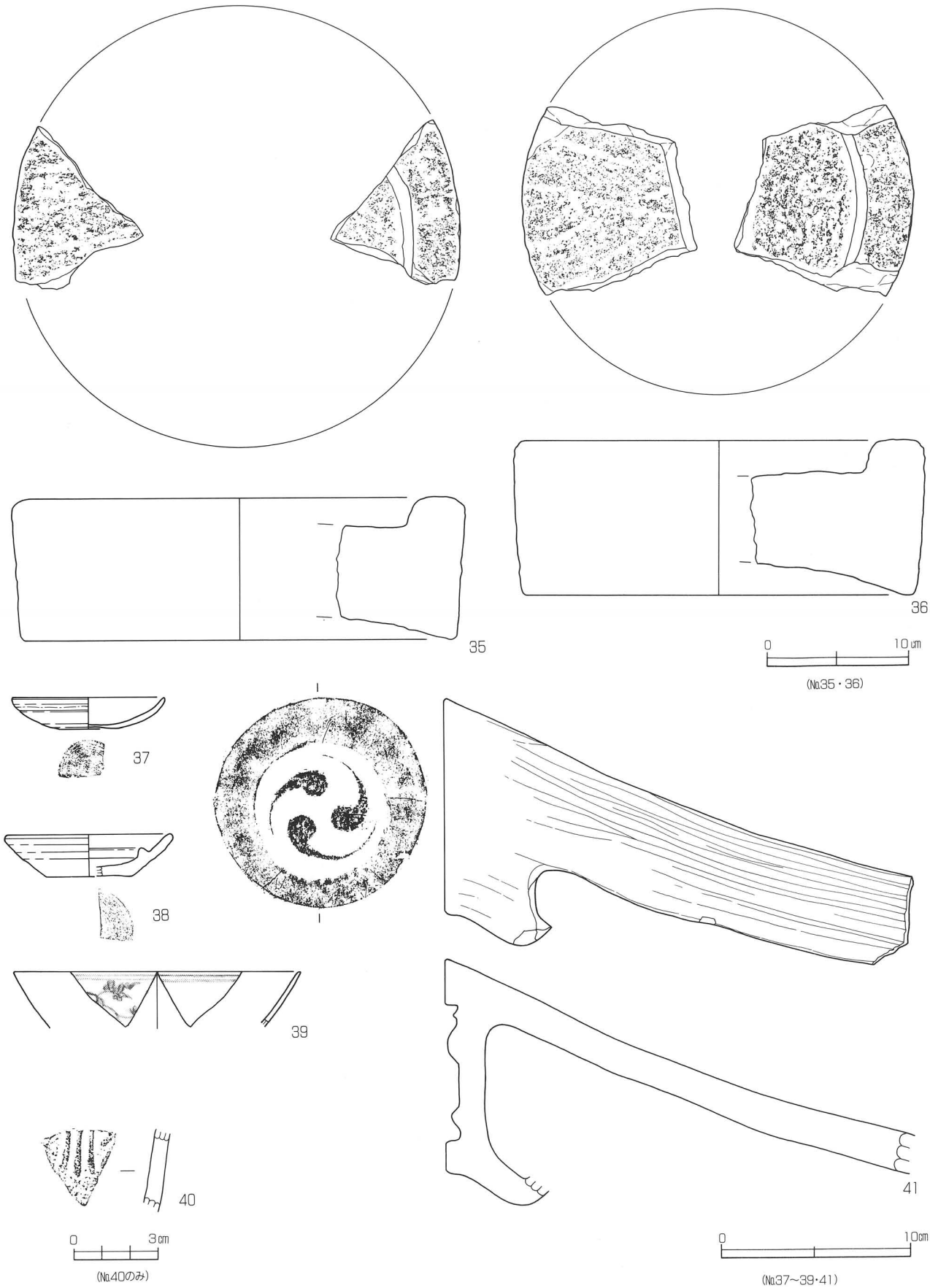


図22　A区7号・8号溝出土遺物

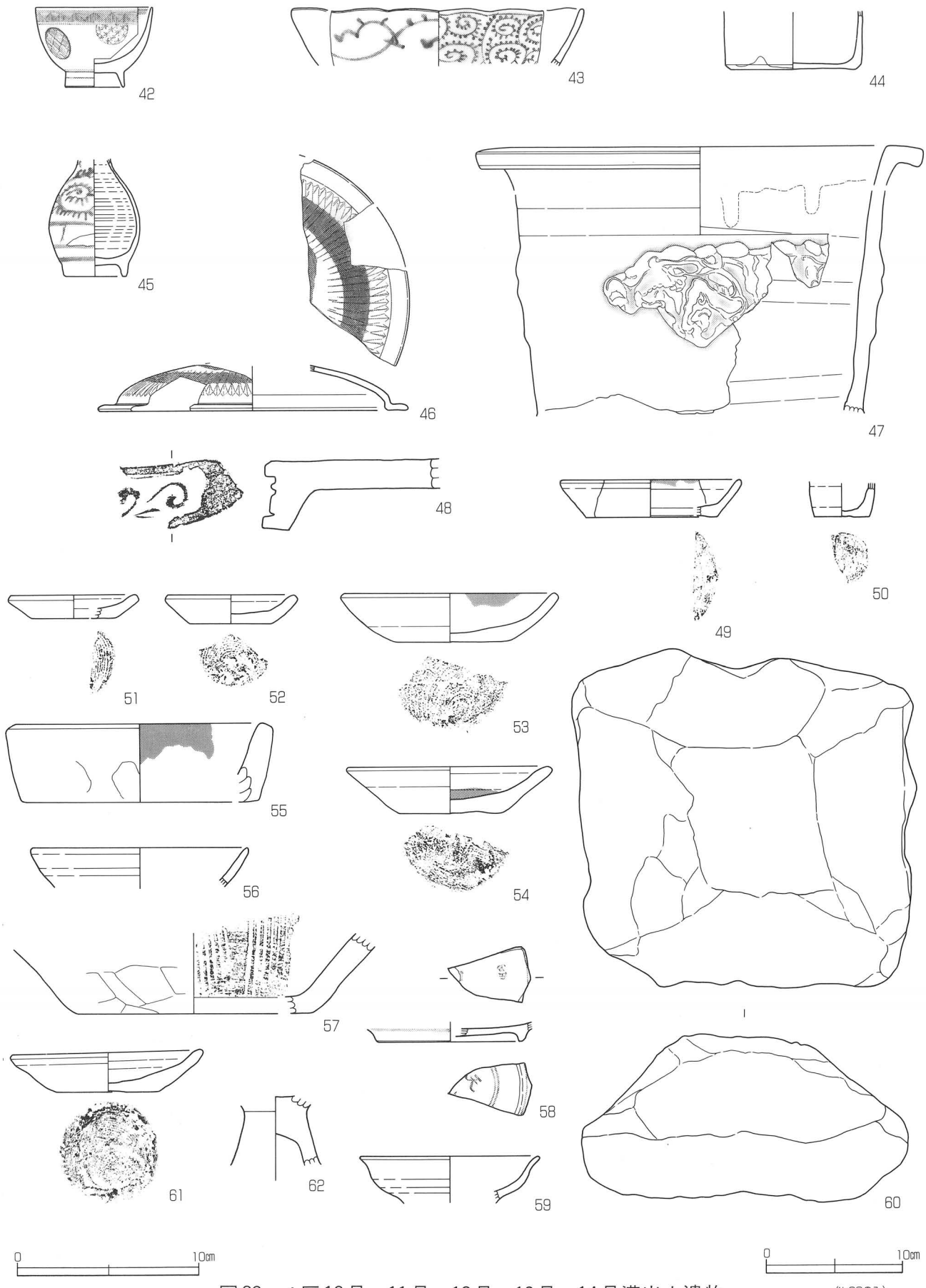


図23　A区10号・11号・12号・13号・14号溝出土遺物

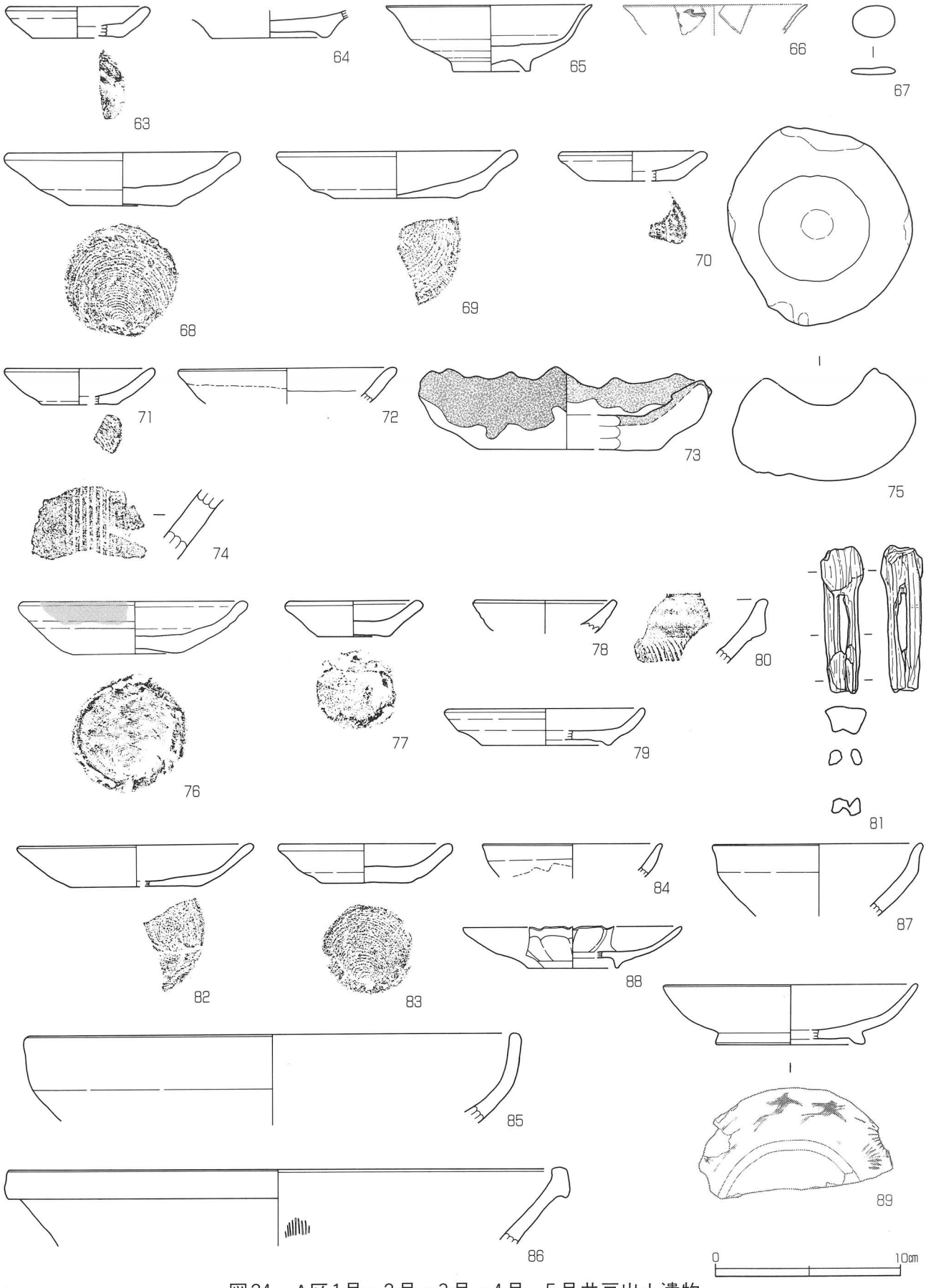


図24　A区1号・2号・3号・4号・5号井戸出土遺物

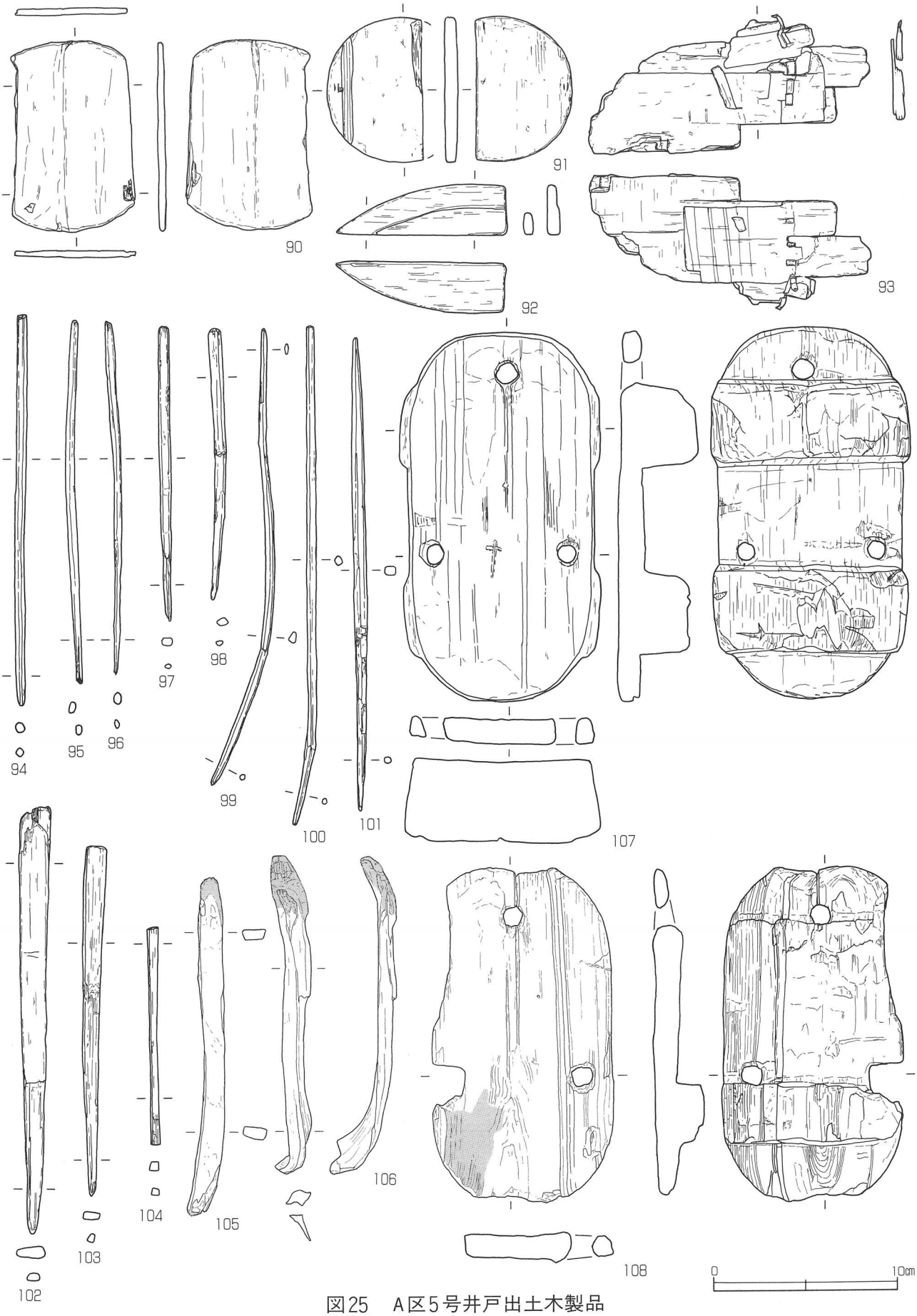


図25　A区5号井戸出土木製品

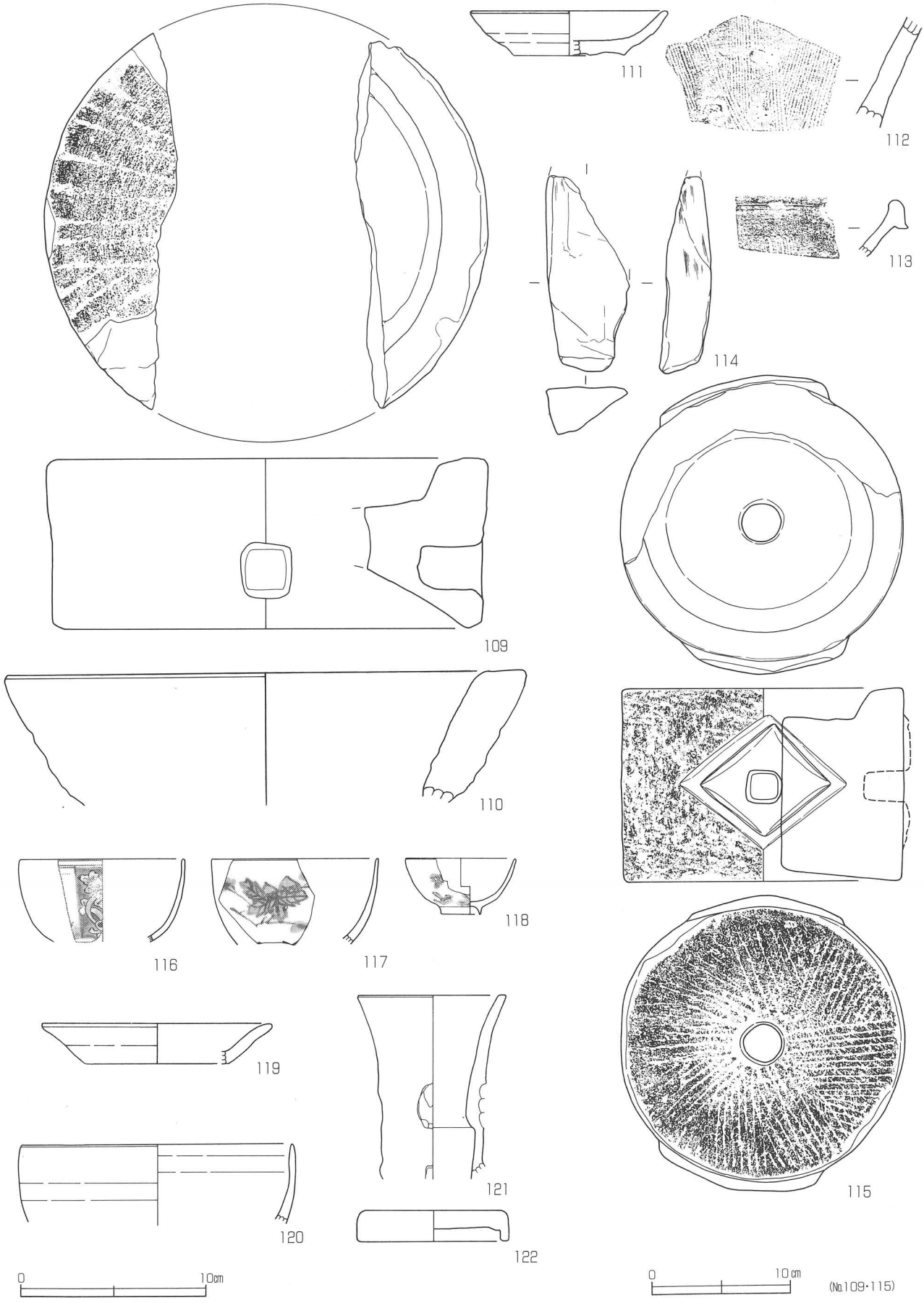


図26　A区5号・6号・7号井戸出土遺物

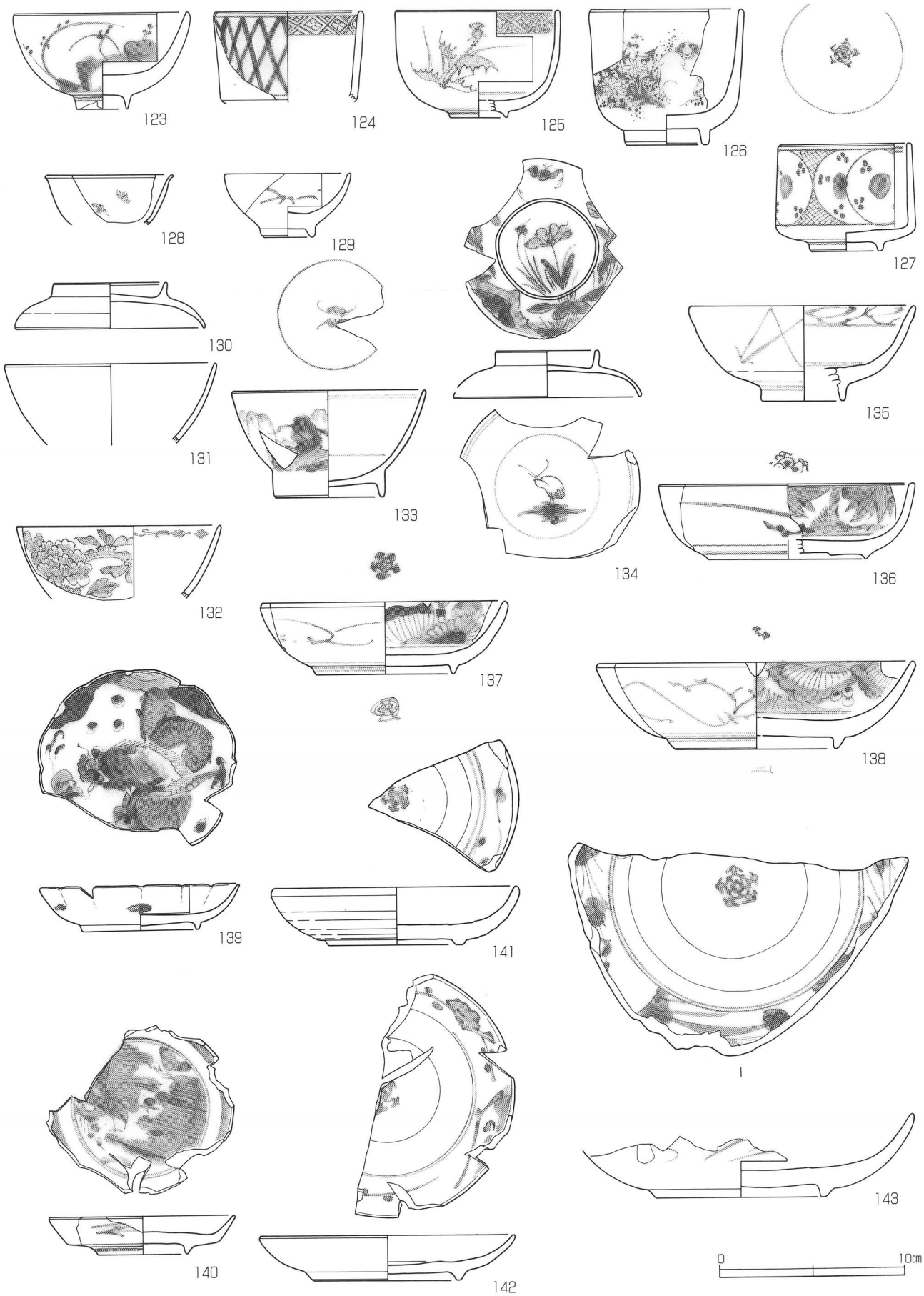


図27　A区8号井戸出土磁器

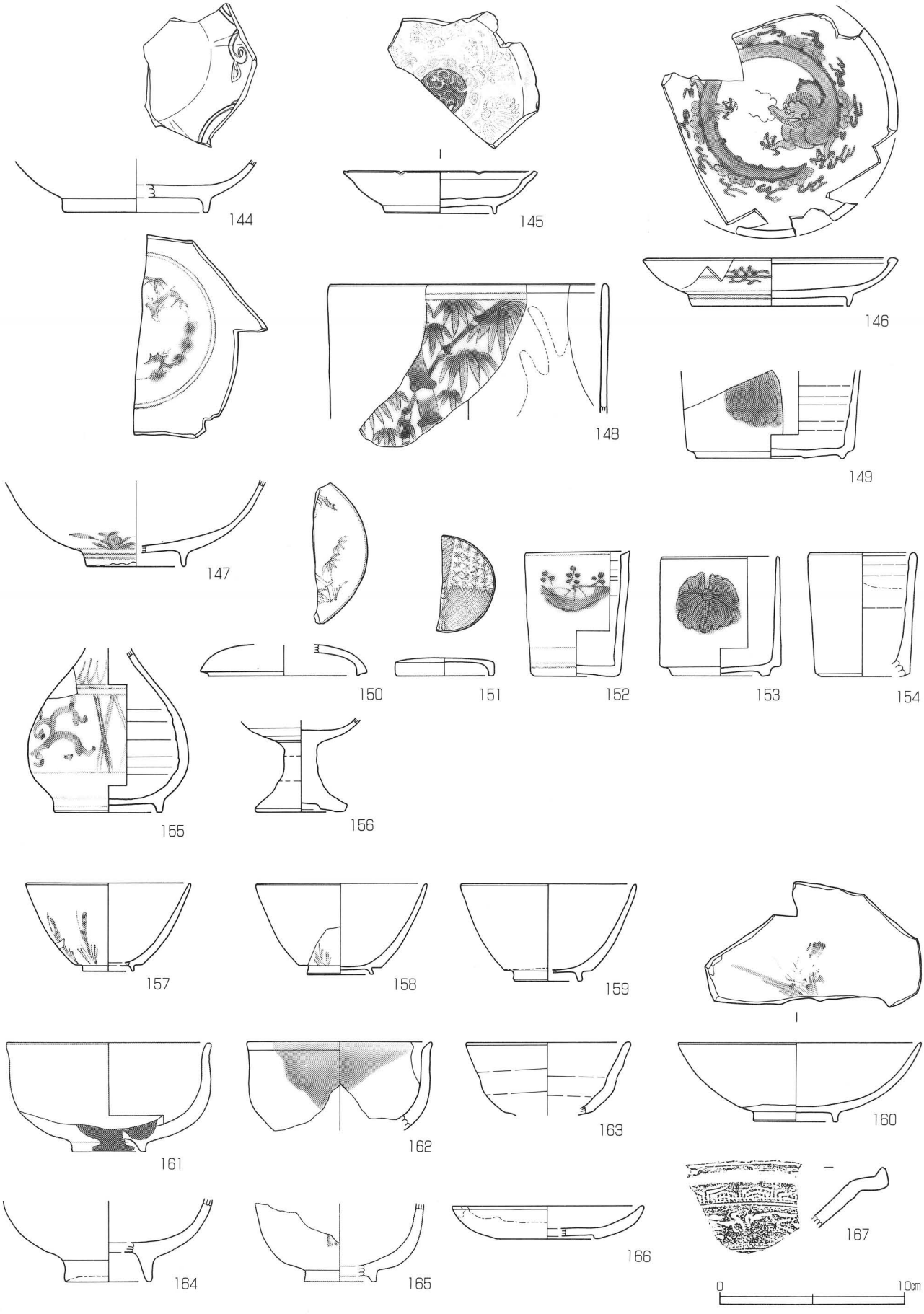


図28　A区8号井戸出土陶磁器

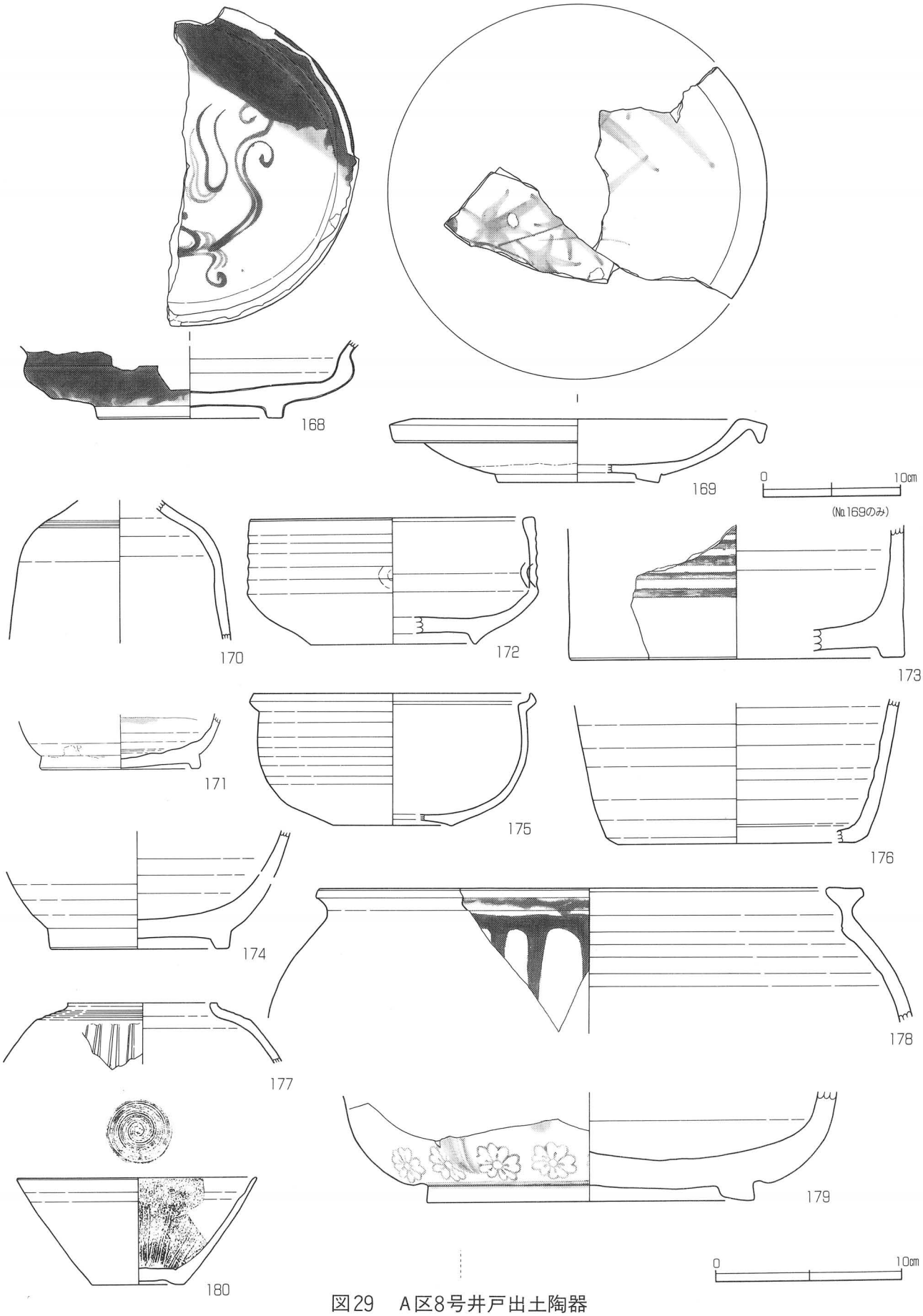


図29　A区8号井戸出土陶器

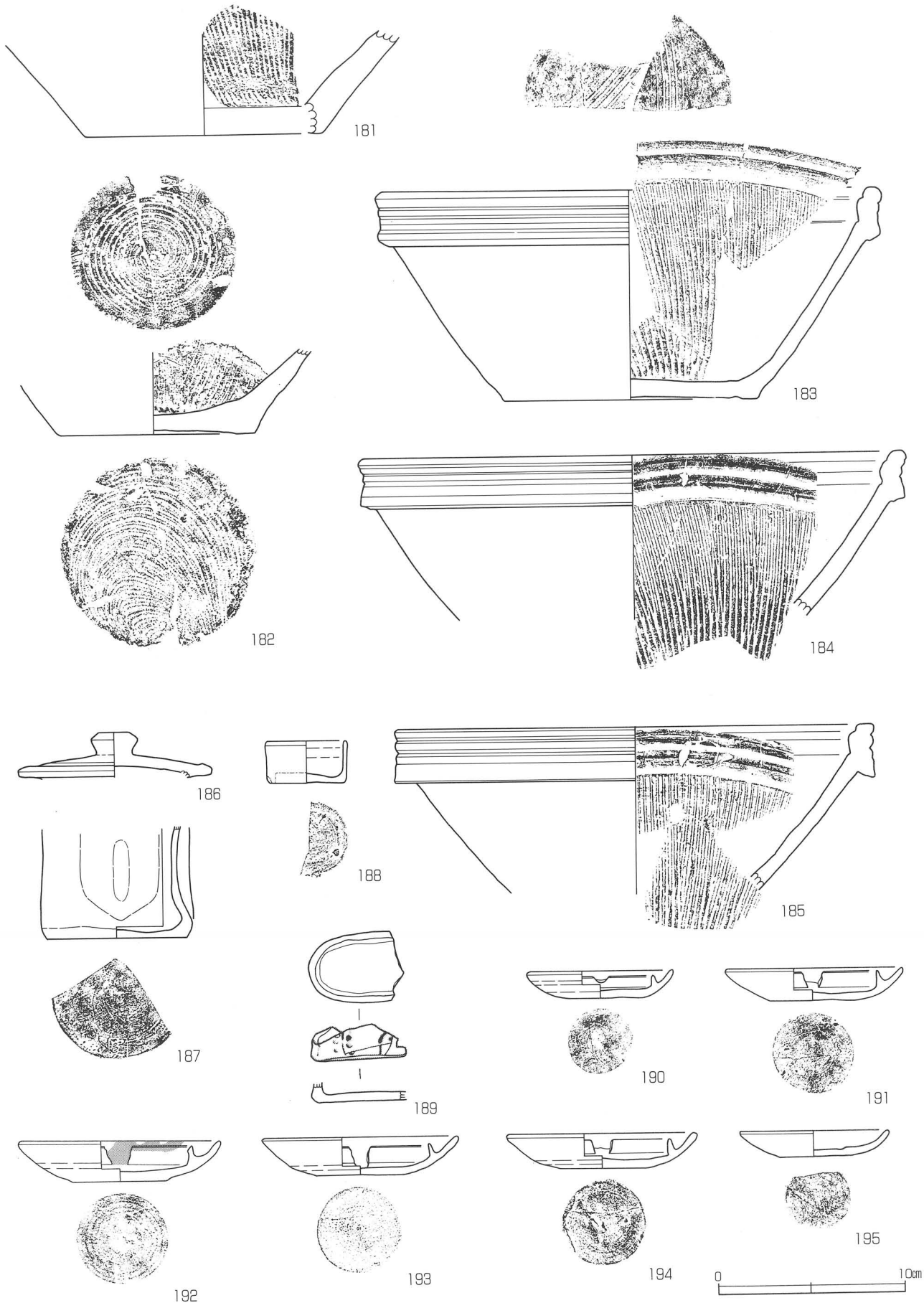


図30　A区8号井戸出土陶器

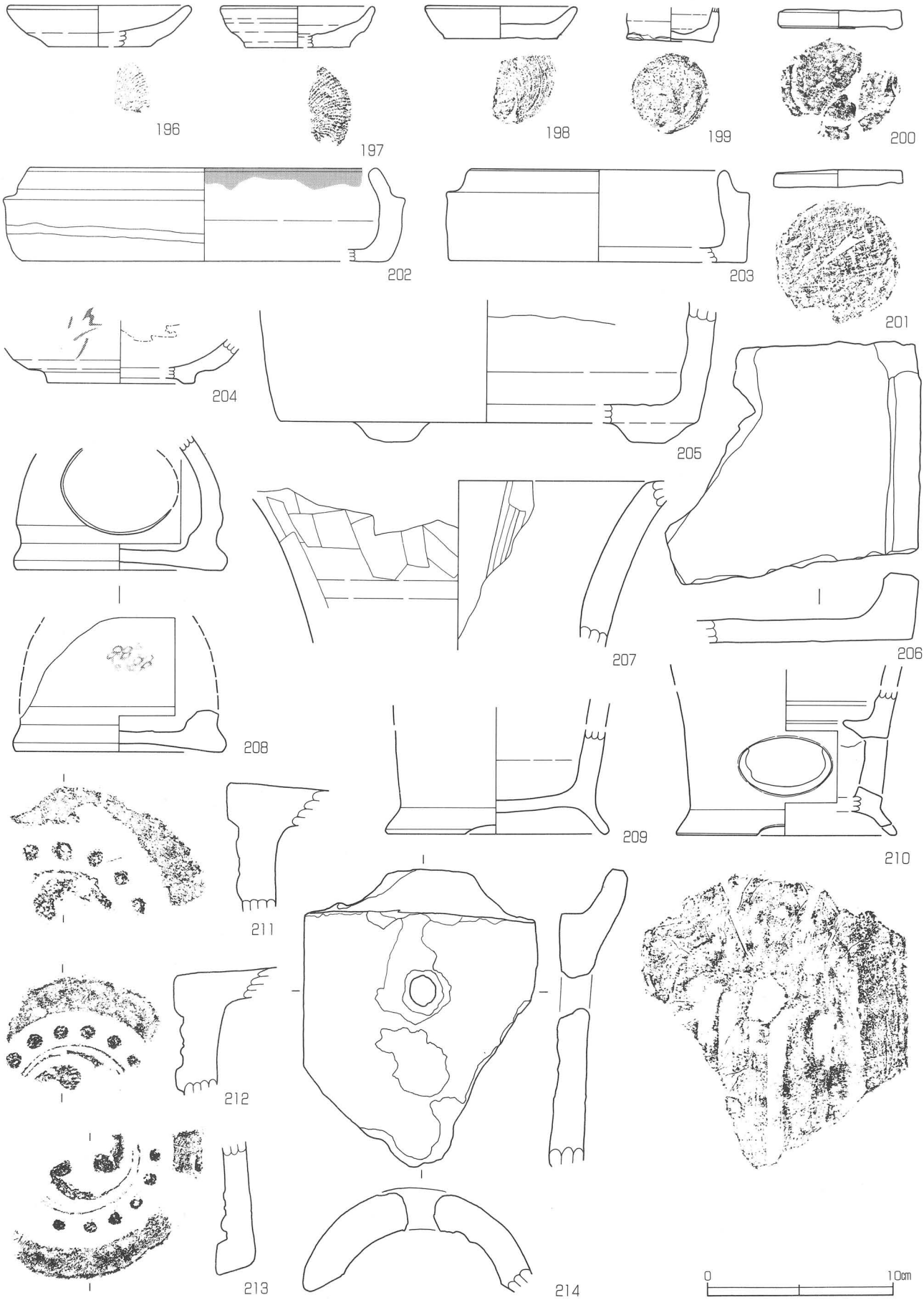


図31　A区8号井戸出土遺物

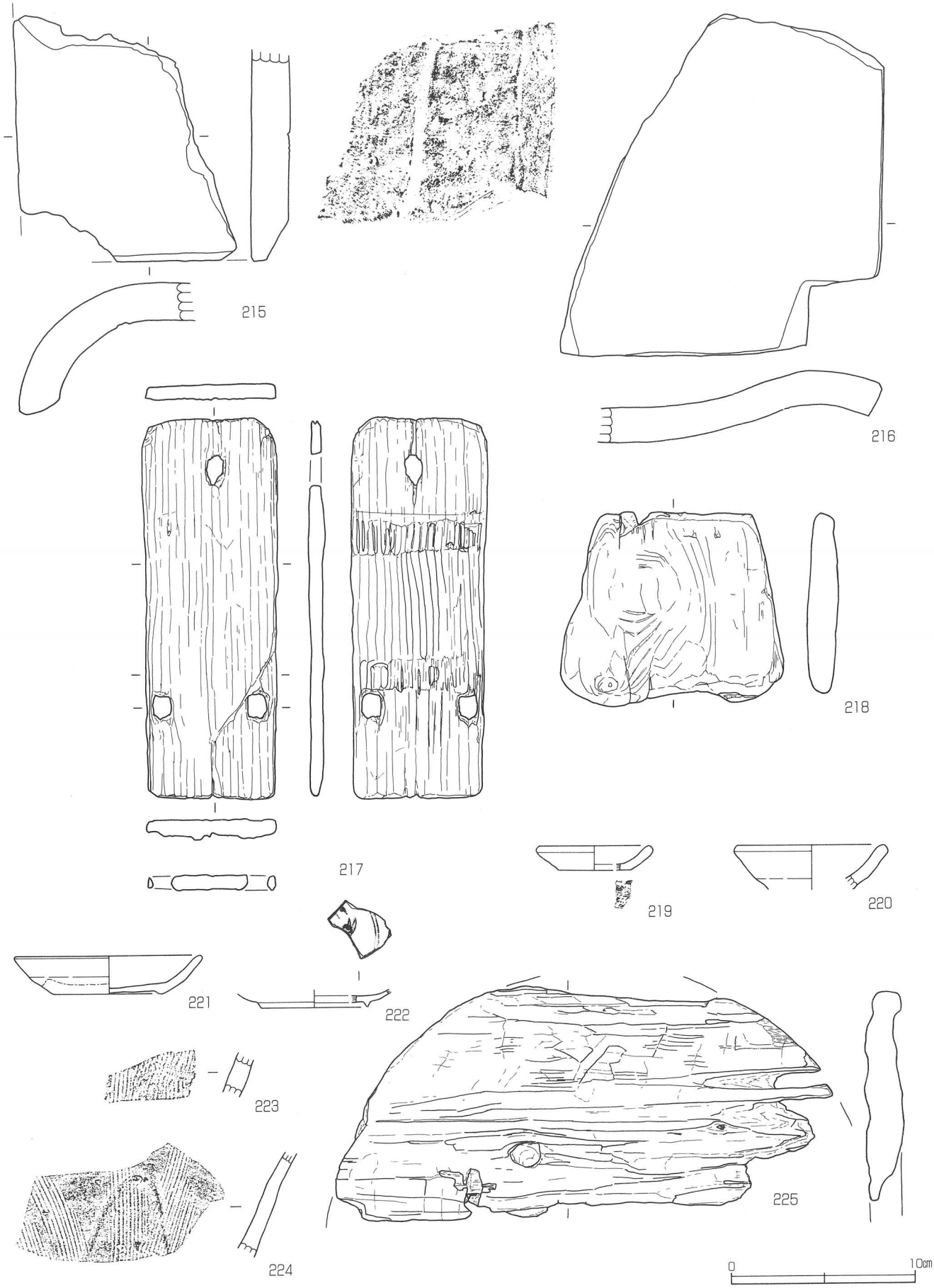


図32　A区8号・9号井戸出土遺物

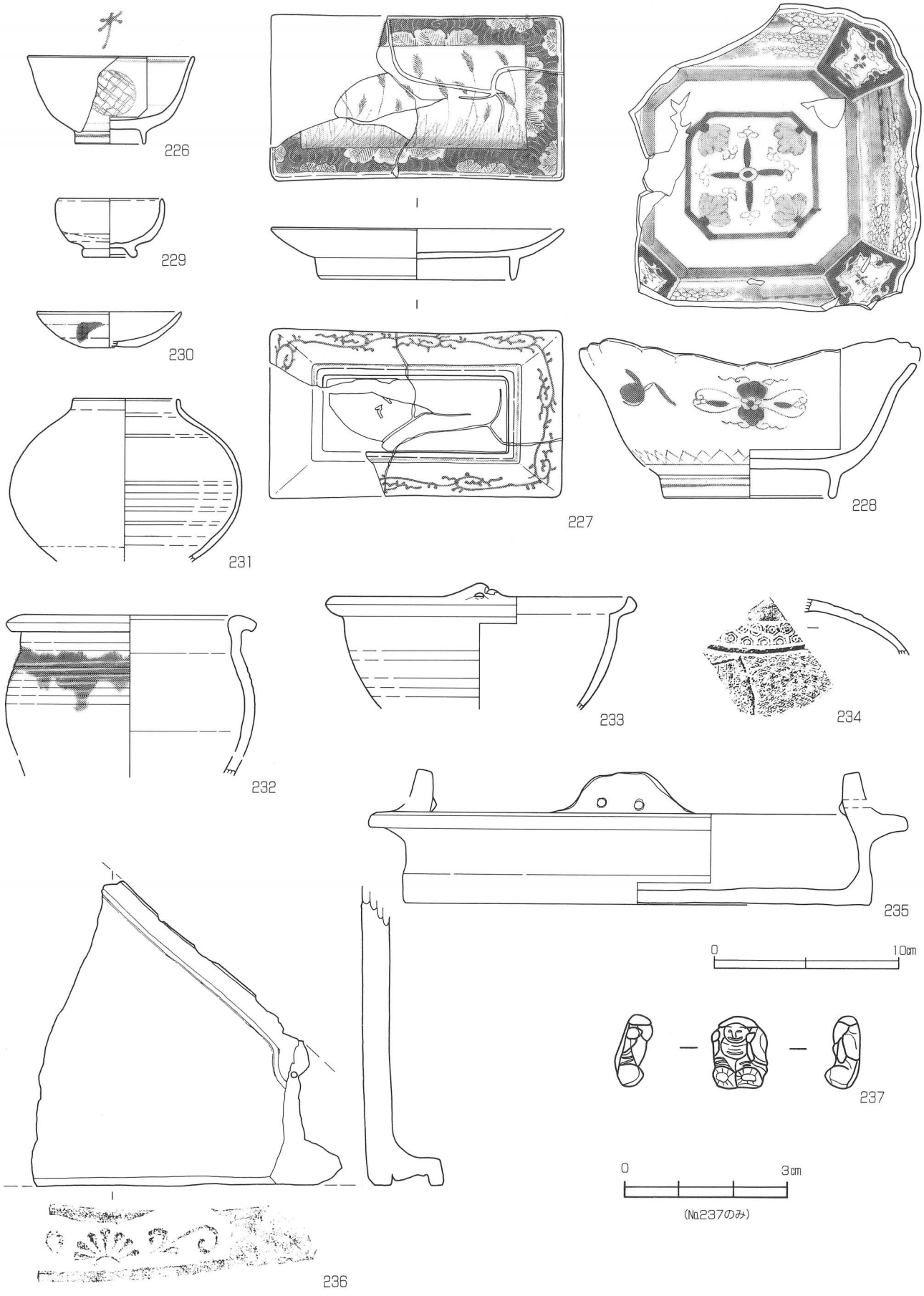


図33　A区1号土坑出土遺物

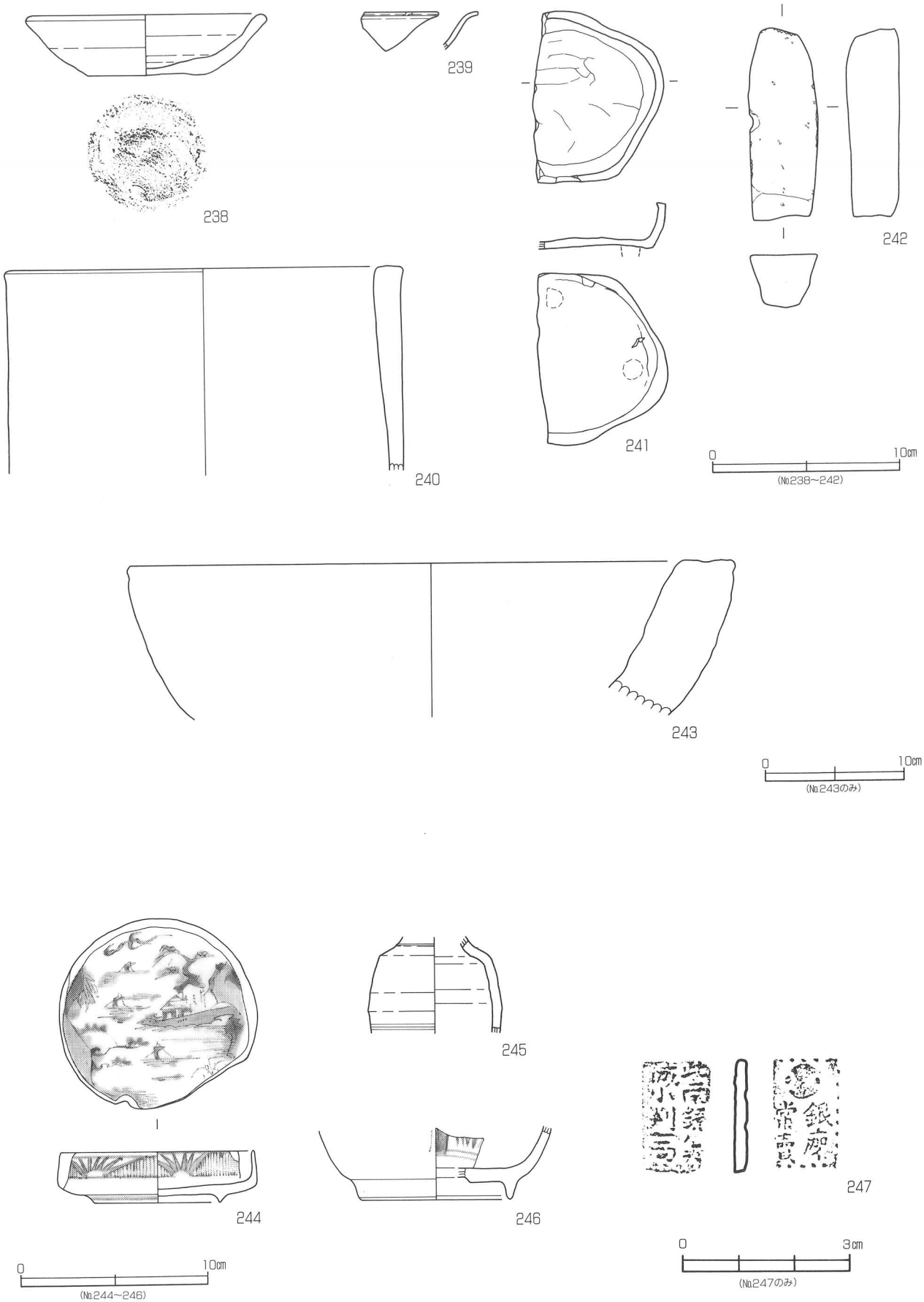


図34　A区2号・3号・8号・13号・21号土坑・埋桶8出土遺物

図35　A区22号土坑出土遺物

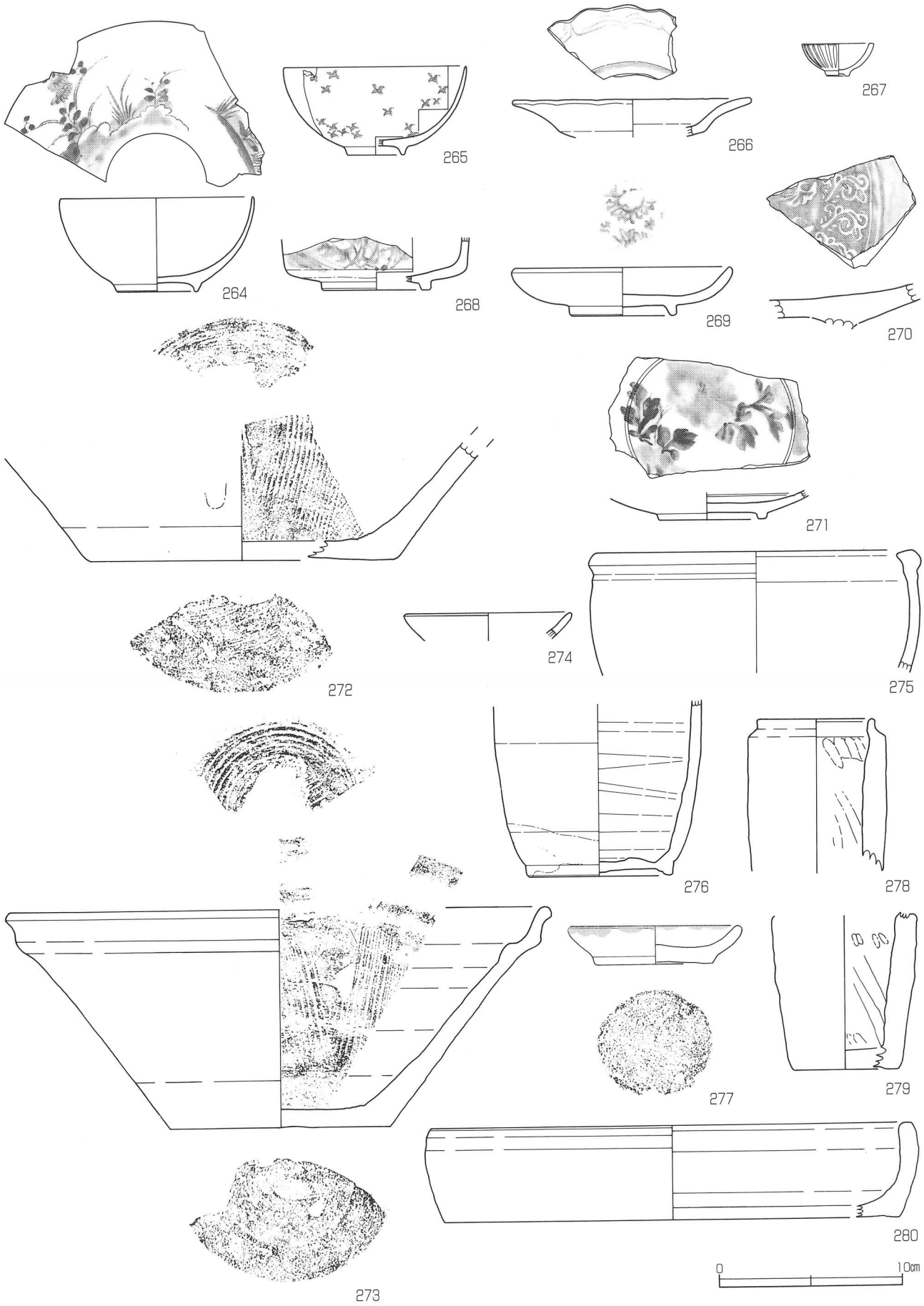


図36　A区23号土坑出土遺物

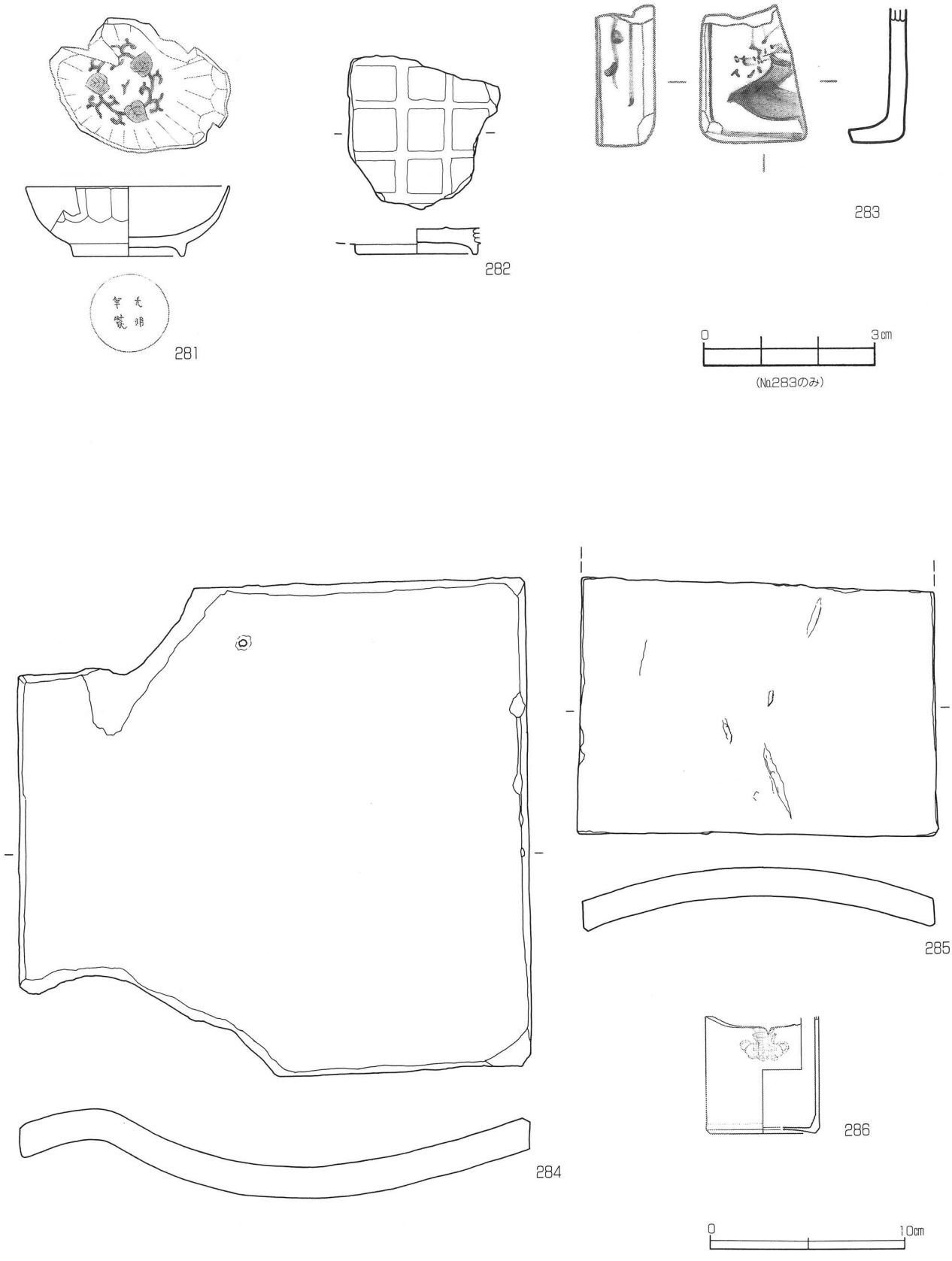


図37　A区24号・26号土坑出土遺物

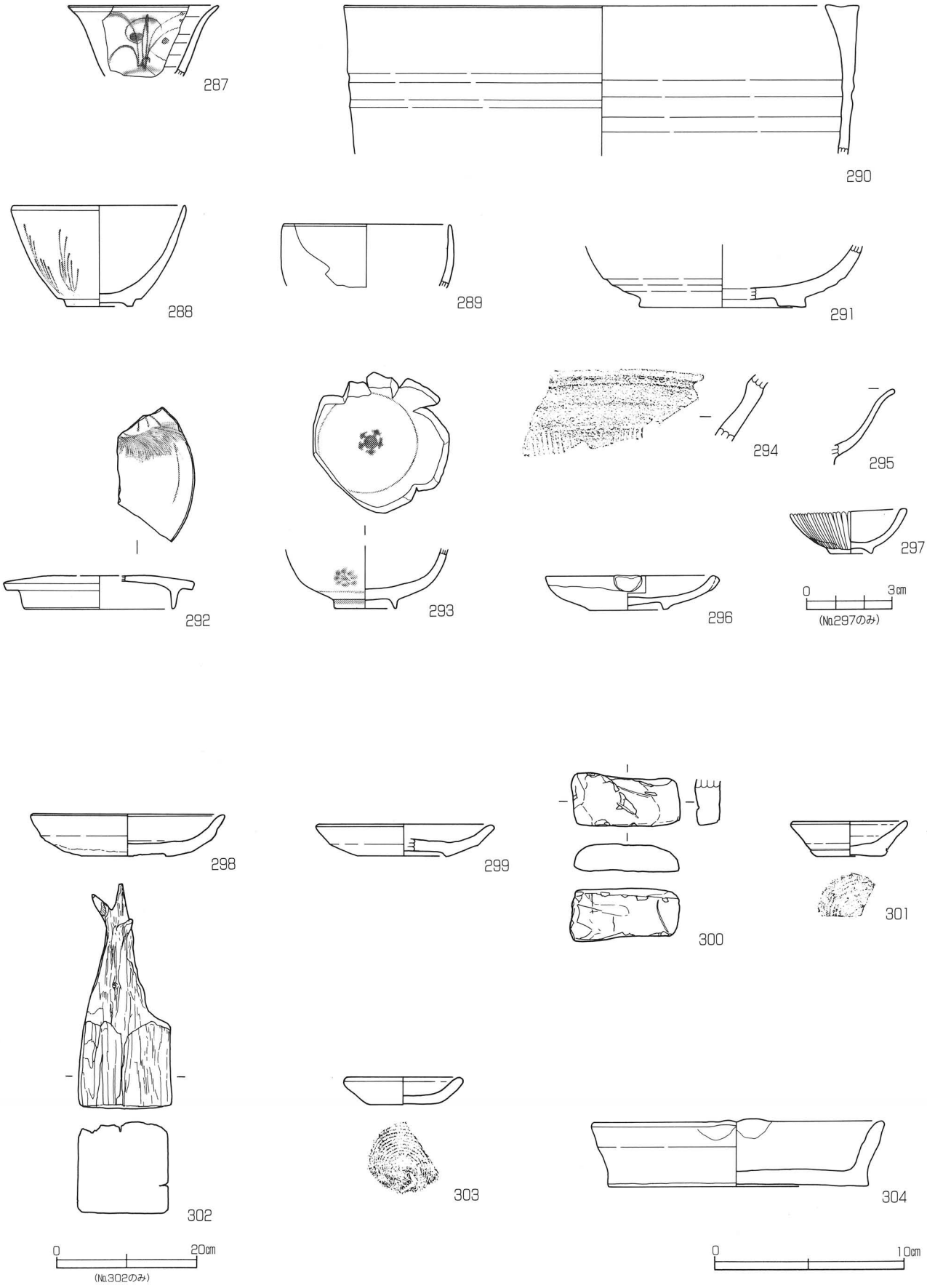


図38　A区6号・25号土坑、ピット51・274・315・369・533・562・588出土遺物

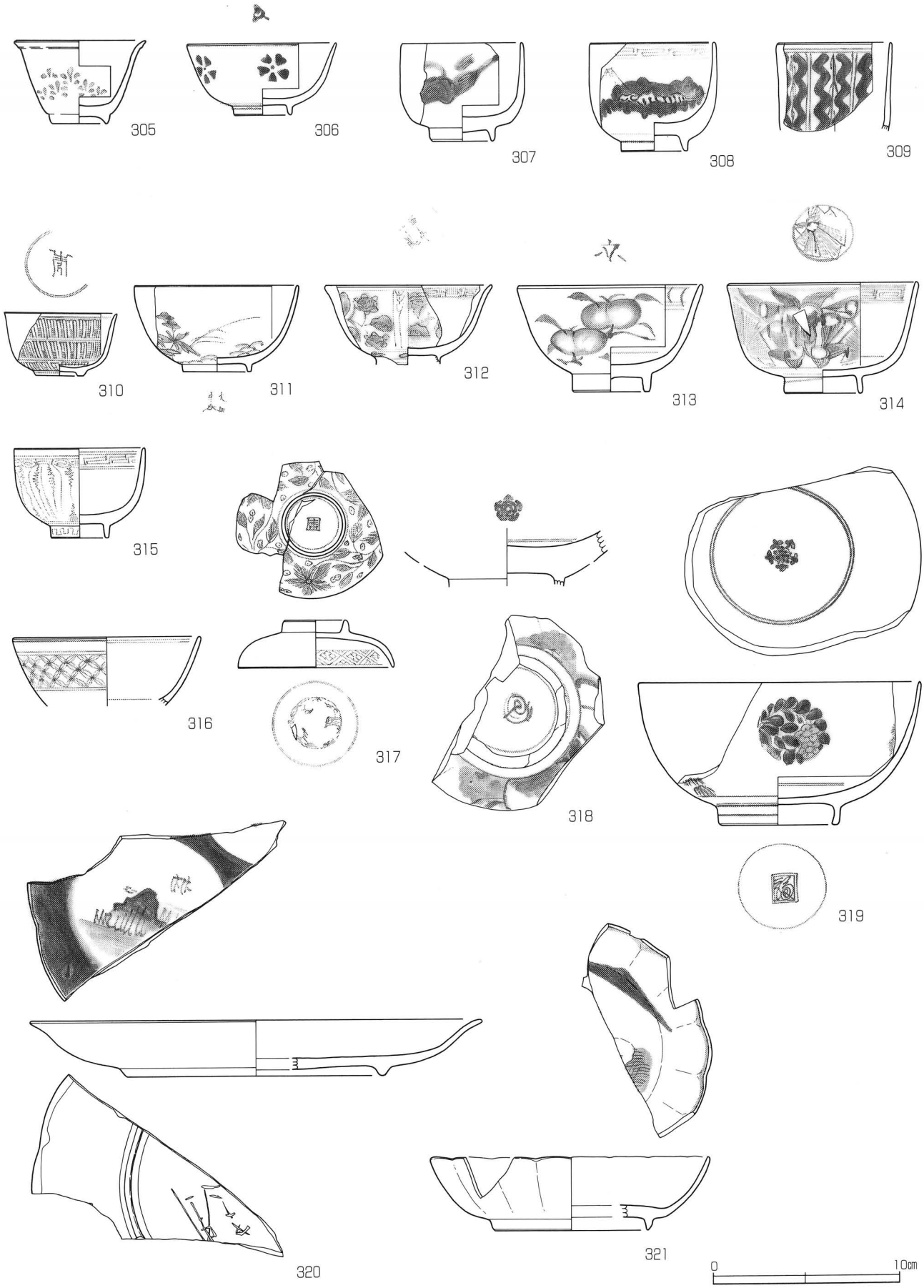


図39　A区グリッド出土遺物

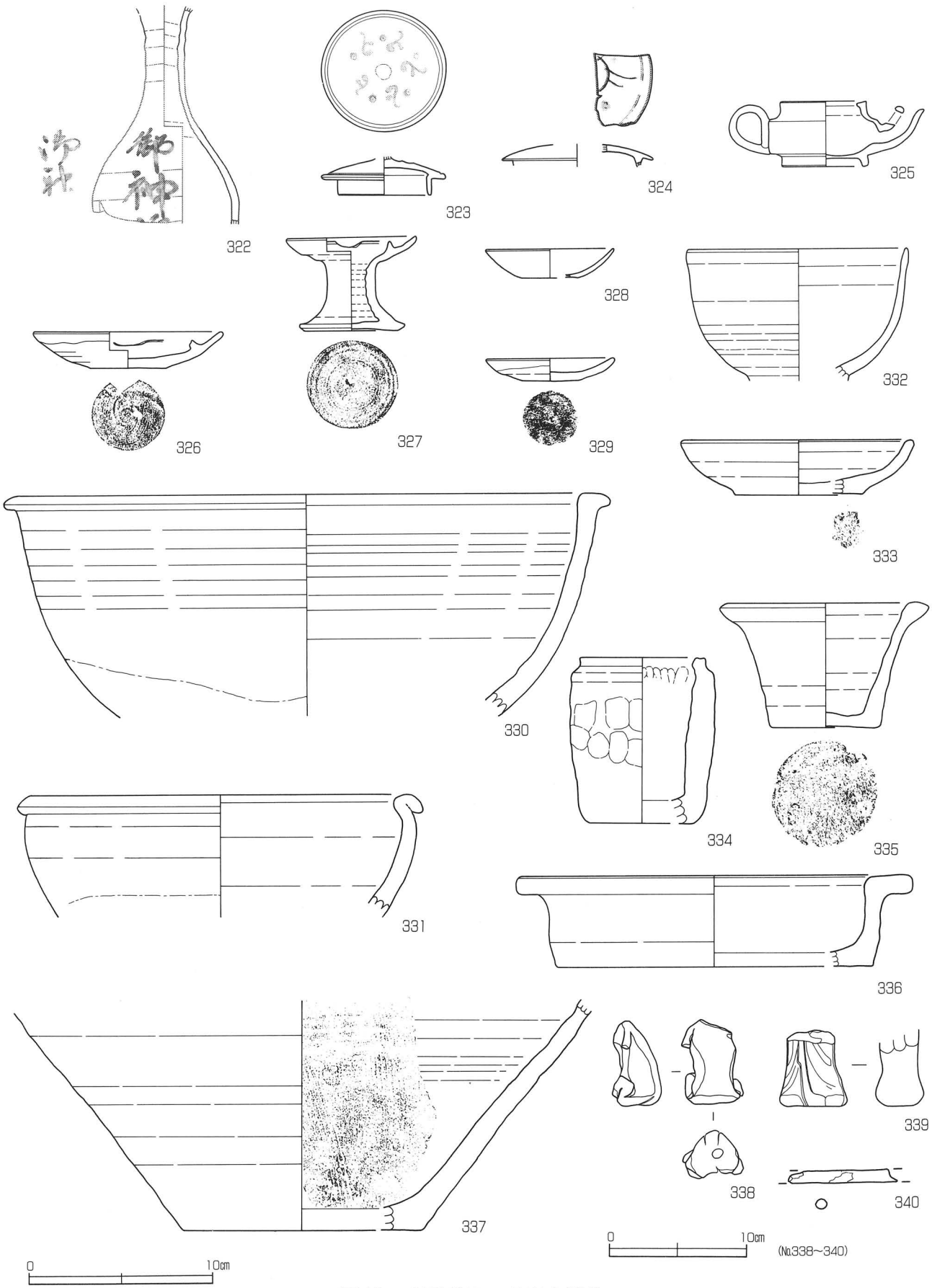


図40　A区グリッド出土遺物

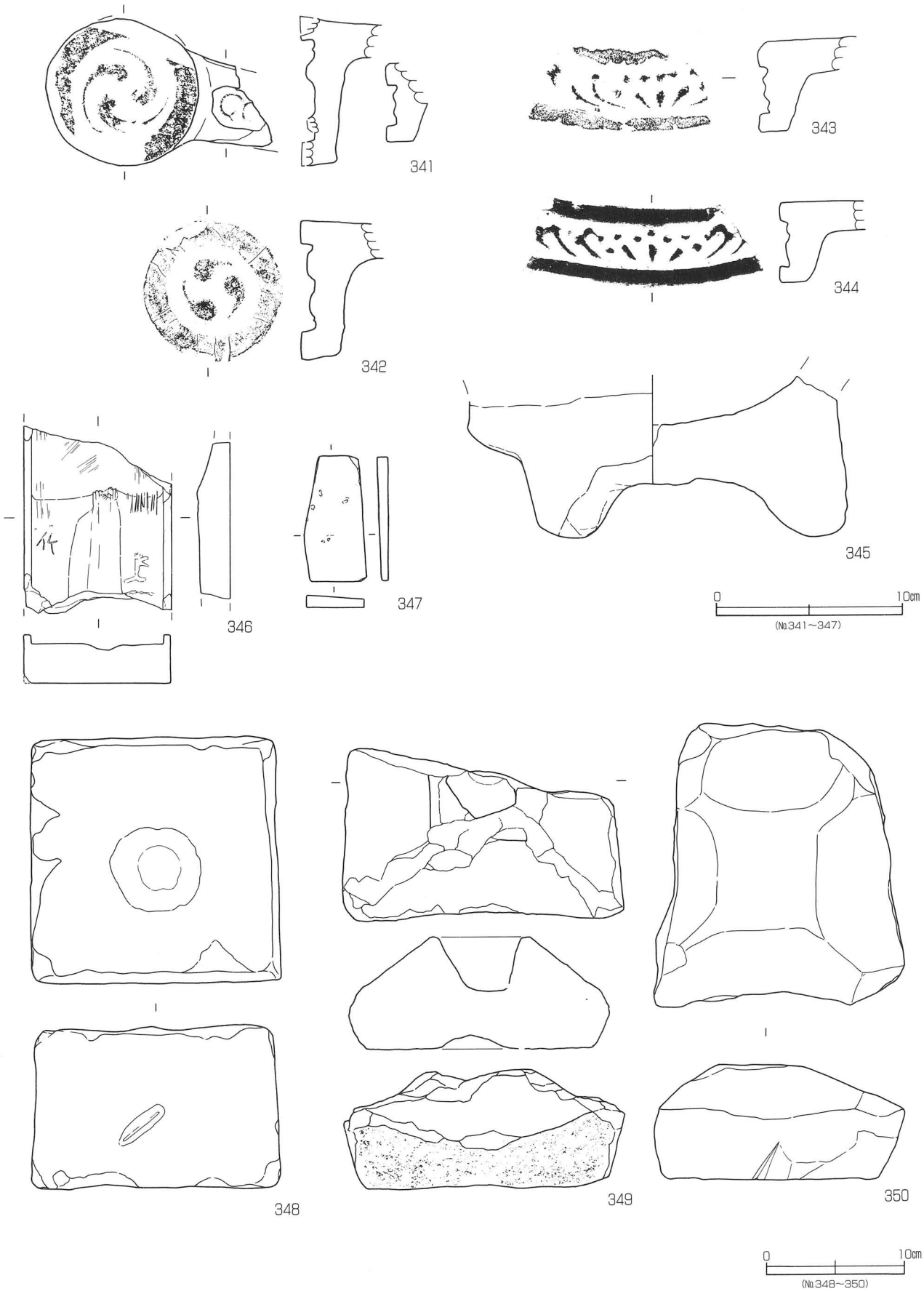


図41　A区グリッド出土遺物

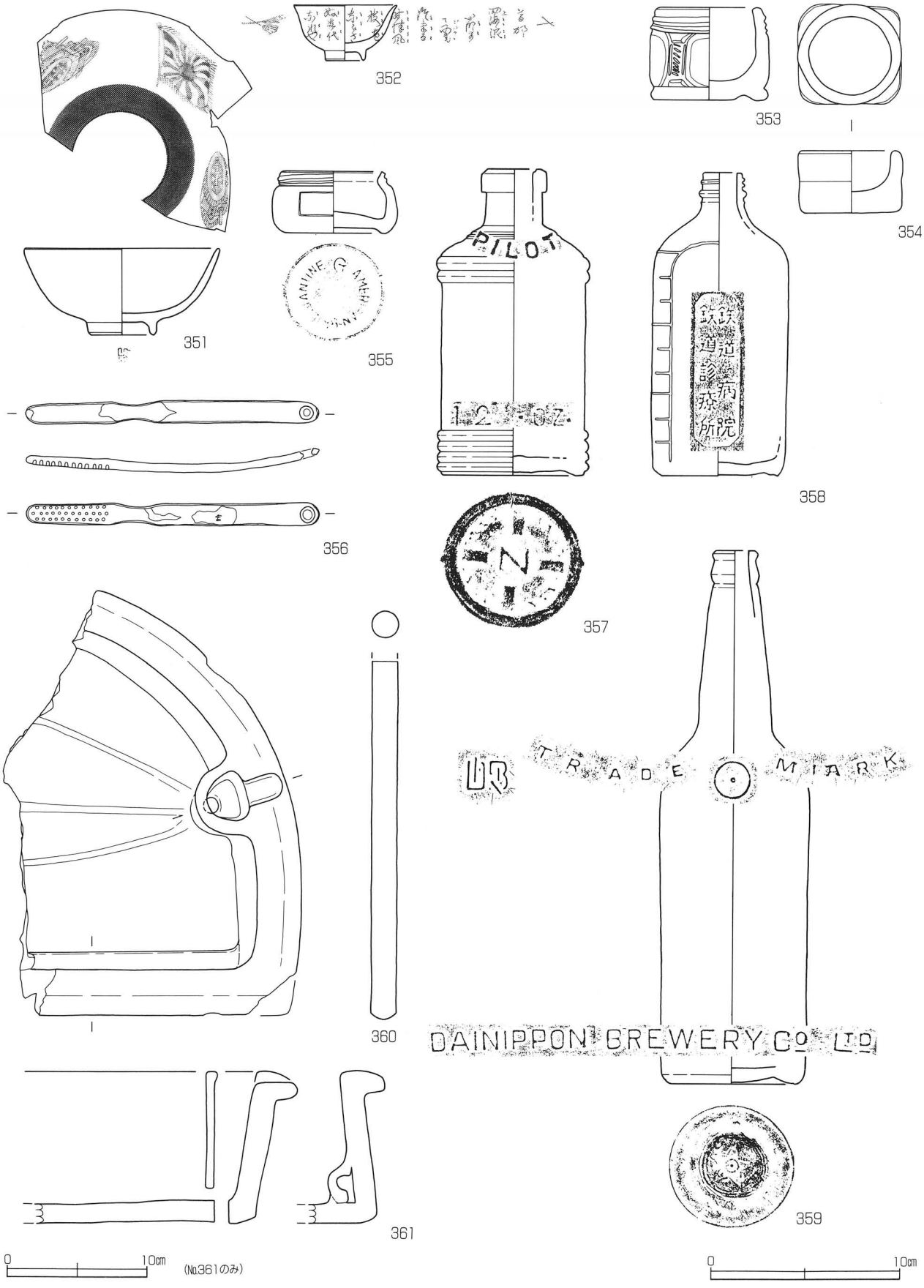
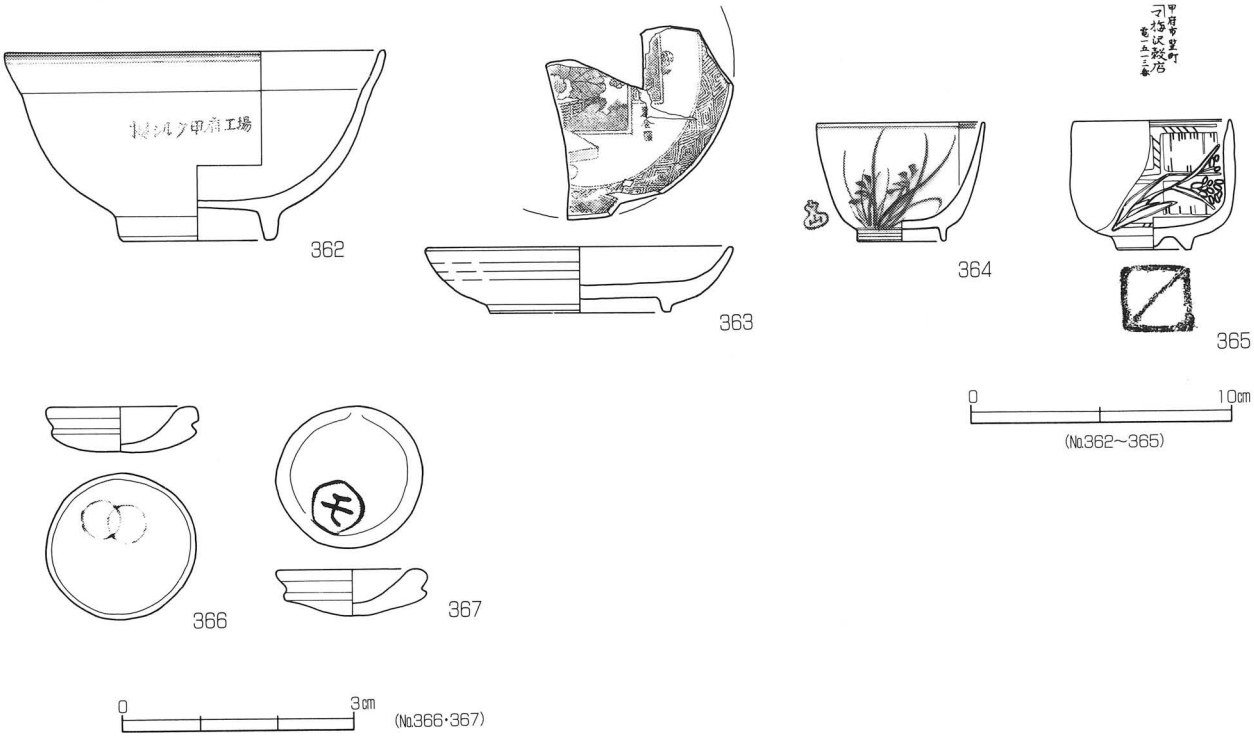

352
353
354
351
355
PILOT
358
356
357
TRADE MIARK
DAINIPPON BREWERY CO LTD
360
361
359
0
10cm
(No.361のみ)
0
10cm

図42　A・B区近代遺物



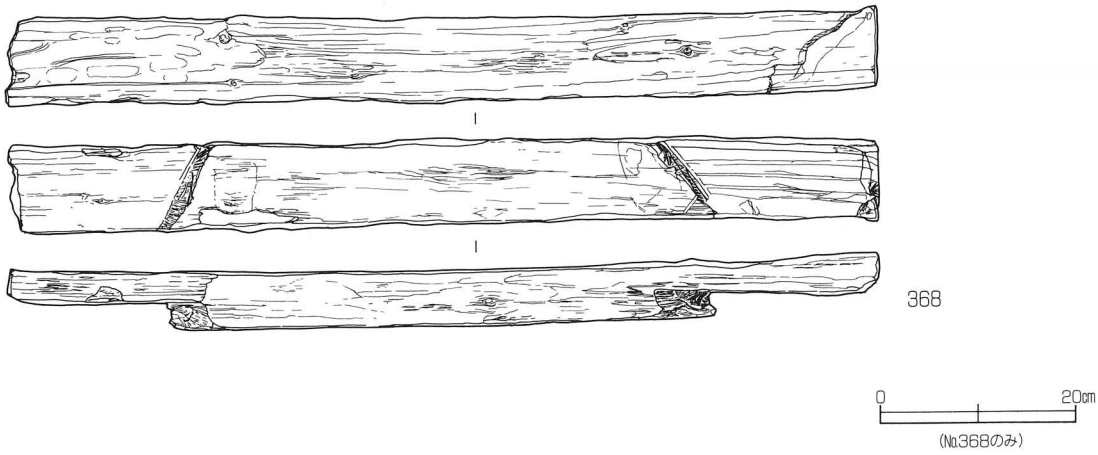


図43　A・B区近代遺物、A区9号井戸胴木

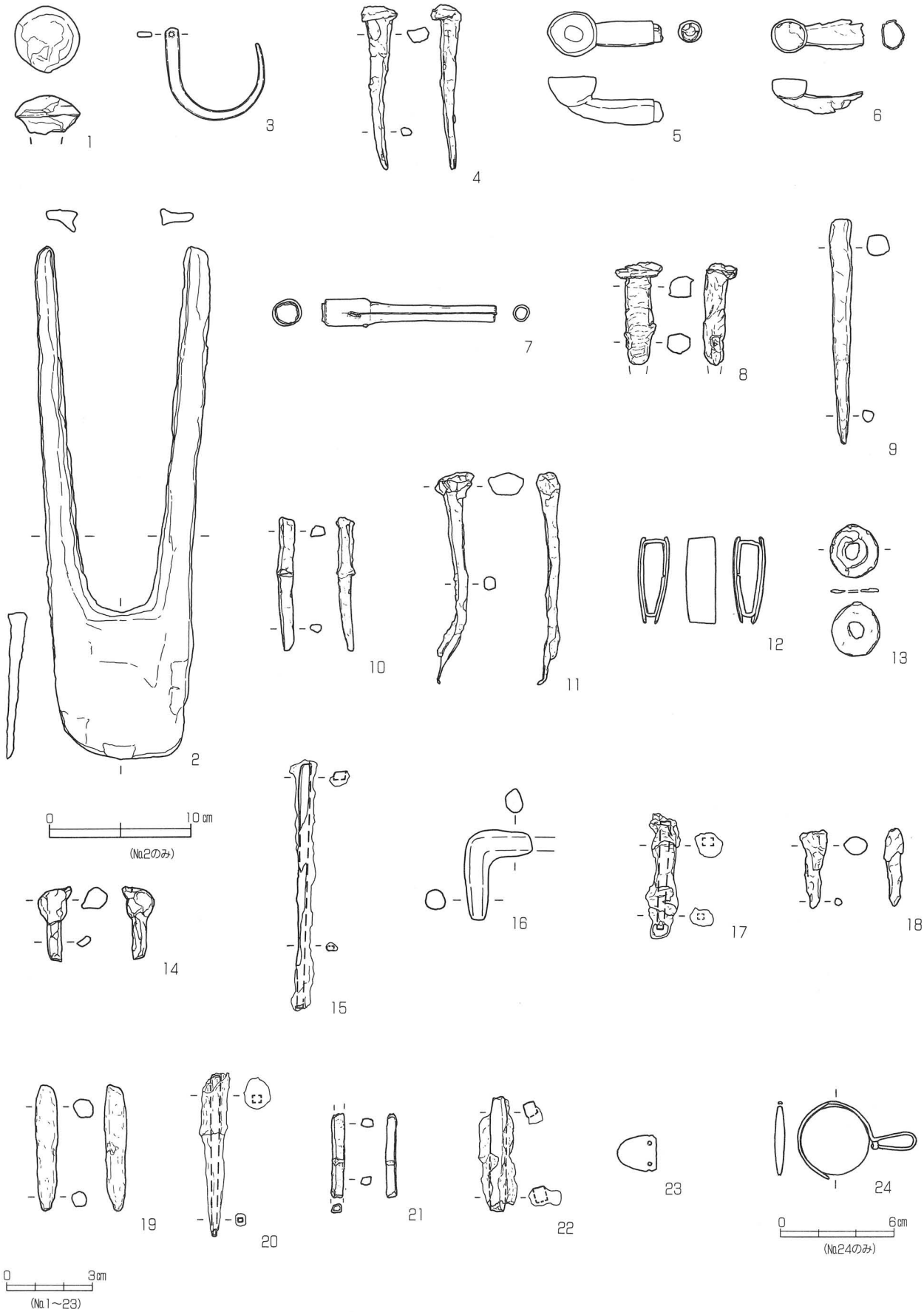


図44　A区出土金属製品

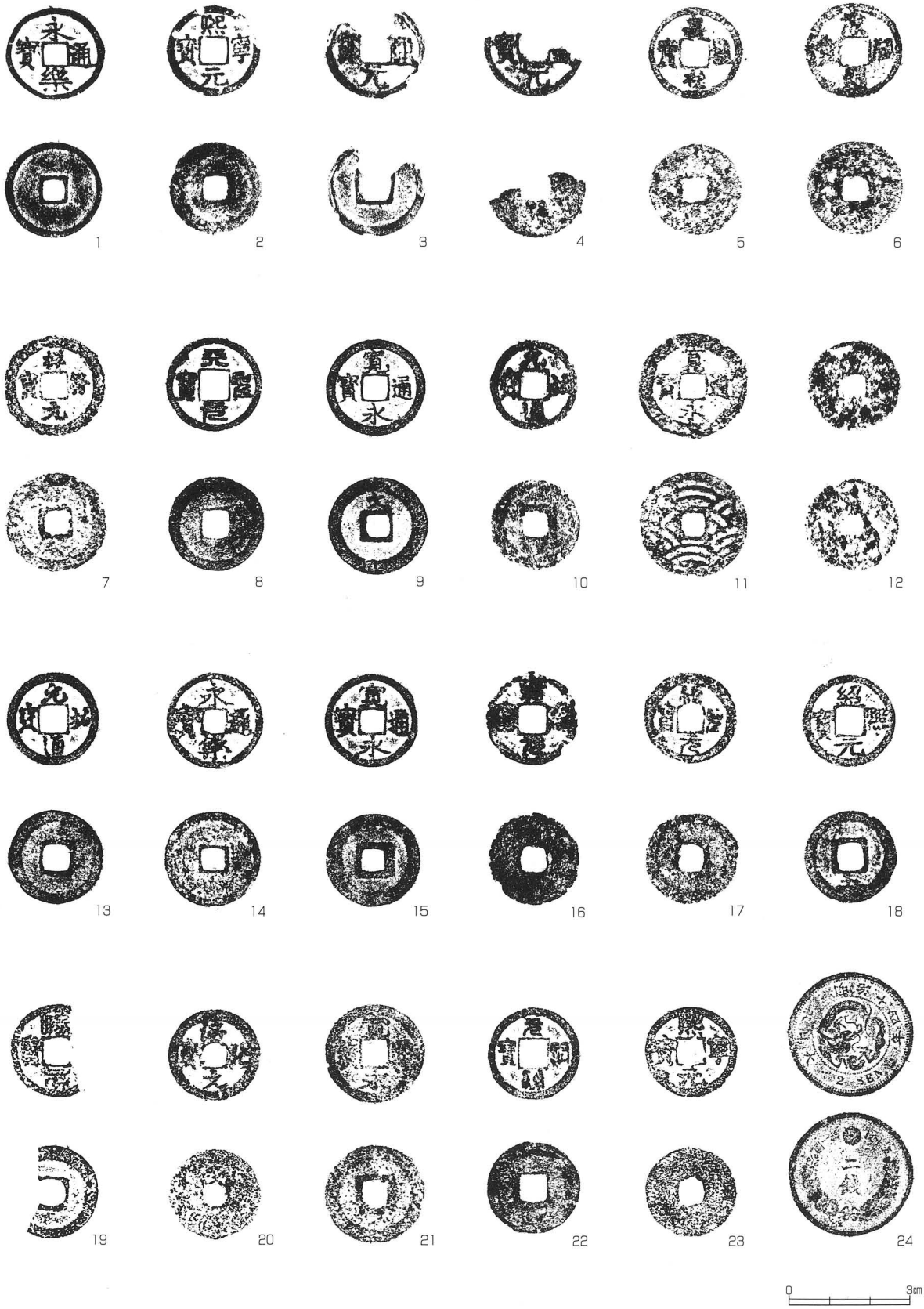

永通寶樂
熙寧寶元
元通寶
元寶
寶
寶
1
2
3
4
5
6
寶元
元寶
寶通
永
寶
寶
7
8
9
10
11
12
元寶
永通寶
寶通
永
寶
寶
紹熙寶元
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
0
3cm

図45　A　区　出　土　銭　貨

第４章　Ｂ区発掘調査の成果

第１節　遺構概観

Ｂ区は近世の絵図（絵図１）に描かれるように、甲府城二の堀とこれに沿った土塁の存在が推定された場所である。調査の結果、幅約13ｍの二の堀と土塁の痕跡が出土した。土塁遺構の下層からは中世（16世紀）の溝９条・井戸１基・土坑２基・ピット78基が検出された。さらに、追加調査で設定したＴ－８トレンチからは、近世の井戸１基が確認されている。試掘調査トレンチ（Ｔ－１）部分は地山層まで及ぶ攪乱を受けていたが、近代の建物基礎と考えられる集石と溝５条が検出された。

遺物は、かわらけ・瀬戸美濃系天目茶碗・丸皿・擂鉢・五輪塔部材・銭貨等金属製品・木製品など16世紀代が多く、土塁下層から地山層にかけて検出された。二の堀跡からは主に製糸工場関係の遺物が検出された。覆土上面には大量の石炭殻が堆積しており、堀が丸茂製糸場操業後から昭和初期に埋め立てられたことがわかる。石炭殻は製糸工場の燃料として使った石炭の燃え殻である。

第２節　基本層序（図46）

Ｂ区はＡ区の北側50ｍに位置し、相川扇状地上の標高約282ｍに位置する。Ａ区と同様に近代以降の製糸工場に関連する攪乱が自然堆積層まで及んでいる部分が見られる。

調査区の基本土層は、現地表面から約60cm下の黄褐色土の自然堆積層との間に、５層が確認されている（図46）。第１層は近代の攪乱層である。第２層は近代の堀埋設土層である。第３・４層は二の堀に伴う土塁の構築層である。第５層は近世以前の堆積層と考えられる。

第３節　遺構と遺物

(1) 二の堀（図48・50、写真77）

調査区北側に位置し、北側の道路と平行してＥ－69°－Ｗに軸をもつ。試掘調査Ｔ－１トレンチで幅11.5ｍ、Ｔ－４トレンチで幅13.5ｍ、Ｔ－５トレンチで幅13.5ｍを測る。堀底を検出していないが、

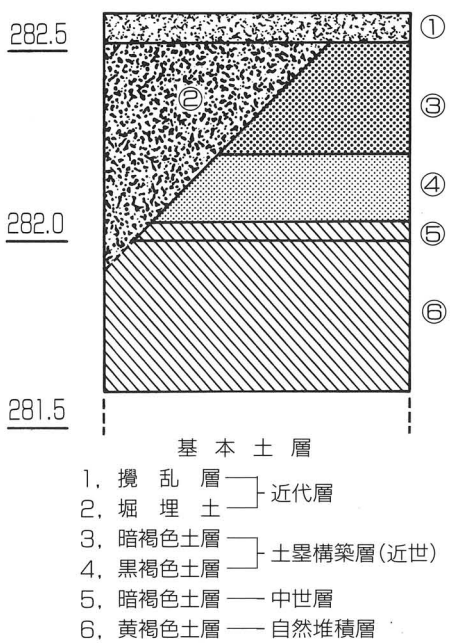


図46　Ｂ区基本土層

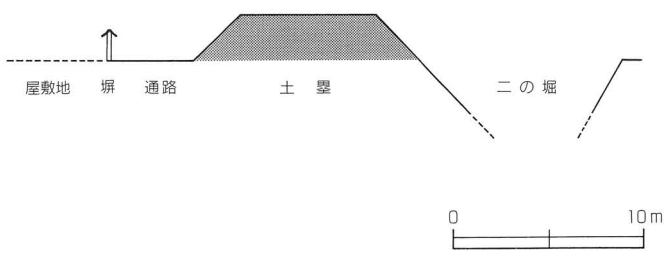


図47　Ｂ区二の堀・土塁断面概略図

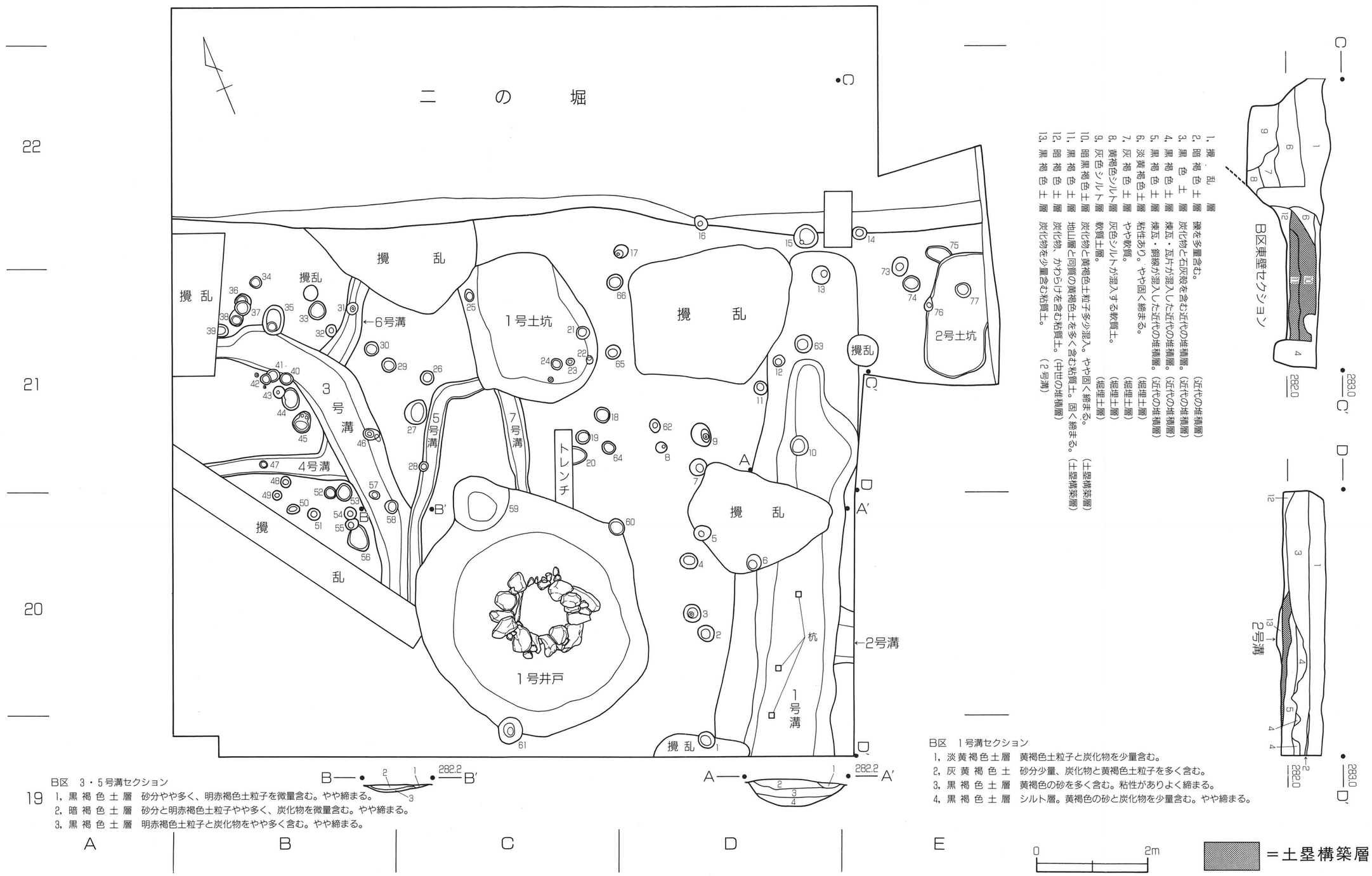

二の堀
撹乱
1号土坑
2号土坑
1号井戸
1号溝
2号溝
3号溝
4号溝
5号溝
6号溝
7号溝
7トレンチ
杭
B区東壁セクション
1, 撹乱層　礫を多量含む。
2, 暗褐色土層　炭化物と石灰殻を含む近代の堆積層。（近代の堆積層）
3, 黒色土層　炭化物と石灰殻を含む近代の堆積層。（近代の堆積層）
4, 黒褐色土層　煉瓦・瓦片が混入した近代の堆積層。（近代の堆積層）
5, 黒褐色土層　煉瓦・鋼滓が混入した近代の堆積層。（近代の堆積層）
6, 淡黄褐色土層　粘性あり。やや固く締まる。（畑耕土層）
7, 灰褐色土層　やや軟質。（畑耕土層）
8, 黄褐色シルト層　灰色シルトが混入する軟質土。（畑耕土層）
9, 灰色シルト層　軟質土層。（畑耕土層）
10, 暗黒褐色土層　炭化物と黄褐色土粒子多少混入。やや固く締まる。（土塁構築層）
11, 黒褐色土層　地山層と同質の黄褐色土を多く含む粘質土。固く締まる。（土塁構築層）
12, 暗褐色土層　炭化物、かわらけを含む粘質土。（中世の堆積層）
13, 黒褐色土層　炭化物を少量含む粘質土。（2号溝）
B区　3・5号溝セクション
1, 黒褐色土層　砂分やや多く、明赤褐色土粒子を微量含む。やや締まる。
2, 暗褐色土層　砂分と明赤褐色土粒子やや多く、炭化物を微量含む。やや締まる。
3, 黒褐色土層　明赤褐色土粒子と炭化物をやや多く含む。やや締まる。
B区　1号溝セクション
1, 淡黄褐色土層　黄褐色土粒子と炭化物を少量含む。
2, 灰黄褐色土　砂分少量、炭化物と黄褐色土粒子を多く含む。
3, 黒褐色土層　黄褐色の砂を多く含む。粘性がありよく締まる。
4, 黒褐色土層　シルト層。黄褐色の砂と炭化物を少量含む。やや締まる。
0　2m
＝土塁構築層

図48　B区全体図

深さは３ｍを超える。断面は逆台形状を呈し、北側の立ち上がり部は約60°、南側は約45°を測る。内城の堀は石垣が積まれるが、各種城下絵図に描かれるように二の堀は素掘りであった。石炭殻が上部に堆積し、近代以降の遺物が多量に検出された。特に製糸工場関係の遺物が多く見られ、遺物と石炭殻の堆積状況より、大正末から昭和初期に埋め立てられたものと推定される。

(2) 土　塁（図48、50、写真75）

現地表面下10cmと極めて浅い部分から土塁の痕跡が検出された。上面及び南側は削平を受け、残存部の基底幅2.8ｍ、高さ0.5ｍ、堀側傾斜角45°を測る。基底部の標高は約282ｍである。土塁は暗黒褐色土層と黒褐色土層の２層に分かれる。土塁構築層内には地山層の黄褐色土が多く混入していることから、堀の掘削に伴い、排土を利用して築かれたものと考えられる。

(3) 溝

１号溝（図48）

Ｎ―24°―Ｅの軸線をもち、長さ約6.15ｍにわたり検出された。上面幅約1.5ｍ、底部幅約1.0ｍ、深さ約15cmを測り、北から南へ緩やかに傾斜する。溝と平行し、約80cm間隔で径５cmの杭２本が検出された。獣骨・かわらけが検出されている。土塁下層に位置することから、中世の溝と判断される。

２号溝（図48）

Ｎ―66°―Ｗに軸線をもち、１号溝と直交するかたちで長さ約30cmが確認された。上面幅1.0ｍ、底部幅約0.5ｍ、深さ約10cmを測るが、傾斜方向は不明である。１号溝との新旧関係を把握することはできなかった。遺物は未検出である。

３号溝（図48）

Ｎ―３°―Ｅに主軸をとる。北側は西へ湾曲し、長さ約6.0ｍを測る。上端最大幅0.95ｍ、最小幅0.4ｍ、底部最大幅0.6ｍ、最小幅0.2ｍ、深さ約15cmを測る。５号溝に切られるが、４・６号溝との重複関係は不明。かわらけ（図53―15～16）と大窯第１段階の端反皿小片、北宋銭（32）が検出された。

４号溝（図48）

Ｎ―68°―Ｗに軸線をもち、長さ約2.5ｍにわたり検出された。東側で北に向かってほぼ直角に屈曲するものと推定されるが、３号溝に切られる。溝は西側で上面幅0.25ｍ、底部幅0.18ｍ、深さ２cmを測る。東側では上面幅0.45ｍ、底部幅0.3ｍ、深さ７cmを測り、東側に緩く傾斜する。銭貨２枚・かわらけ・瀬戸美濃系陶器など、いずれも16世紀段階の遺物小片が検出されている。

５号溝（図48）

Ｎ―32°―Ｅに主軸をもち、北側は東方向へＬ字状に屈曲する。東西約0.7ｍ、南北約3.5ｍの長さで確認された。北側は１号土坑によって切られ、南側は３号溝を切る。上端最大幅約0.3ｍ、底部幅0.2ｍ、深さ約３cmを測り、南側に向かって緩やかに傾斜している。遺物は検出されていない。

６号溝（図48）

北側は攪乱を受け、南側は３号溝によって画される。Ｎ―16°―Ｅに軸線をとり、長さ約1.8ｍにわたり検出された。上端最大幅0.5ｍ、底部最大幅0.25ｍ、最深約15cmを測り、南に緩やかに傾斜する。遺物はかわらけの小片が検出された。

７号溝（図48）

北側は１号土坑、南側は１号井戸によって画される。Ｎ―53°―Ｅに軸線をとり、長さ約1.8ｍにわたり検出された。上端最大幅0.4ｍ、底部最大幅0.25ｍ、最深約８cmを測り、南側へ緩やかに傾斜する。遺物はかわらけの小片が検出されている。

８号溝（図50、写真78・81・88）

Ｂ区東側５ｍのＴ―６トレンチに位置する。トレンチの約１ｍ下部から、二の堀・土塁・溝１条・ピット４基が検出された。地山層に掘り込まれ、二の堀にほぼ直交し、Ｎ―21°―Ｅに軸をもつ。上面幅約0.7ｍ、底面0.2～0.3ｍ、最深17cmを測る。出土遺物（図53―22～27・31）は、かわらけ（22～25）・銭貨・小刀状金属製品（31）・瀬戸美濃系陶器（大窯第２段階、26～27）など、16世紀代に属する。

９号溝（図50・写真79）

Ｔ―１トレンチの東側1.7ｍに位置する、南北約7.3ｍ、幅2.8～3.0ｍのトレンチに位置する。遺構は、二の堀・土塁・溝１条・ピット１基が確認された。地山層に掘り込まれ、二の堀に対しほぼ直交する。南北方向Ｎ―21°―Ｅに軸をもち、南方に延びる。上面幅1.45～1.15ｍ、底面0.5～0.3ｍ、深さ17cmを測る。覆土からは16世紀代と考えられるかわらけが検出されている。

(4) 井戸

１号井戸（図49、写真76・83・84）

調査区中央部のＣ―20グリッドに位置する。確認面の標高は382ｍである。北東―南西方向に長軸をもつ、楕円形を呈した石積みの井戸である。上面の長軸4.8ｍ、短軸3.8ｍ、深さ3.5ｍを測る。石積みは長軸1.0ｍ、短軸0.8ｍの不整形であり、井戸底部には、径約10cmの木材４本が井桁状に据えられている。その上から径約40～70cmの安山岩の山石を奥行きを深くとって垂直に積みあげている。

出土遺物（図52―１～14）は、かわらけ・瀬戸美濃系天目茶碗・志戸呂製擂鉢・木製品・五輪塔部材など、いずれも16世紀末の所産である。土塁構築工事により、井戸は廃絶されたものと推定される。

２号井戸（図51、写真80・87）

Ｂ区の南西側23ｍのＴ―８トレンチから検出された。表土上面は攪乱を受けており、標高281ｍの地山層で掘り込みを確認した。上面の長径は2.5ｍ、短径2.3ｍを測り、深さ3.7ｍを測る。井戸上面から約１ｍ下がった位置から径1.2ｍ程度となって垂直に落ちこむ。内部から径50～70cmの自然石が多数確認された。遺物は少ないが、志野焼の小片と木片（図53―30）が検出された。時期の特定は困難ではあるが、17世紀代まで遡る可能性も考えられる。

(5) 土坑

１号土坑（図49、写真85）

北は二の堀と攪乱で削平されている。Ｎ―17°―Ｅに主軸をもつ。南北約2.7ｍ、東西2.2ｍの方形で、深さ約20cm。試掘時に16世紀のかわらけ・天目茶碗・染付皿・五輪塔部材が出土している。

２号土坑（図49）

Ｂ区北東隅追加調査部分の土塁基底部下層から検出された。Ｎ―17°―Ｅに主軸を持つ、長軸2.2ｍ、短軸1.05ｍ、深さ７cmを測る隅丸長方形の遺構である。遺物は未検出であるが、近世の土塁の下層から検出されたことから、中世の遺構と考えられる。

(6) ピット（図48・50、表19）

Ｂ区及び追加調査区において、ピット78基が確認された。広範囲に攪乱を受けているため未検出の部分もあるが、ほぼ全域に広がっていたものと考えられる。掘立柱建物・柵列などの存在も推定されるが、今回の調査では把握できなかった。土塁下層から検出されたピット74からは、完形品の土製香炉（図52―20）が出土している。他のピットについては別掲一覧表にまとめて報告する。

(7) 遺物観察表

Ｂ区出土遺物を、別掲の表にまとめ、一覧化した。

第４節　試掘調査トレンチ（図51、写真82）

Ｂ区西側に位置する幅２ｍ、長さ34ｍのトレンチである。近世の攪乱層は地表下約80cmの地山層にまで及び、遺構はいずれも地山層に掘り込まれた状態で確認されている。北側で検出された二の堀は幅12.8ｍを測るが、土塁は確認されていない。５条の溝はいずれも東西方向に軸をもつ。５基の集石は南北方向に一直線に並び、溝・集石ともに堆積土の状況から近代の所産と考えられる。

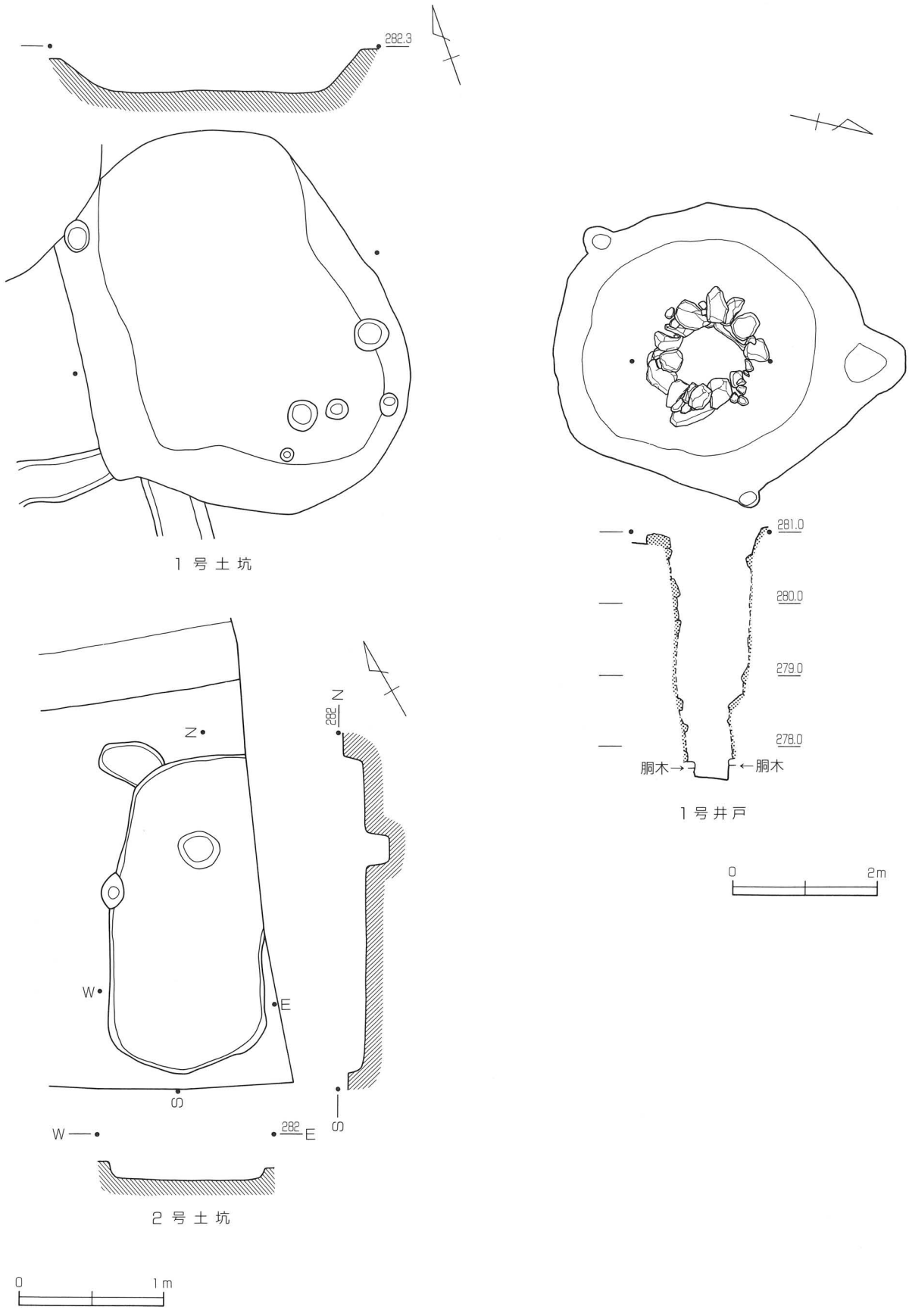
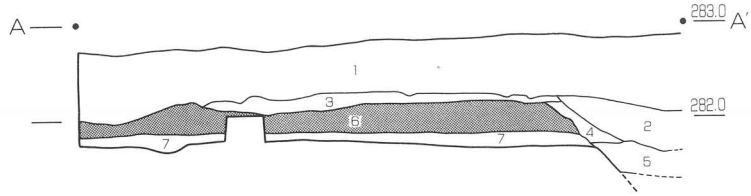
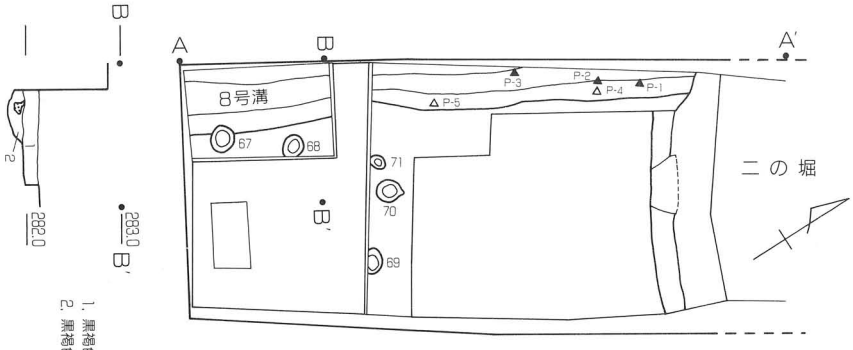


図49　B区1号・2号土坑、1号井戸平面図・エレベーション



1. 攪　乱　層
2. 黒褐色土層
3. 黄褐色土層　地山土と類似する。
4. 暗黒褐色土層
5. 灰色粘質土　軟質の堀埋設土
6. 黒褐色土層　焼土粒子を多く含む。(土塁構築層)
7. 黒褐色土層　砂分少量、礫(φ15～20cm)を含む。(8号溝埋設土)

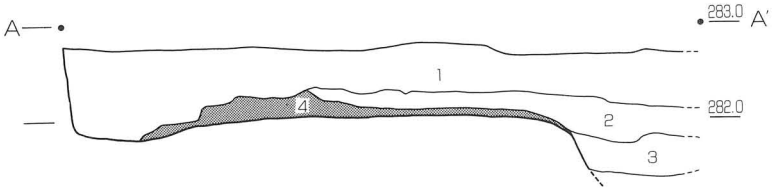


8号溝出土遺物

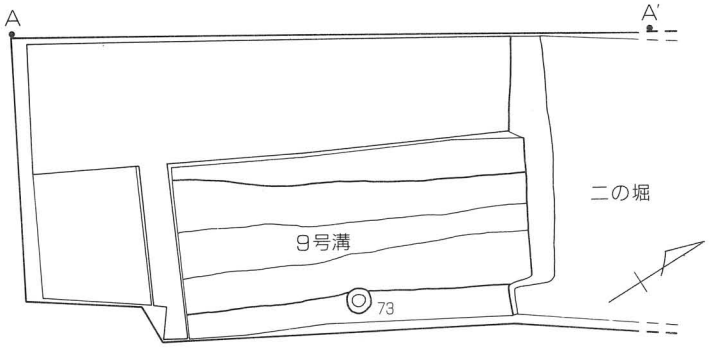
P-1　かわらけ（図53 No.23）
P-2　かわらけ（図53 No.24）
P-3　かわらけ（図53 No.25）
P-4　金属製品（図53 No.31）
P-5　銭　貨

T-6（追加調査トレンチ）

1. 黒褐色土層　焼土粒子を多く含む。(土塁構築層)
2. 黒褐色土層　砂分少量、礫(φ15～20cm)を含む。(8号溝埋設土)



1. 攪　乱　層
2. 黄褐色土層　地山土と類似する。粘性あり。
3. 灰色粘土層　堀の埋設土
4. 黒褐色土層　焼土粒子も多く含む。(土塁構築層)



T-7（追加調査トレンチ）

=土塁構築層

0　2m

図50　B区追加調査トレンチ、平面図・セクション

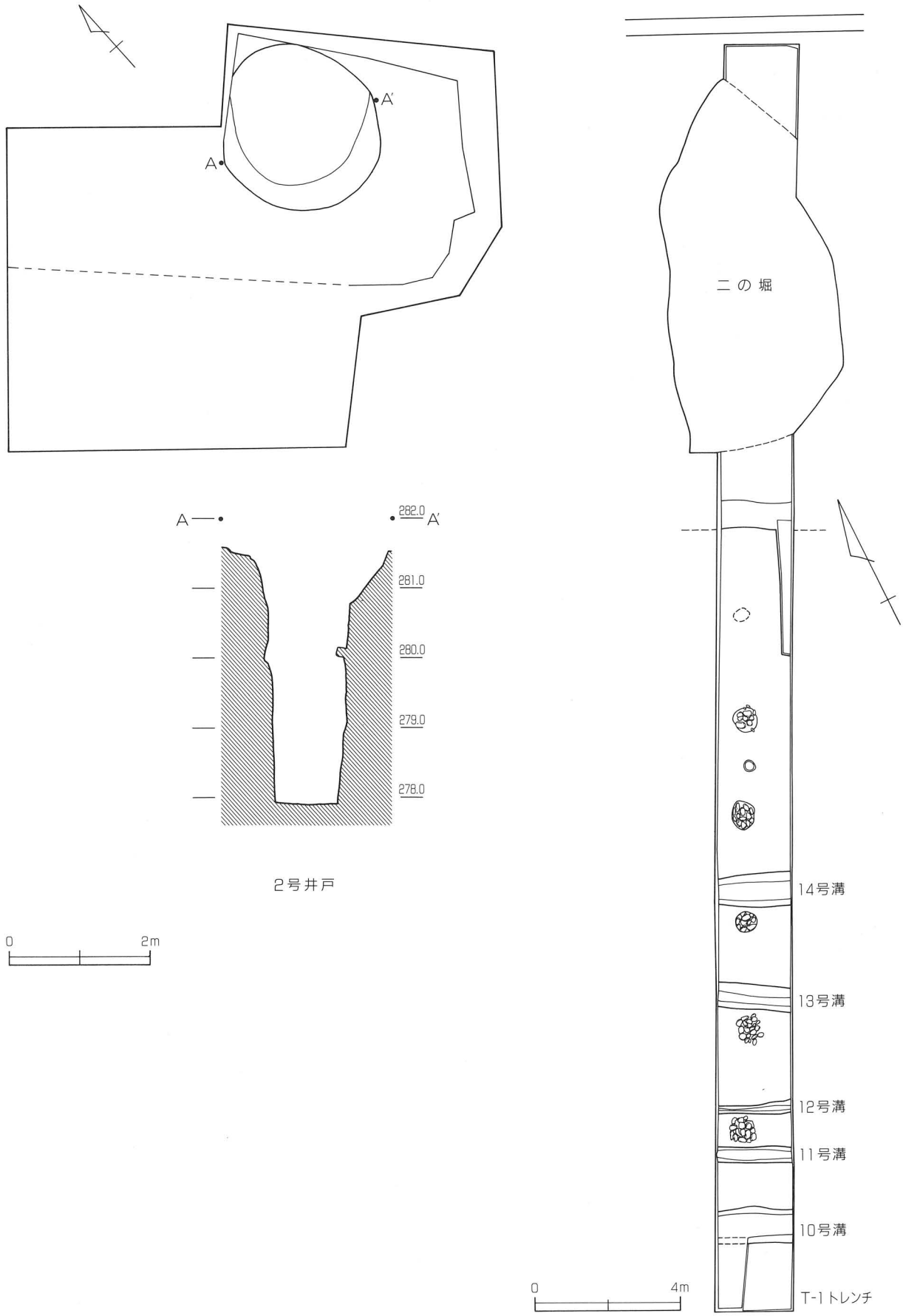


図51　B区2号井戸平面図、試掘トレンチT-1 平面図

(1) 溝

10号溝

N—69°—Wに軸線をもち、トレンチ幅２ｍにわたり検出された。上端約1.0ｍ、下端約0.6ｍ、深さ約30cmを測る。黒褐色土が多く堆積し、溝上面及び周辺からは大正時代以降の遺物が出土した。

11号溝

N—69°—Wに軸線をもち、トレンチ幅２ｍにわたり検出された。上面幅0.4～0.45ｍ、下端約0.2ｍ、深さ約10cmを測る。黒褐色土が多く堆積しているが、遺物はない。

12号溝

N—75°—Wに軸線をもち、西側へ緩やかに傾斜する。近代の土管が埋設され、上面幅0.2～0.3ｍ、深さ５～10cmを測る。

13号溝

N—65°—Wに軸線をもち、トレンチ幅２ｍにわたり検出された。上面幅0.65～0.7ｍ、下端約0.2ｍ、深さ約20cmを測る。溝内は黒褐色土が多く堆積していた。

14号溝

N—77°—Wに軸線をもち、トレンチ幅２ｍにわたり検出された。上面幅0.9～0.7ｍ、深さ約10cmを測る。径２～３cmの礫を含む黒褐色土が堆積していた。

(2) 集石遺構

N—18°—Ｅの軸線上に、約2.8ｍ間隔で５基が並ぶ。上端径約60～70cmの円形状の掘込みに径15～20cmの自然石が多数埋め込まれており、建物の礎石を据えるための根石と考えられる。遺物は未検出であるが、近代の遺構と推定される。

表19　B区ピット観察表

残存値〈　〉

番号	位置	平面形	長径	短径	深さ	遺　物	備　考
1	D—19	円形	34	—	27		
2	D—20	円形	28	—	60		
3	D—20	円形	30	—	55		
4	D—20	楕円形	31	26	30		
5	D—20	円形	30	—	51		
6	D—20	円形	24	—	25		
7	D—21	円形	32	—	52		
8	D—21	円形	18	—	20		
9	D—21	楕円形	44	34	49		
10	D—21	円形	36	—	28		
11	D—21	円形	24	—	37		
12	D—21	円形	18	—	28		
13	D—21	円形	30	—	36		
14	D—22	円形	26	—	35		
15	D—22	円形	44	—	22		
16	D—22	円形	22	—	11		
17	D—22	円形	25	—	16		
18	C—21	円形	27	—	5		
19	C—21	円形	26	—	26	土鍋	
20	C—21	円形	30	—	10		
21	C—21	円形	24	—	14		
22	C—21	円形	13	—	21		
23	C—21	円形	15	—	16		
24	C—21	円形	20	—	13		
25	C—21	円形	21	—	21		
26	C—21	円形	23	—	4		
27	C—21	円形	44	—	20		
28	C—21	円形	17	—	23		
29	B—21	円形	24	—	31		
30	B—21	円形	25	—	23		
31	B—21	円形	18	—	23		
32	B—21	円形	18	—	12		
33	B—21	円形	29	—	25		
34	B—21	円形	18	—	8		
35	B—21	楕円形	45	38	13		
36	B—21	円形	29	—	25		
37	B—21	円形	26	—	7		
38	B—21	円形	24	—	27		
39	B—21	円形	22	—	24		
40	B—21	円形	24	—	6		
41	B—21	円形	24	—	7		42に切られる
42	B—21	円形	19	—	9		41を切る
43	B—21	円形	20	—	17		
44	B—21	楕円形	40	33	10		
45	B—21	不整円形	40	31	14		
46	B—21	円形	28	—	25		
47	B—21	円形	13	—	9		
48	B—21	円形	17	—	11		
49	B—20	円形	17	—	12		
50	B—20	円形	23	—	11		
51	B—20	円形	23	—	21		
52	B—21	円形	19	—	23		
53	B—21	円形	28	—	28		
54	B—20	円形	21	—	24		
55	B—20	円形	22	—	17		56を切る
56	B—20	不整円形	43	38	7		55に切られる
57	B—20	円形	49	—	11		
58	B—20	円形	24	—	20		
59	C—20	不整円形	48	—	27		
60	C—20	円形	29	—	7		
61	C—19	円形	44	—	18		
62	D—21	円形	24	—	7		
63	D—21	円形	31	—	55	土器	
64	C—21	円形	28	—	4		
65	C—21	円形	26	—	38		
66	C—21	円形	30	—	0		
67	T—6	円形	29	—	35		
68	T—6	円形	25	—	19		
69	T—6	楕円形	28	—	23		
70	T—6	円形	24	—	25		
71	T—6	楕円形	18	12	5		
72	T—7	円形	27	—	15		
73	D—22	楕円形	34	28	21		
74	D—21	円形	29	—	0	香炉形土器	
75	D—22	楕円形	〈46〉	30	8		
76	D—21	不整円形	22	16	31		
77	D—21	円形	27	—	24		

（単位：cm）

表20　B区遺物観察表

（　）復元値、〈　〉残存値

図	番号	出土位置	種別・器種		法量(cm) 口径	底径	器高	部位	観察所見(技法・文様・その他)	推定生産地	推定年代	備考
52	1	1号井戸	土器	かわらけ	(13.8)	(8.8)	2.65	口縁～底部	内外面ロクロ成形、底部回転糸切り、外面炭化物付着			
〃	2	1号井戸	土器	かわらけ	(8.0)	—	〈1.4〉	口縁部	内外面ロクロ成形			
〃	3	1号井戸	陶器	天目茶碗	(11.0)	—	〈5.0〉	口縁～体部		瀬戸・美濃	大窯4	
〃	4	1号井戸	陶器	天目茶碗	11.8	4.0	6.2	口縁～底部		瀬戸・美濃	大窯3	
〃	5	1号井戸	陶器	擂鉢	—	—	—	体部	鉄釉、被熱	瀬戸・美濃	16世紀	
〃	6	1号井戸	陶器	擂鉢	—	—	—	体部	鉄釉	志戸呂		
〃	7	1号井戸	木製品	円形曲物底板	長さ 16.1		厚さ 0.6	—	一部炭化			
〃	8	1号井戸	木製品	円形曲物蓋板	長径 19.0	短径 18.4	厚さ 0.95	—	樹皮の綴じ紐残存			
〃	9	1号井戸	木製品	曲物側板	長さ 10.85	幅 2.25	厚さ 0.45	—	樹皮の綴じ紐残存			
〃	10	1号井戸	木製品	曲物折敷底板	長さ 32.9	幅 10.2	厚さ 0.45	—	樹皮の綴じ紐残存 木釘孔、刃物痕			
〃	11	1号井戸	木製品	円形曲物底板	20.05	7.05	1.0	—				
〃	12	1号井戸	石製品	五輪塔空風輪	底部 7.7	最大幅 11.3	高さ 19.75	—	安山岩製			
〃	13	1号井戸	石製品	五輪塔空風輪	底部 6.7	最大幅 11.7	高さ 20.05	—	安山岩製			
〃	14	1号井戸	石製品	五輪塔水輪	底部 11.2	上部 8.85	高さ 11.75	—	安山岩製、体部ノミ痕			
53	15	3号溝	土器	かわらけ	(10.0)	—	〈2.6〉	口縁				
〃	16	3号溝	土器	かわらけ	—	(6.65)	〈1.7〉	底部	内面ロクロナデ 底部回転糸切			
〃	17	1号土坑	土器	かわらけ	10.0	5.5	2.15	口縁～底部	内外面ロクロ成形			
〃	18	1号土坑	陶器	緑釉丸皿	(9.8)	—	〈2.4〉	口縁	内外面ロクロ成形、緑釉	瀬戸・美濃	大窯2	妙土窯
〃	19	1号土坑	陶器	天目茶碗	—	—	〈4.7〉	体部		瀬戸・美濃		
〃	20	ピット74	土器	香炉形土器	8.4	6.7	3.7	完形	内外面ロクロ成形、底部回転糸切り、三足貼付け			
〃	21	D—20	土器	かわらけ	(8.4)	(4.2)	2.65	口縁～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り			
〃	22	8号溝	土器	かわらけ	8.5	5.6	2.1	口縁～底部	内外面ロクロ成形 底部回転糸切り			
〃	23	8号溝 P—1	土器	かわらけ	7.5	4.9	2.05	完形	内外面ロクロ成形、底部回転糸切り、内面口縁炭化物付着			
〃	24	8号溝 P—2	土器	かわらけ	8.4	4.5	2.1	完形	内外面ロクロ成形 内外面炭化物付着			
〃	25	8号溝 P—3	土器	かわらけ	10.8	6.7	2.1	完形	内外面ロクロ成形、底部回転糸切り、内面炭化物付着			
〃	26	8号溝	陶器	端反皿	—	5.8	〈1.6〉	口縁～底部	見込み印花文	瀬戸・美濃	大窯1	
〃	27	8号溝	陶器	丸皿	(9.5)	(5.8)	2.8	口縁～底部	被熱	瀬戸・美濃	大窯3	
〃	28	T—7	陶器	碗	—	5.1	〈2.7〉	体部～底部	ロクロ成形、底部周辺のみ無釉	瀬戸		尾呂窯
〃	29	T—7	土器	擂鉢	—	—	—	体部	櫛目9本単位			
〃	30	2号井戸	木製品	不明	長さ 5.7	幅 2.8	厚さ 0.75	—				
〃	31	8号溝 P—4	金属	不明	長さ 6.83	幅 1.71	厚さ 0.15	重量 9.64g	表面金箔付着			

図	番号	出土位置	銭種	材質	法量(mm) 外径	穿径	厚さ	(g) 重さ	観察所見 字体	特徴・遺存状況	時代	初鋳
53	32	3号溝	熙寧元宝	銅	24.7	7.6	1.8	2.1	真	完形	北宋	1587
53	33	C—21	皇栄通宝	銅	24.8	7.7	1.7	2.0	篆	ほぼ完形、腐蝕が著しい	南宋	1253

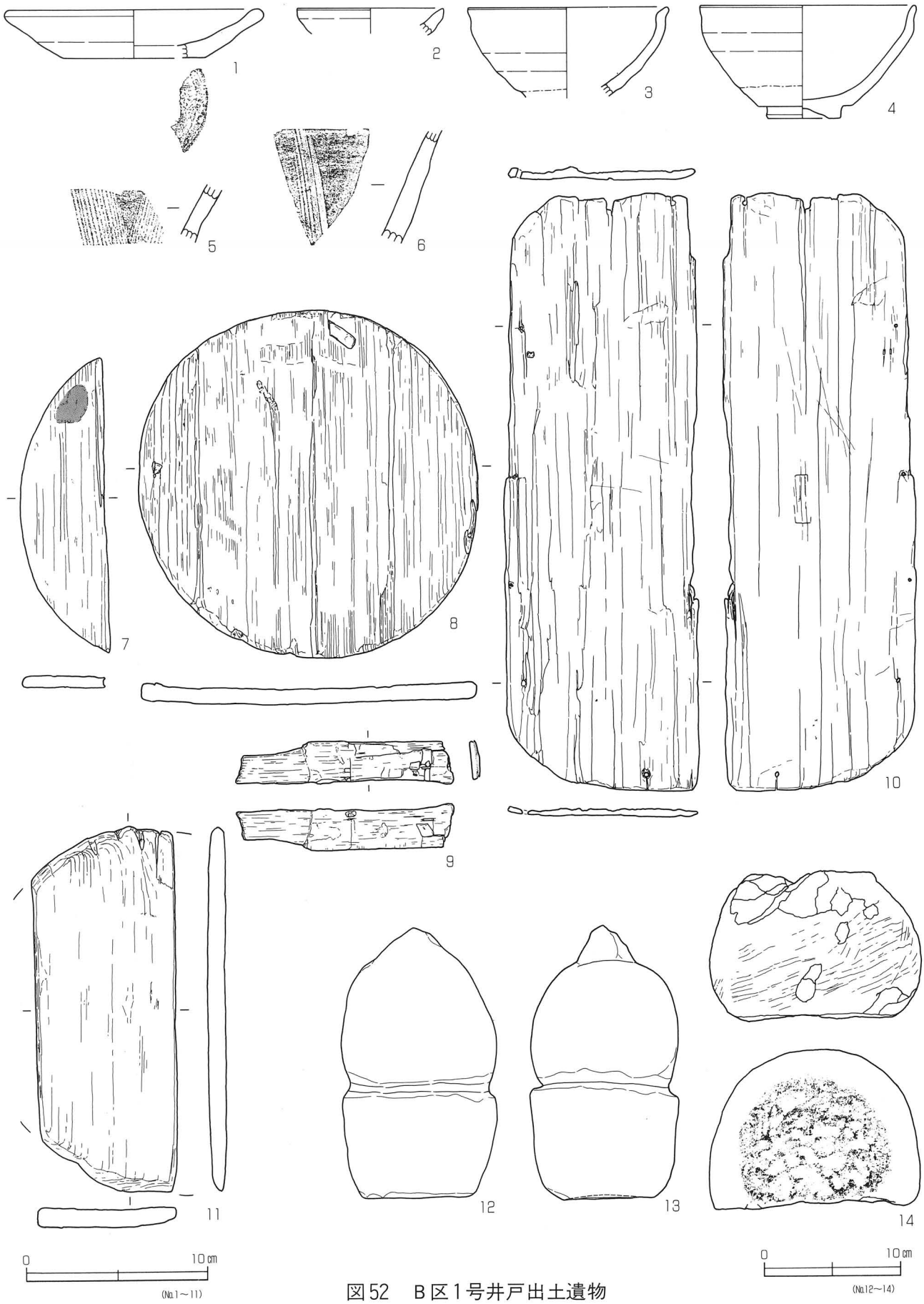


図52　B区1号井戸出土遺物

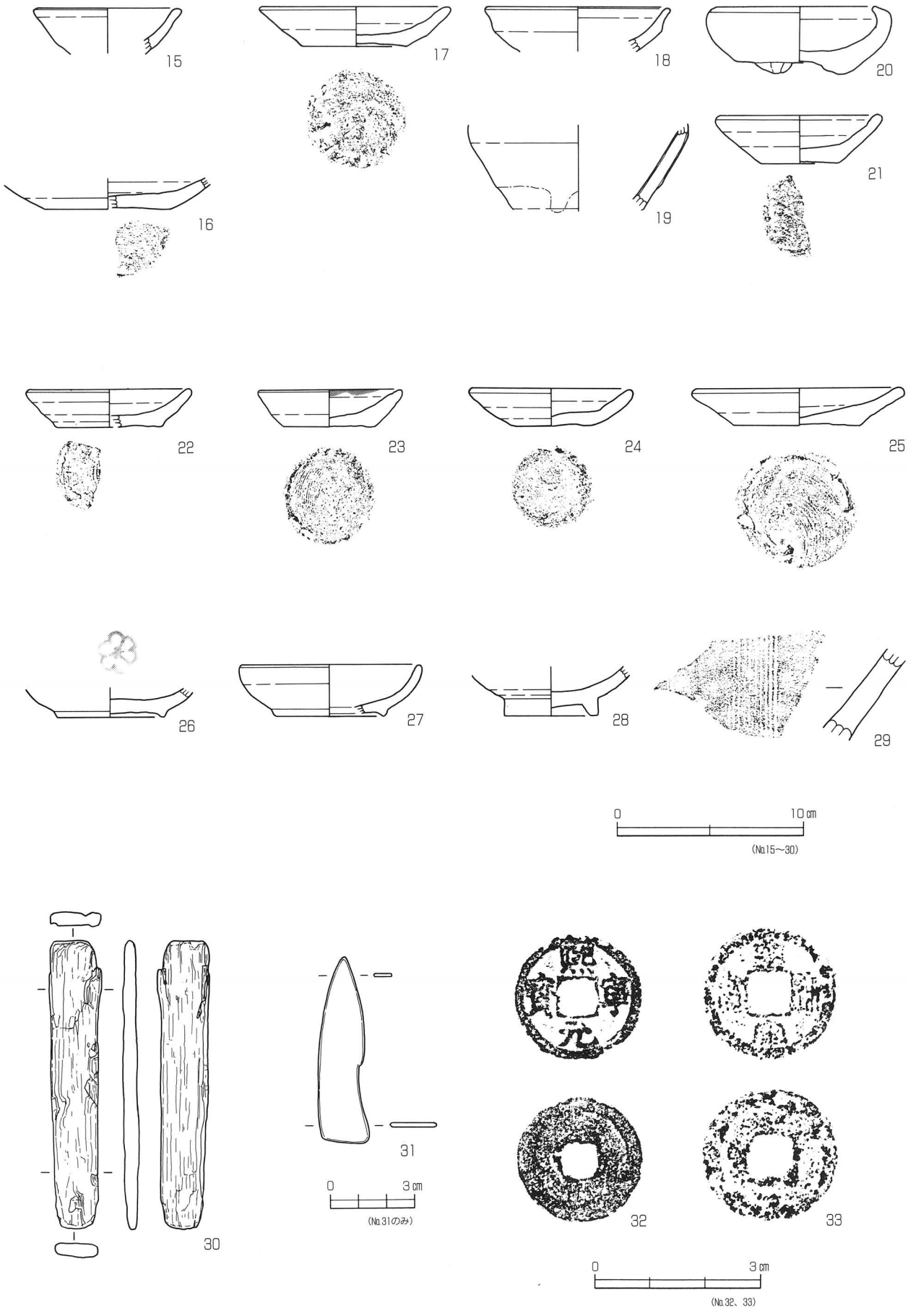


図53　B区3号溝、1号土坑、ピット74、8号溝、T-7、2号井戸出土遺物

第5章　ま　と　め

第1節　古代

東側に近接する日向町遺跡（図1—㉑）では古墳時代初頭の壺片が検出されているが、今回の調査地点からは古代の遺構は確認されなかった。しかし、14号溝から古墳時代の高坏脚部1点が検出されており、遺跡周辺に古代の集落遺跡が存在していた可能性がある。

N—84°—Eに方位をとる16・21・23号溝などは遺物がなく時期を特定できないが、近世段階の町割と異なる軸線であり、今後の周辺調査により時期的解明が進められることを期待したい。

第2節　中世

A区で中世の遺構として捉えられるのは、1～5号井戸及び8号土坑である。B区では、土塁下層から検出された遺構が中世段階に位置づけられる。中世遺物は、16世紀前半の大窯第1段階から17世紀前後の志戸呂製品までが検出されている。出土地点は調査区全体に及び、永正16年（1519）の武田氏館跡造営以降、甲府城建設に伴う城下町の再整備に至るまで、この辺りが戦国期城下町の一角を占めていたことが明らかとなった。

16世紀代の溝は、20号溝など曲線を描いたものが多いが、B区土塁下部から検出された8号・9号溝はN—21°—Eの軸線をとり、近世甲府城下町の街路軸線とほぼ一致する。このことは、近世甲府城下町の街路や屋敷割りが、戦国期城下町の地割線を基本的に踏襲していることを示す。

8号土坑は中世墓である。図1に本遺跡周辺で実施された発掘調査を示したが、⑰・⑳地点でも中世の土坑墓が検出されており、また、B区1号井戸からは五輪塔部材など寺院や墓域の存在を示す遺物が検出された。『甲斐国志』「一蓮寺」の項には、「寺領十七町七反屋敷二所アリ」「天文永禄ノ際ニ至リ福田ノ富古ニ超過シテ寺門ニ市ヲ為シ商売多ク集マル因テ一條町一蓮寺小路ノ名アリ」などの記述が見られる。さらに「光澤寺」の項に「文禄中因築城賜替地今ノ地ニ遷リ古寺迹不分明今ノ郭内柳澤権太夫居地ノ辺ニ在リシトモ云」とあることから、甲府城の築城が開始される16世紀末までは、戦国期城下町の南端に位置するとともに、一蓮寺の門前町が広がっていたことも考えられる。

第3節　近世

今回の調査区は、江戸時代に甲府城「山手御門」北側に位置する内郭の武家屋敷地であった。調査区南側のA区は四十九番屋敷（絵図3）であり、北側B区は二の堀と土塁部分にあたる。土地利用の変遷は、17世紀代、18世紀前半（宝永元年～享保9年の柳沢氏領有期）、18世紀中葉から19世紀前半、さらに幕末までの甲府勤番支配の時代の4時期に大別される。

近世の遺構・遺物は最も多く、特に甲府勤番支配時代の18世紀後半から19世紀代が顕著であった。居住者については、17世紀代は資料が少なく不明であるが、18世紀初頭の柳沢氏による城下町再整備後に描かれた絵図に、飯塚の姓を確認できる。享保9年以降は甲府勤番士の山岡、19世紀代は長・永井・北条の姓が絵図等に記されている。

1．江戸前期（17世紀）

16世紀末から17世紀初頭には甲府城の内城建設が進み、武家屋敷地を囲繞する二の堀の掘削も行われたものと考えられる。この時期は資料が少なく判然としないが、柳沢氏入部前の甲府城下町を描いたと推定される「甲府城内屋敷図」（柳沢文庫所蔵）には二の堀と土塁が描かれ、土塁と平行した東西の通りには、入母屋作り風の建物が並ぶ様子が描かれている。同絵図には元城屋町通りと連雀小路の中間に位置する南北の通りは描かれていない。この時期の明確な遺構は未検出であり、17世紀代の遺物

は検出量が少ないため、柳沢氏入部以前の調査区周辺が空閑地であった可能性も考えられる。

2．江戸中期［宝永元年（1704）～享保9年（1724）］

宝永二年（1704）、柳沢吉保が甲斐国の領主となり、甲府城及び城下町の再整備が行われた。柳沢時代の絵図としては、柳沢文庫蔵「甲府御城下絵図」（絵図1）、山梨県立図書館蔵「甲府城郭内外屋敷図」が知られる。前者では、東西の森下小路がクランク状になり、その部分に南側から街路が突き当ってT字路となっている。北側の土塁沿いには南北の街路は見られない。しかし、後者では森下小路は一直線となり、土塁側まで南北の街路が通じ、二の堀側の土塁沿いに元城屋町見付から元連雀町見付に続く東西街路が描かれている。これは柳沢氏の城下町再整備による街路のつけ替えや新規整備によるものと考えられる。また、調査地点の屋敷地面積は（絵図1）に「五百四坪」、隣接する西側の屋敷は「五百六十坪」と記載されるが、後者では調査地点が「六百二十」、西側隣接屋敷は「六百坪」と増加している。森下小路南側は、柳沢市正の屋敷が一区画と拡張された他は変化は見られないが、街路北側の元城屋町見付側に近い三軒の屋敷が南側へ拡張されている。これは森下小路を一直線に整備し直したためと考えられる。（絵図1）に描かれていない土塁沿いの街路は、絵図3～5にあることから、絵図の記載漏れ、あるいは城下町整備後の測量による面積の修正があったものと考えられる。

調査地点の居住者飯塚氏は、寄合衆・石高550石の飯塚彦右衛門である。東には寺社御用兼400石の柳沢内蔵助、同400石の永井彦太夫の名前が見られる。柳沢時代の遺物が少ないのは、20年間という短い領有期間だったことや、火事や地震などに見舞われなかったことに起因するものであろう。

3．18世紀代［享保9年（1724）以降～］

柳沢氏が大和郡山へ転封となり、甲府勤番支配の時代になると、享保12年12月の裏先手小路大久保内蔵助宅からの出火により勤番士屋敷64軒が焼失するが、森下小路は火災を免れている。坂田氏所蔵の元文三年（1738）絵図や絵図2では、街路設定の変化は確認できないが、居住者に山岡喜知五郎の氏名が見られる。山岡景典（喜知五郎）は、享保9年8月13日から元文5年7月まで勤番士を勤め、300俵取りである。2代前の景弘は甲府宰相綱重に使えていた。景典の後は、喜太郎景基（寛延2年7月29日～天明8年8月19日）―栄次郎景照（天明8年11月5日～寛政8年6月23日）―景輔（寛政8年9月3日～同年12月3日）―光太郎景廣（寛政9年2月15日～）と続く。天保9年の江戸城西の丸炎上の際に、山岡内蔵助が上納金四両弐分を納めた記録もある。また、慶応3年の『甲府勤番明細席順』には、山岡清三郎景佐（慶応2年正月23日～）の名前が見られる。以上、幕末期まで山岡氏7名の氏名を確認できるが、嘉永2年（1849）発行の「懐宝甲府絵図」（絵図4）に記載がなく、これ以前に屋敷替えが行われたものと推定される。

4．19世紀中葉以降

弘化2年（1845）の絵図（絵図3）では、調査区から元城屋町見付の街路までが四十七番、四十八番、四十九番の3区画に区画されていた。しかし「懐宝甲府絵図」第1版（絵図4）では屋敷割りが4区画に変化し、森下小路は柳沢時代の絵図（絵図1）と同じく調査地点でクランク状に折れ曲がりを見せている。このことは、A区1号溝の東側で石積みが検出されたものの、西側で石積が検出されず、溝の埋められた痕跡が確認されたことに関係する。また、A区1号溝に直交する2～4号溝と10号溝もこの時期の屋敷割りの変遷を示す遺構と考えられる。

「懐宝甲府絵図」は嘉永2年から明治4年までの3版の絵図が確認されている（絵図4・5）。調査区の居住者として第1版では長氏の名前が見られるが、2版以降は記載がない。他に、「永井」「北条」の姓を記した絵図があり、幕末期の甲府勤番士の異動が頻繁に行われたことが分かる。

長氏は、先祖が武藤と名乗り、初代義連は津軽信義に仕えていたが、後に甲府綱重に仕えている。天保4年（1833）に「追手頻　四百俵　小普請組浅野隼人支配　長熊之助」の着任を記録した資料があるが、慶応3年「甲府勤番明細席順」には見当たらない。永井氏については、文政3年（1820）、300俵の永井左膳盛光が着任し、さらに安政3年7月3日から幕末まで永井牛五郎盛久が勤番士を勤めて

いた。北条氏は文久元年（1861）に甲府勤番に着任している。

(1) 溝の検討

検出された近世の溝は、ほとんどがN—18°—EまたはN—69°—Eの軸線をとり、現在の街路と平行（直交）する。2号・12号・10号・4号溝は、武家屋敷を区画する境界の塀か溝跡と考えられる。2号溝は1号溝を切っていることから、幕末から近代に位置づけられる。10号溝は遺物から19世紀代と判断できるが、他の2本は時期の特定ができない。しかし、絵図1～5を詳細に検討することにより、今後、使用時期を明らかにしていくことが可能と考えられる。

(2) 8号井戸検出遺物

A区8号井戸からは、一括廃棄されたと考えられる大量の肥前系磁器・陶器・土製品と、上屋部材と推定される枘穴などを穿った柱材が多数検出された。肥前系磁器は18世紀後半から19世紀初頭に位置づけられるもので、覆土から大量の炭化物が検出されたことから、享和3年（1803）4月3日の大火によって廃絶された井戸の可能性が高い。

磁器には、肥前系の広東碗など18世紀後半から流行した器種が多い。幕末の廃絶と考えられる1号溝の出土遺物と比較してみても、瀬戸系の磁器製品の割合は極めて低い。このことは、19世紀初頭段階までに甲斐国内に流通した磁器は肥前系が主流であったことを示している。しかし、その後は、尾張藩が享和2年（1802）から行った陶磁器専売制度の影響により、甲斐国内への瀬戸系陶磁器の流入が加速されたものと考えられる。また、一括廃棄された遺物は、19世紀初頭に甲府城下町の中級武家屋敷で使われた食器の標準的な器種構成を示しているものと思われる。

(3) 園池遺構

A区26号土坑は南側が攪乱を受け遺構の全容を確認することはできなかったが、北側から7号溝が接続し、粘土質土壌の堆積も多いことから、園池の遺構と考えられる。溝は暗渠であり、26号土坑とほぼ同時期の瓦が検出され、19世紀代に同時存在していたものと推定される。また、池状遺構の覆土上面や西側の21号・22号土坑周辺から大量の桟瓦が検出されたことから、遺構西側に建物の存在がうかがわれる。22号土坑からは赤絵の碗や香合など嗜好品が検出されており、池に面して来客を迎える座敷などの空間が設けられていたことも考えられる。

(4) 二の堀と土塁

二の堀と土塁部分は大正8年の製糸工場建設や堀埋戻しにより整地されていくが、(写真90)には大正時代の堀の痕跡が写っている。試掘調査ではT—1・4・5の3本のトレンチから幅12～13mの堀と、高さ0.5mの土塁基底部が検出された。調査から二の堀と土塁の全体像を把握することは困難であるが、柳沢文庫所蔵「楽只堂年録」付図（絵図1）の記載により、ある程度の復元が可能である。

同絵図にはB区付近に「元城屋町御見付ゟ元連雀町見付迄長百二十六間半　土手高八尺鋪（敷）六間半　堀幅六間右間大槇木二十五本小篠」と記載され、二の堀は長さ約227m・幅約10.8m、土塁は基底部幅約11.7m・高さ約2.4mを測り、土塁には25本の大槇が植えられていたことが分かる。土塁の長さから槇は約9m間隔で植えられていたものと推測される。土塁表面は小篠が覆っていた。

絵図に記載された元城屋町見付から元連雀町見付（現在の武田通り）までの距離は現在の通りと一致し、江戸時代の街路を踏襲していることが確認された。発掘調査によって検出された堀の幅は約13mで、古絵図の記載と若干異なる。また、土塁は、堀上面から南側の近代の石積みまでの約12mの幅が、「土手高八尺　鋪（敷）六間半」と記載された数値とほぼ合致する。このことからも、近世の地割線が近代へと引き継がれていることを確認することができる。調査区東側の堀・土塁部分に関しても、現在の地籍図の区画線とほぼ一致することから、「楽只堂年録」付図が精緻な測量をもとに作成されたことが分かり、今後、城下町の復元を行っていく上で貴重な参考資料となる。

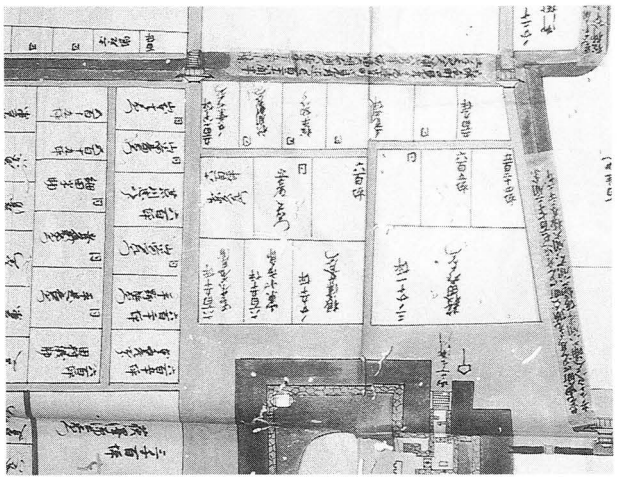
第４節　近代

明治30年筆写の図（絵図６）には、道幅と土地の寸法・所有者が記載され、堀は灰色で描かれている。道路は朱色で塗られ、江戸時代の森下小路部分に「日向町道巾四間」とある。土塁部分と平行して東西の通りがあり、その両通りをつなぐ南北通りも書き込まれている。調査区には「四番風間伊七」とあり南北36間１尺５寸×東西53間１尺５寸の敷地であったことがわかる。特に南北36間１尺５寸の寸法は武家屋敷の区画線の長さであったものと考えらえる。

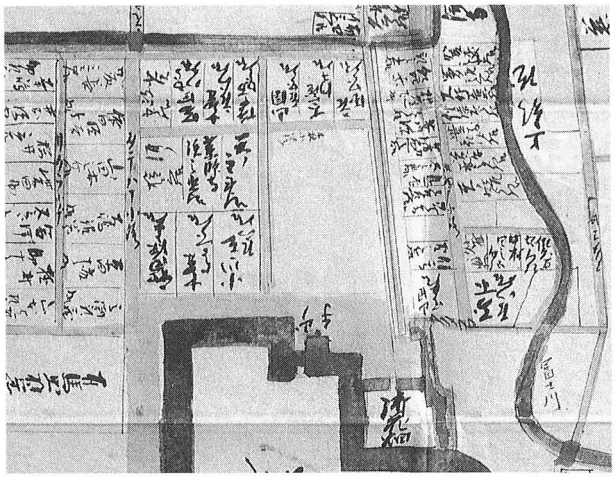
大正８年、茅野市出身の丸茂文六により、敷地6,000坪に費用45万円をかけて製糸工場が建設され、翌９年２月から操業を開始した。当時県外資本としては最大規模であり、水道を引くことが許可されなかったため２基の井戸を掘削したとのことである。その内の１基が今回確認された11号井戸であった。当時は敷地一杯に工場の施設が建ち並び（写真90）、北側に湿地状の二の堀跡が見える。この時代の遺構として先述した11号井戸・石積遺構・支柱状遺構があり、繰糸鍋（図42―361）・集緒器（図43―366～367）など製糸工場関係の遺物が検出された。

［引用・参考文献］

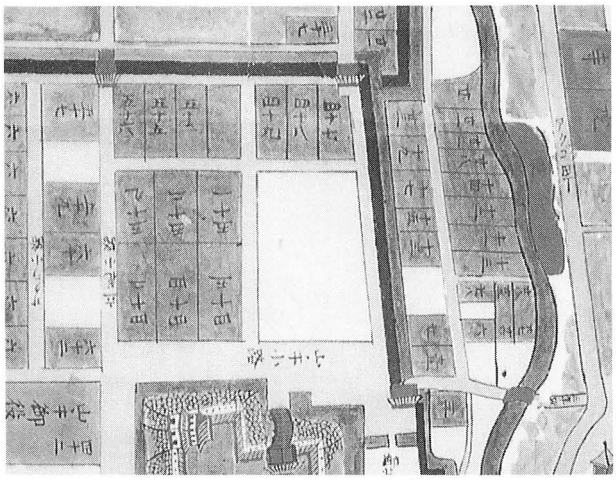
１．『甲斐国志』（雄山閣大日本地誌大系本）
２．『甲府略志』甲府市役所　1918
３．『甲府市三十年史』甲府市役所　1918
４．『市制四十年記念誌』甲府市役所　1928
５．『甲府市史　通史編第二巻　近世』甲府市市史編さん委員会　1992
６．『甲府市史　通史編第三巻　近代』甲府市市史編さん委員会　1990
７．『甲府市史　史料編第一巻　原始・古代・中世』甲府市市史編さん委員会　1989
８．『甲府市史　史料編第二巻　近世Ⅰ』甲府市市史編さん委員会　1987
９．『甲府市史　史料編第三巻　近世Ⅱ』甲府市市史編さん委員会　1987
10．『甲府市史　史料編第四巻　近世Ⅲ』甲府市市史編さん委員会　1987
11．『甲府市史　史料編第五巻　近世Ⅳ』甲府市市史編さん委員会　1989
12．『山梨県史　資料編８　近世領主』山梨県　1998
13．『定本山梨県の城』郷土出版社　1991
14．『岡谷蚕糸博物館紀要』第２号　市立岡谷蚕糸博物館　1997
15．『日向町遺跡発掘調査報告書』山梨県教育委員会　1999
16．『巣鴨町Ⅲ』豊島区教育委員会　1999
17．『北海道から沖縄まで国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館　1984
18．『瀬戸市史　陶磁史編四』瀬戸市史編纂委員会　1993
19．『瀬戸市史　陶磁史編六』瀬戸市史編纂委員会　1998
20．『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会　2000
21．『（新訂）寛政重修諸家系譜』（続群書類従完成会）



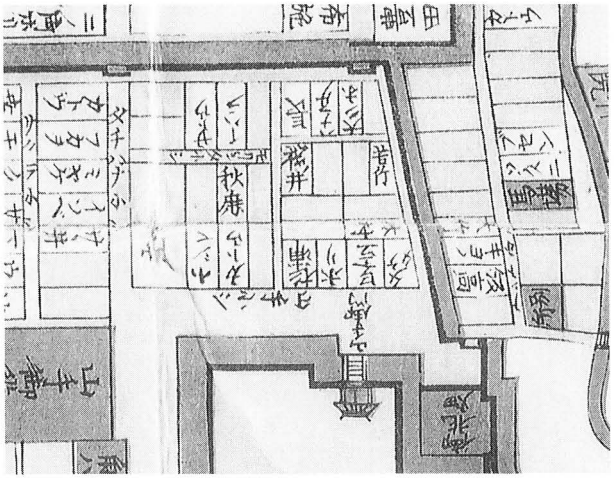
絵図１　甲府御城下絵図「柳沢文庫蔵」



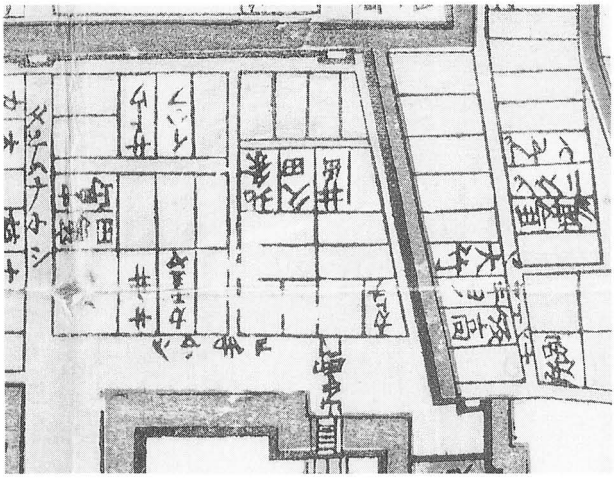
絵図２　甲府城下絵図「柳沢文庫蔵」



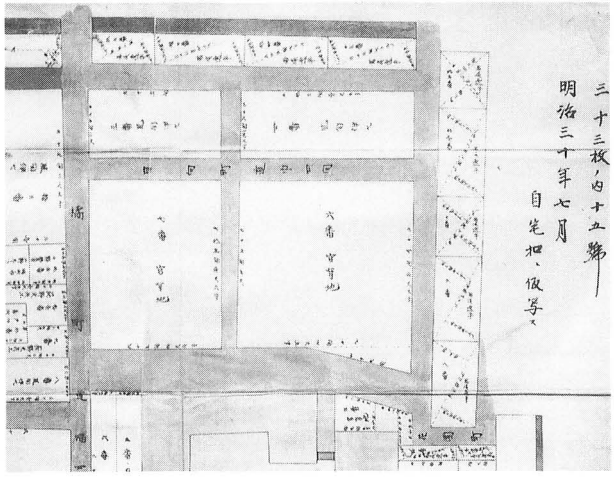
絵図３　甲府城下絵図「山梨県立図書館蔵」
（弘化２年）



絵図４　懐宝甲府絵図 1版「山梨県立図書館蔵」
（嘉永２年）



絵図５　懐宝甲府絵図 2版「山梨県立図書館蔵」
（嘉永２年以降）



絵図６　明治時代図面（明治30年）

甲府城下町絵図（部分）

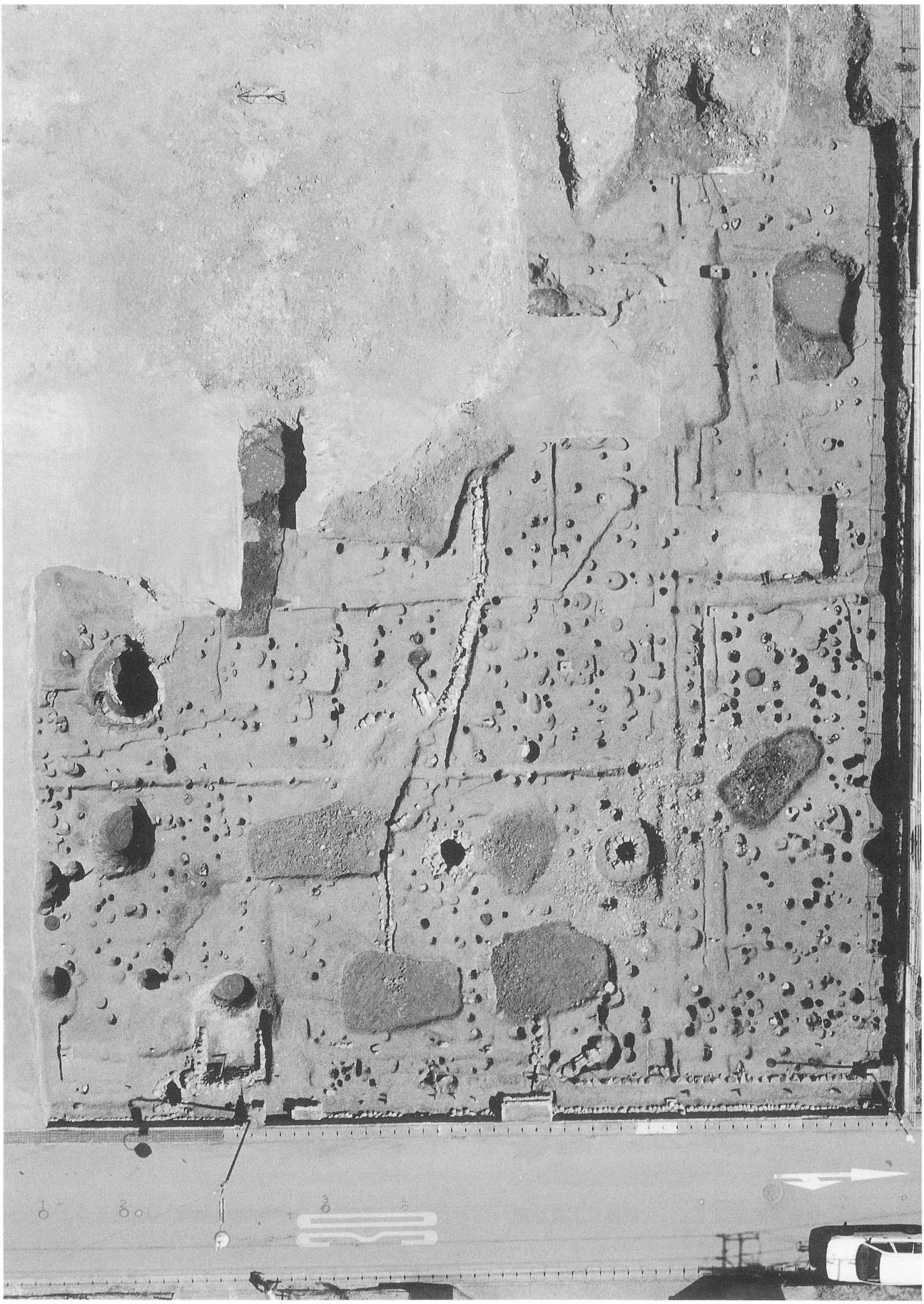


写真1　A　区　全　景

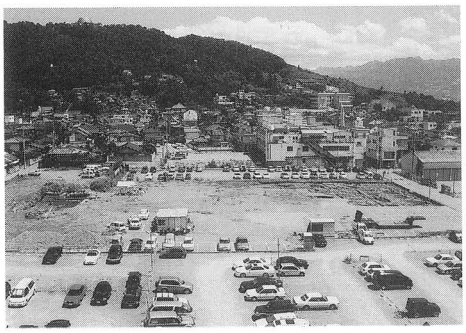


写真２　調査区全景

写真３　Ａ区全景

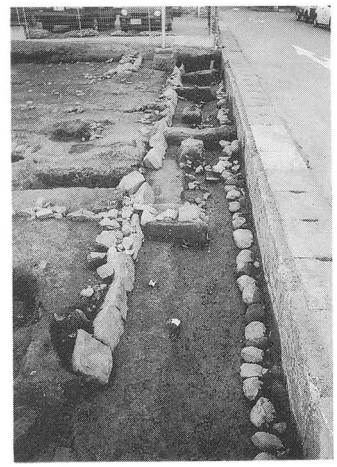


写真４　１号溝

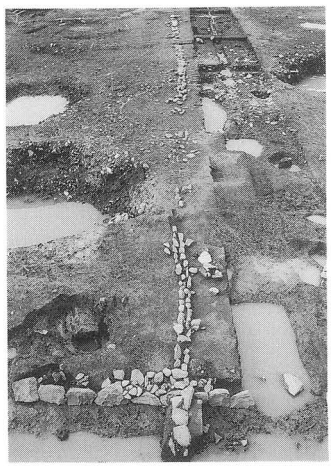


写真５　２号溝

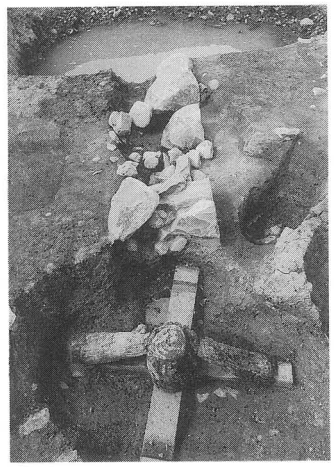


写真６　３号溝

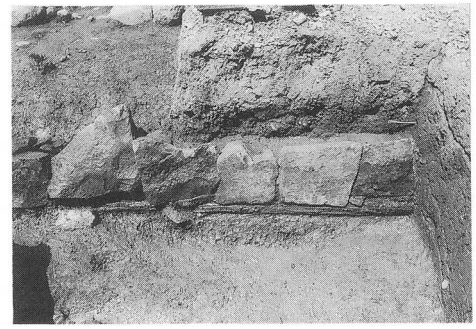


写真７　１号溝東側胴木

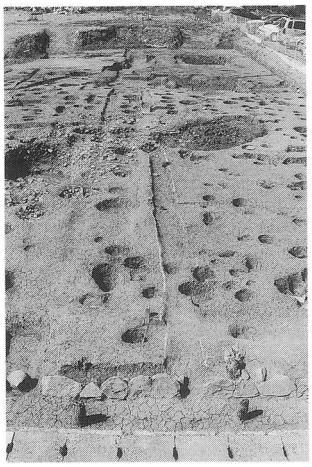


写真８　10号溝(右)・28号溝(左)

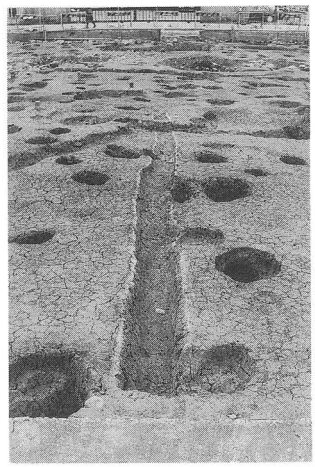


写真９　４号溝

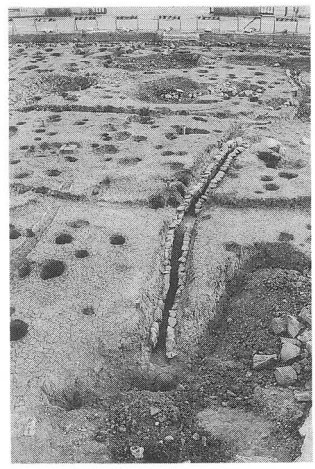


写真10　７号溝

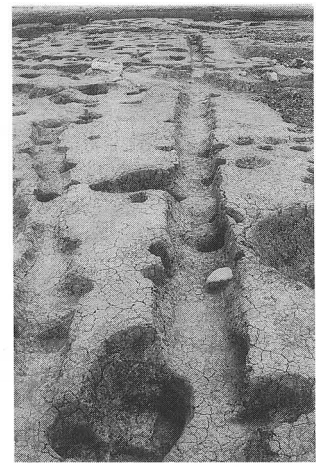


写真11　12号溝(右)・17号溝(左)

写真12　11号溝

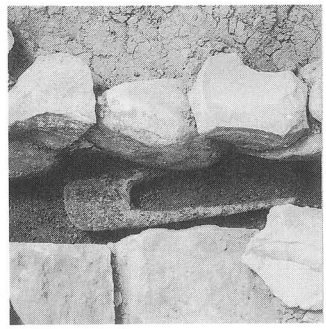


写真13　７号溝鋤出土状況

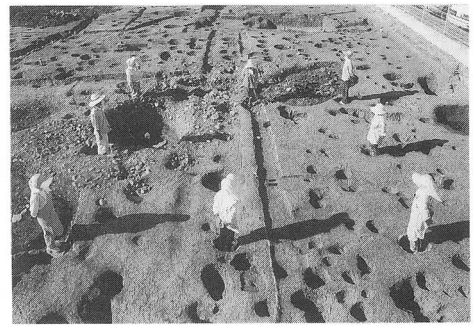


写真14　掘立柱建物跡

Ａ　　区

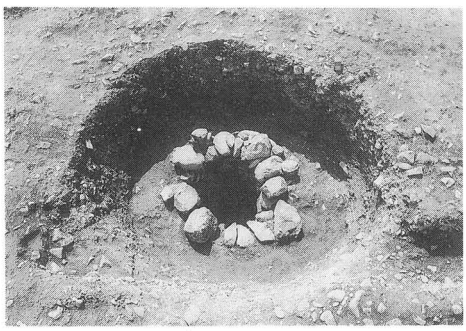


写真15　1号井戸

写真16　2号井戸

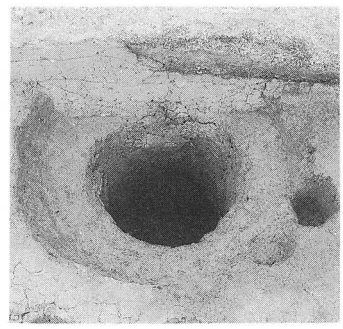


写真17　4号井戸

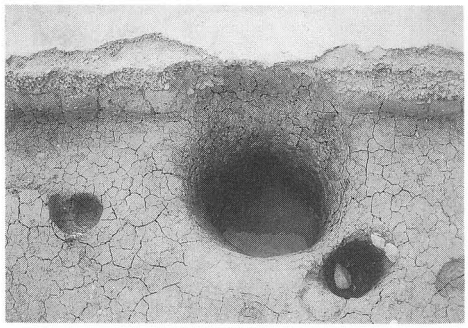


写真18　5号井戸

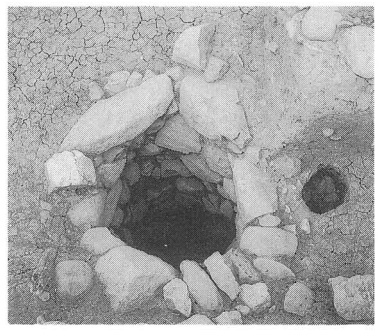


写真19　6号井戸

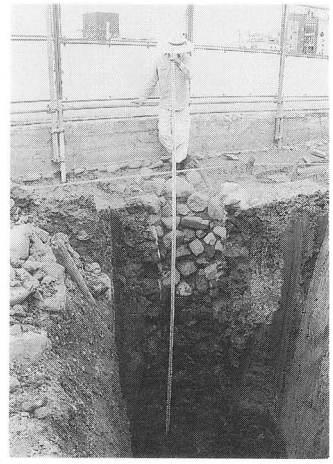


写真20　6号井戸半截状況

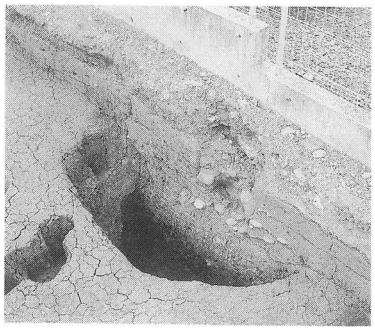


写真21　7号井戸

写真22　8号井戸半截状況

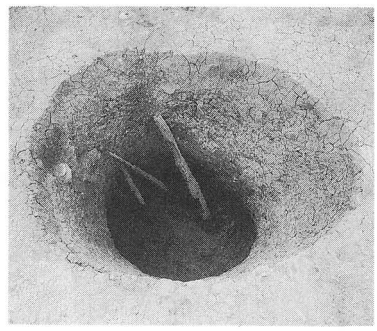


写真23　8号井戸木材検出状況

写真24　9号井戸半截状況

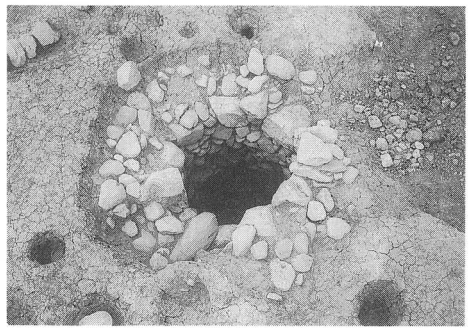


写真25　9号井戸

写真26　11号井戸

A　　区

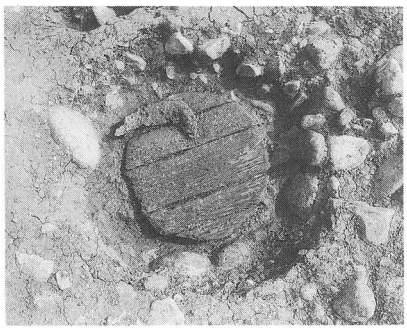


写真27　埋桶 1

写真28　埋桶 2

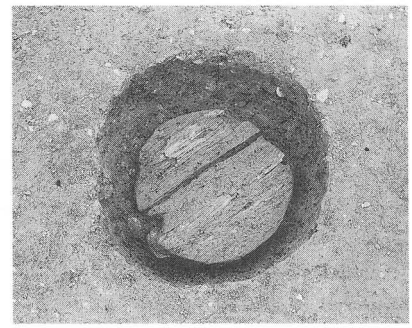


写真29　埋桶 3

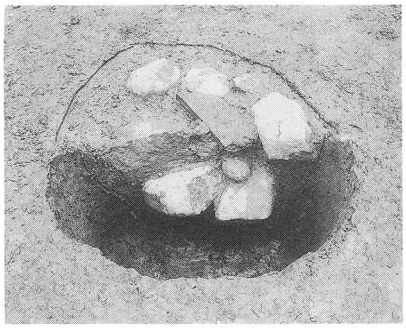


写真30　埋桶 4

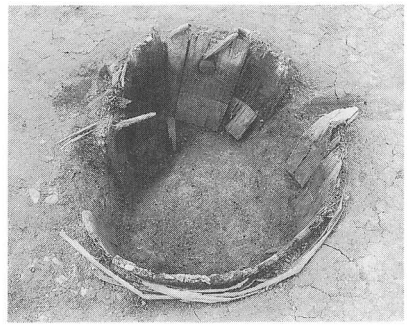


写真31　埋桶 5

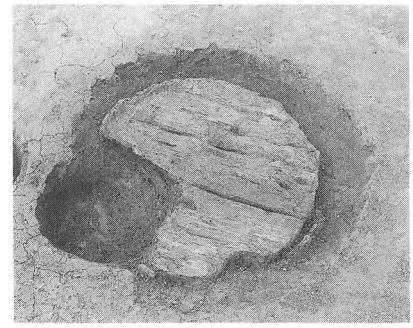


写真32　埋桶 6

写真33　埋桶 7

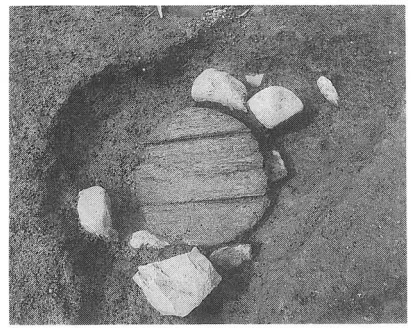


写真34　埋桶 8

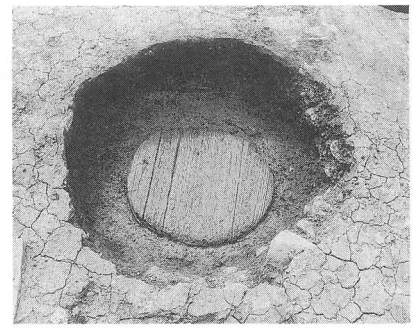


写真35　埋桶 9

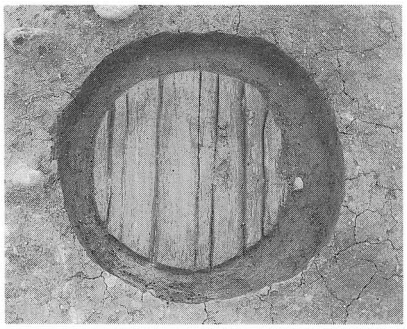


写真36　埋桶10

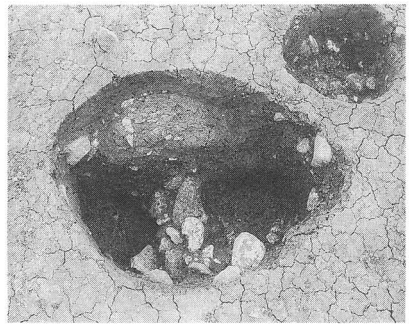


写真37　埋桶11

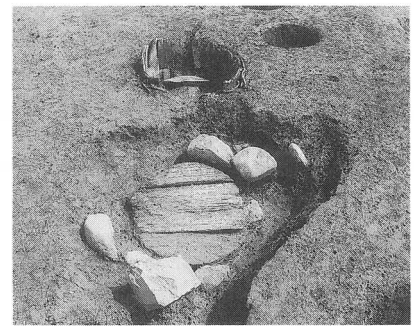


写真38　埋桶 5 ・ 8

A　　区

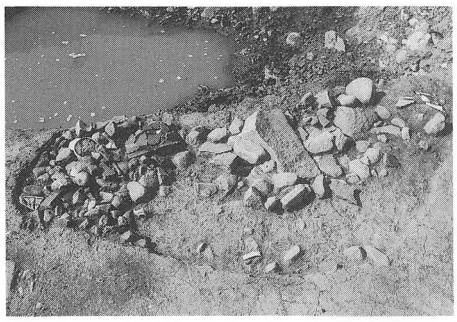


写真39　1号土坑

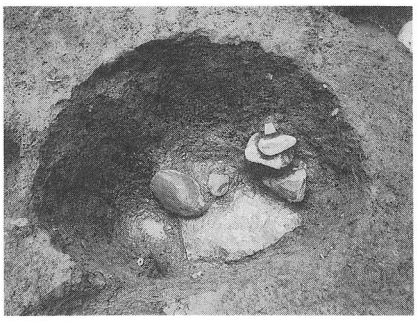


写真40　7号土坑

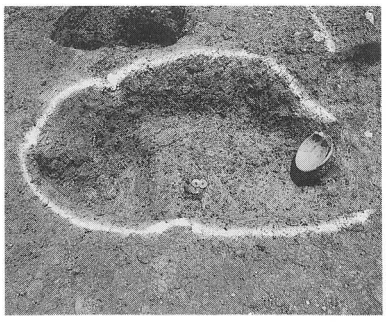


写真41　8号土坑

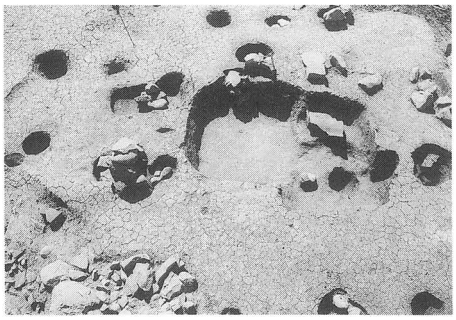


写真42　21号土坑(左)・22号土坑(右)

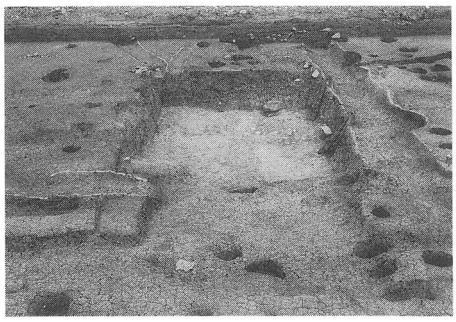


写真43号　24号土坑

写真44　23号・24号・25号土坑

写真45　23号土坑

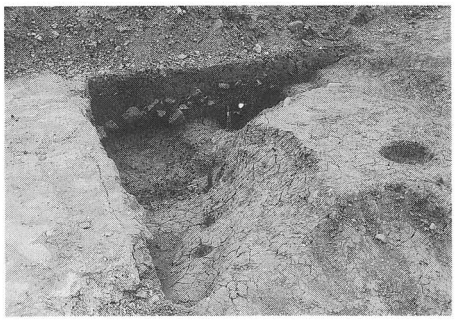


写真46　25号土坑

写真47　23号土坑上面集石

写真48　石積遺構

写真49　支柱状遺構部材

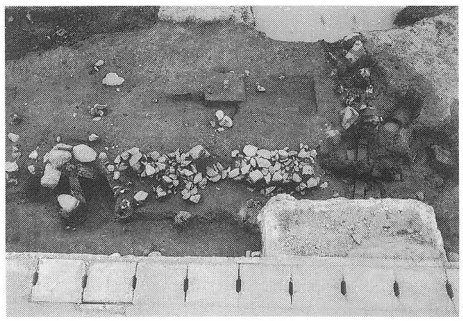


写真50　支柱状遺構

A　　区

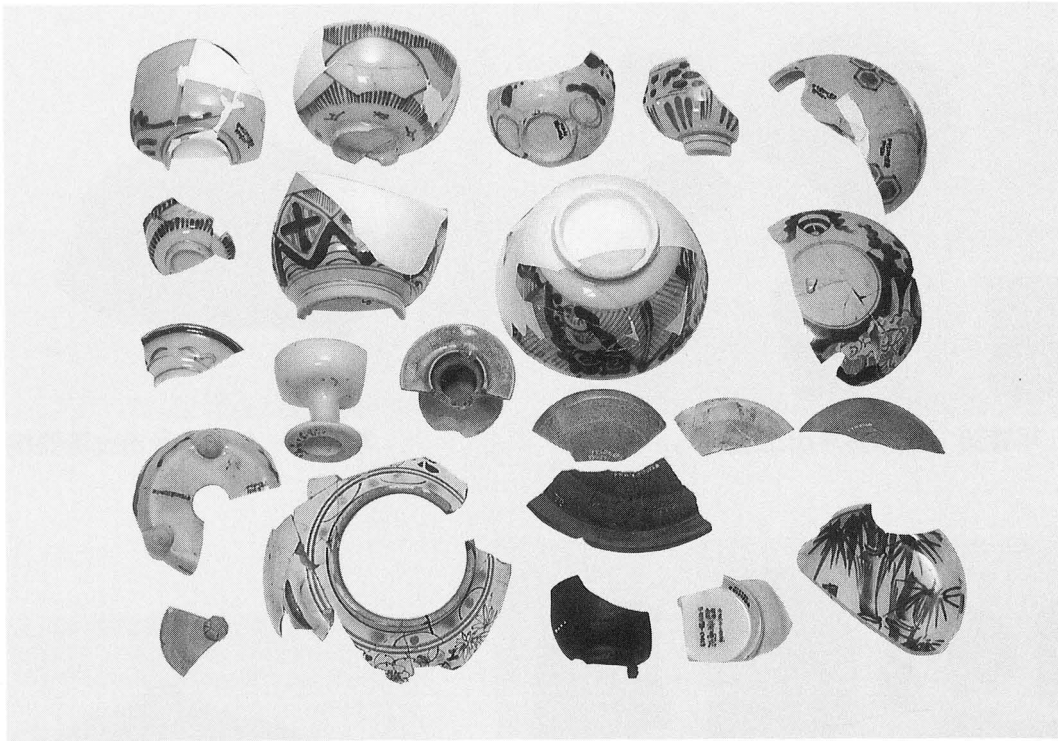


写真51　1号溝出土遺物

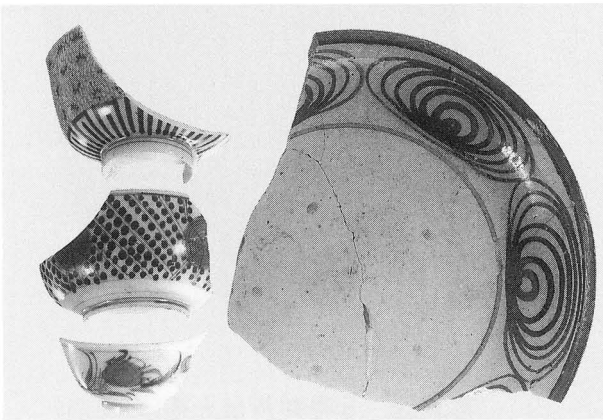


写真52　2号溝出土遺物

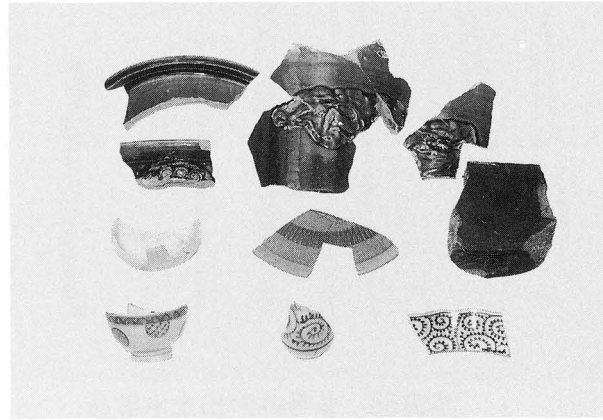


写真53　10号溝出土遺物

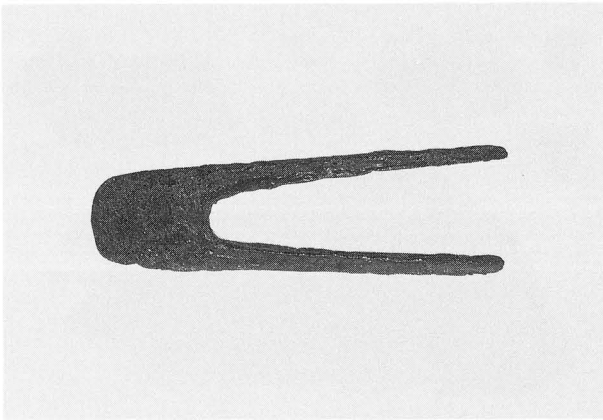


写真54　7号溝出土鋤

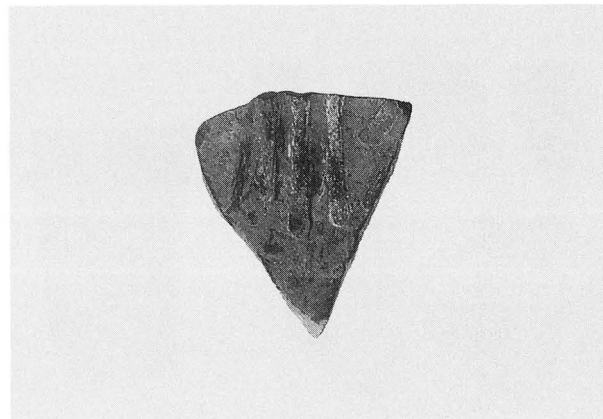


写真55　8号溝出土土製品

A　　区

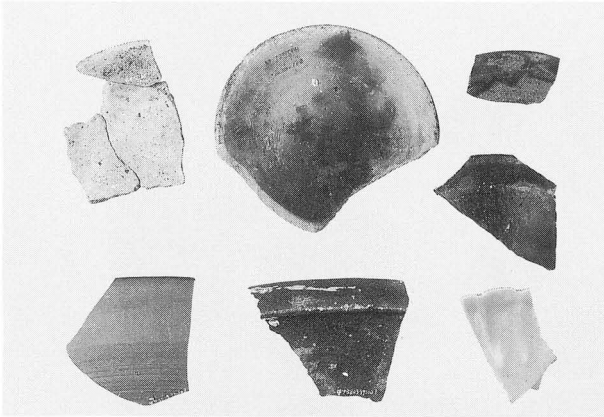


写真56　5号井戸出土遺物

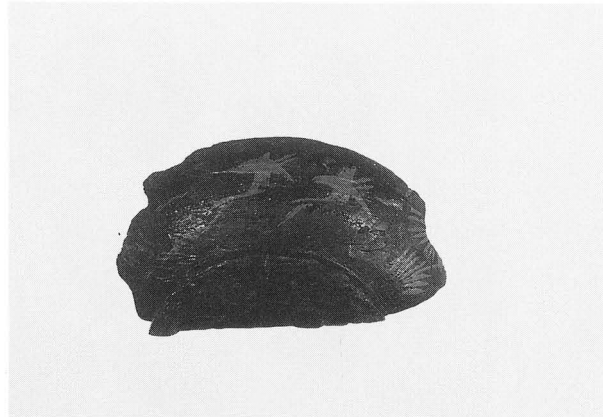


写真57　5号井戸出土漆器椀

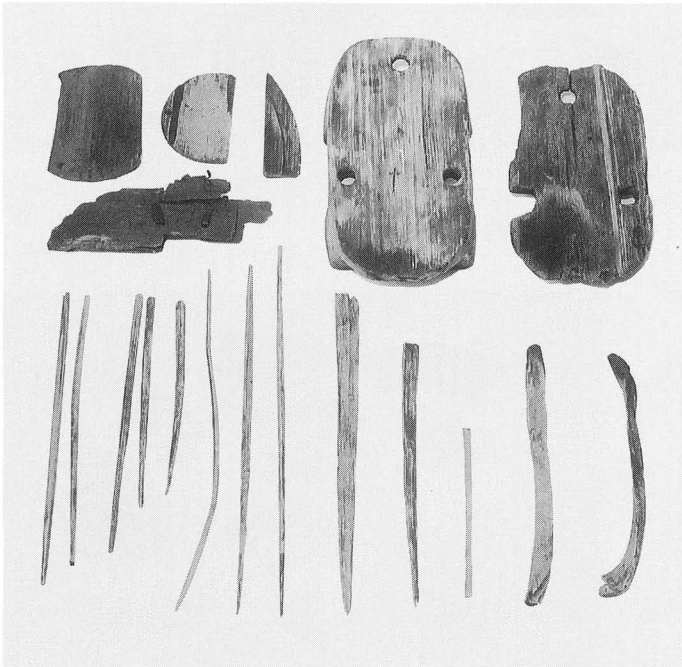


写真58　5号井戸出土木製品

写真59　6号井戸出土茶臼(上臼)

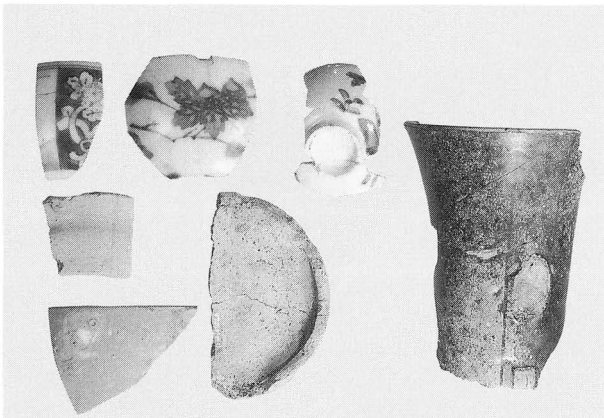


写真60　7号井戸出土遺物

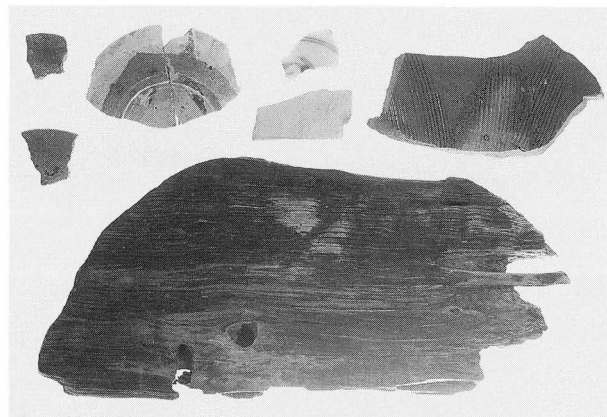


写真61　9号井戸出土遺物

A　　区

写真62　8号井戸出土陶器

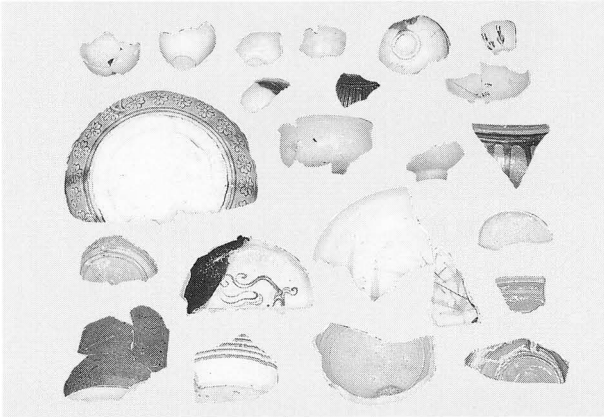


写真63　8号井戸出土陶器

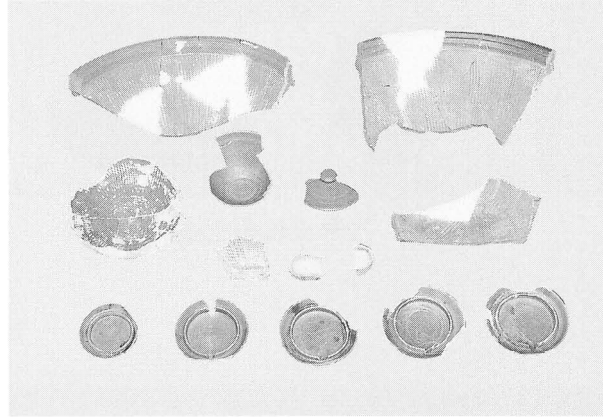


写真64　8号井戸出土陶器

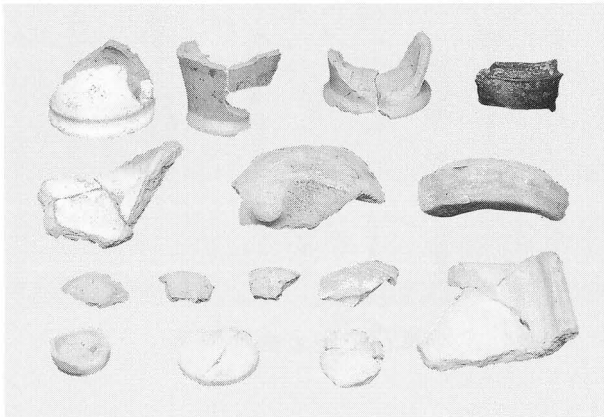


写真65　8号井戸出土土製品

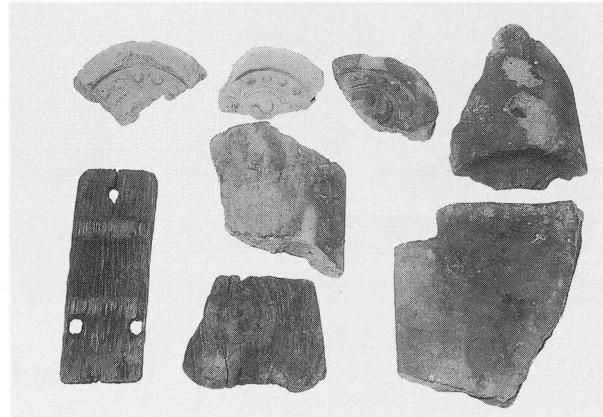


写真66　8号井戸出土瓦・木製品

A　　区

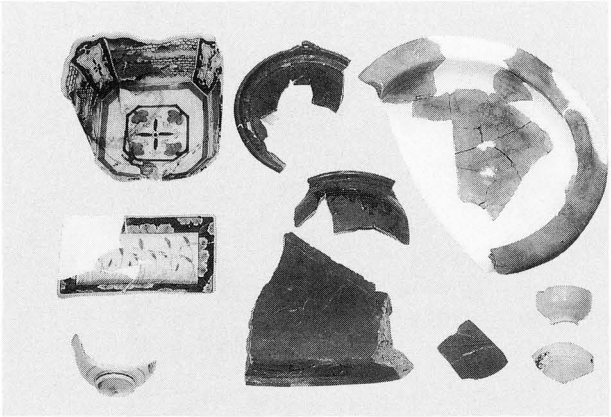


写真67　1号土坑出土遺物

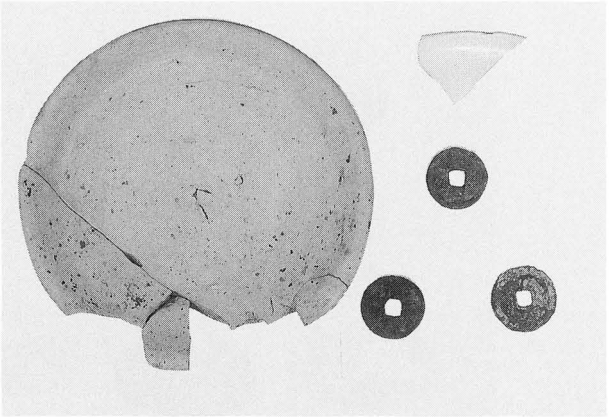


写真68　8号土坑出土遺物

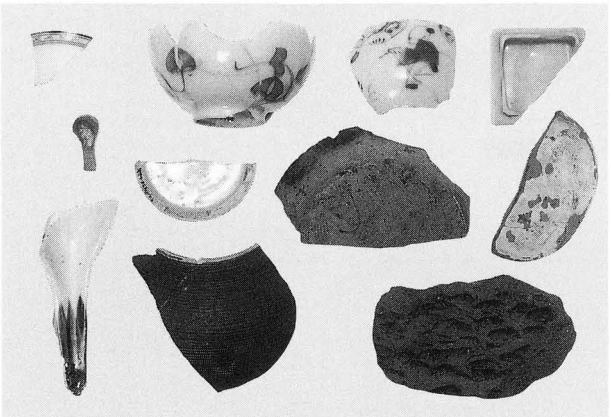


写真69　22号土坑出土遺物

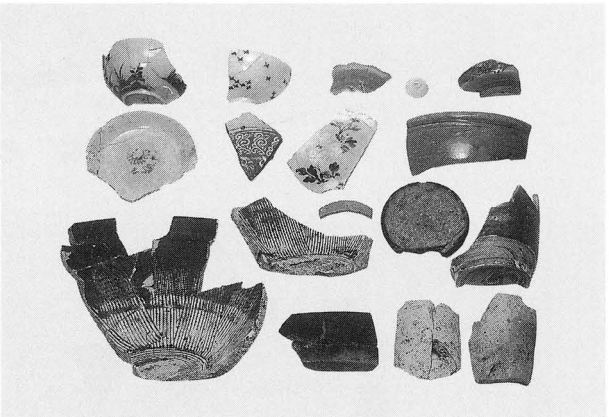


写真70　23号土坑出土遺物

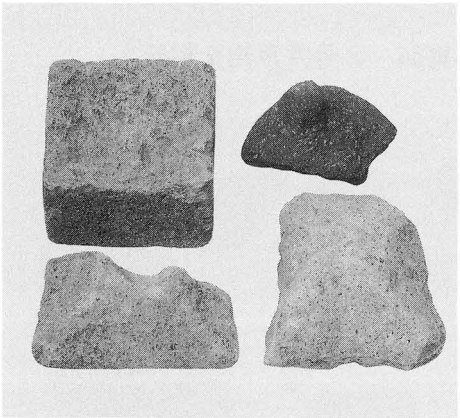


写真71　出土石製品

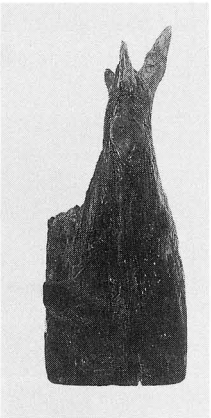


写真72
ピット533出土角柱

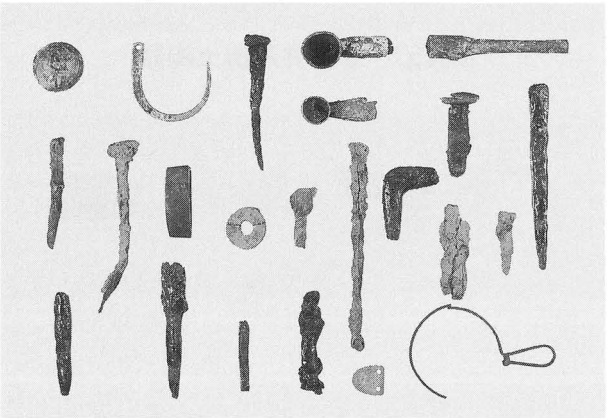


写真73　出土金属製品

A　　区

写真74　B　区　全　景

写真75　土塁検出状況

写真76　1号井戸

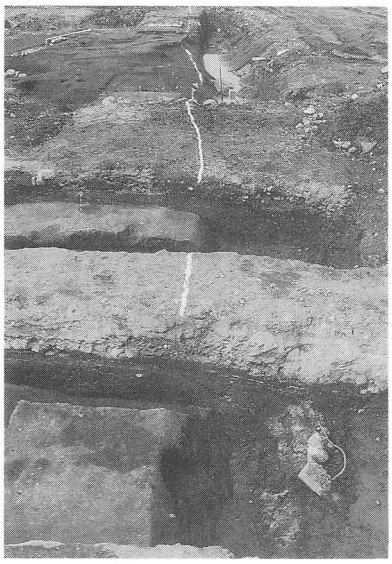


写真77　二の堀・土塁ライン

写真78　T－6トレンチ

写真79　T－7トレンチ

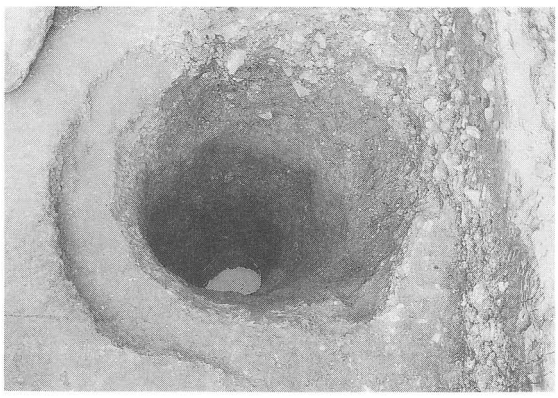


写真80　2号井戸

写真81　8号溝出土金属製品

写真82　試掘調査T－1トレンチ

B　　区

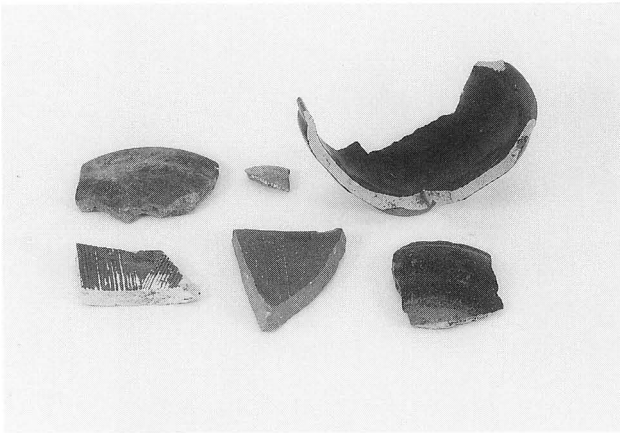


写真83　1号井戸出土遺物

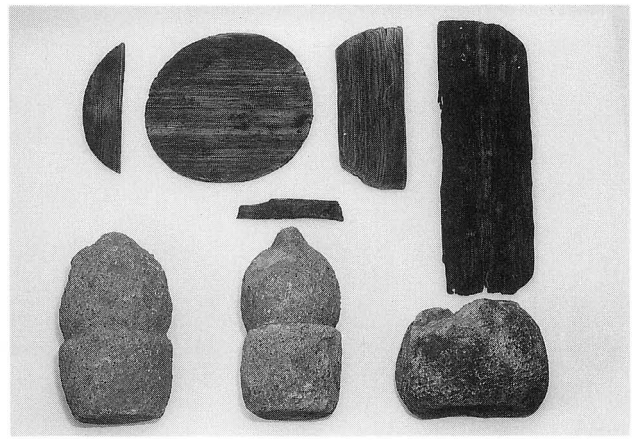


写真84　1号井戸出土遺物

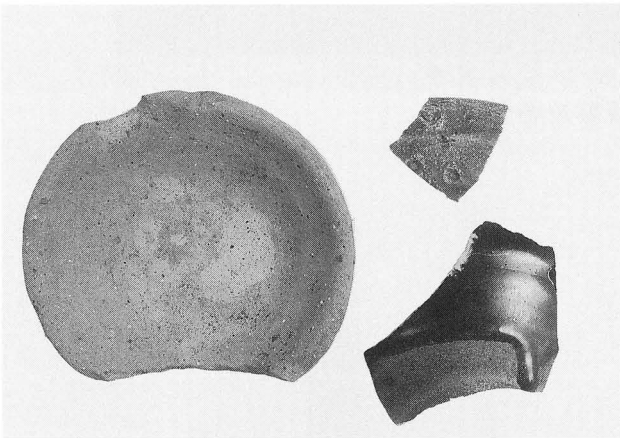


写真85　1号土坑出土遺物

図86　ピット74出土遺物

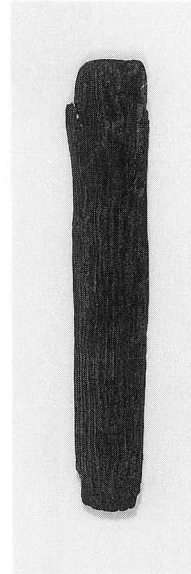


写真87
2号井戸出土木製品

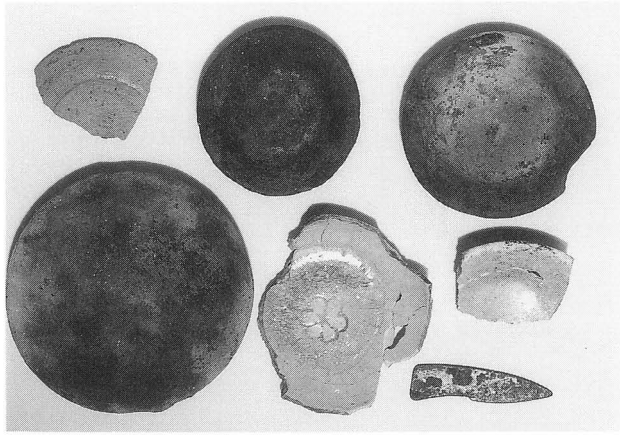


写真88　T－6トレンチ8号溝出土遺物

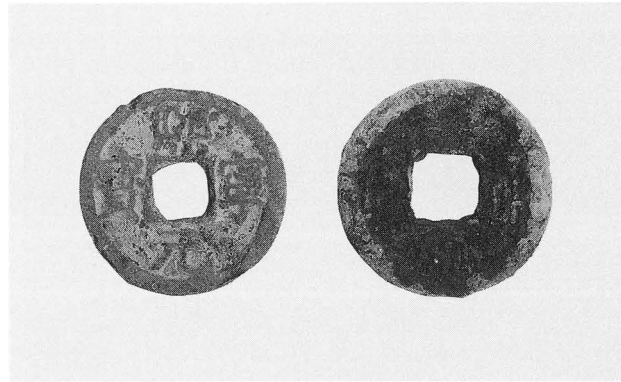


写真89　出土銭貨

B　　区

写真90　甲府丸茂製糸場全景

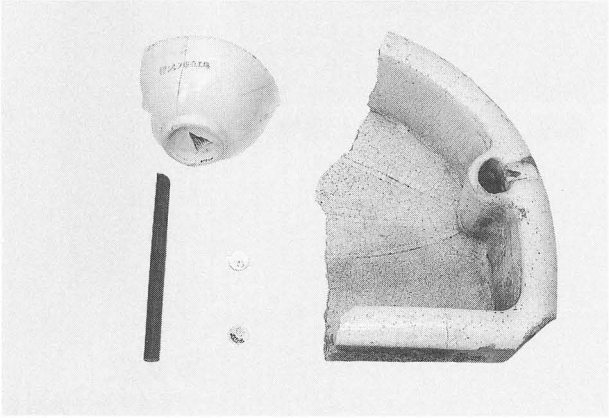


写真91　製糸工場関連遺物

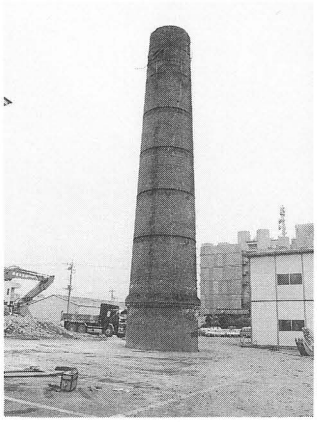


写真93　製糸工場煙突

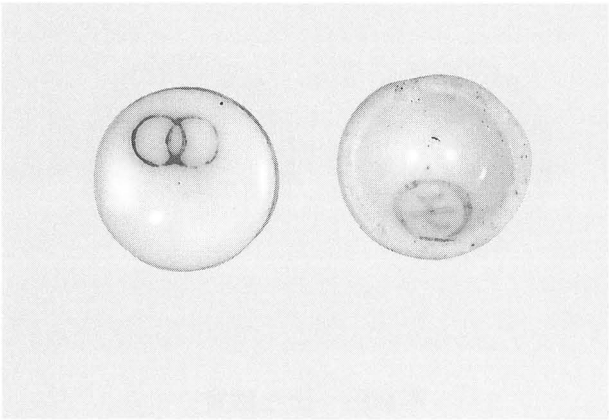


写真92　集 緒 器

写真94　発掘調査参加者

甲府城下町関連略年表

年号	西暦	日付	主なできごと
元暦元年	1184	6月16日	一条忠頼、源頼朝により謀殺される（吾妻鏡）
			一条小山にあった忠頼館は、忠頼死後夫人により尼寺となる（甲斐国志）
正和元年	1312		甲斐国守護職一条時信を開基として一蓮寺を創建（甲斐国志）
永正16年	1519	8月15日	武田信虎、躑躅ケ崎に新府中の鍬立の儀を行う（高白斎記）
		8月16日	新館を信虎検分（高白斎記）
		12月20日	信虎・大井夫人、躑躅ケ崎館に移る（高白斎記）
			この年、信虎、有力国人層の新府中への集住を断行する（勝山記）
永正17年	1520	6月30日	信虎、積翠寺丸山に要害城の建設工事を起す（高白斎記）
大永3年	1523	4月24日	信虎、湯村山城建設の工事を起す（高白斎記）
大永4年	1524	6月16日	信虎、一条小山に砦を築く（高白斎記）
天文10年	1541	6月14日	晴信、父信虎を追放し甲斐国の守護となる（勝山記・高白斎記他）
		9月23日	晴信宛て、今川義元の書状に「甲府」の地名初見（堀江家文書）
天文17年	1548	6月4日	府中で地下人が田畠・新屋敷を作ることを禁止する（高白斎記）
天文20年	1551	8月23日	躑躅ケ崎館西曲輪の増設始まる（高白斎記）
天文21年	1552	11月27日	今川義元の娘、晴信嫡男義信に嫁ぎ、躑躅ケ館西曲輪に入る（高白斎記）
弘治2年	1556	10月10日	八日市場に夜廻りの番帳を出す（坂田家文書）
元亀4年	1573	4月12日	信玄、信濃伊那郡駒場にて病死。後、四郎勝頼家督を継ぐ
天正2年	1574	8月2日	勝頼、府中柳町宿の家並みを整備する（新編会津風土記）
天正9年	1581	12月24日	勝頼、躑躅ケ崎館より新府城へ移る（甲陽軍鑑）
天正10年	1582	3月11日	武田氏天目山に滅亡（塩山向嶽禅庵小年代記・信長公記）
		3月29日	穴山氏領地を除き甲斐国は、河尻秀隆が領有する
		6月15日	本能寺の変後、河尻秀隆殺害される
		12月12日	徳川家康、重臣平岩親吉らに甲斐国守備を命じる（朝野旧聞裒藁）
天正18年	1590	7月13日	羽柴秀勝、甲斐国を受封する（甲斐国志）
天正19年	1591	3月	加藤光泰、甲斐国を受封する（甲斐国志）
			甲府城築城により一蓮寺が一条小山から移動する（一蓮寺過去帳）
文禄2年	1593	11月20日	浅野長政・幸長親子甲斐国に入部（甲斐国志）
慶長5年	1600		関ケ原の戦い。浅野氏紀伊国和歌山へ転封
慶長6年	1601		徳川家康、重臣平岩親吉に再び甲斐国守備を命じる
慶長8年	1603	正月28日	徳川五郎太（義直）甲斐24万石を受封、平岩親吉城代となる（朝野旧聞裒藁）
慶長12年	1607	閏4月26日	徳川義直、尾張国清洲に47万石で転封により甲府城番が設置される（甲斐国歴代譜）
元和2年	1616	9月13日	徳川国千代（忠長）23万石を受封（元和年録）
寛永9年	1632	10月23日	徳川忠長の所領没収（徳川実紀）
寛文元年	1661		徳川綱重（甲府家）甲斐国を領有
寛文10年	1670	5月	甲府の町人人口1万2772人内、下府中1万420人、上府中2352人
万治3年	1660	正月18日	昼七ツ時（午後4時）九蔵火事伊勢町酒屋江戸屋五郎兵衛より出火、柳町・八日町・三日町・工町・連雀町・魚町・穴山町焼失
元禄6年	1693	12月27日	古紺屋町より出火、愛宕町・金手町・上一条町・下一条町・和田平町の本家171、寺社19、小借家184軒焼失（坂田家文書）
元禄16年	1703	11月22日	夜八ツ時（午前2時）元禄大地震発生
		12月23日	宝永火山噴火に伴い、地震発生
宝永元年	1704		柳沢吉保、武蔵国川越から甲斐国15万石へ所替え
宝永2年	1705		町名呼称の変更を行う（甲府略志）
宝永2年			甲府の町人人口1万3291人
享保7年	1722	2月12日	片羽町より出火、緑町・遠光寺村・東青沼村・蔵田村焼失
享保9年	1724	3月11日	柳沢吉里、大和郡山への所替えを命じられる
		7月4日	甲府勤番支配が置かれる
享保12年	1727	12月9日	夜五ツ半時（午後9時）裏先手小路大久保内蔵助の屋敷より出火、本丸・屋形曲輪・清水曲輪の殿舎及び勤番士屋敷64軒焼失。柳町・八日町・山田町・三日町・上連雀町・下連雀町・穴山町・魚町・竪近習町・工町・鍛冶町・桶屋町・緑町・西一条町・深町・一蓮寺地内町・光沢寺地内町・蔵田村・東青沼村焼失
享保20年	1735	12月9日	暮六ツ半時（午後7時）柳町より出火、上連雀町・下連雀町・魚町・穴山町・鍛冶町・桶屋町・緑町・西一条町の本家299軒と借家311軒を焼失
延享元年	1744	4月23日	夜九ツ時過（午前0時）緑町、左官新兵衛宅より出火、本家12軒と借家26軒焼失
宝暦6年	1756		甲府の町人人口1万2872人
明和7年	1770	9月2日	夜五ツ時（午後8時）八日町二丁目麻屋平兵衛宅より出火、魚町・三日町・穴山町・上連雀町・下連雀町・鍛冶町・桶屋町・山田町・工町・金手町・上一条町・深町組屋敷など13町丁数29丁、竈数1160軒焼失
		10月5日	夜五ツ半時（午後9時）上府中元紺屋町桶屋惣兵衛宅より出火、愛宕町・長禅寺・甲府陣屋長屋・上一条町・下一条町・和田平町焼失（坂田家文書）
天明2年	1782	7月15日	夜五ツ時（午後8時）大地震
享和3年	1803	4月3日	昼九ツ時（正午）柳町二丁目鳥羽屋庄右衛門宅より出火、横近習町を除く郭内町全体、下府中19町で44丁焼失。類焼家屋1108軒（坂田家日記）
文化初年	1804		家数2059、町人人口9566人（甲斐国志）
文政5年	1822	3月23日	夜五ツ半時（午後9時）八日町亀屋金兵衛店牧野宗寿宅から出火、柳町・魚町・三日町を類焼
嘉永5年	1852	2月3日	夜四ツ半時（午後11時）鍛冶町から出火、桶屋町など焼失
嘉永7年	1854	3月24日	暮六ツ時（午後6時）柳町三丁目酒造業、富士井屋栄助の裏木小屋より出火。三日町・魚町・上連雀町・下連雀町・穴山町・鍛冶町・桶屋町・西一条町・緑町・一蓮寺寺内町・蔵田村・東青沼村焼失
		11月4日	南海諸道に地震。下府中被害甚大（坂田家日記）
安政7年	1860	正月2日	穴山町四丁目西側の新八宅より出火。下連雀町・桶屋町・深町御組屋敷四軒焼失
文久2年	1862	3月7日	細工町より出火。広小路・畳町・竪町・新紺屋町・元連雀町の竈数83軒、郭内10軒焼失
慶応2年	1866	8月	甲府勤番廃止。替わりに甲府城代が設置される
慶応4年	1868	3月4日	官軍甲府城に入城
明治3年	1870		甲府の人口1万3662人（甲府町方家人数取調書）
明治6年	1873		権令藤村紫朗の命により内城の保存決まる
		6月	見付諸門撤去、堀が埋め立てられ市街地になる
明治7年	1874	9月16日	錦町に県営勧業製糸場完成
明治9年	1876		甲府城内に勧業試験所建設される
明治10年	1877		勧業試験所内に葡萄酒醸造室を設置
明治29年	1896		中央線の敷設工事開始。清水曲輪を鉄道院に割譲
明治36年	1903		中央線開通により、清水曲輪・御花畑曲輪が消滅し城下町も南北に分断される
昭和元年	1926		県議会、県庁周辺の堀埋め立て及び民間払い下げを議決
昭和5年	1930		甲府中学校の移転に伴い、山梨県庁と県会議事堂建設。この時楽屋曲輪の堀が埋め立てられる
昭和20年	1945	7月6日	甲府空襲。市域の64%焼失

報　告　書　抄　録

ふりがな	こうふじょうかまちいせき
書名	甲府城下町遺跡
副書名	北口二丁目（桜シルク跡）発掘調査報告書
巻次	Ⅰ
シリーズ名	甲府市文化財調査報告
シリーズ番号	15
編集機関	甲府市教育委員会
所在地	〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番１号　電話 055(223)7324
発行年月日	平成13年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間 調査面積	調査原因
こうふじょうかまち 甲府城下町 いせき 遺跡	やまなしけんこうふし 山梨県甲府市 きたぐちにちょうめ 北口二丁目	19201		35° 40′	138° 34′ 23″	19990512 ～ 19991006 約1000㎡	店舗・駐車施設の建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
甲府城下町遺跡	城下町	中世 近世 近代	溝・暗渠・土坑墓・井戸・土坑柱穴・石列・二の堀跡・土塁	かわらけ、瀬戸・美濃系陶器、白磁、染付、肥前系磁器、石臼、硯、五輪塔、銭貨、漆製品	武家屋敷で使用された大量の陶磁器を検出

甲府市文化財調査報告15

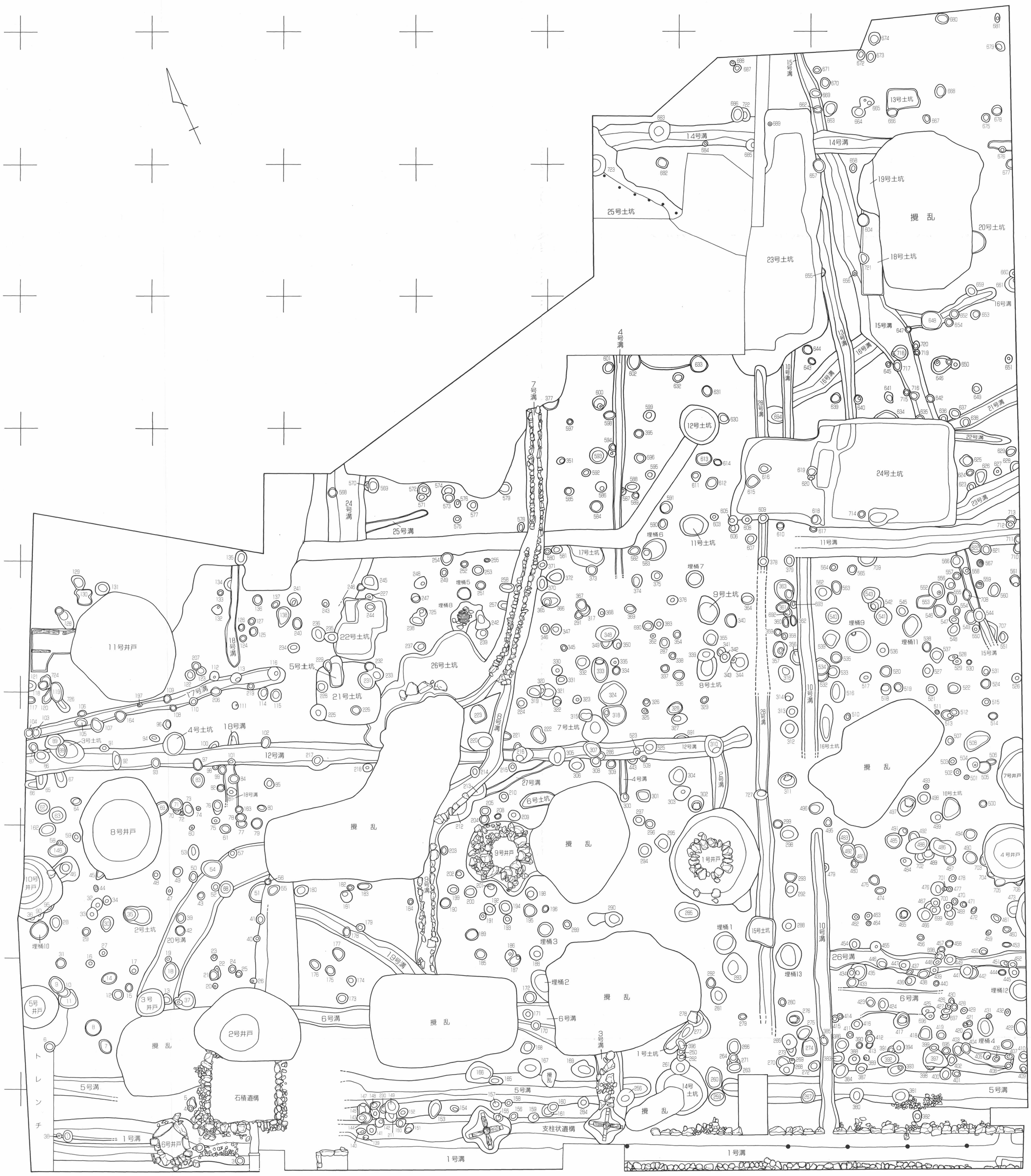
甲府城下町遺跡Ⅰ

―北口二丁目（桜シルク跡）発掘調査報告書―

平成13年３月30日

発　行　甲府市教育委員会
〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番１号
TEL ０５５（２２３）７３２４
FAX ０５５（２２６）４８８９

印　刷　㈱内田印刷所
〒400-0032 山梨県甲府市中央二丁目10-18



甲府城下町遺跡A区（桜シルク跡）全体図